

金沢市

# 梅田B遺跡Ⅳ

2022

石川県教育委員会  
(公財)石川県埋蔵文化財センター

梅<sup>う</sup>田<sup>めだ</sup> B 遺跡 IV

2022

石川 県 教 育 委 員 会  
(公財)石川県埋蔵文化財センター

## 例 言

- 1 本書は、金沢市梅田B遺跡第5次調査(1区、2区下層、4区)の発掘調査報告書(一般国道159号金沢東部環状道路事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書7)である。
- 2 遺跡の所在地は、石川県金沢市梅田町、観法寺町地内である
- 3 調査の原因は、一般国道159号(旧8号改築)金沢東部環状道路事業(山側環状)であり、同事業を所管する国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所(旧建設省北陸地方建設局金沢工事事務所)が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 現地調査は、平成9(1997)年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が実施した。また、平成10(1998)年度からは、財団法人石川県埋蔵文化財センターが現地調査を行ない、平成15(2003)年度には出土品整理を実施した。令和2・3(2020・21)年度に報告書の原稿作成、同3年度に報告書の編集・刊行を公益財団法人石川県埋蔵文化財センター(平成25年度に公益財団法人へ移行)が、石川県教育委員会から委託を受けて実施した。
- 5 調査に係る費用は、国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所が負担した。
- 6 現地調査は、平成9(1997)年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者(当時)は下記のとおりである。

期 間 平成9年4月9日～12月22日

面 積 11,900㎡(1区上層3,300㎡、下層3,300㎡、2区下層2,500㎡、4区上層2,300㎡、下層500㎡)  
3区5,600㎡(2,800㎡×2面)の報告は、次年度以降のため除外している。

担当課 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会 調査課

担当者 藤田邦雄(調査第1係長)、山川史子(主任)、滝川重徳(調査員)、端 猛(調査員)、  
春田幸恵(調査員)、宮川彩子(調査員)
- 7 出土品整理は、財団法人石川県埋蔵文化財センター企画部整理課が担当した。
- 8 樹種同定は、株式会社パリノ・サーヴェイに委託して行った。本報告では樹種同定の成果を利用し、委託の報告書は後年の報告書に掲載する。遺構・遺物図のデジタル化及び図版編集は、株式会社セビアスに委託して行った。
- 9 報告書の執筆は、令和2・3(2020・21)年度に垣内光次郎(調査部参事)が担当した。編集・刊行は、令和3年度に実施した。遺物の写真撮影は、池田拓が行った。
- 10 調査には下記の機関、個人の協力を得た(五十音順、敬称略)。

国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所、金沢市教育委員会、四柳嘉章
- 11 調査に関する記録と出土品は、石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 12 本書についての凡例は、下記のとおりである。
  - (1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系(日本測地系)に準拠した。
  - (2) 水平基準は海拔高であり、T. P. (東京湾平均海面標高)による。
  - (3) 出土遺物番号は、挿図、観察表、写真で対応する。
  - (4) 遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を、木製品の砂トーンはコゲを表す。また赤彩・漆器には20%のアミをかけた。
  - (5) 遺構の名称は、下記の略記号に番号(算用数字)を付し表記した。

S I : 竪穴建物、S B : 掘立柱建物、S K : 土坑、S D : 溝、P : 柱穴・小穴、  
S X : その他(不明確遺構等)

## 目 次

第 1 章	発掘調査の経緯と経過	1
第 1 節	発掘調査に至る経緯	1
第 2 節	発掘調査の経過	2
第 3 節	出土品整理等の経過	2
第 2 章	遺跡の位置と環境	5
第 1 節	遺跡の位置と地理的環境	5
第 2 節	森本地区と梅田 B 遺跡の歴史	5
第 3 章	第 5 次調査の方法と成果	9
第 1 節	調査の方法	9
第 2 節	調査区の概要	9
第 3 節	1 区の遺構と遺物	11
第 4 節	2 区下層の遺構と遺物	40
第 5 節	4 区の遺構と遺物	57
第 4 章	調査成果の総括	125
第 1 節	第 5 次調査の成果	125
第 2 節	活断層調査と梅田 B 遺跡	126
第 3 節	梅田 B 遺跡の曲物生産について	128
	報告書抄録	132

## 挿 図 目 次

<p>第1図 金沢市梅田B遺跡の位置…………… 1</p> <p>第2図 調査年次毎調査区位置図 (S=1/2500)…………… 4</p> <p>第3図 梅田B遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/25000)…………… 7</p> <p>第4図 1・2区グリット設定図(下層) (S=1/600)……………12</p> <p>第5図 1区遺構配置図(S=1/400)……………14</p> <p>第6図 1区上層遺構全体図(S=1/300)……………15</p> <p>第7図 1区SB101平面図・断面図 (S=1/80)……………16</p> <p>第8図 1区SK01・02平面図・断面図 (S=1/40)……………16</p> <p>第9図 1区SK03平面図・断面図 (S=1/40)……………18</p> <p>第10図 1区小溝群平面図・断面図 (S=1/20)……………19</p> <p>第11図 1区遺構平面図・SD06断面図 (S=1/20・1/200)……………20</p> <p>第12図 1区SD02・03断面図(S=1/40)……………21</p> <p>第13図 1区SD08・10断面図(S=1/20)……………22</p> <p>第14図 1区SD13平面図・断面図 (S=1/20・1/200)……………23</p> <p>第15図 1区下層遺構全体図(S=1/400)……………24</p> <p>第16図 1区SD14平面図・断面図1 (S=1/20・1/200)……………25</p> <p>第17図 1区SD14平面図・断面図2 (S=1/40・1/200)……………26</p> <p>第18図 1区SD14・16断面図、SD28平面 図・断面図(S=1/20・1/40)……………27</p> <p>第19図 1区上層遺構出土遺物実測図 (S=1/2・1/3・1/4)……………29</p> <p>第20図 1区上層SK03出土遺物実測図 (S=1/3)……………30</p> <p>第21図 1区上層包含層出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)……………31</p> <p>第22図 1区SD01・02出土遺物実測図 (S=1/3・2/3)……………32</p> <p>第23図 1区SD03出土遺物実測図1 (S=1/3)……………33</p> <p>第24図 1区SD03出土遺物実測図2 (S=1/2・1/3)……………34</p>	<p>第25図 1区SD03出土遺物実測図3 (S=1/4・1/6)……………35</p> <p>第26図 1区SD05・06・08・13・14出土遺物 実測図(S=1/2・1/3)……………36</p> <p>第27図 1区下層包含層出土石器実測図 (S=1/3)……………37</p> <p>第28図 2区上層・中層遺構全体図 (S=1/500)……………41</p> <p>第29図 2区下層遺構全体図(S=1/400)……………43</p> <p>第30図 2区SB201平面図・断面図 (S=1/80)……………44</p> <p>第31図 2区下層遺構平面図(東側) (S=1/200)……………45</p> <p>第32図 2区SD01・07断面図(S=1/40)……………46</p> <p>第33図 2区SD02断面図(S=1/40)……………47</p> <p>第34図 2区下層遺構平面図(西側) (S=1/200)……………48</p> <p>第35図 2区SD01断面図(S=1/40)……………49</p> <p>第36図 2区SD03・05断面図(S=1/40)……………50</p> <p>第37図 2区SD01・02・07出土土器実測図 (S=1/3)……………51</p> <p>第38図 2区SD02出土土器実測図1 (S=1/3・1/6)……………52</p> <p>第39図 2区SD02出土土器実測図2 (S=1/6)……………53</p> <p>第40図 2区SD03・05出土土器実測図 (S=1/3)……………54</p> <p>第41図 2区包含層出土土器実測図 (S=1/3)……………55</p> <p>第42図 4区グリット設定図(S=1/800)……………59</p> <p>第43図 4区遺構配置図1-1(4-I・V区) (S=1/200)……………60</p> <p>第44図 4区遺構配置図1-2(4-I・V区) (S=1/200)……………61</p> <p>第45図 4区遺構配置図2(4-Ⅲ区) (S=1/200)……………62</p> <p>第46図 4区遺構配置図3(4-Ⅳ区) (S=1/200)……………63</p> <p>第47図 4-I区平面図・基本土層図 (S=1/60・1/300)……………64</p> <p>第48図 4-I区SB401平面図・断面図 (S=1/40・1/100)……………65</p>
---	---

第49図	4-I区SB402平面図・断面図 (S=1/80)……………	66	第72図	4区SX06出土遺物実測図3 (S=1/3)……………	93
第50図	4-I区SE01・02、P15平面図・断面図 (S=1/20)……………	68	第73図	4区SX06出土遺物実測図4 (S=1/3)……………	94
第51図	4-I区SD01・02平面図・断面図 (S=1/40・1/80)……………	69	第74図	4区SX06出土遺物実測図5 (S=1/3)……………	95
第52図	4-I区SD06平面図・断面図 (S=1/50)……………	70	第75図	4区SX06出土遺物実測図6 (S=1/3)……………	97
第53図	4-I区SK02・03・05・07平面図・断面図 (S=1/40)……………	71	第76図	4区SX06出土遺物実測図7 (S=1/2・1/3・1/4)……………	98
第54図	4-II区SX02・03平面図・断面図 (S=1/40・1/200)……………	72	第77図	4区SX06・07出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)……………	100
第55図	4-III区SB403・404平面図・断面図 (S=1/80)……………	73	第78図	4区SG01出土遺物実測図1 (S=1/3)……………	101
第56図	4-III区SX06平面図・断面図 (S=1/40・1/200)……………	74	第79図	4区SG01出土遺物実測図2 (S=1/2・1/3・1/4)……………	102
第57図	4-III区SD16・SG01平面図・断面図 (S=1/50・1/300)……………	75	第80図	4区石積01出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)……………	103
第58図	4-III区石積01平面図・断面図 (S=1/30)……………	76	第81図	4区SD18出土土器実測図1 (S=1/3)……………	104
第59図	4-IV区平面図・基本土層図 (S=1/80・1/300)……………	78	第82図	4区SD18出土土器実測図2 (S=1/3)……………	105
第60図	4-IV区小溝群平面図、SD18・19 断面図(S=1/40・1/100)……………	79	第83図	4区SD18出土木器実測図1 (S=1/3)……………	107
第61図	4-IV区SD14断面図、下層遺構実測図 (S=1/40・1/100)……………	80	第84図	4区SD18出土木器実測図2 (S=1/3)……………	108
第62図	4-V区SB05・06平面図・断面図 (S=1/80)……………	82	第85図	4区SD18出土木器実測図3 (S=1/2・1/3)……………	109
第63図	4区SE02出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)……………	83	第86図	4区SD18出土木器実測図4 (S=1/6)……………	110
第64図	4区SD01出土遺物実測図1 (S=1/3)……………	84	第87図	4区SD18出土木器実測図5 (S=1/6)……………	111
第65図	4区SD01出土遺物実測図2 (S=1/2・1/3)……………	85	第88図	4区SD18出土木器実測図6 (S=1/3)……………	112
第66図	4区SD05出土遺物実測図 (S=1/3)……………	86	第89図	4区SD18出土木器実測図7 (S=1/3)……………	113
第67図	4区SD06出土遺物実測図 (S=1/3)……………	87	第90図	4区SD出土遺物実測図(S=1/2・1/3) ……	115
第68図	4区SD01・SX03出土遺物実測図 (S=1/3)……………	88	第91図	4区出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)……………	116
第69図	4区SX02・03出土遺物実測図 (S=1/2・1/3・1/4)……………	89	第92図	4区出土木器実測図(S=1/3・1/6) ……	117
第70図	4区SX06出土遺物実測図1 (S=1/3)……………	91	第93図	森本活断層発掘調査区 (S=1/600)……………	127
第71図	4区SX06出土遺物実測図2 (S=1/3・1/4)……………	92	第94図	断層活動を表す土層断面図 (S=1/60)……………	127
			第95図	4区曲物生産関連遺物(S=1/8・1/1000) ……	129
			第96図	曲物生産工具と作業解説図(S=1/5) ……	131

## 表 目 次

第1表	発掘調査・出土品整理体制表……………	3	第7表	2区土器・土製品観察表……………	56
第2表	梅田B遺跡周辺遺跡一覧表……………	8	第8表	2区木器観察表……………	56
第3表	1区土器・土製品観察表……………	38	第9表	4区土器・土製品観察表……………	118
第4表	1区木器観察表……………	39	第10表	4区木器観察表……………	122
第5表	1区金属製品観察表……………	39	第11表	4区金属製品観察表……………	124
第6表	1区石製品観察表……………	39	第12表	4区石製品観察表……………	124

## 図 版 目 次

図版1	遺跡全景(南から)、遺跡全景(東から)	1区(北)SD03土層断面(北東から)
図版2	1区下層調査区的全景(南から) 1区下層調査区的全景(西から)	1区(北)SD02・03土層断面(北東から) 1区(北)SD03木製片口鉢の出土状況
図版3	1区表土の重機掘削 1区上層遺構の検出状況 1区上層SD12検出状況 1区SD14検出状況と上層堆積層 1区(南)西側拡張の上層遺構 1区(南)の上層遺構 1区上層堆積層の重機掘削 1区SD02・SD03の発掘状況	図版8 1区(北)SD02～SD13(南東から) 1区(北)SD014と柱穴列(西から)
図版4	1区SD01(南から)、1区SD06(西から)	図版9 1区(南)SD14(南西から) 1区(北)SD14(南西から) 1区(南)SD14南端(南西から) 1区(南)SD14土層断面(北から) 1区(南)西側拡張(東から) 1区(北)SD13(西から) 1区(北)SD18(東から)
図版5	1区(南)上層遺構(東から) 1区(南)西側拡張(東から) 1区(南)上層遺構(南西から) 1区(南)SD21(北から) 1区(南)SD22(北東から) 1区(南)SD21土層断面(南から) 1区(南)SB101(南から) 1区(南)P03土器出土状況	1区(南)SD28土層断面(西から)
図版6	1区(南)SK01土層断面(東から) 1区(南)SK02土層断面(東から) 1区(南)SK03土層断面(南東から) 1区(南)SK03(東から) 1区(南)SD08土層断面 1区(南)SD19土層断面 1区(北)SD10(南から) 1区(北)SD10土層断面	図版10 1区出土遺物1 図版11 1区出土遺物2 図版12 2区下層調査区全景(西から) 2区下層調査区全景(南から)
図版7	1区(北)SD02・03(北東から) 1区(北)SD02土層断面(北東から)	図版13 2区中層堆積層の重機掘削 2区下層遺構の検出作業 下層遺構の発掘風景1 下層遺構の発掘風景2 2区下層東側SD01東側(南東から)
		図版14 2区下層東側SD01土層断面(北東から) 2区下層東側SD01土器出土状況 2区下層東側SD02土層断面 2区下層東側SD02木器出土状況 2区下層東側SD02(南西から)
		図版15 2区下層西側SD03・05(南西から) 2区下層西側遺構発掘状況 2区下層西側SD03・05土層断面

- 2区下層西側SD03遺物出土状況  
 2区下層西側SD05土器出土状況  
 図版16 2区下層東側SD05北部(北東から)  
 2区下層東側SD07(南から)  
 2区下層西側SB201(南西から)  
 2区下層西側SD01内土坑  
 2区北西の活断層(南壁)  
 図版17 2区出土遺物  
 図版18 4-I・II区全景(南から)  
 4-IV区全景(南から)  
 図版19 4-III・V区全景(北から)  
 4-III・V区全景(東から)  
 図版20 4-I区全景(西から)  
 4-I区全景(東から)  
 4-I区SE01土層断面(東から)  
 4-I区SE02(北から)  
 4-I区P15土層断面(南から)  
 4-I区SK01土層断面(東から)  
 4-I区SD10と土層断面(東から)  
 4-I区SD06(南から)  
 図版21 4-III区SX04(南から)  
 4-III区SX05・SD15(南から)  
 4-III区SX06(南から)  
 4-III区SX06(北から)  
 SX06土器溜り  
 SX06下駄出土状況  
 4-III区SX06法面(西から)  
 4-III区SX06土層断面と杭列(北から)  
 図版22 4-III区全景(南から)  
 4-III区SG01と土層断面(東から)  
 4-III区SX07周辺(北から)  
 4-III区SD16(西から)  
 4-III区SX07(南から)  
 4-III区石積01(南から)  
 4-III区SK06土層断面(東から)  
 4-III区P33(北から)  
 図版23 4-IV区全景(南東から)  
 4-IV区SD18(北西から)  
 4-IV区SD18発掘作業(北西から)  
 4-IV区SD18土層断面(南から)  
 SD18木器発掘状況  
 SD18木製容器出土状況  
 SD18曲物出土状況  
 SD18柄杓出土状況  
 図版24 4-IV区SD21(北西から)  
 4-IV区SD19(北から)  
 4-IV区SD20周辺(西から)  
 4-IV区SD20周辺(南から)  
 4-IV区下層全景(南東から)  
 4-IV区下層全景(西から)  
 4-IV区SD24(南から)  
 4-IV区下層断面(南から)  
 図版25 4-V区全景(北から)  
 4-V区全景(南から)  
 4-V区SK04(南から)  
 同左土層断面  
 4-V区SD12・13(北西から)  
 4-V区SK05(北西から)  
 4-V区SD14(南東から)  
 4-V区SD14土層断面(東から)  
 図版26~32 4区出土遺物1~7



# 第1章 発掘調査の経緯と経過

## 第1節 発掘調査に至る経緯

金沢市梅田B遺跡の発掘調査は、国土交通省(平成12年まで建設省)が事業主体である一般国道159号(旧8号改築)金沢東部環状道路工事に伴うものとして、石川県教育委員会が建設省からその委託を受けて、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会(以下埋文保存協会、平成10年度組織統合)及び財団法人石川県埋蔵文化財センター(平成25年度から公益法人)が実施したものである。

調査原因の金沢東部環状道路は、金沢市内を通過する一般国道8号及び159号の交通量の増加により生じていた慢性的な交通混雑に対処し、安全な都市交通の確保を図りつつ、市内の交通混雑の解消を目的とした環状道路網計画による地域高規格道路である。また、この外環状道路は、市街地の東部に連なる丘陵地を抜ける山側幹線(延長26.4km)と、市街地西部の水田や住宅地を通過する海側幹線(延長18.5km)に分れる。共に、梅田町に近い国道8号今町インターチェンジを起点としている。

平成3年、金沢市今町から鈴見台までの金沢東部環状道路(延長9.4km)の早期開通を目指した建設省は、同年2月に建設省北陸地方建設局金沢工事事務所(現国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道工事事務所)から、埋蔵文化財分布調査の依頼が石川県教育委員会へ出された。これは、事業の予定地に多くの埋蔵文化財包蔵地が存在することが予測され、埋蔵文化財に係る現地調査が、同事業の進捗に大きな影響を及ぼすことが危惧されたことによる。

金沢東部環状道路予定地における埋蔵文化財の把握を早期に進める必要を認識した金沢工事事務所と石川県立埋蔵文化財センターは、道路建設の予定地の買収が済み、試掘調査等の条件などが整った地区から、順次、埋蔵文化財の分布調査を実施することで合意した。

当時、周知の埋蔵文化財包蔵地であった梅田B遺跡が存在する梅田町については、平成3年2月14日に金沢工事事務所から石川県立埋蔵文化財センターへ分布調査等の依頼文が出された。県立埋蔵文化財センターでは、同年3月15日にJR北陸本線よりも北西側の予定地で試掘調査を実施し、水田下に広がる埋蔵文化財包蔵地を確認した。これは、JR北陸本線の南東側に存在する梅田B遺跡の広がりと考えられ、その旨を金沢工事事務所長へ回答した。

その後、梅田町地内における事業予定地の買収等に伴い追加の分布調査が実施され、梅田B遺跡をはじめ周辺地の埋蔵文化財包蔵地が次第に明らかとなった。梅田B遺跡については、事業者である建設省から文化財保護法に基づく発掘通知が石川県教育委員会へ提出され、それに対し県教育委員会は、発掘調査が必要とする旨を通知し、平成5年度より現地における発掘調査を実施する運びとした。この梅田B遺跡の発掘調査は、平成5～9年度までを埋文保存協会、平成10、11年度を財団法人石川県埋蔵文化財センターが担当した。いずれも、石川県からの委託事業であった。



第1図 金沢市梅田B遺跡の位置

梅田B遺跡の試掘調査および発掘調査は、起点である今町インターチェンジから工事計画の予定地の買収状況に応じて進められた。遺跡の西端部から発掘調査が東進するなかで、予定地の現況と契約から年度により調査区の変更が生じたほか、工事の設計変更に伴う変動や拡大もあった。また、発掘調査が森本丘陵に近づき、河原市用水が通過する丘陵の裾部から開析谷では、弥生時代以降とみられる土砂の堆積により、複数面の遺構面が存在する区域があることも判明した。

このため、平成5年度に開始した梅田B遺跡の発掘調査は、遺跡の範囲拡大や遺構面の多面化から、平成11年の第7次調査までの7年間で、累計7万㎡を超える調査面積となった。

## 第2節 発掘調査の経過

平成5年度に開始された梅田B遺跡の発掘調査は、起点の今町インターチェンジ側が遺跡の西端部と推定されたことから、JR北陸本線の北西部から着手された。翌6年度の第2次調査では、調査区はJR北陸本線の南東側に移り、平成7年度の第3次調査、平成8年度の第4次調査と道路本線の予定地を東進するように発掘調査は進められた。

平成8年度の第4次調査では、第3次調査区の東方に1・2区を設け、遺跡の範囲拡大が確認された第1次調査の西側に3区、梅田インターチェンジ南側の分岐道路予定地にK区を設け、延16,200㎡の発掘調査を実施したが、2区3面目(下層)については、翌年度へ繰り越した。

平成9年度の第5次調査では、同年4月2日に事業者の建設省北陸地方建設局金沢工事事務所長から石川県教育長あてに発掘調査依頼があり、4月7日には石川県と事業者、石川県と埋文保存協会が平成9年度の発掘調査・出土品整理の委託契約を締結した。梅田B遺跡の発掘調査計画書には、当初の調査面積は12,500㎡とするが、2,500㎡の追加契約により、最終15,000㎡の計画が明記された。

現地調査は、埋文保存協会が平成9年4月9日から同年12月22日にかけて実施した。4月24日には建設省、県文化財課、埋文保存協会の担当者による現地打合せで、調査範囲の確認及び調査工程の確認と調整が行われた。5月6日から重機による表土除去作業を開始し、5月19日に調査事務所へ発掘機材を搬入することで、現地調査を本格化した。埋文保存協会では、調査員・作業員とも3班体制を組み、1～4区の遺構検出・掘削作業等を順次開始した。調査体制は、第1表のとおりである。

同年10月、発掘調査の進捗を確認した県文化財課は、埋文保存協会に対して、梅田B遺跡で4,000㎡の追加調査を依頼した。これにより、当初12,500㎡の調査面積は、16,500㎡と増大したが、遺構密度が予想以上に希薄であったことから、発掘作業が順調に進んだ。各区は調査の進捗に応じて、重機による表土掘削、遺構の検出と調査、空中写真測量を実施した。補測作業を経て12月22日に県文化財課、建設省、埋文保存協会による終了確認を行ない、現地の引渡しを実施した。

同年12月24日には、埋文保存協会から石川県教育委員会へ現地完了が提出された。調査面積は、1区6,600㎡(3,300㎡×2面)、2区2,500㎡、3区5,600㎡(2,800㎡×2面)、4区2,800㎡(2,300㎡+500㎡)となり、合計面積は17,500㎡と報告されている。

## 第3節 出土品整理等の経過

本遺跡の第5次調査に係る出土品整理作業は、平成15年度に(財)石川県埋蔵文化財センターに委託され、記名・分類・接合、実測・トレース、遺構図トレースの各作業を調査部調査第1課と企画部整理課が担当した。また、図面類のデジタル図化編集作業と樹種同定作業を外部へ委託している。

本報告書の作成と刊行については、令和2年度に原稿作成、図版作成等を行い、令和3年度に追加の原稿作成と、編集・校正作業及び報告書の刊行を実施した。

なお、本遺跡の第1～4次調査の成果については、既に発掘調査報告書を刊行しており、本書はその続編である。報告済みの調査区は、第2図に明示した。

『金沢市 梅田B遺跡Ⅰ』（平成14年3月29日刊行）

内容：平成5年度第1次調査(6,600㎡)、平成8年度第4次調査3区(1,200㎡)、平成10年度第6次調査A区(1,000㎡)の調査成果

『金沢市 梅田B遺跡Ⅱ』（平成16年3月31日刊行）

内容：平成6年度第2次調査(2,400㎡)、平成7年度第3次調査(9,000㎡)の調査成果

『金沢市 梅田B遺跡Ⅲ』（平成18年3月31日刊行）

内容：平成8年度第4次調査(1区3層7,400㎡、2区2層5,000㎡)の調査成果

調査・整理年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度
調査・整理主体	(社)石川県埋蔵文化財保存協会 (理事長 濱岡賢太郎)		(財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 中西吉明(～平成10年6月30日)、 西 貞夫(平成10年7月1日～))	
総括	大西外美雄(事務局長)	大西外美雄(事務局長)	北村義男(専務理事)	村角道善(専務理事)
事務	田中健一(総務課長)	辻口明広(総務課長)	油屋好樹(事務局長) 藤瀬貞男(総務課長)	油屋好樹(事務局長) 藤瀬貞男(総務課長)
調査	田嶋明人(次長) 三浦純夫(調査課長) 藤田邦雄(調査第1係長)	田嶋明人(次長) 三浦純夫(調査課長) 藤田邦雄(調査第1係長)	谷内尾晋司(所長) 小嶋芳孝(調査部長) 中島俊一(調査第1課長)	谷内尾晋司(所長) 小嶋芳孝(調査部長) 中島俊一(調査第1課長)
担当	調査第1係	調査第1係	調査第1課	調査第1課

調査・整理年度	平成15年度	令和2年度	令和3年度
調査・整理主体	(財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 山岸 勇)	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 徳田 博)	
総括	林 正信(専務理事)	田村彰英(専務理事)	田村彰英(専務理事)
事務	松柳 拓(事務局長) 井田徳久(総務課長) 繁田吉彦(経理課長)	北谷俊彦(事務局長) 伊藤 直(総務GL)	北谷俊彦(事務局長) 北谷洋子(総務GL)
調査	谷内尾晋司(所長)	伊藤雅文(所長)	伊藤雅文(所長)
整理	小嶋芳孝(調査部長) 湯尻修平(企画部長) 中島俊一(調査第1課長) 藤田邦雄(整理課長)	川畑 誠(調査部長) 松山和彦(国関係調査GL)	川畑 誠(調査部長) 澤辺利明(国関係調査GL)
担当	調査第1課、整理課	国関係調査G	国関係調査G

※ GL：グループリーダー、G：グループ

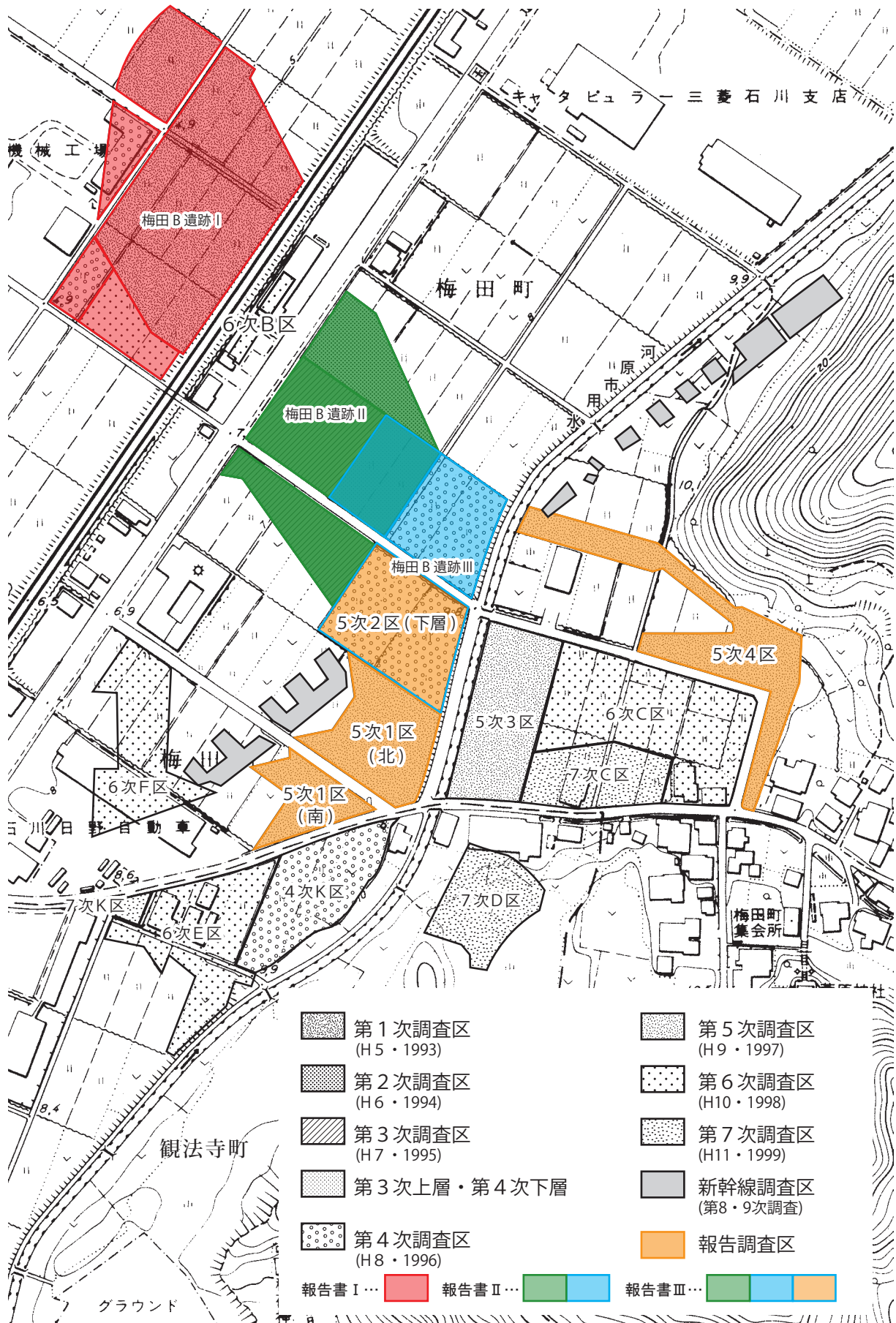
第1表 発掘調査・出土品整理体制表



整理作業の様子1(記名・分類・接合)



整理作業の様子2(実測)



第2図 調査年次毎調査区位置図(S=1/2500)

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

梅田B遺跡は、金沢市北部の梅田町に所在する集落遺跡である。この梅田町は、金沢市の北東域に広がる森本丘陵の西辺に位置しており、低丘陵の開析谷から森下川へ流下する小河川(梅田川)が形成した開析谷と西方の沖積地に立地する。主な地目は水田で、調査地の一部は南方の観法寺町地内へ及んでいる。遺構面は標高5～12mの緩斜面にみられ、北西に広がる河北潟と土砂を供給した森本丘陵の影響が大きい。

金沢市北部の河北潟は、1963～1985年にわたる干拓建設事業により、約1,100haもの干拓地が造成されるまで、石川県最大の汽水湖であった。日本海側に列なる内灘砂丘でせき止められた潟湖は、東西4km、南北約8kmの規模を測り、かつて金沢城下町に暮らした人々は、蓮湖や太清湖と呼び親しんでいた。その広大な潟湖は、水深約2.5mと浅く、フナやワカサギ、ウナギ、エビなどの漁場であると共に、古代から舟運により物資と人が往来した内水面交通の場であった。また、森本丘陵から流下した金沢市の森下川、金腐川や浅野川などが潟の南部に流れ込み、東部から北部では、津幡町とかほく市の各河川が注ぐ。流域に形成された沖積地は、潟縁の湿地と共に水田として開発され、稲作の単作水田として耕作されている。

遺跡の東方に広がる森本丘陵は、富山県との県境に広がる前衛的な丘陵で、標高60～200mの稜線には細かな開析がみられる。地質は更新世前期(90～120万年前)に形成された大桑累層に比定される軟質な砂岩層で、更新世中期(40～50万年前)の断層活動により隆起したと考えられている。また、丘陵の北西側は急峻な斜面となり、その裾には金沢市東山付近から津幡町浅田にかけて、帯状の緩斜面が連なる。これは、丘陵の裾部にある断層の活動に伴い、森本丘陵側の上昇と河北潟(日本海)側の沈降が起きたことで、その境目で地すべり的な崩壊が生じた地形と考えられている。石川県の活断層調査でも、ここには、金沢市小坂町付近から津幡町の中津幡付近まで延びる森本断層(延長13km)が走ることが確認され、金沢市の南部で確認された富樫断層(延長8.5km)と合わせ、総延長約25kmの森本・富樫断層として評価されている。

この森本丘陵と河北潟に挟まれた緩斜面は、帯状で直線的な地形から古代の北陸道に始まり、中世から近世の北陸道、北陸本線、国道8号が敷設され、北加賀の交通路として機能している。遺跡を南北に縦断する河原市用水も、森下川北岸から津幡川までの水田を潤すため、江戸時代に建設されたものである。

### 第2節 森本地区と梅田B遺跡の歴史

森下川が形成した沖積平野には、弥生時代から中世の遺跡が群集しており、手取川の扇状地地形が広がる金沢市南部とは、遺跡の分布様相が異なる。森本地区で最も古い遺物は、縄文時代草創期の有舌尖頭器で、南岸の吉原七ツ塚遺跡(46)から出土している。丘陵地の小野遺跡でも、縄文前期の土器や球状耳飾が採集されキャンプサイトとみられている。また、縄文中・後期をみても集落遺跡は未確認のことから、定住型の集落が設営されるのは、弥生時代の中期以降とみられている。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、森本地区では多くの集落や墳墓が設営され、梅田B遺跡でも集落形成がみられる。塚崎遺跡(49)は標高30mの丘陵に営まれた玉生産の集落で、竪穴建物27基・掘立柱建物4棟等の発掘から構造が判明している。谷を隔てた西方には、方形周溝墓9基、方形台状墓6基、埋葬施設38基を確認した吉原七ツ塚墳墓群(46)が造営されている。対岸の岩出うわの遺跡(31)では、古

墳前期の堅穴建物や大型土坑から集落の展開が知られ、本遺跡で発掘した弥生後期から古墳前期の水田遺構は、当地における水田開発と水稲栽培を裏付けている。また、北方に位置する月影遺跡は、後期終末の有段擬凹線をもつ土器が発見されたことで知られ、背後の丘陵上には古墳群の造営がみられる。観法寺古墳群(17)は、本遺跡と観法寺遺跡(16)を俯瞰する丘陵に造営された古墳前期の方墳と前方後方墳で、被葬者は当地を基盤とした首長と考えられ、観法寺墳墓群(21)も同時期の遺構と報告されている。

古墳後期になると森下川の南岸で古墳造営がみられる。吉原親王塚古墳(44)は、吉原七ツ塚墳墓群の裾に造営された全長76mの前方後円墳で、北加賀最大の首長墓とみられる。隣接する法華堂古墳群(45)では、金環や直刀、須恵器などの遺物が出土している。さらに、12基の横穴墓が発掘された塚崎横穴墓群(50)は、7世紀代に塚崎遺跡の東斜面で造営され、北岸の岩出町や観法寺町においても横穴墓群が確認されることから、森本地区は古墳時代における在地勢力の拠点の一つであったと考えられている。

古代の墨書土器や木簡の出土地をみると、観法寺遺跡(16)、今町A遺跡(8)、大田シタンダ遺跡(1)が、北陸道が敷設されたと推定される丘陵裾に点在する。観法寺遺跡では、古代北陸道とみられる道路状遺構が検出され、8世紀後半～9世紀前半の集落が営まれている。今町A遺跡では、8世紀前半の墨書土器があり、県下でも最古段階のものと評価されている。大田シタンダ遺跡では、墨書土器や帯金具(鉸具、丸軋)の出土から、7世紀後半～8世紀前半に営まれた官衙的な遺跡と推定され、近くに位置する北中条遺跡の墨書土器「深見驛」は、北陸道に設置された深見駅が、この近隣に存在することを裏付けるものと注目される。

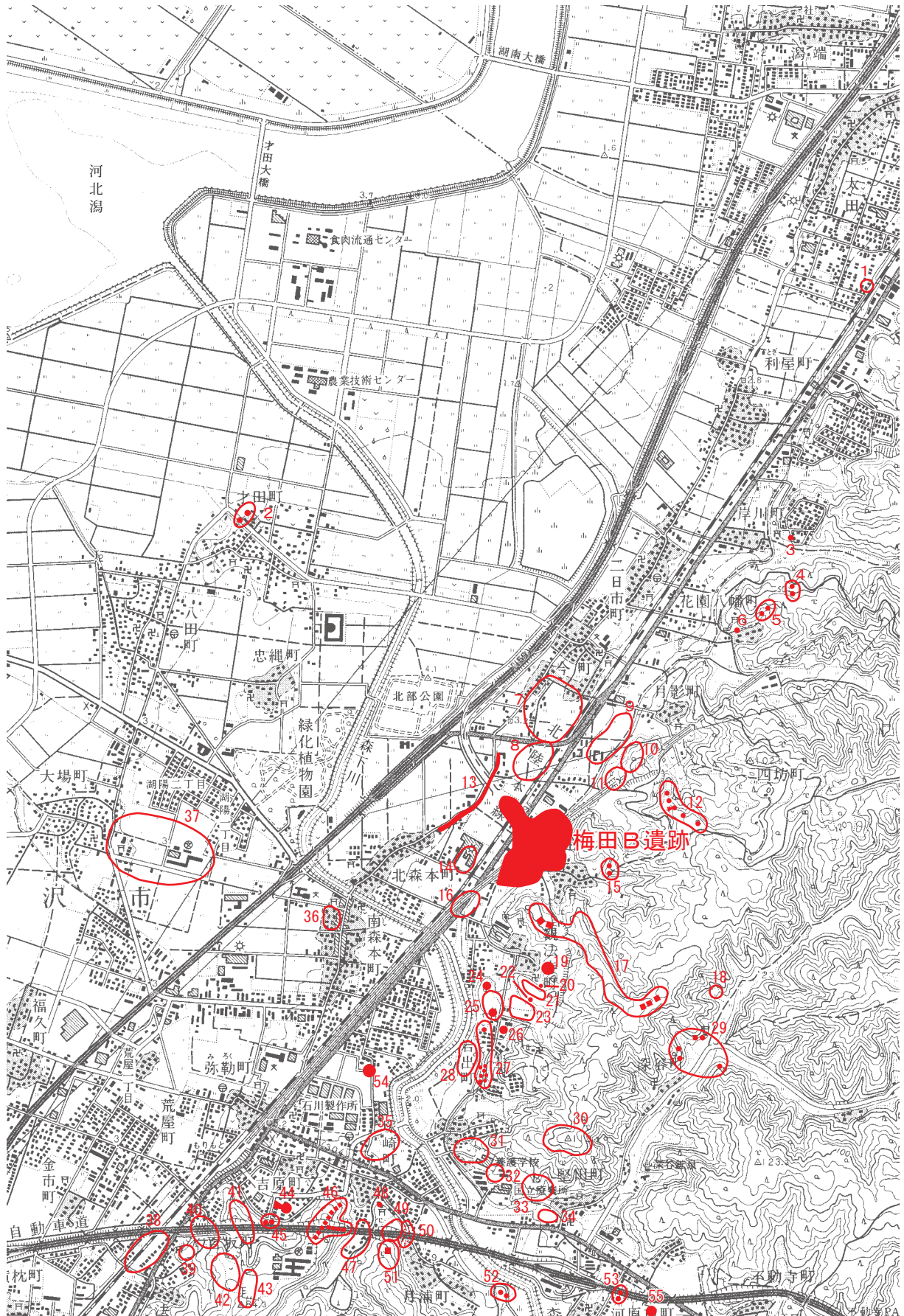
観法寺須恵器窯跡(26)は、7世紀前半に開窯した窯場で、観法寺ジンヤマ窯跡(22)は、7世紀後葉～8世紀初頭に瓦と須恵器を生産している。焼成した瓦は金沢市内の広坂遺跡で造営された古代寺院へ供給されている。また、『日本三代実録』の仁和元年(885)に記録された定額寺の加賀郡弥勒寺は、この森本地区の弥勒町を所在地とする説があるものの、確証となる遺構や遺物は未確認である。

古代の北陸道が機能したと考えられる8～9世紀前半、梅田B遺跡の様相は不明瞭であるが、10～11世紀になると集落の活動がみられる。中世の北陸道に隣接した鎌倉時代の集落をみると、中国陶磁器に加えて東播系の播鉢が搬入され、北陸道から分岐した小道では、スギを加工した木製笠塔婆の造立がみられ、鉄鍋の生産を裏付ける鋳型も出土している。南方の観法寺古墳群では、梅田町の方角から登る階段と一間規模の掘立柱建物(SB03)がセットで発掘され、11～12世紀の宗教施設として機能したと報告されている。谷間の観法寺谷遺跡(19)では、鎌倉時代の有力名主を推定させる宅地から、土器や陶磁器に漆器・鳥形・板絵などの出土がみられ、楠葉型の瓦器塚については、畿内との往来が窺われる。

梅田町の南方1.5km、森下川の北岸に位置する堅田B遺跡(34)は、堅田城跡(30)の山麓に設営された居館である。発掘された方一町規模の堀は、上幅4～5m前後と大規模で、大量の土師器と陶磁器に加えて、建長3年(1251)と弘長3年(1263)銘の卷数板<sup>かんじょういた</sup>が出土している。また、館の南辺を北陸道から分岐した脇街道の小原越が、東の越中方向へと通過している。考古資料の検討から、居住者は承久の乱などの功績により、森下川から津幡川に広がる井家荘<sup>いのいえのしょう</sup>の地頭職を得た東国御家人と考えられている。600mほど離れる河原市館跡(55)でも方形の区画溝が発掘され、地名と出土遺物などから市庭跡と推定されている。

堅田と梅田は京の勸修寺家の所領であった井家荘に比定され、中世史料から時宗の拠点とみられる。

『一遍上人絵詞伝』によれば第二代上人の他阿真教が、正応4年(1291)に加賀を布教している。第三代の阿弥陀仏智得は、弘長元年(1261)に加賀の堅田で誕生したと伝え、第九代の他阿弥陀仏白木(1314～67)も井家荘を根拠地とした加賀井家氏の出身という。また、『時宗過去帳』をみると、貞和4年(1348)に梅田の時衆師阿弥陀仏が没し、以後、作阿弥陀仏、都一房、重阿弥陀仏、巧阿弥陀仏など多くの時衆が梅田に居住したと裏書されるほか、「梅田大場」「梅田観音堂」の記載もみられ、その様子が知られる。



第3図 梅田B遺跡の位置と周辺の遺跡[国土地理院発行2万5千分の1地形図(栗崎)]

第2節 森本地区と梅田B遺跡の歴史

『遊行派末寺帳』にある光摂寺は、近世には退転しているものの梅田に置かれた時宗の道場とみられる。梅田町背後の小字地「テランヤチ」では、戦国期の陶磁器埋納と理解される瀬戸美濃の灰釉皿10点が一括出土しており、この付近が遺跡と考えられている。さらに、森下川南岸の大場遺跡(37)では、15世紀後半代の土師器皿が大量に出土しており、南森本町に位置する居館(南森本遺跡)から15世紀代の堀や建物が発掘されるなど、当地の低湿地では、安定した耕地として村里が設営されている。

番号	名称	所在地	現状	立地	時代	出土品	備考
	梅田B遺跡	金沢市梅田町・観法寺町	畑地、水田	沖積地、開析谷	縄文～近世	縄文土器、打製石斧、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、中・近世陶磁器	県埋文 2002・04・06「梅田B遺跡Ⅰ～Ⅲ」 県埋文 2004「梅田B遺跡・観法寺遺跡」
1	太田シタンダ遺跡	津幡町太田	水田、宅地	沖積地	縄文～近世	須恵器、土師器、墨書土器、銅製帯金具、曲物、鞆羽口	町教委 1994「津幡町太田シタンダ遺跡」
2	才御亭山古墳群	金沢市才田町	墓地、宅地	沖積地	古墳(後期)		沖積地の円墳カ
3	岸川横穴	金沢市岸川町	社地	丘陵斜面	古墳		
4	二日市横穴群	金沢市二日市町	墓地、山林	丘陵斜面	古墳、近代		市埋文 1997「埋蔵文化財調査年報」
5	八幡薬師横穴群	金沢市花園八幡町	山林	丘陵斜面	古墳		
6	八幡波字加弥神社横穴	金沢市花園八幡町	社地	丘陵斜面	古墳		旧参道脇に奥壁遺存
7	今町御所野遺跡	金沢市今町	畑地、水田	沖積地	平安	須恵器	
8	今町A遺跡	金沢市今町	水田、道路	沖積地	縄文、奈良～近世	縄文土器、宋銭2、曲物、土錘、須恵器、土師器、貨幣、木材	県埋文 1982「今町A遺跡」
9	今町僧ノ町遺跡	金沢市今町	畑地	沖積地	平安	須恵器	
10	月影遺跡	金沢市月影町	畑地	丘陵斜面	弥生	土器、シジミ	「月影式土器」の標式遺跡
11	月影塚	金沢市月影町	墓地	丘陵上	不詳		径約8m
12	月影古墳群	金沢市月影町	山林	丘陵上	古墳		前方後円墳1基、円墳4基
13	松並木の旧金沢下口往還	金沢市北森本町・梅田町	道路	沖積地	近世		県指定史跡
14	梅田遺跡	金沢市梅田町・観法寺町	宅地	沖積地	古墳(後期)	土師器	耕地整理により損壊カ
15	梅田横穴群	金沢市梅田町	山林	丘陵斜面	古墳(後期)		横穴2基
16	観法寺遺跡	金沢市観法寺町	水田	沖積地	縄文～近世	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、陶磁器、柱根	県埋文 2004「梅田B遺跡・観法寺遺跡」 県埋文 2013「観法寺遺跡」
17	観法寺古墳群	金沢市観法寺町	畑地、山林	丘陵上	弥生～中世	弥生土器、土師器、剣、須恵器、土師器	県埋文 2008「観法寺古墳群」
18	深谷遺跡	金沢市北森本町	畑地	丘陵	縄文	石斧	
19	観法寺谷遺跡	金沢市観法寺町	山林	開析谷	中世	土師器、中国陶磁器、瀬戸焼、珠洲焼、漆器、曲物、鳥形、柱材、板絵、温石、銭貨	県埋文 2008「観法寺谷遺跡」
20	観法寺ジヤマ横穴	金沢市観法寺町	山林	丘陵斜面	古墳後期		2021年県埋文調査
21	観法寺墳墓群	金沢市観法寺町	山林	丘陵上	弥生後期～末	弥生土器	2021年県埋文調査
22	観法寺ジヤマ窯跡	金沢市観法寺町	山林	丘陵斜面	古墳後期	須恵器、瓦	2020年県埋文発掘調査
23	観法寺ヤツタ遺跡	金沢市観法寺町	水田	開析谷	古墳～中世	土師器、須恵器、瓦	2019・20年 県埋文発掘調査
24	観法寺瓦窯跡	金沢市観法寺町	畑地	丘陵斜面	平安	瓦	1987「北陸の古代寺院」桂書房
25	観法寺古墳	金沢市観法寺町	山林	丘陵(後期)	古墳(後期)		径約10mの円墳
26	観法寺横穴群	金沢市観法寺町	山林	丘陵斜面	古墳(後期)		1～5号横穴が現存カ
27	観法寺須恵器窯跡	金沢市観法寺町	山林	丘陵斜面	古墳後期	須恵器	
28	岩出横穴群	金沢市岩出町	道路、山林	丘陵斜面	古墳(後期)	人骨、須恵器、土師器、刀装具、刀子、直刀、金環、管玉	
29	岩出うつば遺跡	金沢市岩出町	畑地	沖積地	平安	須恵器	
30	深谷横穴群	金沢市深谷町	山林、畑地	丘陵斜面	古墳(後期)		
31	堅田城跡	金沢市堅田町	山林	丘陵上	弥生・中世		
32	岩出銭ガメ塚古墳	金沢市岩出町	病院敷地	丘陵上	古墳		
33	堅田A遺跡	金沢市堅田町	畑地	沖積地	古墳	土師器	
34	堅田B遺跡	金沢市堅田町	畑地	沖積地	中世	土師器、漆器、中国陶磁器、瀬戸焼、下駄、曲物、卒塔婆、勸請札	市埋文 2003「堅田B遺跡Ⅰ」 市埋文 2004「堅田B遺跡Ⅱ」
35	塚崎タカキ遺跡	金沢市塚崎町	水田、畑地	沖積地	古墳、平安	碧玉原石、土師器、須恵器	
36	亀田大隅岳信館跡	金沢市南森本町	宅地	沖積地	中世		
37	大場遺跡	金沢市大場町	水田、校地	沖積地	古墳、中世	土師器	県教委 1970「大場遺跡」
38	百坂C遺跡	金沢市百坂町	水田、宅地	沖積地	中世	青磁、陶器、土師質土器	
39	百坂B遺跡	金沢市百坂町	山林	丘陵	古墳(前期)	土師器	
40	百坂A遺跡	金沢市百坂町	道路、山林	丘陵	古墳	土師器	
41	古原大門山遺跡	金沢市吉原町	道路	丘陵	古墳	土器、鉄器	
42	百坂あらかやま遺跡	金沢市百坂町	畑地	丘陵	縄文	土器	
43	松陵高校グラウンド遺跡	金沢市吉原町	校地	丘陵	縄文	土器、尖頭器	
44	吉原親王塚古墳	金沢市吉原町	宅地	丘陵裾	古墳	直刀、須恵器	1945年消滅、前方後円墳(全長76m)と推定
45	吉原法華堂古墳群	金沢市吉原町	道路、山林	丘陵上	古墳(後期)		県教委 1973「法華堂第2号墳」
46	吉原セツ塚墓群	金沢市吉原町	道路	丘陵上	弥生		県教委 1974「セツ塚墓群」
47	吉原セツ塚遺跡	金沢市吉原町	道路	丘陵上	縄文～古墳	有舌尖頭器、弥生土器、管玉	県教委 1974「セツ塚墓群」
48	塚崎大谷遺跡	金沢市塚崎町	水田	平地	縄文、古墳	縄文土器、磨製石斧、土師器	
49	塚崎八幡神社古墳	金沢市塚崎町	社地	丘陵	古墳		
49	塚崎遺跡	金沢市塚崎町	畑地、道路	台地	弥生、古墳	土器、管玉、勾玉、ガラス小玉、鉄剣、鉄鏃、砥石	県教委 1976「塚崎遺跡」
49	塚崎中世遺跡	金沢市塚崎町	畑地、道路	台地	中世	火葬骨、土師器皿、珠洲焼	県教委 1976「塚崎遺跡」
50	塚崎横穴群	金沢市塚崎町	山林、道路	丘陵斜面	古墳(後期)		県教委 1976「塚崎横穴群」
51	塚崎古墳	金沢市塚崎町	山林	丘陵上	古墳		方墳、辺21m、高1m。
52	月浦町おやだま横穴群	金沢市月浦町	山林	丘陵斜面	古墳(後期)		横穴2基
53	河原市経塚群	金沢市河原市町	道路	丘陵先端	近世	一石一字経	県教委 1974「河原市遺跡」
54	南森本・塚崎遺跡	金沢市南森本町・塚崎町	宅地、道路	沖積地	弥生～古代	弥生土器、土師器、須恵器、墨書土器、木製品	市埋文 2002「南森本・塚崎遺跡」
55	河原市館跡	金沢市河原市町	道路	河岸段丘	縄文、中世	土器、石器、珠洲焼、加賀焼、土師器	市埋文 1996「河原市館跡」

第2表 梅田B遺跡周辺遺跡一覧表



## 第3章 第5次調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

平成9年度の第5次調査は、調査の予定地内に梅田町の市道や農道、用排水路が所在したことから1～4区に分割した。また、前年度第4次調査の2区についても下層が発掘未了であったことから、これを第5次調査の2区として扱い、その南西部に1区、河原市用水の東側に3区を設けた。3区の北側に予定された農道の付け替え予定他の4区については、用排水路の撤去が困難であったことから、4-I区から4-V区まで5区画に細分することで、発掘調査を順次実施した。

また、1～4区にかけて公共座標(日本測地系)に基づく10m間隔のグリッドを設定した。グリッドの基点は、平成5年(1993)に実施した第1次調査から踏襲してきたもので、北から南へ向けてL～Yのアルファベットを、西から東へは9～33の算用数字を用い、それらを組み合わせることで、T14区などのグリッド名とした。また、グリッドの北西隅の杭に区名を付しており、1区(北)のT14杭の座標は、 $X = +68980$ 、 $Y = -41090$ となる。

検出した遺構の番号は、各調査区で独立している。略記号は、溝 = SD、井戸 = SE、土坑 = SKを使用し、各区とも略記号に1から順に番号を付している。複数の遺構面が確認された調査区でも、遺構の番号は連続しており、遺構面により番号の使い分けはない。このため、調査の工程で遺構の種別が変更するなかで、番号に欠番を生じている場合がある。

各調査区の基本層序は、調査地点により土層の堆積状況に異なりが多く、安定していない。これは、開析丘陵から流下した土砂堆積と水田耕作に伴う造成等で複雑化したとみられる。加えて、後述する森本断層の活動に起因すると考えられる地層のずれが、層序の把握をより困難にしている。

平成9年の現地調査は、埋文保存協会が同年4月9日から12月22日にかけて実施した。4月下旬に建設省、県文化財課、埋文保存協会の三者で現地打合せをおこない、調査範囲と基本工程等の確認を実施している。埋文保存協会は、調査員6名と作業員からなる3班の調査体制を組み、5月6日から重機による表土除去作業を開始することで、第5次調査の発掘を本格化させた。

当初の調査面積は12,500㎡であったが、発掘作業の進捗を踏まえ、途中で追加調査の依頼があり4,000㎡ほどが増加された。12月22日に現地で三者による終了確認が行なわれ、調査地が県文化財課確認のもと建設省へ引き渡された。最終の調査面積は、1区6,600㎡(3,300×2面)、2区2,500㎡、3区5,600㎡(2,800×2面)、4区2,800㎡(2,300+下層500㎡)を測り、総面積は17,500㎡であった。

このうち、本報告書では、1区、2区、4区の調査成果を収録している。3区については、隣接地を平成10年(1998)の第6次調査(C区)、平成11年の第7次調査(C区)と分轄して発掘したことから、次年度以降に一体的に報告する予定である。

### 第2節 調査区の概要

第5次調査の成果は、次節に個別報告がある。ここでは、1・2区及び4区の概要を報告する。

#### 1区の概要

1区は遺跡の南西部に位置して、北辺は第4次調査の2区、東辺は市道と河原市用水に面している。調査面積は6,600㎡を測るが、これは1区(北)と拡張区とした1区(南)の全域(3,300㎡)で、上下2面の発掘と遺構検出の発掘作業を実施ことから算定されたものである。

南北の2区画に分かれる1区では、南東の市道際において遺構面が浅く、上下2面の遺構が同一の地山面で検出された。傾斜していた地山面は、北西や2区の方角へ向けて標高が下がり、間層的な堆積層の下を抜けて、2区の下層遺構面へ連なる。このため下層の遺構は、ほぼ全域で確認したものの、上層の遺構は、1区(南)から1区(北)の南東側に偏在している。

上層で検出した遺構は、平安時代後半から近世とみられる。灰色砂質土や砂粘質土の包含層からは、中世の土師器皿を中心として近世に至る遺物が出土している。遺構としては、掘立柱建物、土坑、溝、畝溝などが検出されたが、その規模は小型のものが多い。そのような1区で、SD02と漆器片口鉢が出土したSD03は、中世に機能した排水溝として注目される。この上方に当たる遺構が、東方の3区や7次調査のC区で検出され、この溝は梅田町の開析谷から流下した小河川(梅田川)の前身とみられる。また、下層のSD13などは、それ以前の流水路であった可能性が高い。

さらに、1区下層の西辺を南北に貫流しているSD14は、北の2区を抜け第4次調査の1区まで延びる長大な利水施設として注目される。このSD14の西側では、縄文晩期から弥生前期の土器や石器などの集中がみられ、弥生時代以前の活動がこの付近にあったことを物語っている。

#### 2区下層の概要

2区は第4次調査の2区で、平成8年(1996)に上層と中層の遺構調査が実施され、下層面が未調査となった調査区である。調査面積は下層一面で、2,500㎡を測る。

第4次調査では、上層において平安時代後半から中世の掘立柱建物や溝から構成される宅地を発掘し、中層では弥生時代終末から古墳時代初期の小区画水田などを検出している。また、第4次調査の1区で発掘された大型の竪穴建物などが、南の2区へ広がるものと予測されたが、下層では掘立柱建物1棟、溝数条と遺構の検出が少なかった。過年度の調査区と比べても、遺構数、遺物量とも急減しており、弥生後期に営まれた集落の縁辺部を示すものと理解された。

なお、2区の北西隅では、石川県森本断層調査グループ・石川県環境安全部(生活安全部前身)による活断層調査が実施されている。調査の概要は、第4章第2節の「活断層調査と梅田B遺跡」に取上げたが、過年度調査区で発掘された断層の活動により、弥生後期の集落は、M6.7以上と推定される大規模な直下型の地震を経験したことが明らかにされた。また、古墳時代の初頭に営まれた小区画の水田などは、この地震からの復興するなかで、耕地として再開されたものと考えられ、自然災害を克服した歴史が明らかにされた事例と評価される。

#### 4区の概要

梅田インターチェンジの北側では、農道などの付け替え予定地が、北西、西、南の三方向に分岐する不規則な形状にあった。また、予定地には既設の用排水があり、調査区は5区画に分轄された状況にあった。このため、北西に4-I区、4-II区の調査区を設け、中央付近を4-III区、その西側を4-IV区、南側を4-V区と分轄する調査計画のもと、西方の4-I区から発掘を開始した。調査面積は、2,800㎡を測る。これは、4区の全域(2,300㎡)で奈良・平安時代以降の遺構が検出されるなか、下層の遺構が4-I区と4-III区で発掘されたことで、その面積500㎡を加算したものである。上層は奈良・平安時代～近世の遺構面で、下層では弥生時代の遺構・遺物がみられた。

このうち、4-I区で検出した中世前半の遺構は、建物の柱穴、土坑、溝等から構成され、屋敷地の存在が確認できた。また、4-IV区のSD18は、古代から中世に利用された溝状の湧水池である。古代の人形や曲物、槽や加工材等の木製品が注目される。その東側に位置する4-III区のSX06で確認された曲物生産は、工具の出土には欠けるものの、古代から中世にかけて、北陸道に隣接していた梅田の集落に暮らした住人の生業が確認されたものである。

## 第3節 1区の遺構と遺物

### 1. 1区の上層遺構(第4～14図)

1997年の第5次調査は、第1次調査から続いた金沢東部環状道路の本線部分の発掘調査に加えて、梅田インターチェンジの両側に整備される取付け道路予定地の調査も併せて実施する運びとなった。また、前年の第4次調査の2区下層が、未調査として残されたことから、未調査の2区下層を第5次調査の2区として取扱い、その南側の取付け道路予定地に1区、2区東側の本線部分に3区を設定した。

このため1区は、第4次調査の2区南辺から、梅田町へ向かう市道までの区域となり、第2次調査から設定している10m方眼のグリッドも、北端がQライン、南端はYラインへ及んだ。さらに1区には、東西に横断する農道が生活道として利用され、調査対象地から除外されたことで、市道と農道に挟まれ三角形の南部と、農道から2区南辺までの略台形状の北部に分かれていた。

現地調査では、1区の全域に設定したグリッドを使い、包含層遺物など取上をおこなったが、本報告では、遺構の解説を進めるため1区南部を「1区(南)」、北部を「1区(北)」と表示することにした。その1区では、上層・下層の文化層を発掘している。上層の遺構は、1区(南)から1区(北)の東側を中心に確認しており、下層の遺構は、ほぼ全域で確認したが、南東部のSD02・03の周辺では、それらが同一の地山面で検出されている。また、1区(南)では、耕作土の直下から近世以降と推定される畝溝などを下層包含層の上面で検出している。

#### 上層遺構の概要(平安時代～近世)

上層は灰色の砂質土と一部地山を遺構の基盤としており、主に平安時代後期から近世に至る遺物が出土している。遺構としては、掘立柱建物、土坑、溝、小溝群などが検出された。総柱の掘立柱建物SB101は、調査区外の市道下へ伸びるものとみられ、馬鋏状木製品が出土しているSK03と同時期とみられる。調査区の南東で並走するSD02・03の溝は、本遺跡が立地する梅田町の開析谷から流下した用水路とみられ、SD03の底から出土した漆器の片口鉢(第24図54)は、発掘時から注目された。また、1区(南)の小規模な溝は、宅地や耕地に設営されたものとみられ、土地利用の変化を示している。

#### (1) 1区(南)の上層遺構(第6～10図)

SB101：1区の南辺で検出した2間×2間以上の小規模な掘立柱建物で、南側は市道下へ延伸している。東西の柱間が180cmと230cmを測り、西側の柱間180cm分は、庇のようにみえる。東西を梁行とすると、本来は東へ延びて、3間×3間の構造であった可能性が高く、南北の小溝群に切られたことで不明である。P11からスギ材の柱根が出土しており、平安時代末頃から鎌倉時代前半に設営されたものとみられる。

SK01：小溝群の東で、SK02と南北に並ぶ円形の土坑である。長径106cm、深さ60cmを測り、覆土の下部はレンズ堆積を呈する。小溝群は宅地の囲む区画溝であった可能性が高く、本土坑はその宅地に設営された井戸状の利水施設とみられる。

SK02：SK01の北に隣接する小土坑である。長径65cm、深さ43cmを測り、内部は二段掘りとなる。SK01とは隣接するものの、形態は4-I区で検出した平安時代末頃のSB01の柱穴に近似しており、掘立柱建物の支柱穴とみられる。

SK03：SB101の北西脇に位置する略方形の大型土坑である。上面の規模は南北径253cm、東西径326cmを測る。底は平坦で略方形を呈し、中央の深さは52cmを測る。底に堆積した淡褐灰色粘質土から、太さ10cm未満の丸木と馬鋏状の木製品(第20図)が出土した。粘質土の特徴から水性堆積とみられ、池状の湛水施設であった可能性が高い。また、覆土上半の1～3層は、埋込みによるものとみられる。SB101に付



第4図 1・2区グリッド設定図(下層) (S=1/600)

属した施設が、建物の廃絶により耕地化されるなかで埋立てされたと考えられる。

SK04: SB101の北西隅の柱穴と複合していた浅い窪地。復元径は284cmを測るも、深さは5cm程である。上層の出土遺物から、当地が耕地化した近世の攪乱的な窪地とみられる。

P03: SD21の西に接する南北径36cm、深さ43cmを測る柱穴状の小穴である。覆土の上半から、13世紀初頭と推定される土師器の皿(第19図1)が出土している。

SD19: 南北方向をとる小溝群の東において斜行する溝である。幅40cmほどで、深さ20cm前後を測る。覆土から建物の廃絶後に機能した用水的な溝とみられる。

SD20: SB101の北でSK03方向へ傾斜する溝状の窪地。幅14~33cm、深さ6~12cmと変動する。宅地の降雨をSK03へ排水する溝の残存とみられる。

SD21: 南北の小溝が複合した溝である。検出時にみられた幅85cmの溝状のプランは、SD21の東に2条の小溝が複合したものとなった。各小溝とも深さ6~12cmと浅く、溝底は緩やかに南へ傾斜し、調査区際で合流している。各小溝覆土も似た灰色土で、溝の東側に設営された宅地の排水施設とみられる。

SD22: SD21から西へ直角に延びる幅8~16cmの小溝である。SD22の脇に1条、90cm程の間隔を空けて、南側に同規模の溝が2条並走する。SD21の東側に設営された宅地から、西方へ三尺規模(90cm)の小路が設置され、その小路の両側に側溝的な小溝が開削されたとみられる。

なお、調査区西側を走る南北方向の小溝SD23は、当地にみられた水田畦畔と方向が合う。溝の西側に点在する小穴は、稲架のような施設とみられる。また東西方向の小溝SD24の脇にも、同規模の小溝が連なる。これも近世以降の農耕によるものであろう。

## (2) 1区(北)の上層遺構(第11~14図)

1区(北)は、1区を横断する農道の北側部分である。調査区の平面形は台形を呈し、南北47m、東西46m規模であった。東側は河原市用水の側道、西側は本線と接続道路の関係から三角状に飛び出す。また、上層の遺構は、調査区の南西側に偏在するように検出した。

P01: 調査区の南東隅で、SD02の肩付近に位置する小穴である。中世の土師器皿が出土。

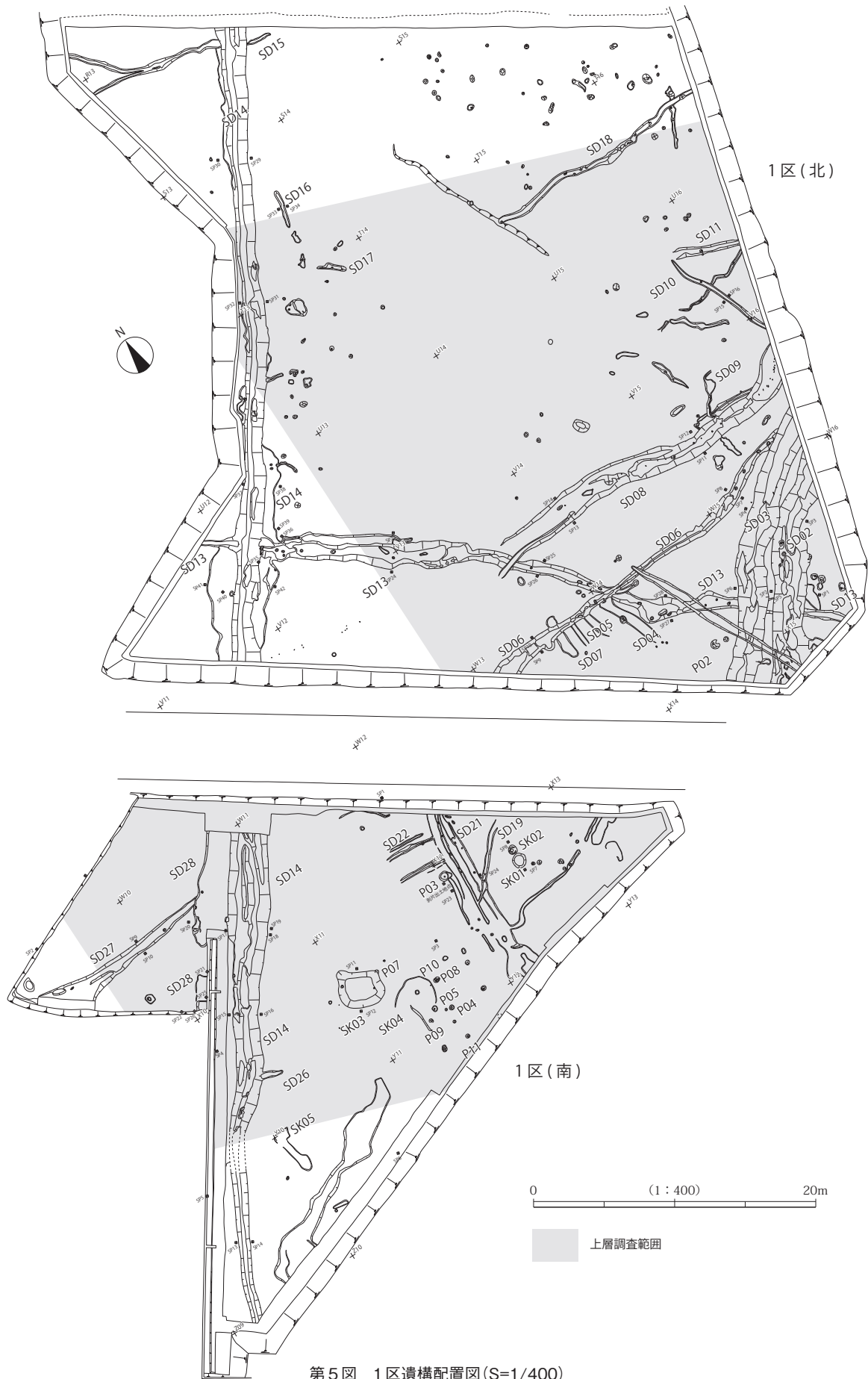
P02: 調査区の南辺でも、SD01の西側の肩付近で検出した柱穴形態の小穴である。中世の遺物が出土。

SD01: 調査区の南東隅から北西方向へ直線的に延びた小型の溝である。SD02とSD03が完全に埋もれた後に機能しており、幅50~80cm、深さ6~16cmの規模等から、近世の用水施設とみられる。

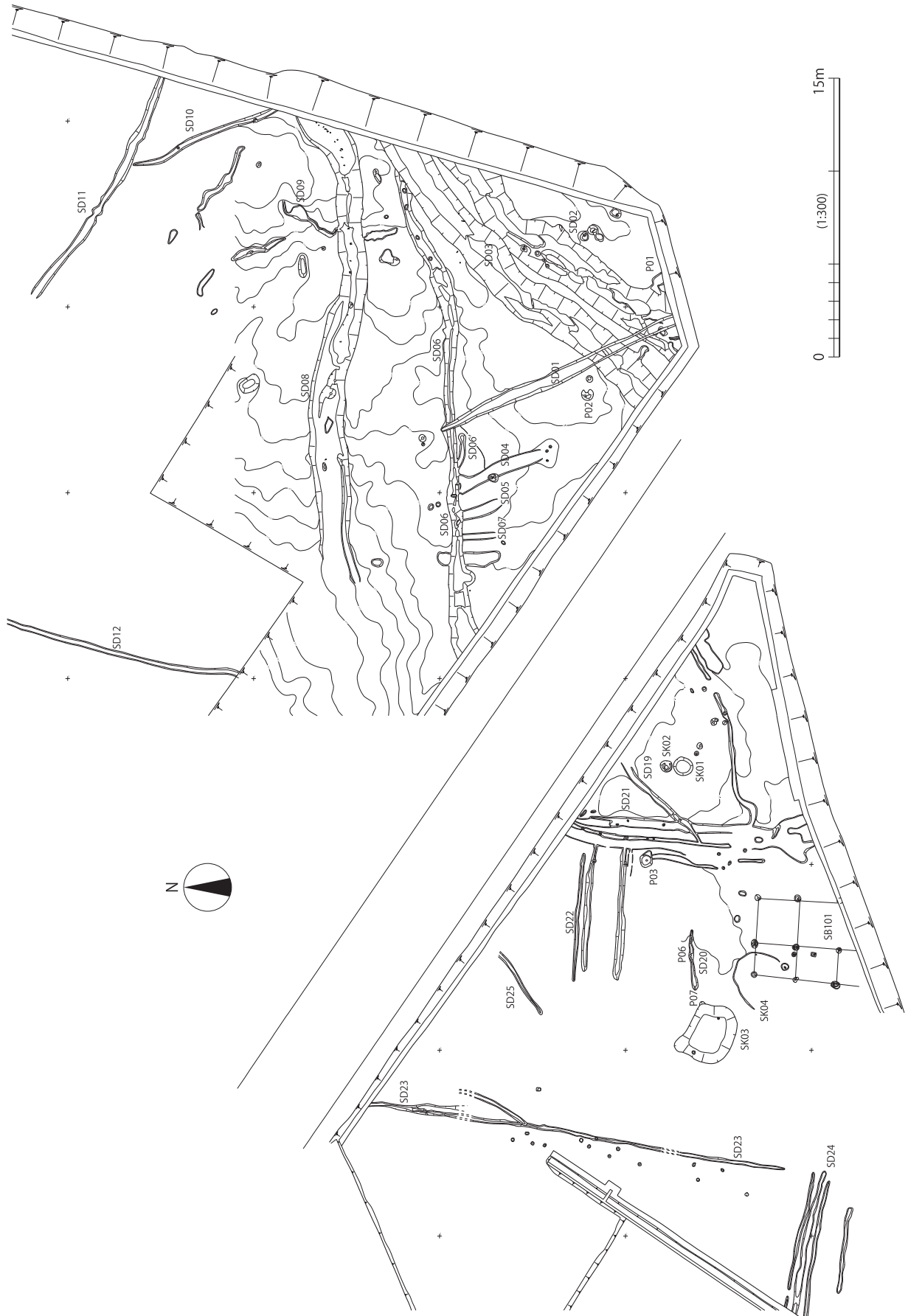
SD02: 調査区の南東隅を湾曲するように南流する溝で、西側のSD03に先行する。SD03と共に、東方に広がる第5次調査3区から流下した幹線的な用水とみられる。この1区の直前に流れが南方向となり、市道の下から南の第4次調査K区へと流下している。梅田町の開析谷を流下した河川状の用水と考えられ、現在の梅田川の前身とみられる。

そのSD02の規模は、北側で幅180cm、深さ66cmを測る。10mほど南流する間に、幅260cm、深さ179cmと拡大する。溝底も北と南で約110cmの落差をもち、水流が急であったとみられる。このため、溝の下部は甌穴状に凹凸が強く、溝底も各所が窪み、褐色の粗砂が堆積している。横断形は、北ではU字形を呈するが、南へ向かい深さを増すとV字形へ変化している。覆土からは、平安時代後期から鎌倉時代前期の土器が出土しており、幹線的な用水路として鎌倉時代にSD03へ作り変えられたとみられる。

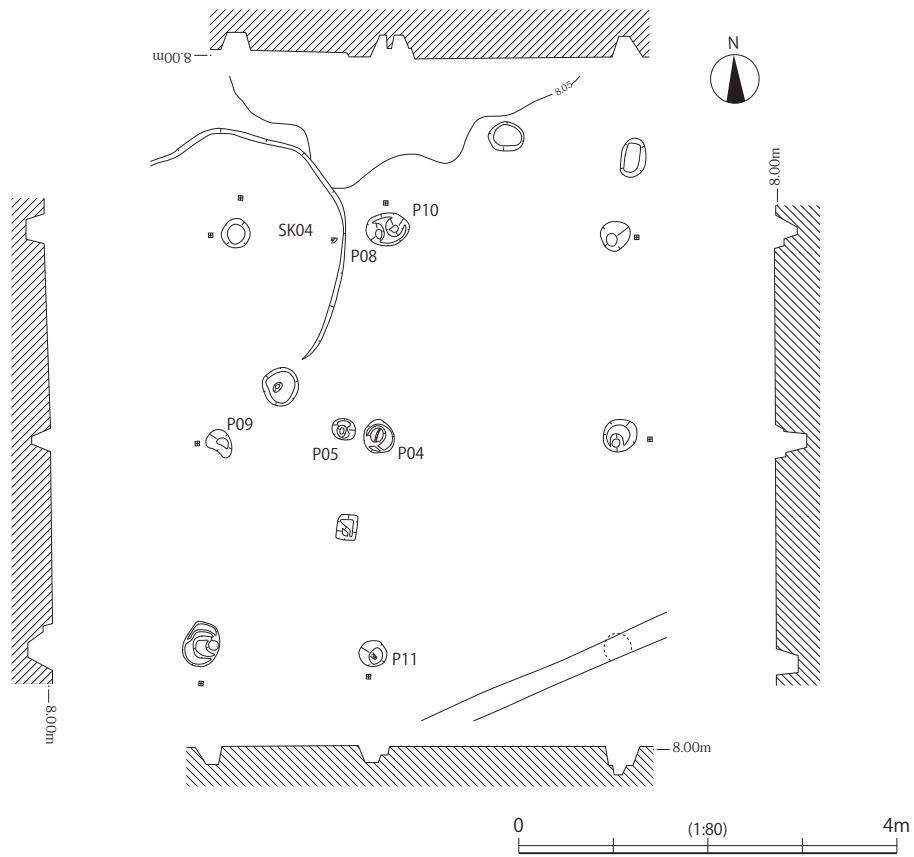
SD03: SD02の西側に並走する溝で、作り変えにより新規に開削された溝であることが、土層観察で確認された。溝幅は190cm前後を測り、幅の変動はSD02に比べ少ない。深さは、北側で65cmと浅く、途中で145cmと深くなるものの、南端では深さ92cmと浅くなる。また西側の斜面に角材を使用した杭列が残り、水路の整備と維持を目的とした護岸工事が実施されている。覆土中からは、谷より流下した平安時代中期の須恵器から鎌倉時代の土師器が出土しており、主に中世前半に機能したとみられる。出土品の漆器



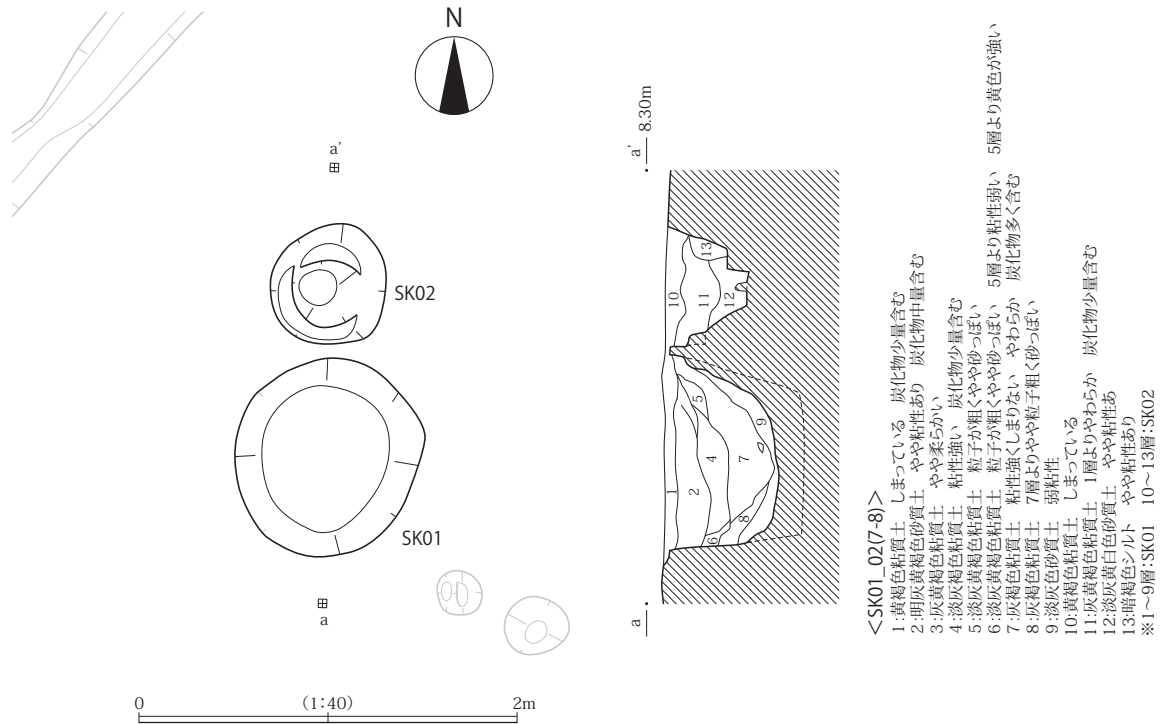
第5図 1区遺構配置図(S=1/400)



第6図 1区上層遺構全体図(S=1/300)



第7図 1区SB101平面図・断面図(S=1/80)



第8図 1区SK01・02平面図・断面図(S=1/40)

- <SK01\_02(7-8)>
- 1:黄褐色粘質土 しまっている 炭化物少量含む
  - 2:明灰黄褐色砂質土 やや粘性あり 炭化物中量含む
  - 3:灰黄褐色粘質土 やや柔らかい
  - 4:淡灰黄褐色粘質土 粘性強い 炭化物少量含む
  - 5:淡灰黄褐色粘質土 粒子が粗くやや砂っぽい
  - 6:淡灰黄褐色粘質土 粒子が粗くやや砂っぽい
  - 7:灰褐色粘質土 粘性強くしまりない やわらか
  - 8:灰褐色粘質土 7層よりやや粒子粗く砂っぽい
  - 9:淡灰色砂質土 弱粘性
  - 10:黄褐色粘質土 しまっている
  - 11:淡黄褐色粘質土 1層よりやわらか 炭化物少量含む
  - 12:淡灰黄白色砂質土 やや粘性あり
  - 13:暗褐色シルト やや粘性あり
- ※1~9層:SK01 10~13層:SK02



の片口鉢は、鎌倉時代の完形品である。溝の岸に伏せた状態に置かれ、埋込みされた可能性が高い。

SD04・05・07: SD04はSD01の西側にある溝状の窪みで、その西側にSD05・SD07など3条の溝状の窪みが連なる。合計4条の遺構はSD06を切る。04の規模は、幅80cm前後を測るが、深さは5cmほどで浅い。SD05から珠洲焼のすり鉢(Ⅳ期)が出土したことから、室町時代から戦国時代の遺構群とみられる。

SD06: SD03の北部から西へ流下する溝で、上幅70cm、深さ36cm規模から始まり、途中に幅50cmに狭まりSD13を切る。西端では上幅156cmと広まり、深さも50cmと大きくなる。土器の出土から平安時代後期に東方の3区から流下していた可能性が高い。

SD08: 調査区の東辺からSD06と並走する西へ流下する溝で、西端でSD13を切る。東側では幅180cm、深さ25cmの規模で溝中央に小杭列が連立する。中程で幅124cm、深さ38cmとやや小型になるが、流下するにつれ幅を広げ、断面付近では幅196cmと広がり、深さ22cmと浅くなる。覆土は南側から流入したものが多く、12世紀前半の白磁碗や土器などが出土している。溝の規模と年代からみて、東方向にある3区において、SD02から分流された用水が西方へ流下していた可能性が高い。

なお、この溝と交差する不整形なSD09は、時期・性格とも不明である。

SD10・11: 上層遺構群の北辺に位置する細長い溝である。SD10は幅25cm前後、深さも18cmほどで、北のSD11方向へ流下する。SD11は調査区の東壁から西方へ流下する溝である。上幅は30～60cmと変動するが、深さは5cmと浅い。

SD12: 北部の中央付近を北へ流下する溝で、幅32cm前後、深さ6cmほどと浅い。近世の用水路とみられる1区(南)のSD23とも、方向と規模が似通っている。

## 2. 1区の下層遺構(第15～18図)

### 下層遺構の概要(縄文時代晩期～弥生時代後期)

1区の北部から西部では、上層の水田の基盤であった灰色の砂質土を40～50cmほど除去すると、暗灰褐色の下層包含層が広がり、地山面から縄文時代晩期から弥生時代前期と後期の遺物が出土した。調査区の西辺に沿って、南北方向に貫流するSD14は、2区下層のSD02へ続き、第4次調査の1区下層のSD122まで接続する長大な溝である。1区(南)の南端から4次調査の北端までの長さは、185m以上を測る。ほぼ直線的に開削された溝は、第4次調査報告『金沢市梅田B遺跡Ⅲ』で、時期を弥生時代後期後半と報告している。またSD14の西側のSD28では、縄文時代晩期から弥生時代前期の土器や打製石斧などの遺物が集中して出土している。

#### (1) 1区(南)の下層遺構(第15～18図)

SD14: 調査区の西辺に位置する溝で、南西隅から北へ向かい、1区(北)から2区の中央へ抜けている。溝の規模は、1区(南)の南西隅で幅44cm、深さ38cmと小規模であるが、15mほど北上した付近で拡大し、SP17-18地点で幅140cm、深さ46cmまで広まる。覆土をみると掘削後、3回以上の大規模な掘り直しが行なわれ、下部に灰黄色砂や青灰色砂の堆積がみられることから、通水していたことが知られる。また1区(北)をみると、溝の規模は幅60～80cm、深さ40～46cmと変動が少ないが、片側の斜面が直立に近く、その断面形は片切掘りとなる。これは掘り直しに際して、箱堀状に掘削したことによるものであろう。

出土品は少なく、法仏期の甕(第26図68)が年代資料としてある。また護岸の杭列や堰のような施設もみられない。なお、本遺構は、北は2区下層のSD02から第4次調査1区のSD122へとつながり、南は第6次調査E区のSD01へ到達するものとみられる。その延長270mにも及び、出土遺物が示す弥生時代後期に開削された溝なら、注目すべき用水施設である。

SD26: SD14の中程にみられた溝状の窪地である。

SD27：西側の拡張区で検出した東西方向の溝である。東はSD28から始まり、最初は幅50cm、深さ8cmほどの溝が、緩やかに拡大しつつ、西端では幅200cm、深さ20cmと広まる。弥生時代の排水施設か。

SD28：SD14の西肩にみられた幅170cmほどの溝状の窪地があり、その上面を下層の包含層が覆う。南端では方形の浅い窪地もあり、覆土の灰白色の砂質土から、弥生時代前期とみられる条痕文土器(第26図71)が出土している。

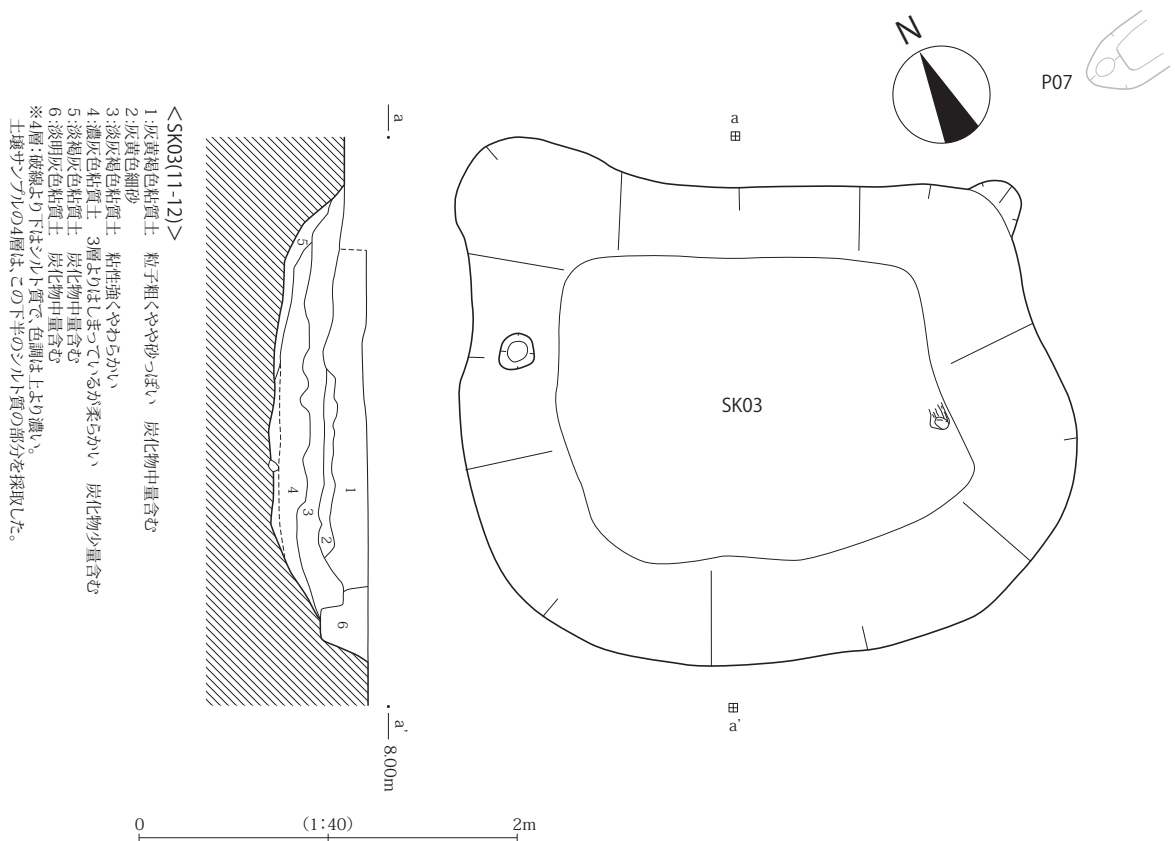
(2) 1区(北)の下層遺構(第15・17・18図)

SD13：南東の隅から北西方向へ下り、SD14の西方へ延びていた溝である。調査区の南東では、SD01～03、及びSD06などに切られ、中央付近から上層の基盤層である灰色砂質土に埋もれていた。溝の規模は、SD05付近で幅60cm、深さ35cmほどを測る。上部が削平を受け、小型化したものとみられる。SP23-24ライン付近で、幅196cm、深さ40cmへと拡大しており、そのままSD14と交差する。溝底もU字形から平底風に変形している。またSD14の東肩では、溝幅が狭まり横板が置かれている。溝はSD14と交差する直前に狭められ、そのまま西方へ下ることから、樋のような施設が置かれた可能性がある。

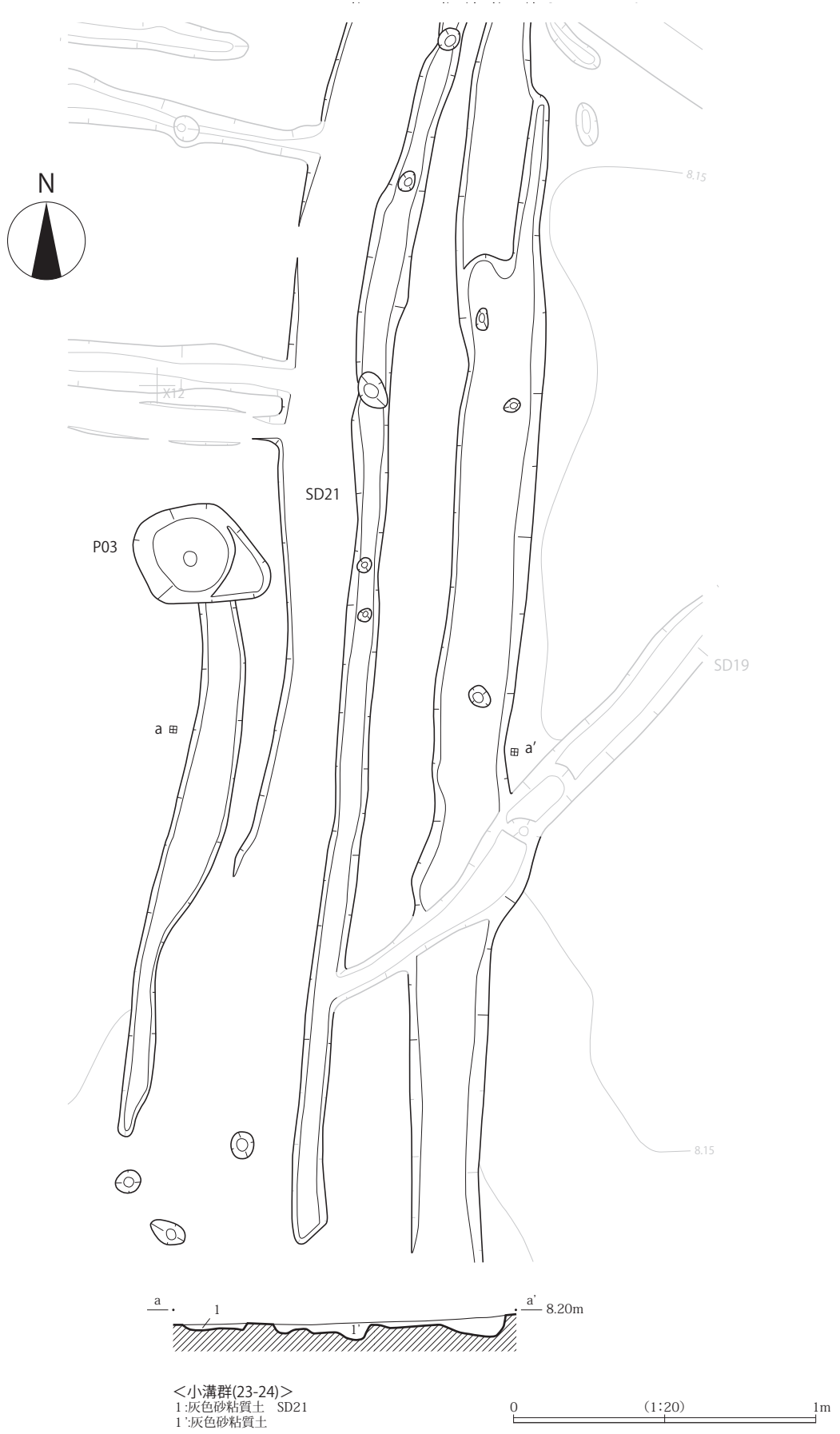
SD15：SD14の北端にみられた東西方向の小溝である。溝幅は30～74cmと安定せず、深さも6～10cmと浅く、西側で枝分かれしている。2区下層のSD04の延長部ともみられる。

SD16・17：SD14の中央部の東肩でみられた溝状の窪地である。

なお、SD17の南で、SD14の東側には、柱穴列とみられる小穴群(図版8)を検出している。建物プランなどは不明であるが、SD14の開削以前に建物が存在したことを示す遺構として留意される。



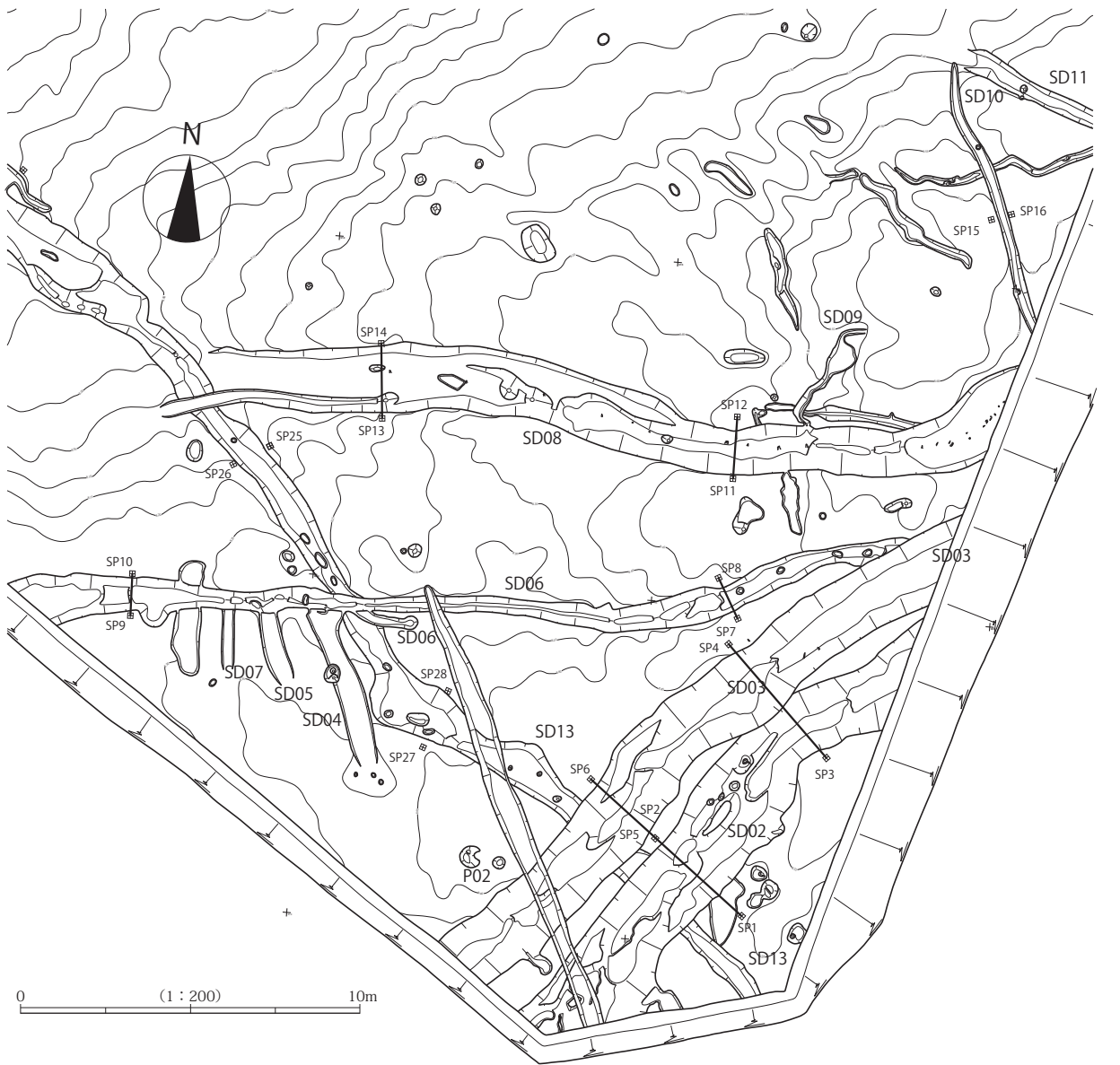
第9図 1区 SK03平面図・断面図(S=1/40)



<小溝群(23-24)>  
 1: 灰色砂粘質土 SD21  
 1': 灰色砂粘質土

0 (1:20) 1m

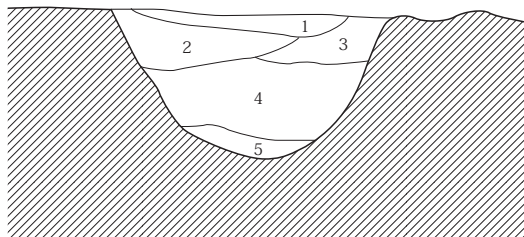
第10図 1区小溝群平面図・断面図(S=1/20)



a .

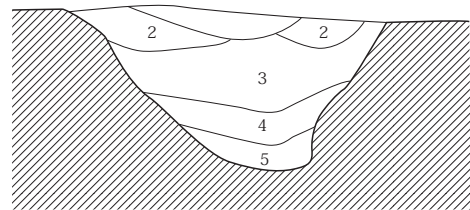
. a' 8.70m a .

. a' 8.40m



<SD06(7-8)>

- 1:灰色シルト
  - 2:黄灰色シルト 灰色シルトと黄色シルトの互層
  - 3:灰褐色シルト 灰色シルトと灰色砂の互層に地山ブロックが混ざる
  - 4:濁灰褐色粗砂 褐色粗砂と灰色砂、灰色シルトの互層
  - 5:暗灰色シルト 暗灰色シルト(粘質)と灰色細砂の互層
- ※地山黄褐色シルト やや細砂混じり

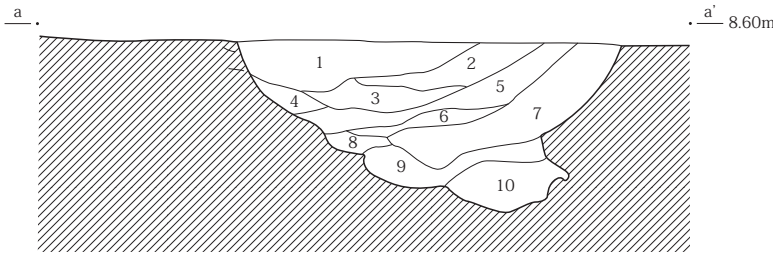


<SD06(9-10)>

- 1:灰色シルト やや砂混じり
  - 2:灰褐色シルト 灰色シルトと褐色粗砂がブロック状に入り込む
  - 3:濁褐色シルト 灰色粘質シルトと褐色粗砂、灰褐色細砂が互層に入る
  - 4:灰褐色細砂 灰色粘質シルトと灰褐色細砂が互層に入る
  - 5:濁黄褐色シルト 浅黄色地山ブロックの間に粗砂が入るが、地山の可能性あり
- ※上のほう(4層)ぐらまでは褐色の砂混じるシルト  
下のほう(4,5層は5層とほぼ同じ5層の下には黄褐色細砂)  
※6~12層:P2017 6,7層:柱痕又は抜き取り後の堆積 8~12層:掘り方

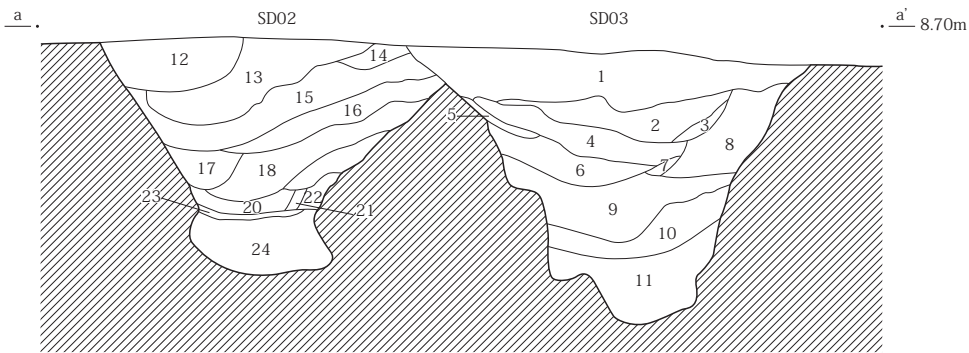
0 (1:20) 1m

第11図 1区遺構平面図・SD06断面図(S=1/20・1/200)



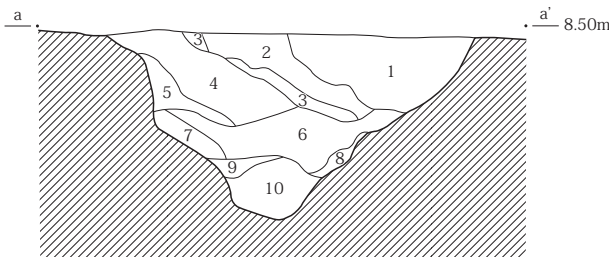
<SD02(1-2)>

- 1:灰褐色シルト
  - 2:瀾黄灰褐色シルト 地山ブロック(浅黄色小さい)が少し混ざる
  - 3:瀾暗灰色シルト 地山ブロック(浅黄色大きい)と灰シルトが混ざる
  - 4:灰色細砂 灰色細砂と灰色シルトが薄い互層に入る
  - 5:灰色シルト 一部細砂含む
  - 6:瀾灰褐色シルト 地山質の黄色シルトブロック(軟石状)と粗砂の混ざった層
  - 7:瀾暗灰褐色シルト 暗灰色粘質シルトと粗砂(下の方)の互層状に混ざった層 植物遺体(木)を含む
  - 8:灰黄色粗砂
  - 9:瀾黄灰褐色粗砂 粗砂と黄色シルト地山ブロックの互層 鉄分の沈着強い
  - 10:案灰色シルト 下のほうの上は細砂、下は粗砂混ざり
- ※地山:浅黄色シルト  
 ※2,3層:整地土 5~7層:整地土下層砂で取り上げ 8~10層:粗砂で取り上げ



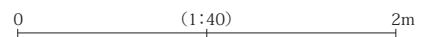
<SD02・SD03(3-4)>

- 1:灰褐色シルト
  - 2:暗灰色シルト
  - 3:灰色細砂
  - 4:瀾暗灰色シルト 褐色粗砂(下のほうが多い)と灰色シルト(上のほうが多い)の互層
  - 5:暗灰色シルト
  - 6:瀾暗灰色シルト 褐色粗砂と灰色粘質シルトの互層
  - 7:褐色粗砂
  - 8:暗灰色シルト
  - 9:瀾褐色シルト 褐色粗砂と軟石状地山ブロック、灰色(細)砂が互層になる
  - 10:瀾灰色シルト 灰色シルトに褐色粗砂が薄く互層に入る
  - 11:瀾暗灰色シルト 上のほうは暗灰色粘土と灰色細砂の互層、下のほうは褐色粗砂
  - 12:灰褐色シルト
  - 13:黄灰褐色シルト 大き目の地山ブロック入る
  - 14:灰色シルト
  - 15:暗灰色シルト
  - 16:灰色細砂
  - 17:褐色粗砂 粗砂と軟石状地山ブロックの混ざった層
  - 18:暗灰色シルト
  - 19:瀾暗灰色粘質シルト 浅黄色粘土、黒色粘土、灰色シルトの混ざった層
  - 20:瀾褐色粗砂 褐色粗砂と灰色シルトの互層
  - 21:暗灰色シルト
  - 22:灰色シルト 灰色シルトに軟石状地山ブロック入る
  - 23:暗灰色シルト
  - 24:褐色粗砂 褐色粗砂に軟石状地山ブロック多く入る
- ※地山:浅黄色シルト  
 ※1~3層:灰褐粘で取り上げ 4~11層:灰褐砂で取り上げ  
 ※12層:整地土 13~19層:整地土下砂 20~24層:粗砂



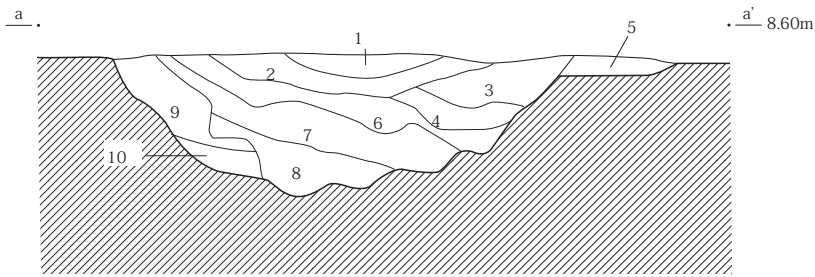
<SD03(5-6)>

- 1:瀾灰色シルト 灰色の粘質シルトに黄灰色シルトの小さいブロック、暗灰色シルトが混ざる
  - 2:灰色シルト
  - 3:灰褐色粗砂 褐色粗砂と灰色シルトの混ざり合う
  - 4:灰色シルト 灰色粘質シルトと暗灰色シルト、灰色細砂の互層
  - 5:瀾灰色シルト 灰色シルトと細~普砂の互層 肩のほうは地山ブロック混
  - 6:瀾灰褐色粗砂 褐色粗砂、細砂、灰色シルトが薄く互層に入る
  - 7:瀾暗灰色粗砂 褐色粗砂、軟石状地山ブロック、灰色シルトが互層に入る
  - 8:灰色粘質シルト
  - 9:暗灰色シルト 灰色シルトと細砂の互層
  - 10:瀾暗灰褐色シルト 上の方は暗灰色シルト、下の方は褐色粗砂それぞれと細砂の互層それぞれ
- ※地山:浅黄色シルト 下の方は粗砂っぽい  
 ※1~5層:灰褐粘土 6~10層:灰褐砂



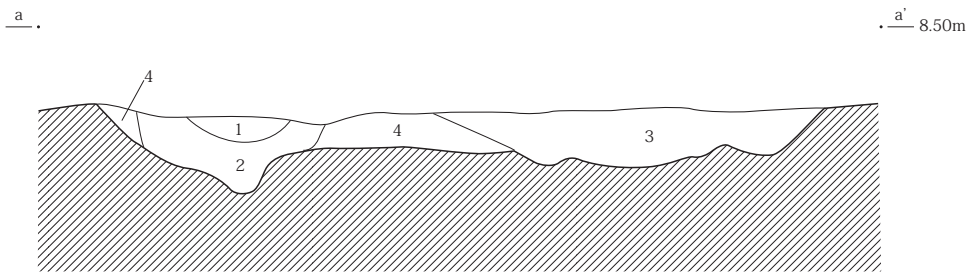
第12図 1区 SD02・03断面図(S=1/40)

第3節 1区の遺構と遺物



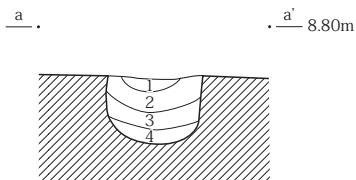
<SD08(11-12)>

- 1:灰色シルト やや砂質
  - 2:褐色粗砂 褐色粗砂と灰色砂が互層に入る 軟石状地山ブロック(5mm~10mm大)も含む
  - 3:灰褐色砂 灰色砂と褐色粗砂が互層に入る 軟石状地山ブロック(5mm~10mm大)も含む
  - 4:灰色細砂 褐色細砂(上の方)と灰色シルト(下の方)が層をなす
  - 5:灰色シルト
  - 6:灰色砂 褐色粗砂、灰色砂、灰色シルトが層をなす(上から)
  - 7:褐色粗砂 褐色粗砂の下の方に灰色砂、灰色シルトが薄く層をなす
  - 8:褐色粗砂 褐色粗砂、灰色砂が互層に入る
  - 9:灰色シルト
  - 10:灰色砂 灰色シルトと砂の互層
- ※地山:オリブ灰色シルト やや砂質



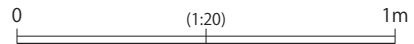
<SD08(13-14)>

- 1:暗灰色シルト 粘質
  - 2:褐色粗砂 粗砂と灰色砂の互層
  - 3:灰色シルト やや砂質
  - 4:灰色砂 シルトと砂の互層
- ※地山:オリブ灰色シルト(粘性帯びるも細砂混じり)  
 ※1,2層:別の溝か最終段階のSD08

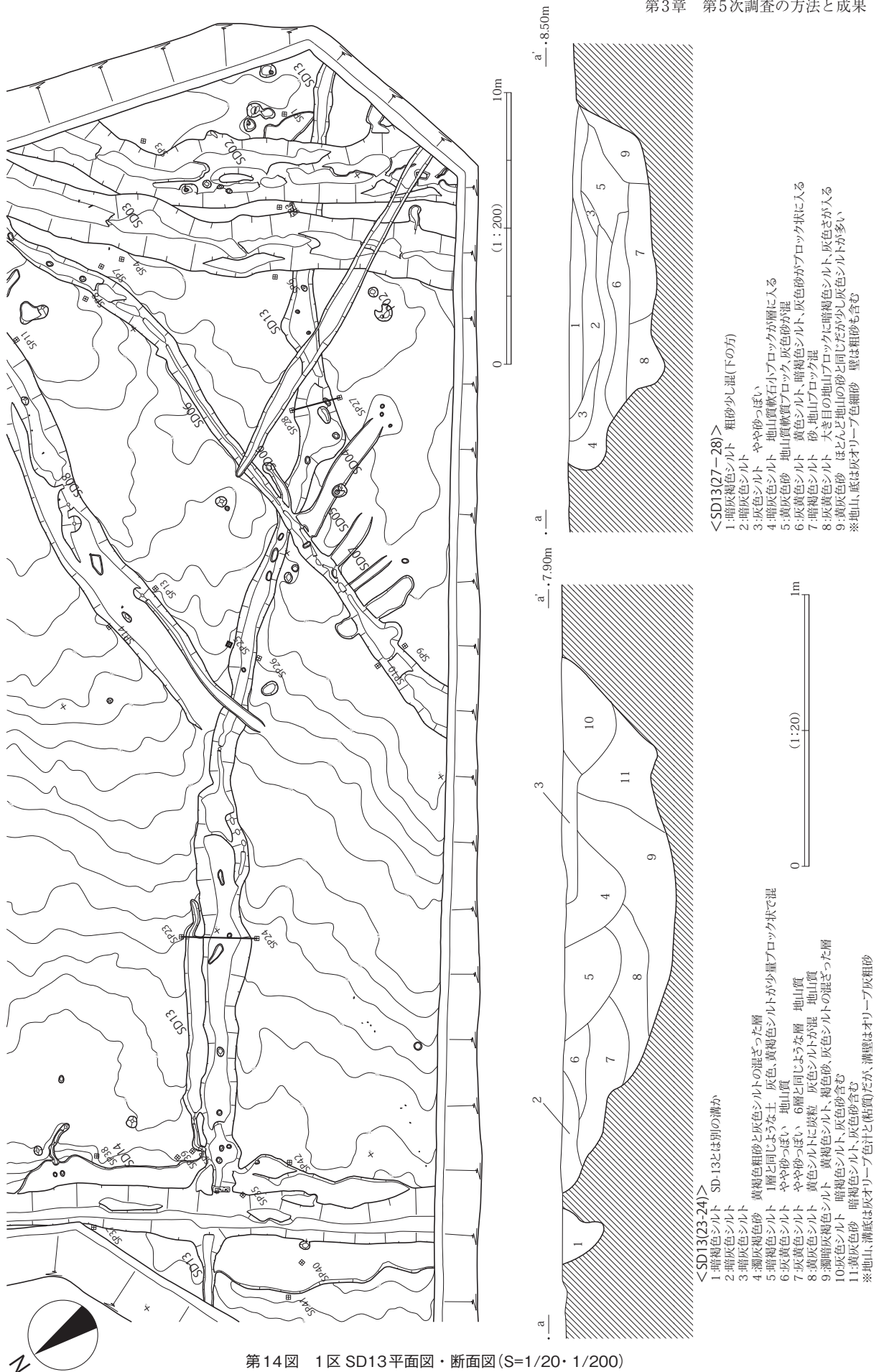


<SD10(15-16)>

- 1:灰色シルト やや砂質
  - 2:灰色粗砂
  - 3:暗灰色シルト 粘質 3,4層の間に薄い層があるが同じ層
  - 4:暗灰色シルト 粘質 3,4層の間に薄い層があるが同じ層
- ※地山:黄褐色シルト



第13図 1区 SD08・10断面図(S=1/20)



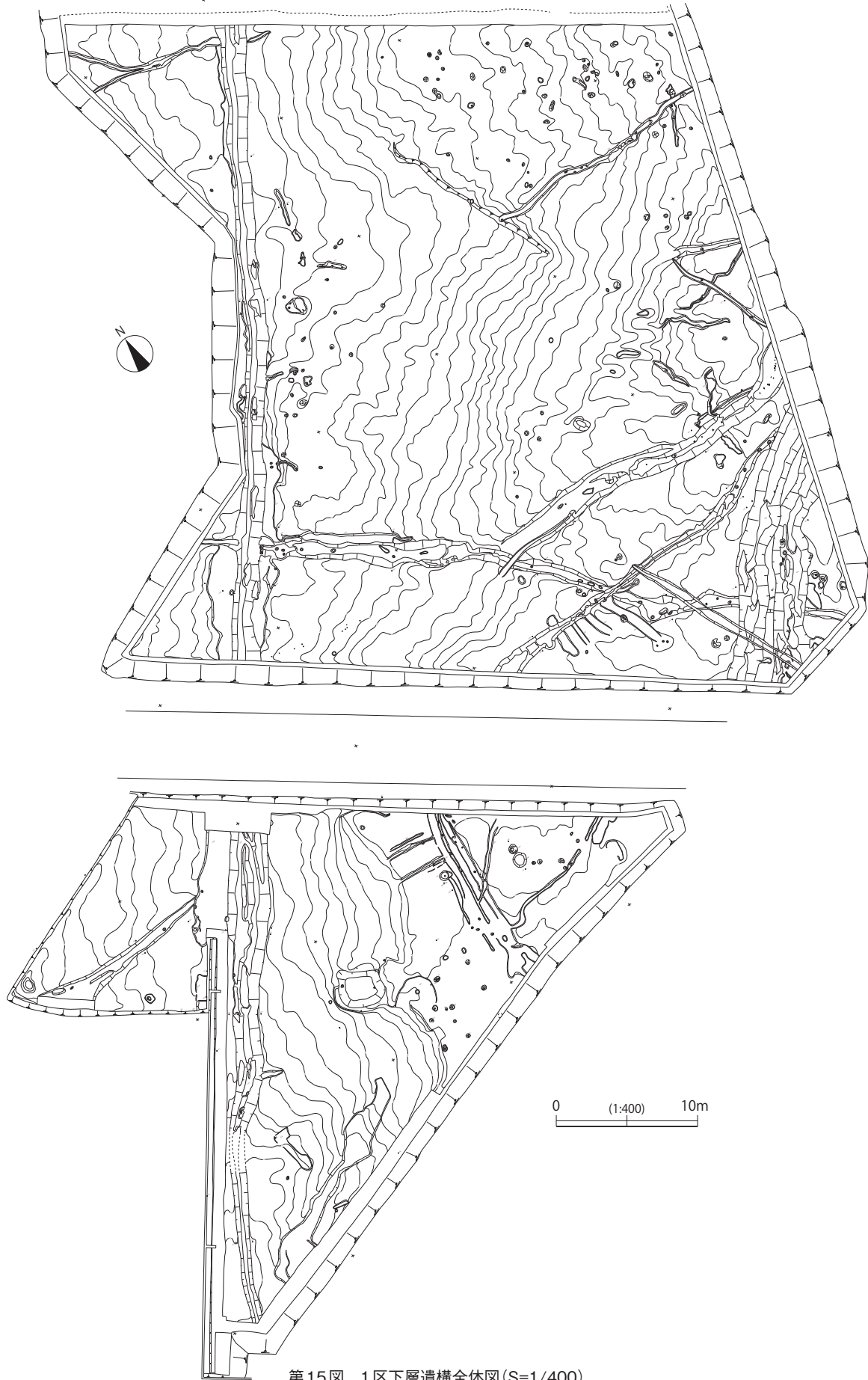
第14図 1区SD13平面図・断面図(S=1/20・1/200)

<SD13(27-28)>

- 1:暗灰褐色シルト 粗砂少し混(下の方)
  - 2:暗灰色シルト
  - 3:灰色シルト やや砂っぽい
  - 4:薄灰色シルト 地山質軟質小ブロックが層に入る
  - 5:薄灰色シルト 地山質軟質ブロック 灰色砂が混
  - 6:灰黄色シルト 黄色シルト、暗褐色シルト、灰色砂がブロック状に入る
  - 7:暗褐色シルト 砂、地山ブロック混
  - 8:灰黄色シルト 大き目の地山ブロックに暗褐色シルト、灰色砂が入る
  - 9:薄灰色シルト ほとんど地山の砂と同じだが少し灰色シルトが多い
- ※地山、底は灰オリーブ色細砂 壁は粗砂も含む

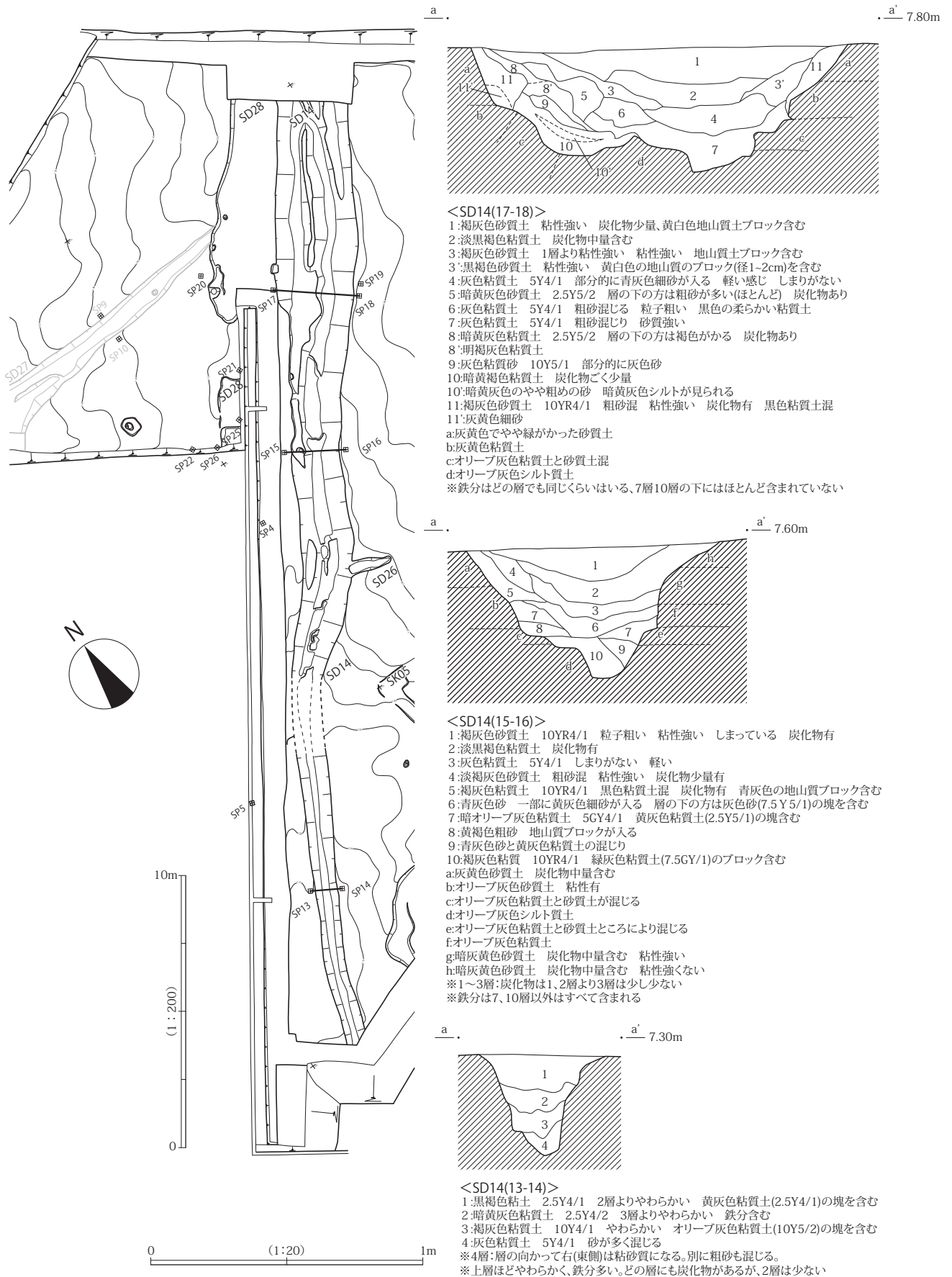
<SD13(23-24)>

- 1:暗褐色シルト SD-13とは別の溝か
  - 2:暗灰色シルト
  - 3:暗褐色シルト
  - 4:薄灰褐色シルト 黄褐色粗砂と灰色シルトの混ざった層
  - 5:暗褐色シルト 1層と同じような土、灰色、黄褐色シルトが少量ブロック状で混
  - 6:灰黄色シルト やや砂っぽい、地山質
  - 7:灰黄色シルト やや砂っぽい、6層と同じような層 地山質
  - 8:薄暗褐色シルト 黄色シルトに炭粒 灰色シルトが混 地山質
  - 9:薄暗褐色シルト 黄褐色シルト、褐色砂、灰色シルトの混ざった層
  - 10:灰色シルト 暗褐色シルト、灰色砂含む
  - 11:薄灰色シルト 暗褐色シルト、灰色砂含む
- ※地山、溝底は灰オリーブ色汁と(粘質)だが、溝壁はオリーブ灰粗砂

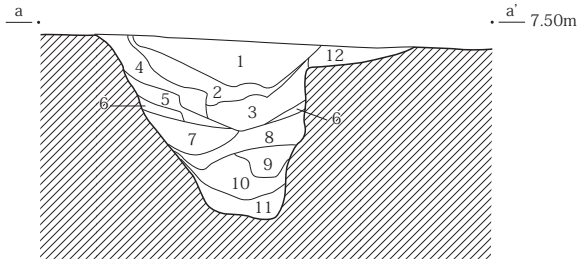
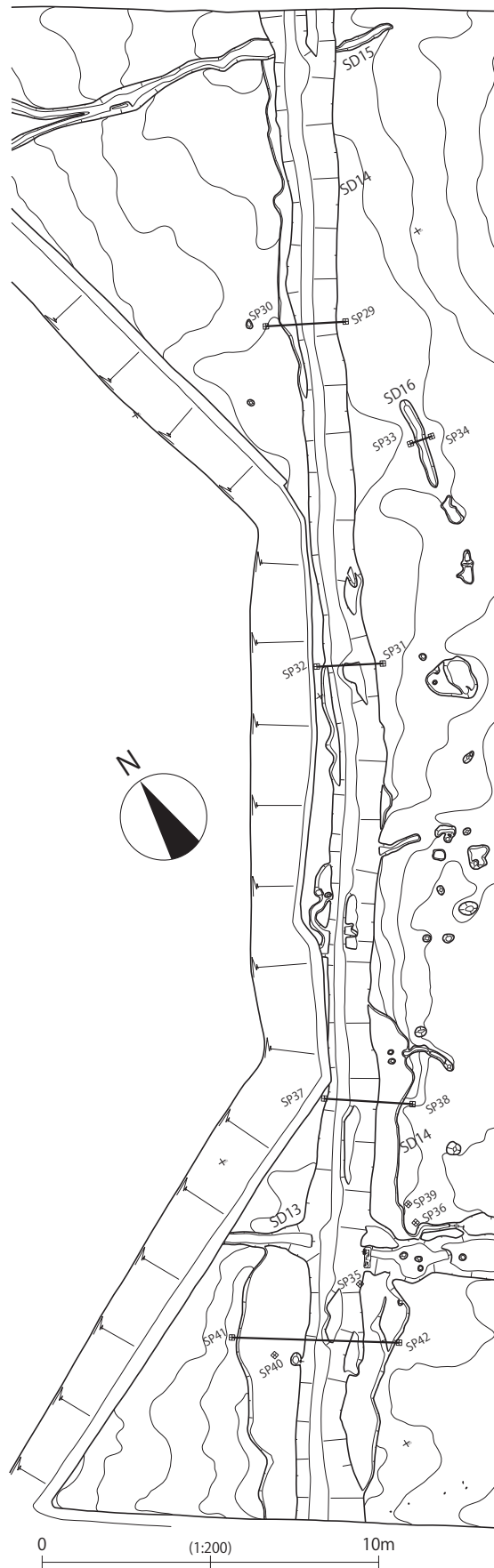


第15図 1区下層遺構全体図(S=1/400)



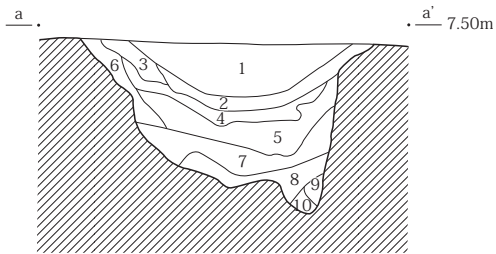


第16図 1区 SD14平面図・断面図1 (S=1/20・1/200)



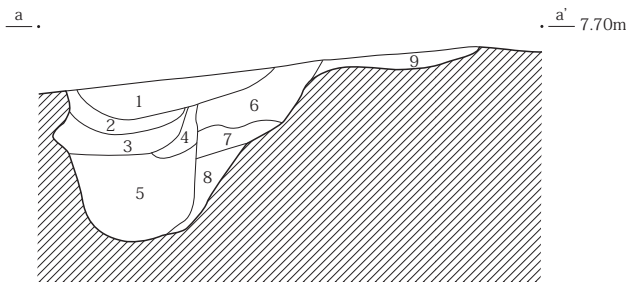
<SD14(29-30)>

- 1:暗灰褐色シルト 鉄分の沈着あり 灰色シルトがブロック状に混ざる
  - 2:濁灰色シルト 灰色シルトと暗灰色シルトが混ざりあう
  - 3:暗灰色シルト やや砂っぽいオリブシルト(地山か?)と灰色シルトの混層
  - 4:濁灰オリブ色シルト
  - 5:暗褐色シルト ほぼ均質の層
  - 6:灰色シルト 暗灰色シルトが少量 混じる
  - 7:濁暗褐色シルト 暗褐色シルトと暗灰砂質シルトなど
  - 8:暗灰色シルト 粘性強い 13, 19層より暗い 均質の層
  - 9:暗灰色シルト
  - 10:濁暗褐色シルト オリブ砂質ブロック土と暗褐色シルトがブロック状に混入
  - 11:濁青灰シルト 大きい(5cm~)地山ブロックに青灰シルトが混入
- ※地山: 青灰砂(下の方)~灰オリブシルト(上の方)



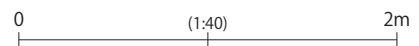
<SD14(31-32)>

- 1:暗灰褐色知シルト 鉄分の沈着あり 上のほうはやや砂質
  - 2:暗灰色シルト 灰色シルトが薄い層で混
  - 3:濁灰オリブ色シルト やや砂っぽい
  - 4:灰色シルト 暗灰色シルトが少量混じる
  - 5:暗灰色シルト ほぼ均質の層
  - 6:濁暗褐色シルト
  - 7:暗灰色シルト
  - 8:青灰色シルト
  - 9:暗褐色シルト 真っ黒 均質
  - 10:青灰色シルト
- ※地山: 青灰砂質シルト(下の方)、灰オリブ質

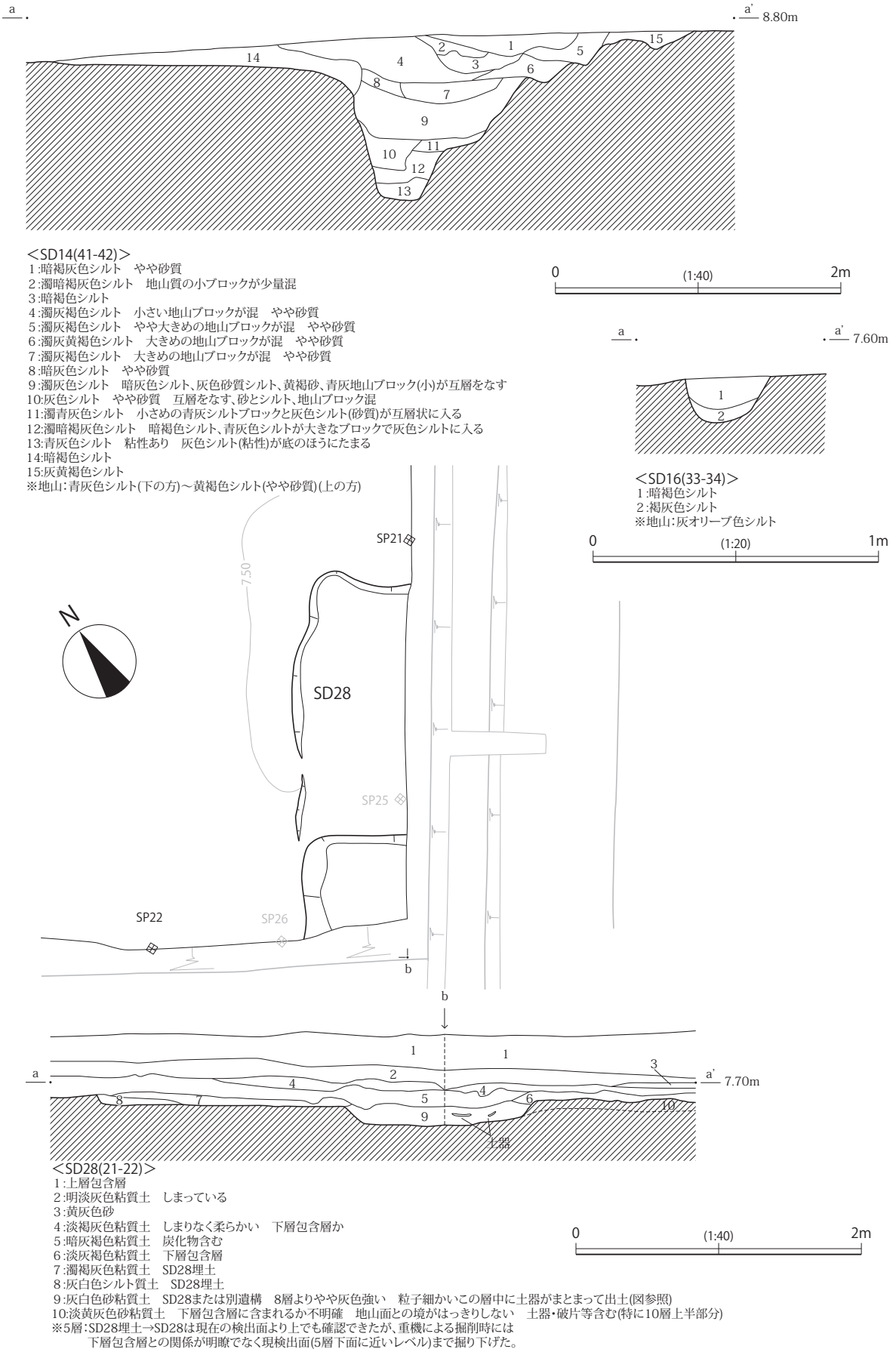


<SD14(37-38)>

- 1:暗褐色シルト
  - 2:暗灰色シルト 灰色シルトが層状に入る
  - 3:灰色シルト
  - 4:濁灰オリブ色シルト やや砂質
  - 5:濁暗灰オリブ色シルト オリブ灰色砂質シルトブロックと灰色シルトが混入
  - 6:濁暗褐色シルト 地山ブロックと灰色、暗灰色シルトが混入
  - 7:暗褐色シルト
  - 8:青灰色砂 灰色シルト混入
  - 9:濁灰色シルト 青灰~灰シルトとオリブ灰地山が混入
- ※地山: 青灰シルト(西壁)~赤褐色粗砂(東壁の下の方)~オリブ灰シルト



第17図 1区 SD14平面図・断面図2 (S=1/40・1/200)



第18図 1区 SD14・16断面図、SD28平面図・断面図(S=1/20・1/40)

### 3. 1区の出土遺物(第19～27区)

1区の上下2層で検出した遺構と包含層からは、古代から近世の陶磁器や木器が出土したが、その出土遺物は、上層・下層とも少ない。

#### 上層遺構出土遺物(1～9)

P03(1)：1は浅黄橙色を呈する非ロクロの土師器皿で、口径14.4cmを測る。13世紀前半とみられる。

P11(8)：8はSB101のスギの柱根である。下端形は略八角柱を呈し、平ノミ状の成形痕がみられる。

SX01(2～7)：瀬戸製品など中世の遺物である。2は瀬戸灰釉のおろし皿、3は口径16.2cmの灰釉平碗である。また、4は瀬戸灰釉の折縁深皿、5は天目茶碗である。これら4点は、古瀬戸後Ⅱ期の製品とみられる。6は瓦質の火鉢の口縁で、径1.9cmの印花文が刻まれている。7は渡来銭の「政和通宝」である。

SK03(9)：9は馬鋏形態を呈する木製品である。幅3.4cm、厚さ2.6cmの台木(桁)に、歯の上部に作り出したホゾを差し込み、クサビ(鼻栓)で止めたものである。歯は長さ11cmの角木で、基部は2cmと細い作りである。台木の左端から2.3cmに最初の歯を入れ、約5cmの間隔を空け、次ぎの歯を差し込んでいたとみられる。歯は4本の出土があり、ほぼ同一形態を呈する。用材は、台木、歯ともアカガシ亜属であり、堅木を選択したことが知られる。時代は周囲の状況から、平安時代末頃から鎌倉時代前半と推定される。

本品は、牛や馬に引かせて水田の代掻きをおこなう農具の馬鋏と形態が似ているが、その寸法は小型である。北陸における馬鋏としては、7世紀前半代と報告されている富山県氷見市の稲積川口遺跡の出土品があることから、両者を比較すると形態面で異なる点が多く見られる。

稲積川口遺跡の馬鋏は、台木が幅8.1cm、厚さ10.7cmと大きく、刀状の歯も長さが45.3～47.3cmと長い。各地の湿田などで使用され、民俗資料として残る馬鋏に近い形状の農具である。これに対して、本品は、台木の桁が細く、歯も小型で角木あることを考慮すると、別形態の農具と判断される。寸法と細部形態から復元すると、鋏や熊手のように人力で操作するものである。寸法と構造から「さらえ」と呼ばれる農具に属し、「ならし鋏」とも呼ばれたものが近い。これは、種を播く耕作地の均しや、麦作などにおいて、除草効果を期待した表土の攪拌などに使用され農具で、民俗資料に類似品をみることができる。

上層包含層出土遺物(10～32)：10の須恵器は、青灰色を呈する口径12.1cmの無台坏。11は口径16cmを測り、小さな玉縁と釉下の化粧土から白磁碗Ⅱ類で、12は玉縁形と灰オリーブの透明釉から白磁碗Ⅳ類に分類できる。13・14は、にぶい黄橙色を呈する土師器皿で、灯芯油痕をもち丸底的な作りから15世紀前半と推定される。15は口径13.8cmの白磁の口禿皿。16は青磁の小鉢で、明緑灰色を呈する鎬連弁から14世紀前半代の龍泉窯の製品である。17はオリーブ灰色を呈する端反の青磁碗で、15世紀前半代とみられる。18は白磁の坏で、内面の円形露胎に朱漆を塗り、外底に漆で「㊦」を書く。22は白磁の小坏で、外底に「三」の墨書がみられる。23は染付皿C群。24は朝鮮の雑釉の小碗で、口径10cm、器高3.3cmを測る。

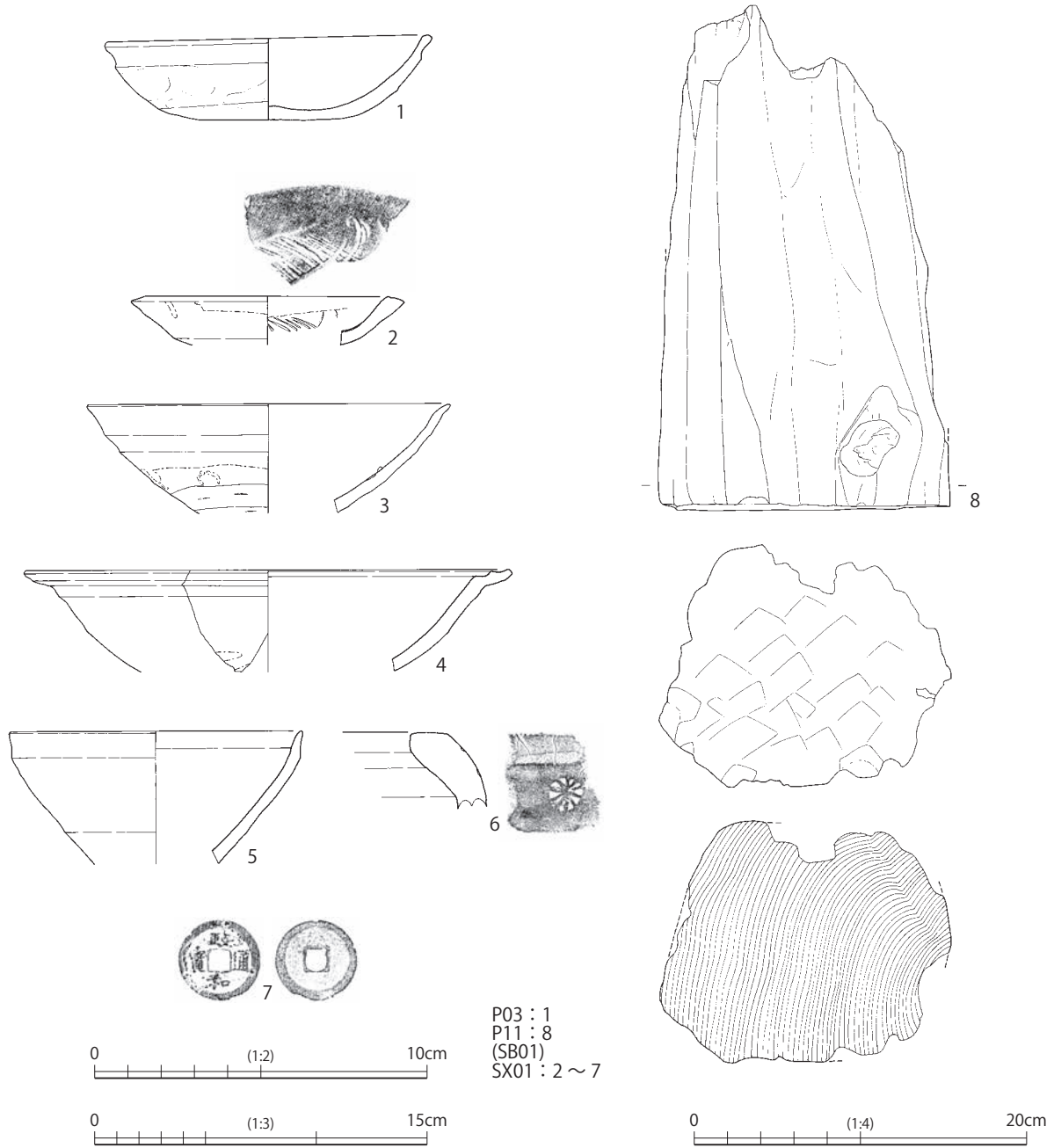
19は瀬戸の灰釉おろし皿で、口径12.4cmを測る。20は瓦質の火鉢の胴部片で、二条の隆帯と型押し朱文を巡らした製品である。21は珠洲焼T種の壺の胴部である。

25は肥前の溝縁皿で、口径12.5cmを測る。26は胎土目の皿である。27は肥前の碗で、17世紀前半。28の筒型碗はコンニャク印判で18世紀の前半。29は肥前の灯芯押えである。高さ4.8cmの小像には、青味を帯びた透明釉がかかり、頭部の頭巾には鉄釉が付く。30は淡赤橙色を呈する土師質の土錘で、32gを測る。31は肥前の甕で、口径17.2cmを測り17世紀前半とみられる。

32は後歯を欠く針葉樹の連歯下駄で、台長18.2cm、幅8.1cmを測り、江戸期の中型品とみられる。

SD01(33)：33は肥前の小碗で、口径2.2cm、器高1.3cmのひな形である。

SD02(35～41)：35は珠洲焼R種の壺の底部である。回転糸切りと作りから、Ⅰ期の双耳壺とみられる。



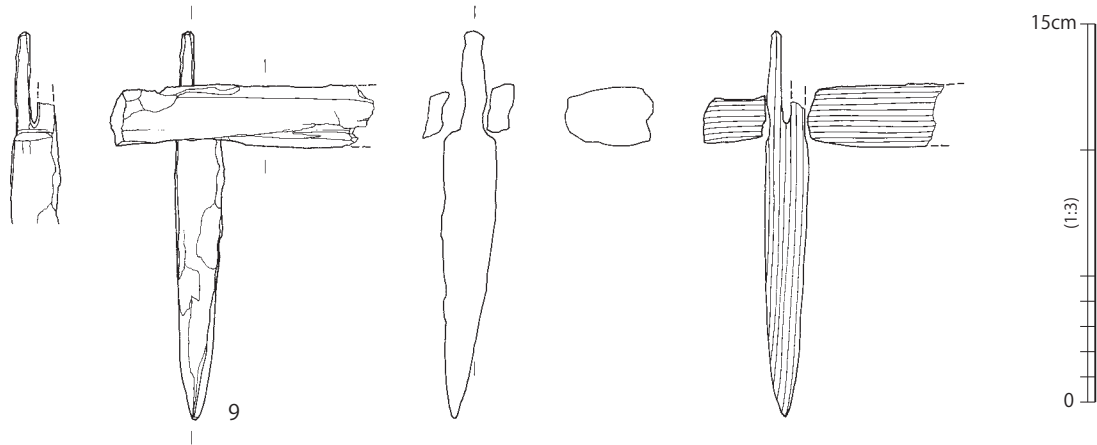
第19図 1区上層遺構出土遺物実測図(S=1/2・1/3・1/4)

34は器形と調整から、平安時代後期の土師器皿である。36は非ロクロの土師器皿で、平底タイプである。37も非ロクロの土師器皿で、本遺跡では少ない灰黄色の胎土である。

38の板杓子は、長さ16.8cm、幅4.6cmを測るスギの加工品である。39は厚さが0.4cmのスギの薄板で、斎串の可能性が考えられる。40はスギの細杭で、護岸工事で打たれていたものである。

41の平瓦は表面に布目、裏面に縄目タタキとなり焼成は良好である。暗灰色の胎土から小松産とみられ、3区のSD01出土品の破片が接合している。

SD03 (42~60) : 42の底部は、灰色を呈し双耳瓶とみられる。3区出土片と接合している。43は胴部径13.8cmを測る長頸瓶で、胎土に海綿骨針を含む。44は内面黒色の台付皿で、浅黄橙色の胎土は精良である。



第20図 1区上層 SK03出土遺物実測図(S=1/3)

45は高台径6.9cmの緑釉碗で、胎土から尾張産とみられる。46～48の土師器皿は、浅黄橙色を呈する非ロクロの製品である。46は口径10.8cm、47・48は口径8cm前後の小皿である。

49は浅黄橙色を呈する土錘で、重量は40gである。50の土錘は、褐灰色を呈して瓦質的な胎土である。形態も竹輪状の作りで、本遺跡に偏在する特異な製品である。51は口径19.4cmを測る土師器の羽釜で、鏝から下にススが付着している。52は口径45cmほどの鍋で、羽釜と共に11世紀代の煮沸具とみられる。

53の瓦は、表面に布目、裏面に縄目タタキとなり、胎土から小松産とみられる。

54は漆器の片口鉢である。黒漆の上に朱漆で、片口の下に蝶の絵柄を描く。木地はクリ材の剝抜きで、口径19cm、器高8.1cmの鉢と、長さ3cmほどの注口を作り出している。内底にも蝶のような絵柄があったとみられる。鎌倉時代の絵巻物を見ると、この種の片口鉢には、持ち手となる横木が紐で結ばれ、酒席の銚子として利用されたことが知られる。本品も底部の傷みが強く、同様の使用が推測される。

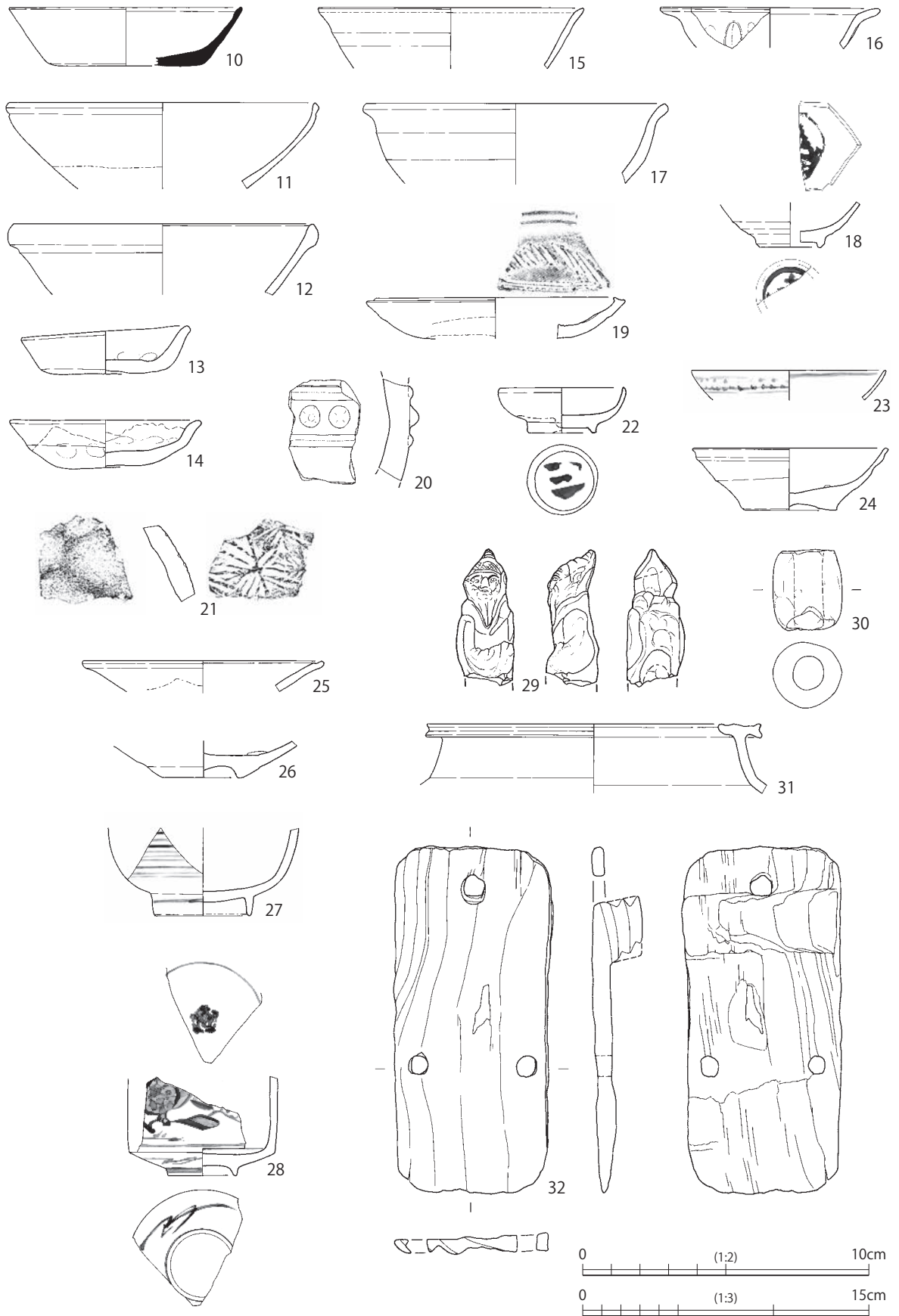
55は幅22.5cmのスギ板で、両縁に釘穴と考えられる小孔が残り、厚さ0.8cmと肥厚なことから、曲物容器の底板とみられる。56は長さ25.8cm、厚さ0.4cmのスギ板で、縁際に2対の小孔が残り、隅落しがみられることから、元は折敷の底板と判断される。内部を階段状に切断した刃痕を残し、用材として再利用された可能性が高い。57は小型の板杓子で、長さ14.3cm、幅4cmの寸法からヘラ状の利用が考えられる。

58は長さ5.5cm、幅1cmで、舟形を呈する鋳銅製品である。断面はV字形で内側に中央に鋳のような針を備え、稜線をもつ外面には鍍金が残る。木製の用具の縁に付けられた飾金具であろう。

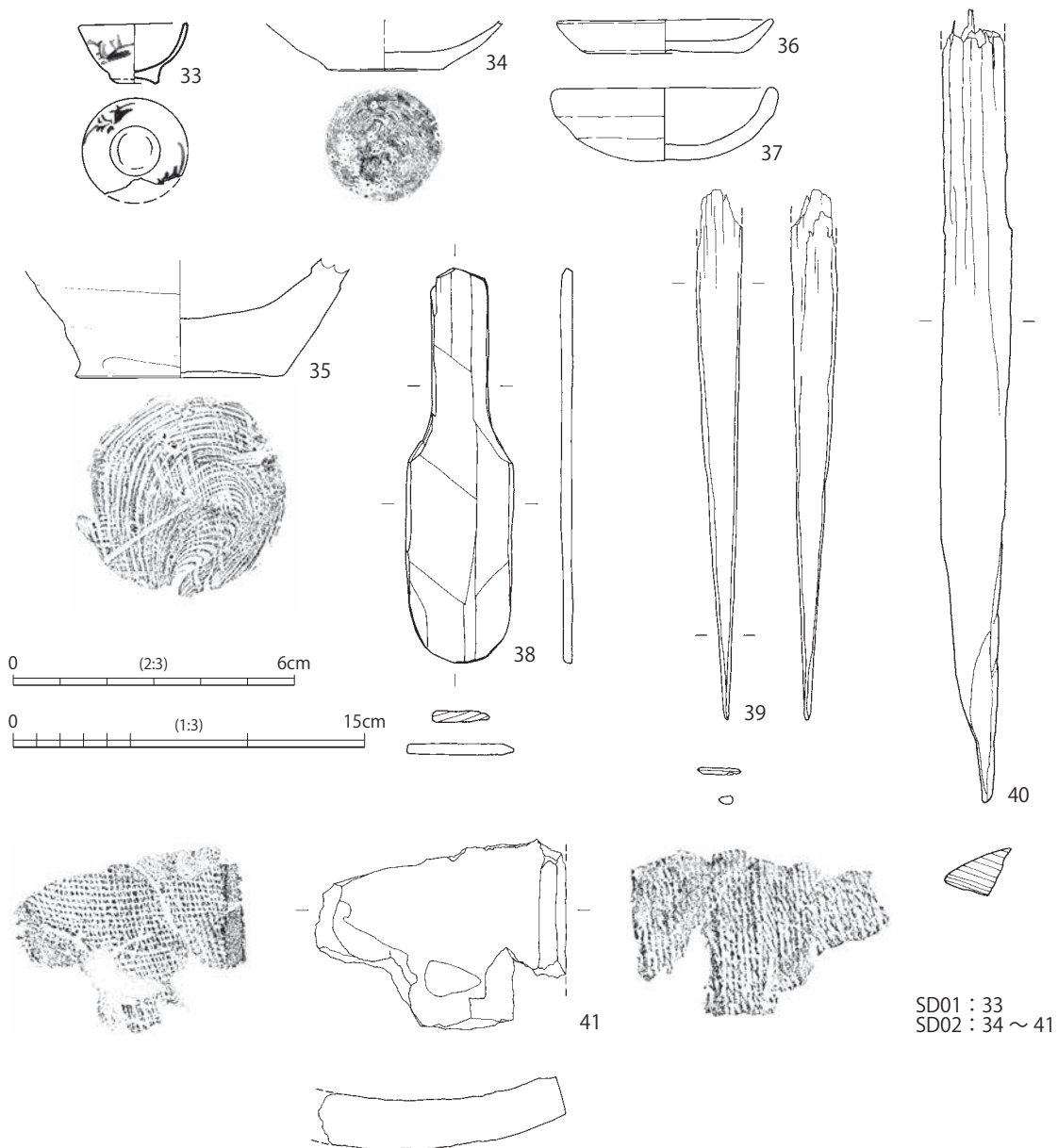
59は長さ63.7cm、厚さ1.5cmのスギの板材で湾曲する。湾曲の内側は平滑であるが、側面の穿孔と板の用途については、判然としない。下端の切断痕は斧によるとみられる。60は長さ133.8cm、幅14.2cmのスギの角杭である。SD03の肩に打たれ護岸に使用されていたものである。70は長さ8.5cm、径4.6cmの土製品で、左側面に魚顔の目と口を連想させる刻みと差込み孔がみられる。重量は139gで欠損は無い。

SD05 (61) : 61は珠洲焼のすり鉢で、IV期の製品とみられる。おろし目は39cm幅14本と密である。

SD06 (62・63・69) : 62は浅黄橙色の有台碗で、口径15.1cm、器高6.2cmの内黒である。63は同じく浅黄橙色を呈する有台碗で、底径5cmを測る。69は鋳銅製の容器の口縁部である。口が開き直線化したようにみえるものの、本来は鉢形の銅製仏具であったと推定される。



第21図 1区上層包含層出土遺物実測図(S=1/2・1/3)



第22図 1区 SD01・02出土遺物実測図(S=1/3・2/3)

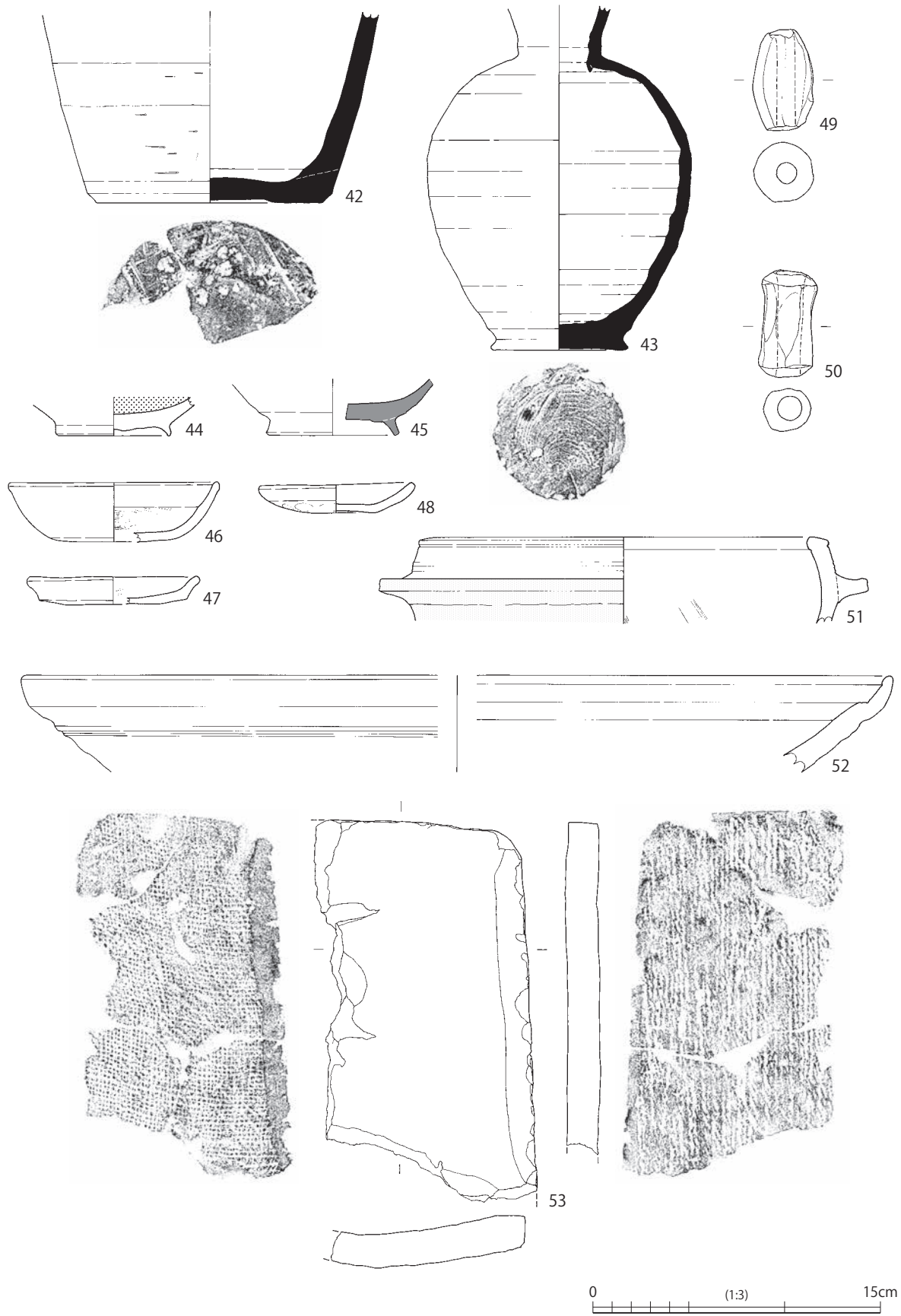
SD08 (64~66) : 64は白磁碗Ⅳ類の底部である。65は非ロクロの土師器小皿で、浅橙色を呈する。66は土師器の鍋で外面にはススが付着している。口縁が傾き口径が拡大するものとみられる。

SD14 (67・68) : 67は口径13.4cmの小型の甕で、口縁に突起をもち緩やかに波状を呈する。胴部に斜行する縄文を巡らし、ススで黒色化している。68も口径15cmの小型の甕で、胎土は浅黄橙色を呈する。

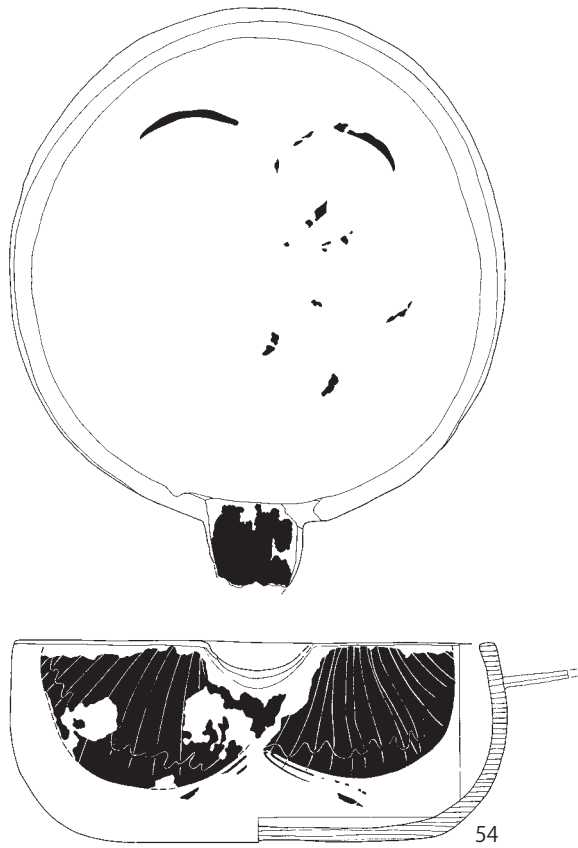
下層包含層出土遺物(71~78) : 71は口縁が波状を呈し、口径が30cmを越える深鉢とみられる。胎土はにぶい黄橙色を呈し、外面には斜行する条痕文が施される。石英砂を含む胎土等の特徴から、弥生時代前期の柴山出村式か。SD28の遺物集中地点からの出土で、周囲からは打製石斧や石族が出土している。

72~74の打製石斧は、全て使用痕が認められる。76は長さ18.2cm、重量650gで、刃部を失い、鋭利さを欠く。73は長さ17.5cmを測り、重量は456gの軽量品である。側面に摩滅がみられ、上端部を欠損している。74は長さ22.1cm、重量972gの大型品である。両側に摩滅がみられ、刃部を欠き鋭利さが無い。





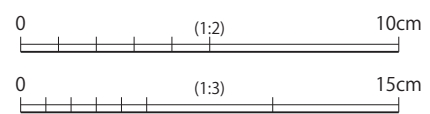
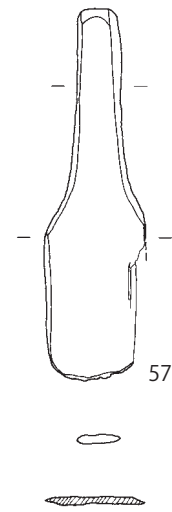
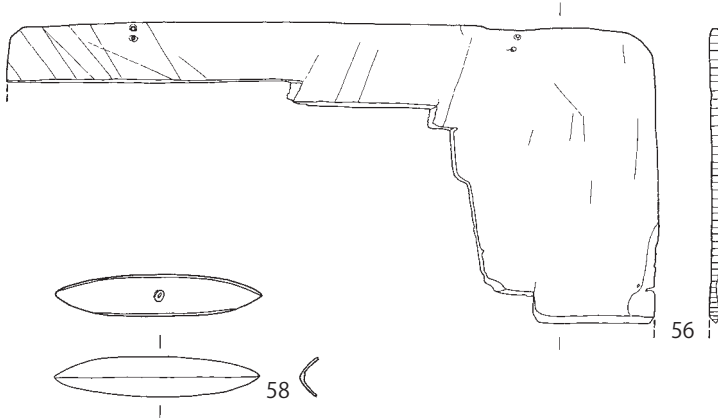
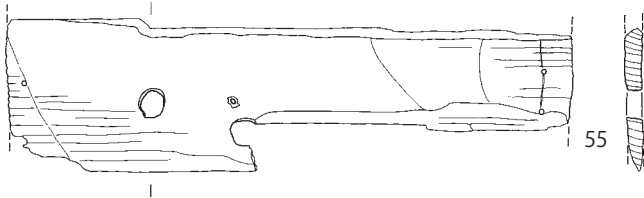
第23図 1区 SD03出土遺物実測図1 (S=1/3)



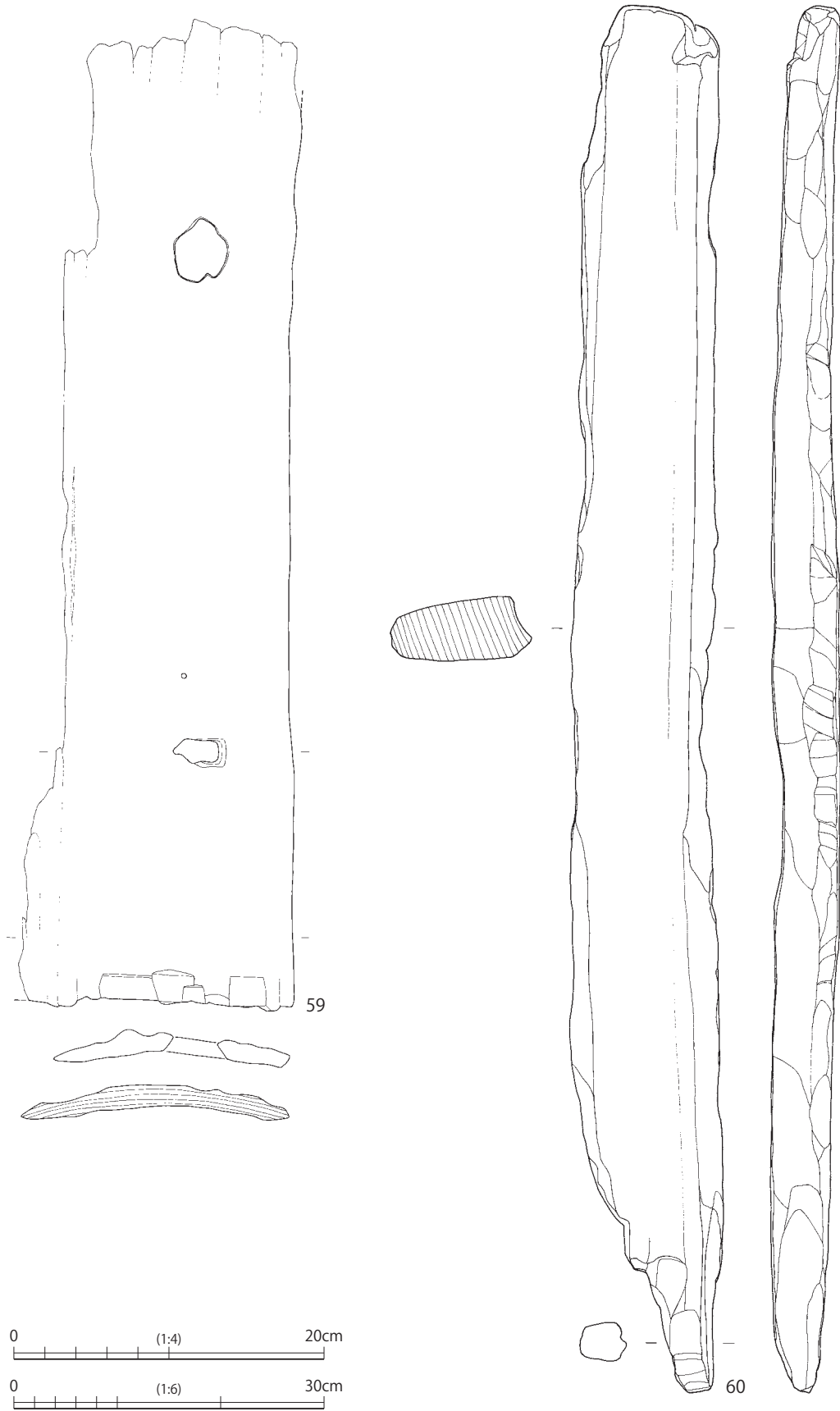
同左側面写真



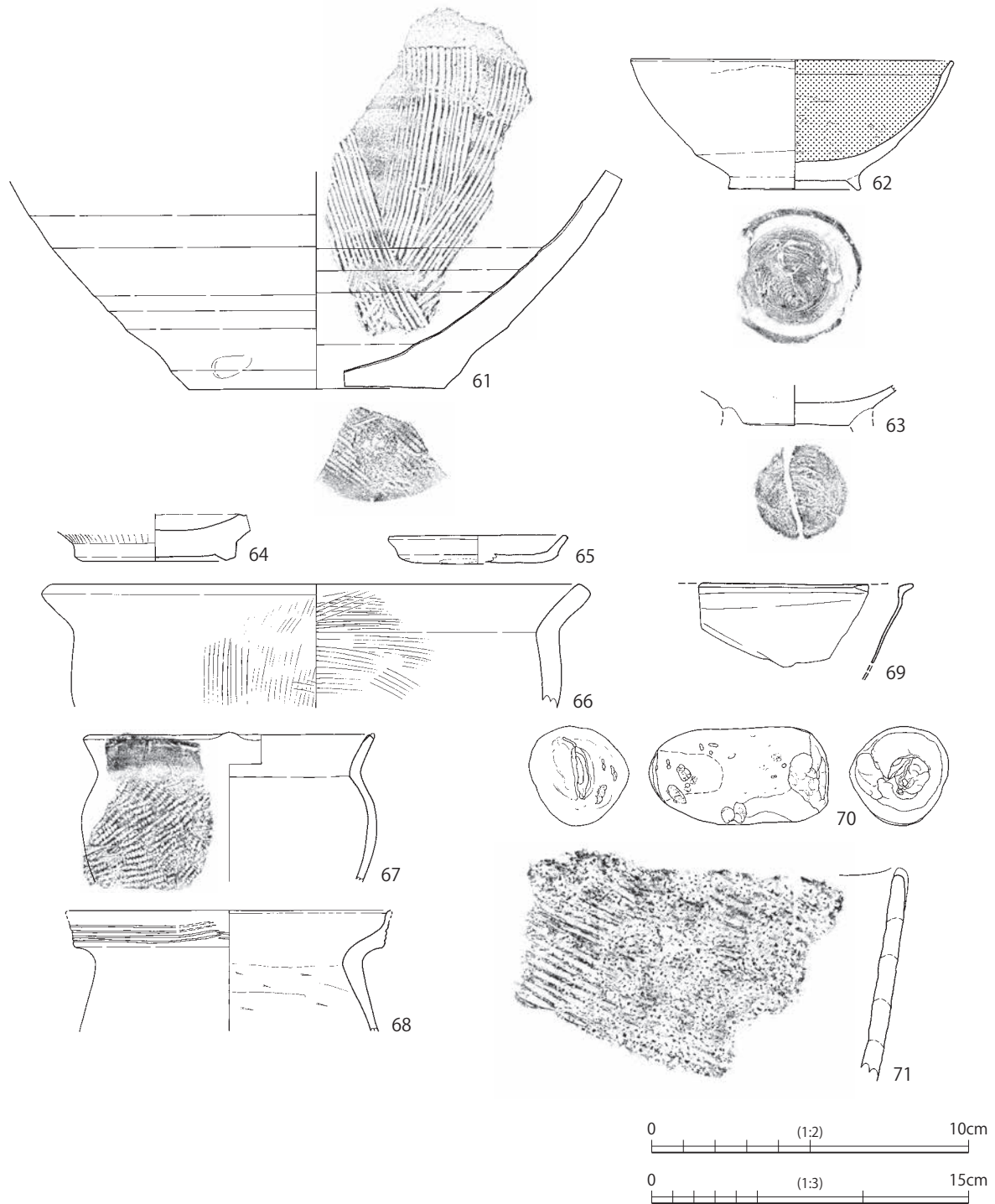
同左座面写真



第24図 1区 SD03出土遺物実測図2 (S=1/2・1/3)

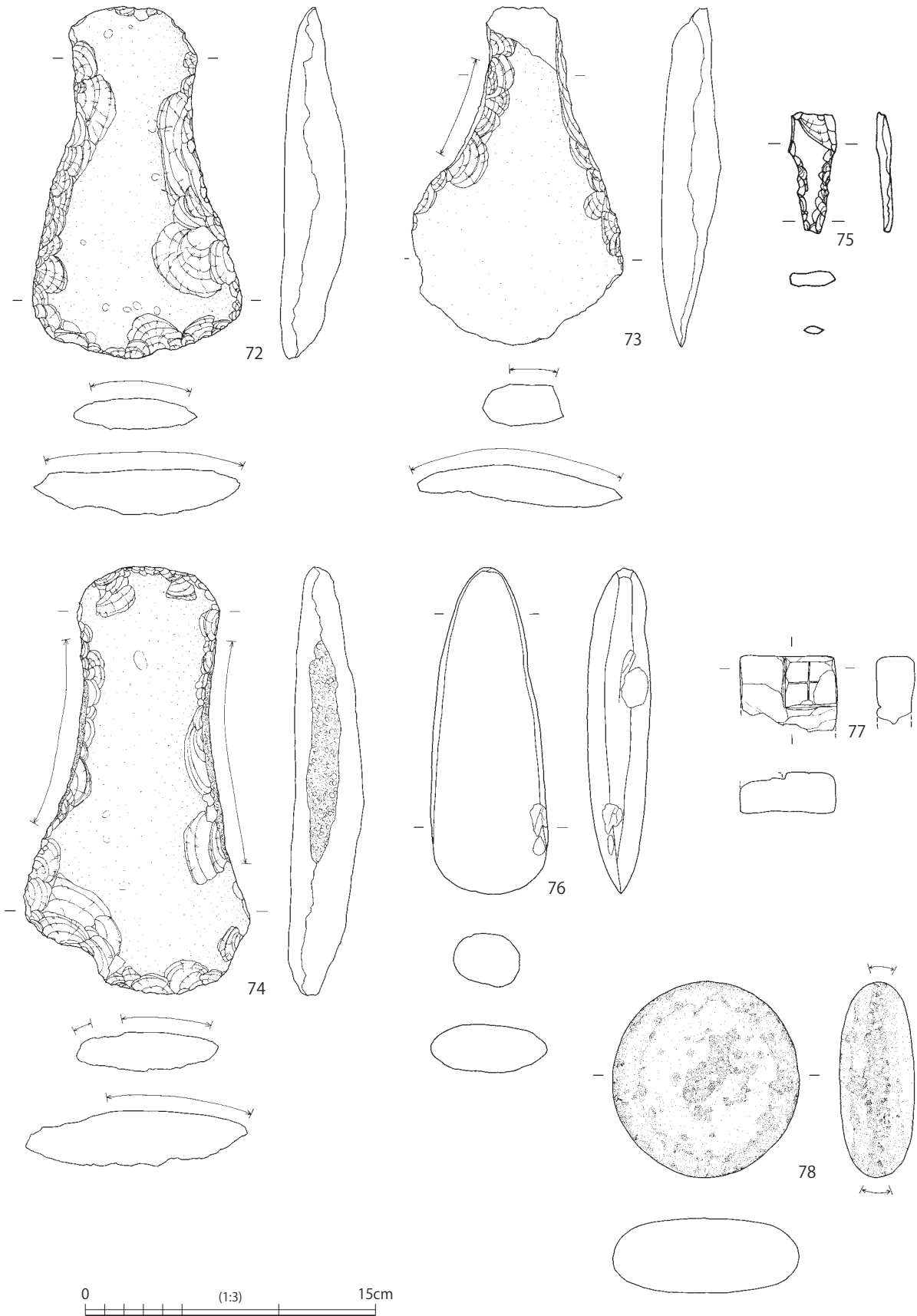


第25図 1区 SD03出土遺物実測図3 (S=1/4・1/6)



第26図 1区 SD05・06・08・13・14出土遺物実測図(S=1/2・1/3)

75は石錐で先端を欠く。76の磨製石斧は、長さ16.8cm、重量495gの中型品で、SD28の遺物集中地点より出土した。77は凝灰岩質の長方形材に、溝で方眼を刻んだもので、玉類製作に係る未製品か。78の敲石は、径10.1cm、重量554gで表裏と側面に打撃痕がみられる。



第27図 1区下層包含層出土石器実測図(S=1/3)

第3節 1区の遺構と遺物

図 No	実測 No	出土地点	遺構	種別	器種	法量 (cm)			調整		胎土・素地	色調		特記事項	
						口径	底径	器高	内面	外面		内面/釉薬	外面/釉薬		
第19区 1	D053	1区上層X12	Pit03	土師器	皿	14.4	7.9	(3.85)	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	粗砂、細砂含む	浅黄橙	浅黄橙	非口クロ	
	2	D033	1区Y9	SX01	瀬戸 おろし皿	10.9	-	(2.2)	ロクロナデ、お ろし目	ロクロナデ	細砂少し/灰白	浅黄橙/灰釉	浅黄橙/灰釉	古瀬戸後期Ⅱ期か	
	3	D013	1区Y9	SX01	瀬戸 平碗	16.2	-	(4.9)	ロクロ/目痕	ロクロナデ、ケ ズリ	堅緻/灰白	灰白/灰釉	オリーブ灰	古瀬戸後期Ⅱ期か	
	4	D030	1区XY10	SX01	瀬戸 折縁深皿	21.7	-	(4.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	緻密/浅黄灰	黄オリーブ	浅黄橙	古瀬戸後期Ⅱ期か	
	5	D032	1区XY10	SX01	瀬戸 天目茶碗	13.0	-	(6.0)	ロクロ	ロクロ	緻密/浅黄灰	鉄釉	鉄釉	古瀬戸後期Ⅱ期か	
	6	D031	1区Y10	SX01	瓦質 火鉢	-	-	(3.4)	ケズリ、ナデ	ナデ、印花文・ 隆帯	細砂含む	灰黄灰	にぶい黄橙	刻印(径1.9cm、不成形な 10花卉)	
第21区 10	D005	1区上層	包含層	須恵器	坏	12.1	8.0	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ、回 転へら切り	1mm以下の白色粒目立 つ	青灰	青灰		
	11	D028	1区上層W10、 X10	包含層	白磁 碗	16.0	-	(4.5)	ロクロ	ロクロ、ケズリ、 玉縁	堅緻/明灰	透明釉	浅黄、灰白	釉下に化粧土あり、白磁碗 Ⅱ類	
	12	D027	1区W10	包含層	白磁 碗	15.7	-	(3.7)	ロクロ	ロクロ、玉縁	堅緻/灰白	透明釉	灰オリーブ	白磁碗Ⅳ類	
	13	D012	1区上層W9	包含層	土師器	皿	8.6	6.6	2.5	ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ	海綿骨針少量含む、比 較的精良	黄灰	にぶい黄橙	非口クロ 内外面口縁部油煙痕あり
	14	D011	1区上層W9	包含層	土師器	皿	9.7	5.1	2.6	ヨコナデ	ナデ	砂粒少なく雲母少量含 む、	にぶい黄橙	にぶい黄橙	口縁に灯明タール付着 非口クロ
	15	D049	1区Y10 上層	包含層	白磁	皿	13.8	-	(3.2)	ロクロ	ロクロ、口禿	堅緻/灰白	透明釉	灰白	白磁皿Ⅲ類、14世紀後半
	16	D006	1区上層	包含層	青磁	鉢	11.3	-	(2.1)	ロクロ	ロクロ/鑄連 弁文	堅緻/灰白	青磁釉	明緑灰	釉は被熱でかすれ 14世紀前半
	17	D050	1区上層Y9	包含層	青磁	碗	15.6	-	(4.2)	ロクロ	ロクロ	堅緻/灰白	青磁釉	オリーブ灰	釉は被熱でかすれ 15世紀前半
	18	D007	1区 Y9	包含層	白磁	小坏	-	3.6	(2.35)	ロクロ/円形 露胎	ロクロ、ケズリ	緻密/灰白	透明釉	明灰	内面の露胎に朱漆、高台内漆 書(○に吉か)、15世紀前半
	19	D009	1区上層Y9	包含層	瀬戸	おろし皿	12.4	-	(2.1)	ロクロナデ、お ろし目	ロクロナデ	堅緻/灰白	灰釉	灰オリーブ 浅黄橙	口縁部付近は剥落
	20	D024	1区上層Y9	包含層	瓦質 火鉢	-	-	(5.3)	ナデ	ヨコナデ/隆 帯、珠文	細砂・雲母含む、海綿 骨針あり	浅黄橙	浅黄橙	貼付け珠文は径1.1cm 被熱で白色・軟質化	
	21	D025	1区上層X10	包含層	珠洲	壺	-	-	(4.0)	押圧痕	タタキ(放射 文)	細砂・海綿骨針含む	灰	灰	T種壺
	22	D008	1区上層Y9	包含層	白磁	小坏	4.2	2.4	1.55	ロクロ	ロクロ、ケズリ	緻密/灰白	透明釉	灰白/淡黄	高台内に墨書「三」か、15世 紀中頃
	23	D051	1区上層X11・ X10	包含層	染付	皿	10.1	-	(1.6)	ロクロ	ロクロ	気泡少し含む、密	青みの透明釉	灰白	
	24	D001	1区上層	包含層	朝鮮	碗	10.0	5.0	(3.25)	ロクロナデ、目 痕	ロクロナデ、ヘ ラキリ、目痕	堅緻/黄灰	雑釉/灰オ リーブ	雑釉/灰オリ ーブ	16世紀後半
	25	D029	1区上層Y9	包含層	肥前	溝縁皿	12.5	-	(1.65)	ロクロ	ロクロ	堅緻/明灰	オリーブ黄	オリーブ黄	
	26	D052	1区上層W10	包含層	肥前	皿	-	4.2	(1.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	白色粒含む/明灰	灰オリーブ	赤褐	内面に土目痕4カ所
	27	D010	1区上層Y9	包含層	肥前	碗	-	5.1	(4.6)	ロクロ	ロクロ、ケズリ	堅緻/灰白	透明釉	灰白	ピンホール目立つ、17世紀 後半
	28	D002	1区上層	包含層	肥前	筒型碗	-	3.6	(5.2)	ロクロ	ロクロ、ケズリ	堅緻/灰白	透明釉	灰白	コンニャク印判、18世紀前 半
	29	D020	1区上層V10	包含層	肥前	灯心押え	最大長 (4.8)	最大幅 2.1	最大厚 1.9			緻密/灰白		透明釉	素地：白色 釉：やや青 味のある白色透明釉
	30	D021	1区上層W11	包含層	土製品	土鉢	最大長 4.3	最大幅 3.6	最大厚 3.45		ナデ	粗砂少量含む	淡赤橙	淡赤橙～浅黄 橙	孔径1.5cm、重量32g
31	D026	1区上層W10	包含層	肥前	甕	17.2	-	(3.65)	ヨコナデ、タタ キ	ヨコナデ	緻密/明灰	灰白・黄褐	灰白・黄褐	17世紀前半	
第22区 33	D019	1区上層	SD01	肥前	碗	2.2	1.05	1.3	ロクロ	ロクロ、	灰白/堅緻	透明釉	灰白		
	34	D044	1区上層	SD02	土師器	皿	-	4.9	(2.15)	ロクロナデか	ロクロナデか、 回転糸切り	粗砂含む	淡橙	淡橙	内面煤付着
	35	D047	1区上層	SD02、 SD03	珠洲	壺	-	8.9	(5.05)	ロクロナデ	ロクロナデ、回 転糸切り	海綿骨針含む、黒色粒 目立つ	灰/降灰	灰(光沢)	珠洲Ⅰ期、R種、
	36	D022	1区上層	SD02	土師器	皿	9.0	7.1	1.35	ナデ	ナデ	砂粒少ない、精良	浅黄橙	浅黄橙	非口クロ
	37	D018	1区上層	SD02	土師器	皿	9.0	3.2	3.05	ナデ	ナデ	細砂、海綿骨針、雲母少 量	灰黄	灰黄	非口クロ
	41	D045	1区上層	SD02	瓦	平瓦				布目痕	縄目タタキ	細砂含む	暗灰	暗灰	降灰付着、小松産カ 3区SD01最下層と接合
第23区 42	D048	1区上層	SD03	須恵器	瓶	-	11.8		ロクロナデ、ナ ズリ	ロクロナデ、ケ ズリ	微量、粗砂、細砂多量 含む	灰	灰	内面降灰、3区SD01と接合	
	43	D039	1区上層	SD03	須恵器	長頸瓶	頸部径 4.5	7.0		ロクロナデ	ロクロナデ、回 転糸切り	粗砂、海綿骨針、焼土含 む	青灰	青灰	肩部に降灰、3区SD01と接 合
	44	D040	1区上層	SD03	土師器	碗	-	5.7	(2.0)	ミガキ	ロクロナデ、ナ デ	砂粒少ない、精良	黒	浅黄橙	内黒
	45	D016	1区上層	SD03	緑釉	碗	-	6.9	(2.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	浅黄橙、緻密	緑釉	緑釉/浅黄橙	
	46	D042	1区上層	SD03	土師器	皿	10.8	6.8	(3.1)	ナデ、ハケ状	ナデ	細砂、比較的精良	浅黄橙	浅黄橙	非口クロ
	47	D054	1区上層	SD03 土器集中	土師器	皿	8.7	7.7	(1.4)	ヨコナデ、ナデ か	ヨコナデ、ナデ か	粗砂含む	淡黄	浅黄橙	非口クロ
	48	D017	1区上層	SD03 土器集中	土師器	皿	7.85	3.1	1.6	ヨコナデ	ヨコナデ、指押 さえ	細砂、海綿骨針含む	浅黄橙	浅黄橙	非口クロ
	49	D023	1区上層	SD03	土製品	土鉢	最大長 5.2	最大幅 3.1	最大厚 3.2		ナデ	粗砂多い		浅黄橙	孔径1.2cm、重量40g
	50	D015	1区上層	SD03	土製品	土鉢	長さ 5.6	幅 3.1	厚さ 2.3		ナデ	細砂含む、密で粘土状		褐灰色	瓦質カ、孔径1.3cm、重量32g 両端やや膨れて竹輪状
	51	D037	1区上層	SD03	土師器	羽釜	19.4	-	(4.5)	ロクロナデ、ハ ケ	ロクロナデ	焼土粒目立つ	浅黄橙	浅黄橙	外面煤付着
	52	D043	1区上層	SD03 土器集中	土師器	埴	(45.0)	-		ロクロナデ	ロクロナデ	細砂、焼土塊多量含む	浅黄橙	浅黄橙	
	53	D041	1区上層	SD03	瓦	平瓦				布目痕	縄目タタキ	粗砂、細砂多い	灰	灰	小松産カ

第3表 1区土器・土製品観察表(1)

図No	実測No	出土地点	遺構	種別	器種	法量 (cm)			調整		胎土・素地	色調		特記事項
						口径	底径	器高	内面	外面		内面/釉薬	外面/釉薬	
第26図61	D536	1区上層	SD05	珠洲	すり鉢	-	12.1		ロクロナデ、おろし目	ロクロナデ、静止糸切り	粗砂、細砂多い、海綿骨針含む	灰白	灰	珠洲Ⅳ期 おろし目:幅3.9cm、14本
62	D003	1区上層	SD06	土師器	碗	15.1	6.3	6.2	ミガキ	ロクロナデ、回転糸切り	砂粒少量、海綿骨針多量含む	黒	浅黄橙	内黒
63	D004	1区上層	SD06	土師器	碗	-	(5.0)		ミガキカ	ロクロナデ、回転糸切り	粗砂、細砂、海面骨針含む	浅黄橙	浅黄橙	
64	D035	1区上層	SD08	白磁	碗	-	7.6	(2.2)	ロクロ	ケズリ	緻密/明黄灰色	淡黄	淡黄	白磁碗Ⅳ類
65	D036	1区上層	SD08	土師器	皿	8.25	6.2	1.35	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、指押さえ	細砂、海綿骨針	浅黄	浅黄	非ロクロ
66	D038	1区上層	SD08	土師器	塀	24.7	-		ハケ	ハケ	細砂・雲母少量含む	浅黄橙	浅黄橙	外面煤付着
67	D034	1区拡張区X10	SD14	縄文	深鉢	13.4	-	(7.0)	ヨコナデ、ナデカ	ヨコナデ、縄文	砂粒少量、雲母多量含む	黒褐	灰黄褐	口縁部かすかな突起もつ (個数不明)
68	C001	1区下層R13	SD14	土師器	皿	(15.0)	-	(5.65)	ケズリ	ヨコナデ、擬凹線	粗砂含む	褐灰	浅黄橙	
70	D014	1区 下層	SD13	土製品	不明	最大長 8.5	最大幅 4.6	最大厚 4.7		ナデ	粗砂、細砂少量含む		灰白	重量139g
71	D552	1区下層W11	包含層	縄文	深鉢	-	-	(10.1)	ナデ	条痕	礫、粗砂多量、海面骨針微量含む	浅黄橙	にぶい黄橙	波状口縁

第3表 1区土器・土製品観察表(2)

図No	実測No	出土地点	区名	遺構	種別	器種	法量			樹種	備考
							最大長	最大幅	最大厚		
第19図8	w43	1区拡張 Y11 P11	1区	P11	建築部材	柱根	30.4	17.5	14.5	スギ	
第20図9	w52	1区 X11	1区	SK03	農具	鋏カ	15.3	(10.4)	(2.3)	アカガシ亜属	
第21図32	w53	1区 Y9上層	1区	包含層	履物	下駄	18.2	8.1	2.8	針葉樹	
第22図38	w82	1区上層	1区	SD02	調理具	板杓子	16.8	4.6	0.5	スギ	
39	w114	1区上層	1区	SD02(満底)	祭祀具	斎串カ	(22.6)	2.0	0.4	スギ	
40	w115	1区上層	1区	SD02	土木具	杭	(33.8)	3.1	1.9	スギ	
第24図54	w65	1区上層	1区	SD03	容器	片口鉢	19.0		8.1	クリ	内外黒漆塗り、朱漆で蝶模様
55	w67	1上層	1区	SD03	容器	折敷カ	(6.1)	22.5	0.8	スギ	
56	w107	1区上層	1区	SD03	容器	折敷	25.8	(11.9)	0.6	スギ	
57	w66	1区上層	1区	SD03	調理具	板杓子	14.3	4.0	0.4	スギ	
第25図59	w23	1区下層	1区	SD03		板材	(63.7)	(17.6)	(1.5)	スギ	
60	w104	1区上層	1区	SD03	土木具	杭	133.8	14.2	6.0	スギ	

漆器碗や容器の曲物の法量は、口径・底径・器高を記載

第4表 1区木器観察表

図No	実測No	出土地点	遺構	種別	器種	法量(mm)		孔径(mm)		重量(g)	備考
						最大長	最大幅	縦	横		
第19図7	金010	1区上層 Y9	SX01	銅銭	渡来銭	縦外径 24.2	横外径 24.3	6.3	6.3	2.8	政和通宝
第24図58	金012	1区上層	SD03	飾り金具	緑金具	55	10			3.6	外面金塗装、内面中央に釘痕
第26図69	金014	1区上層	SD06	仏具カ	鉢カ	(52)	(28)			(11.2)	鉢形の鋳銅製品

第5表 1区金属製品観察表

図No	実測No	出土地点	遺構	種別	器種	法量 (cm・g)				石質	備考
						最大長	最大幅	最大厚	重量		
第27図72	石004	1区 X10	SD14西壁上部	用具	打製石斧	18.2	10.8	3.2	650.0		
73	石022	1区上層 X11	包含層	用具	打製石斧	17.5	10.9	3.0	456		
74	石005	1区上層	遺構検出面	用具	打製石斧	22.1	11.7	3.6	972.0		
75	石019	1区上層 X11	包含層	工具	石錐	3.1	1.2	0.4			
76	石006	1区上層 W10	遺構検出面	伐採具	磨製石斧	16.8	6.0	3.45	495.0		
77	石018	1区上層 W・X10	包含層		未成品か	(4.0)	5.0	(2.2)	(35.0)		
78	石007	1区上層 X12	遺構検出面	用具	敲石	10.1	9.7	3.9	554.0		

第6表 1区石製品観察表

## 第4節 2区下層の遺構と遺物

### 1. 2区上層及び中層の調査概要(第28図)

第5次調査の2区下層は、前年度の第4次調査において、三層の文化層を確認した2区の下層が、調査未了となったことから、第5次調査でその発掘調査を実施したものである。このため、2区の上層及び中層の調査成果は、第4次調査の成果を取り纏めた『金沢市梅田B遺跡Ⅲ』(2006刊行)において、既に報告されている。詳細は同書を参照されたい。本項では2区下層の理解を深めるため、上層と中層の遺構全体図を第28図に示し、その歴史的な推移と概要を説明するものである。

平成8年度の第4次調査で、1区の南に設定した2区では、三層の文化層を確認し、その内容は1区東半部の様相と似通っている。

2区の上層は、古代末から中世前半の遺構面である。小規模な掘立柱建物や溝に加えて、近世に用水路として利用された溝なども発掘している。調査区の東半で検出した溝は、南北や東西方向を取るものが多い。古代末の掘立柱建物に併設され、宅地の区画溝として機能したものとみられる。なかでも、東西方向に並走するSD119とSD125は、東方の開析谷から流下した用水が通過していた可能性が高く、その脇には小道が併設されていたと推定できる。古代末の開発を分担した小規模な集落とみられる。

中層は、弥生時代後期後半から古墳時代前期で、調査区の北西で検出した方形の小区画は、北側の1区で設営された小区画の水田遺構の広がりである。1区の中層で発掘した水田が、2区にも及んでいたことを示すと共に、古墳前期の溝なども開削されていたことから、農耕の生産基盤である水田が、古墳前期には1区～2区にかけて、広く展開していたことが知られた。石川県内では、農耕地の調査事例は少なく、古墳時代の水田農耕を物語る遺構の検出は、発掘当初から注目されている。また、小区画の水田を被覆する砂質土は、田面に残された足形にも入り込み、足形にみる人の動きは、営農に励む人々の様子を伝えている。

この水田遺構は、開析谷から流下した砂質土が、洪水のように田面を覆ったことで埋没したものである。また、上層～中層の堆積土層をみると、水田遺構が確認されていない東半や南半の区域にも、畦畔の検出には欠けるが、同規模の水田区画が、SD129の付近まで展開していたとみられる。

その古墳時代の水田に埋もれていた下層では、弥生時代後期の掘立柱建物や溝などを地山面で検出したものの、1区に比べ集落的な様相は弱い。

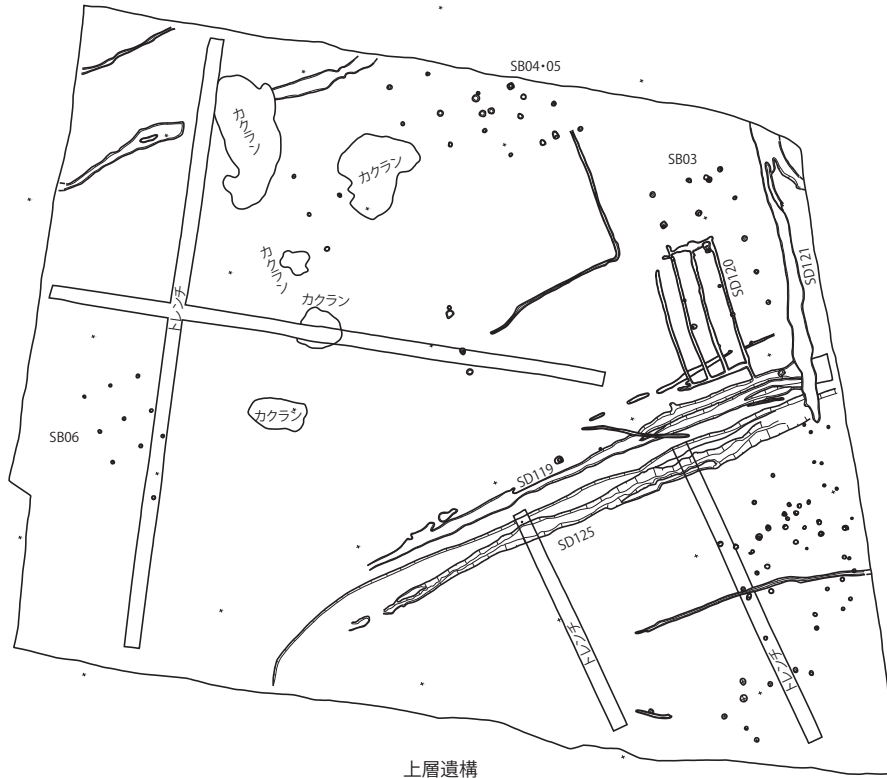
### 2. 2区下層の調査概要(第29図)

2区は、遺跡を東西に通過する農道で北辺が画され、東辺は梅田地内の丘陵裾を北方向へ流下する川原市用水と並走する農道で区画された区域である。平面形が台形を呈する調査区で、面積は2,500㎡を測る。

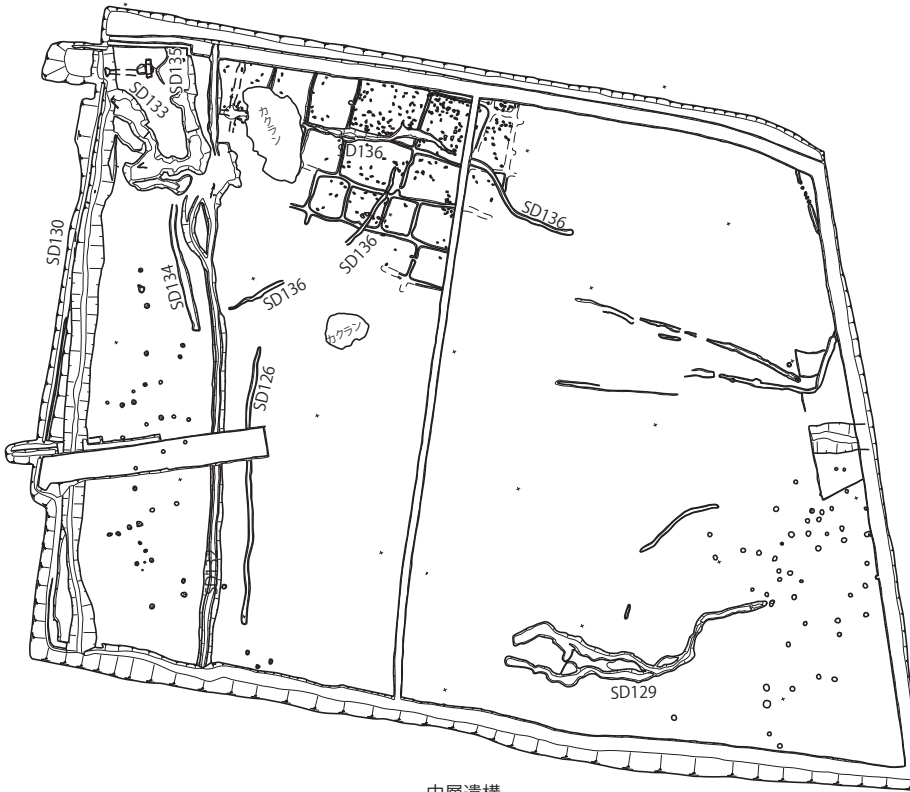
遺構密度は薄く、数条の溝状遺構と1棟の掘立柱建物である。古い時期のものとして、梅田集落が所在する開析谷から河北潟に沿った沖積低地に向けて蛇行するSD01とSD07がある。川原市用水の東に位置する第5次調査の3区から流下したものである。各溝からは、弥生時代後期前半、縄文時代晩期～弥生時代前期と見られる少量の土器片とトチノキの種子等の種実が出土している。自然流路とみられる。

続く弥生時代後期後半の遺構は、当遺跡の下層面においては最も一般的である。調査区中央を直線的に通過するSD02は、南北両方向へと伸びる長大な溝である。南の第5次調査1区ではSD14であり、北の第4次調査1区ではSD122と報告されている。各地区においても出土遺物が少なく、用水のように管理

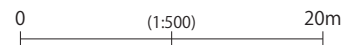




上層遺構



中層遺構



第28図 2区上層・中層遺構全体図(S=1/500)

されていた可能性があり、その時代と性格付けが課題となる。また調査区西端を流れるSD05は、2区の中層で検出されたSD130から1区のSD108の下部で、古墳時代の小区画水田に伴うとみられる。SD03の前身となる溝であろう。

SD05の脇には、2間×2間の掘立柱建物SB01がみられる。倉庫的な建物として設営されたものか。

出土遺物は、土器・木製品合わせも4箱と少ない。第4次調査の1区で検出された大型の平地式建物も認められず、遺構数、遺物量の急減は、集落の縁辺部であったことを示すものと考えられる。

なお、2区の西辺では、平成8年度末に石川県森本断層調査グループ、石川県環境安全部(生活安全部前身)による断層確認のトレンチ調査が実施されている。これは第4次調査の1区下層でみられた地山が、調査区内で上下のずれがあり、これが地震による地盤の変動と予測されたことによる。

その結果、地表面下約6mの地点で、下層遺構面の不整合を裏付けるような活断層の露頭が確認された。断層は、丘陵を隆起させてきた森本断層本体の運動方向とは反対の平野(海)側隆起、丘陵側沈降の逆断層であるため、主断層の活動に伴って形成された副次的な層面すべり断層と考えられている。トレンチ最下部の中部洪積層(卯辰山層)が、逆断層に沿って上下方向に1mほど変位している様子がよくわかる。また、それを覆う沖積層は、上部に向かって次第に緩やかな境曲へと推移しており、構造的には一回の断層運動によって生じたものと理解される。この観察結果は、第5次2区SD08を挟んだ丘陵側の下層遺構検出面が、海側のそれよりも不自然に30~50cm低くなっていることと合致する。

断面観察では、古墳時代の溝には特別な変位は認められず、断層による地盤の変動後に掘削された溝であることがわかる。それに対し、小区画水田に伴う5次2区SD08周辺は変位に参加しており、断層運動によってずれた境曲崖に沿って掘られた溝の可能性が高い。

断層活動はM6.7以上の地震規模に相当すると推定されている。梅田B遺跡では、弥生時代後期後半にかなり大きな地震を経験したことがわかる。また、2区のSD08付近より西側が隆起したことで、2区は南北方向に広がる窪地となり、開析谷から流下した沢水により、湿地状の環境が生まれ、古墳時代には水田化されたとみられる。また、断層のずれに沿って、大規模な用排水路(SD08)が開削されたのであろう。

なお、それ以降、この断層が動いた形跡は見られない。

### 3. 2区の下層遺構(第30~36図)

SB201: 調査区の西側で、SD05に隣接する2間×2間の掘立柱建物である。規模は東西長240cm、南北長280cmを測り、SD05の肩から100~140cmの間隔を空け、径30~50cmの柱穴を掘削している。SD05が掘削された弥生時代末から古墳時代初め頃に設営された倉庫とみられる。

SD01: 調査区の中央付近を東から西方へ流下する溝である。東端では幅160cm前後、深さ80~90cmほどの規模で、東方の第5次調査の3区から流れ下る自然流路とみられる。調査区中央に所在する土坑までは、溝の規模を縮めながら幅直線的に走り、土坑から西方は溝幅70cm前後、深さ45cmほどに縮小したままSD05へ流下する。弥生時代後期の天王山式土器に比定される甕が出土している。

なお、溝が通過する調査区中央の土坑は、径210cm、深さ90cmほどを測り、袋状の形態と植物遺体を含む覆土から、小規模ではあるが、弥生時代から古代にかけて地下水が湧出した泉とみられる。

SD02: 調査区を南北に直線的に縦断する溝である。南端では幅220~240cm前後、深さ90~100cmほどを測り、覆土から大きく3段階に分かれる。下層は溝がV字形を呈している段階で、溝底には濁黄灰褐色の粘質土が短期間に堆積している。中層は溝幅が広く安定していた段階で、両側から土砂が薄く流入堆積している。上層は溝の上半が大きく再掘削された後の段階で、黄灰褐色を呈する砂質土や粘質土が堆積している。弥生時代後期後半の遺物が中層から出土している。



第29図 2区下層遺構全体図(S=1/400)

また本遺構は、北は第4次調査1区のSD122から、南の第5次調査1区のSD14へつながり、南端は第6次調査のE区SD01へ到達する。その延長270mにも及び、出土遺物の少なさから用水のように管理されていたと理解できる。溝の南端を発掘した第6次調査の報告時には、その性格付けをしたい。

SD03：調査区の西壁際で検出した溝で、東側に並走するSD05の作り替えであることが、土層観察で確認されている。溝幅は250cm前後、深さ100ほどを測り、溝底は南から北へ向かって、緩やかに傾斜している。北は第4次調査1区のSD109へ接続し、南は調査区外へ延びている。

SD04：調査区の南端で検出した細い溝で、第5次調査1区の北端にあるSD15へ接続し、SD02に切られている。東端では溝幅100cm、深さ12cmのものが、蛇行した西端では幅50cmと縮小する。SD01と共に東の3区下層から流下しているとみられる。

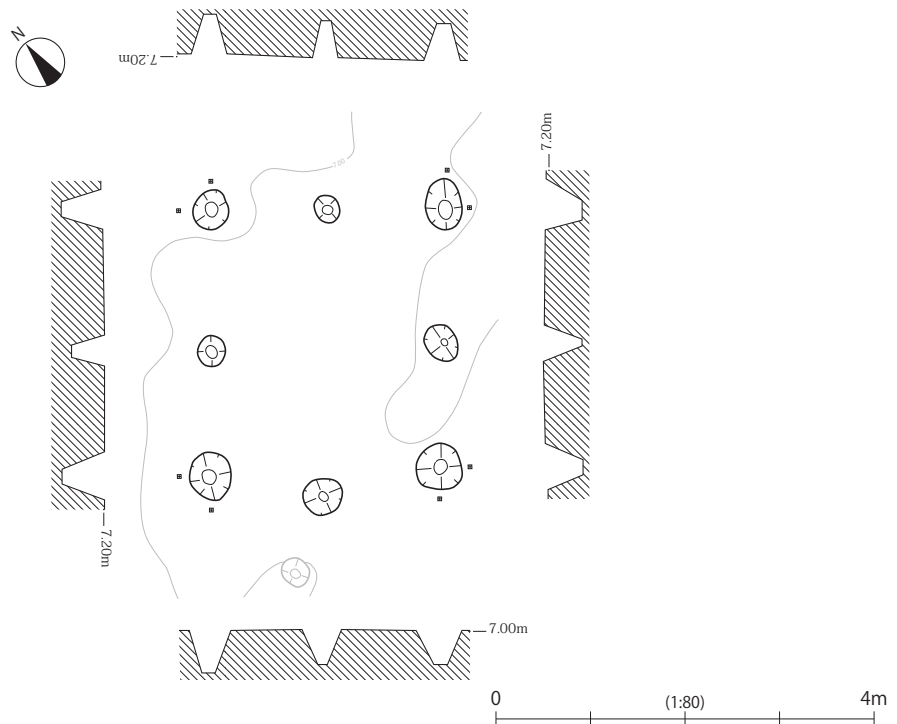
SD05：SD03に先行する溝で、北端は調査区北西隅の不整形な窪地から始まり、南端は重なるSD03により切られている。溝の規模は中程で、幅90cm前後、深さ50cmを測るが、北の窪地付近では縮小している。溝底は南へ向かって緩やかに傾斜しており、作り替えされたSD03の溝底とは逆の傾斜を示し、窪地から南へ流下する状況がみられる。これは、SD05の北部にみられる不整形な窪地の機能と関係するとみられる。

窪地は、他の調査区から類推すると、以前は湧水が多い湿地状の地形であった可能性が高く、SD05はその水を南方へ引く用水であったなら、現状は容認することができる。だが作り替えされたSD03が北へ流下する用水とみられ、SD05は直下の地震断層により溝の傾斜が変動した可能性が強い。

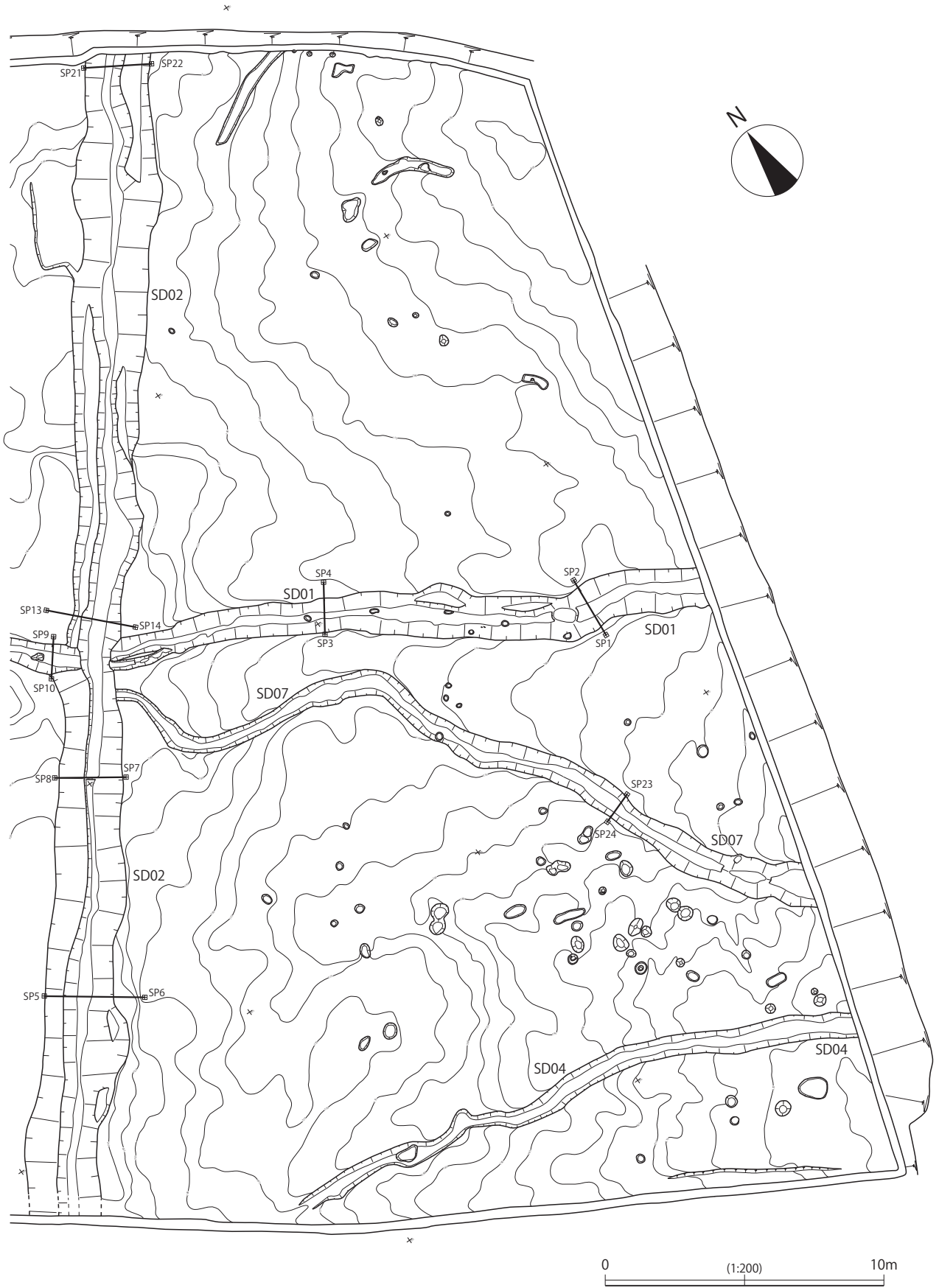
SD06：SD01の西部にみられる不整形な窪地から、北の北西隅へと蛇行する溝である。溝の規模は幅90cmから自然流路のように変動し、西方では40cmほどの箇所もみられる。溝底も波打つ。

SD07：SD01とSD04の間を流れ、SD02に切られている溝である。東端では幅160cm、深さ20cmの規模が、SD02に近づくと幅60cmと縮小している。溝底は波打つが、深さの変動は少ない。

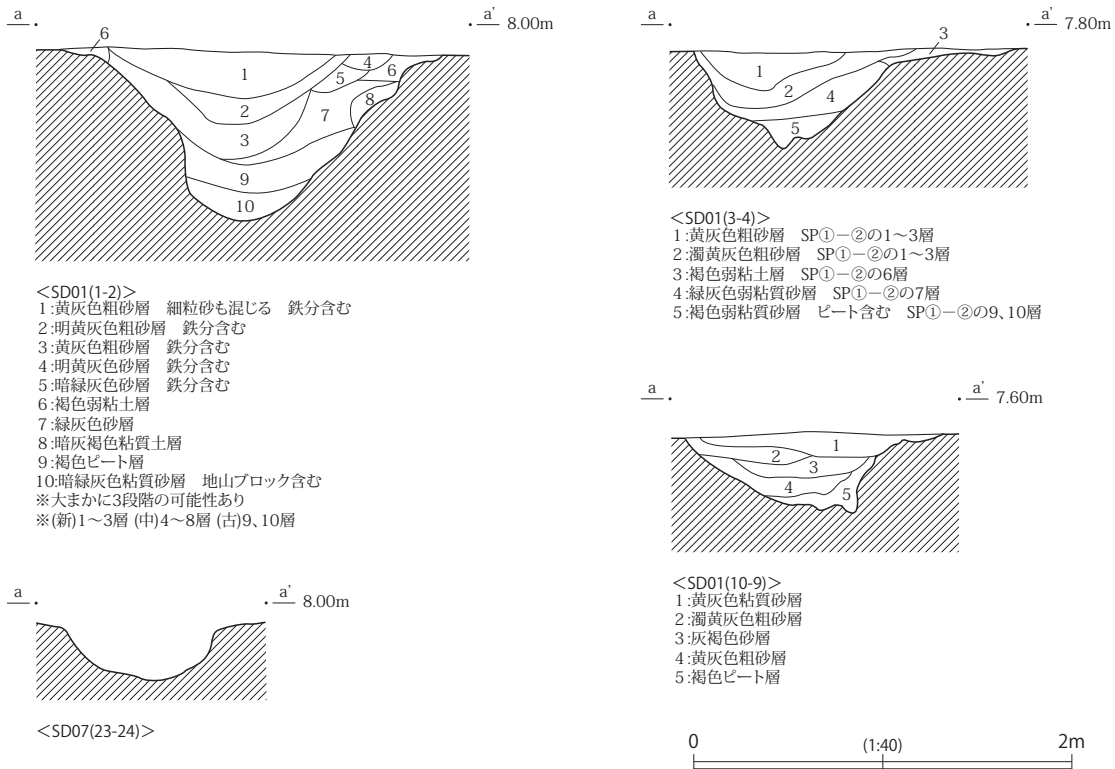
SD08：SD03の西側で検出された溝状の窪地で、規模は不明である。土層観察からするとSD05より後出の溝で、SD03により覆土の上面が切られており、両者の間に機能した溝とみられる。



第30図 2区 SB201 平面図・断面図(S=1/80)



第31図 2区下層遺構平面図(東側) (S=1/200)



第32図 2区 SD01・07断面図(S=1/40)

#### 4. 2区の下層出土遺物(第37~41図)

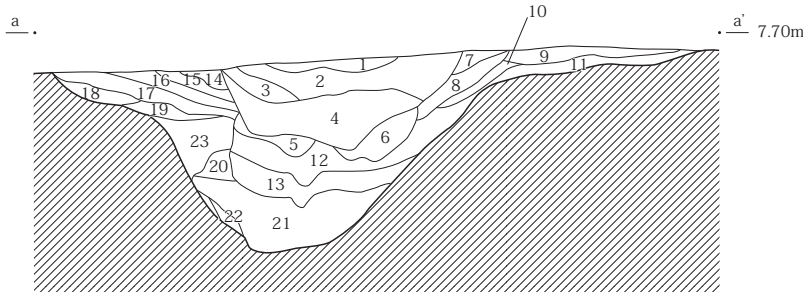
SD01 (79~82)・07 (83) : 遺物は散発的に出土した土器だけである。79は口径19.3cmを測る天王山式土器で、外面全体にススが付着している。口唇部外面に隆帯を貼り、指頭で押圧している。頸部から胴部上半は粗いナデ整形が無文帯となる。口縁上端から内部にはススの付着がみられず、煮沸時は蓋の使用が知られる。80の底部には網代状の圧痕が残り、外面は条痕による調整である。81は甕の口縁部で、口唇部の内面を指頭で押圧し、ヨコハケとしている。外面はヨコハケから縦ハケとなり、ススが付着しており、82はその胴部下半とみられる。胎土には砂粒が多く、内面に焦げ付きがみられる。

83はSD01の南側を流れるSD07から出土した甕の底部で、編籠状の圧痕が残る。黄色灰を呈する胎土は粗く、石英砂が目立ち80と近似している。

SD02 (84~87、88~92) : 84は受口形態の甕で、淡黄橙色を呈する胎土は精良である。85は灰白色を呈する甕で、口径18.4cmを測る。86は鉢形を呈する小型の甕で、口径15.8cmを測り、内外にススが付着している。87は灰黄色を呈する高坏である。

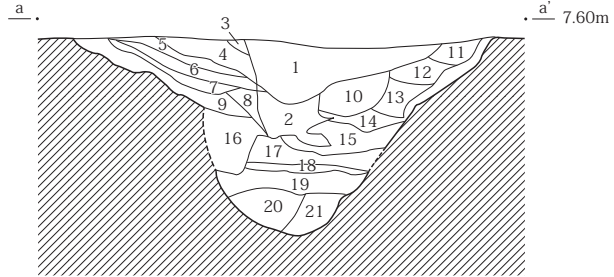
88は腰掛の側板と考えられるスギ板である。手斧で整形されたとみられる板材は、厚さ1.5cmを測り、上部の方形突起は横板を受ける柄とみられる。また中央の方形孔は、横長であることから、補強用の横棧を受ける柄孔とみられる。腰掛の高さは31~32cmと傾く。

89は径1.4cm、長さ74.8cmの丸棒で用材はスギである。90の丸棒もスギ材で、長さ95.8cmと長い。下端は柄、上端は有頭状の突起を呈する。中央付近がやや偏平となり、断面形も楕円を呈することから、89と共に紡織具の部材と推定できる。



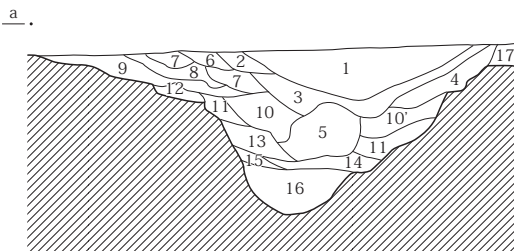
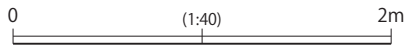
<SD02(5-6)>

- 1:黄褐色粘質土層 地山粒含む
  - 2:褐色粘質土層
  - 3:褐色粘質土層 地山ブロック含む
  - 4:灰褐色粘質土層 炭粒含む
  - 5:濁緑灰色粘土層 地山土に近い
  - 6:緑灰褐色粘質土層 地山ブロック、炭粒含む
  - 7:濁黄色粘質砂層
  - 8:黄灰褐色粘質土層 地山ブロック含む
  - 9:濁褐色粘質土層 砂質気味
  - 10:暗褐色粘質土層
  - 11:濁黄色粘質土層 地山の汚れた
  - 12:暗緑灰色粘質土層 ビート層、植物遺体多い
  - 13:暗褐色粘質土層 ビート層、植物遺体多い
  - 14:濁黄色粘質砂層 7層と同じか?
  - 15:褐色粘質土層
  - 16:濁黄褐色粘質土層
  - 17:暗褐色粘質土層
  - 18:暗黄色粘質土層 11層に近いか?
  - 19:濁黄灰色粘質土層
  - 20:濁暗褐色粘質土層 ビート層、13層に地山ブロック含む
  - 21:濁黄灰褐色粘質土層 褐色系粘質土に多量の地山ブロック含む
  - 22:濁黄灰褐色粘質土層 21層より地山分多い
  - 23:緑灰色粘質土層 地山か、SD02の覆土か?
- ※21層から法仏と思われるカメコ緑部片出土。遺物量は少ない。



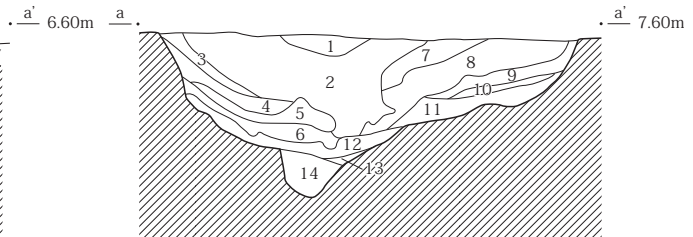
<SD02(8-7)>

- 1:淡灰褐色粘質土層
- 2:灰粘質土 ビート層的で植物遺体含む
- 3:白黄色砂層
- 4:黄色砂層
- 5:白黄褐色粘質砂層
- 6:暗褐色粘質土層
- 7:黄灰褐色粘質砂層
- 8:灰褐色粘質砂層
- 9:褐色粘質土層
- 10:濁灰褐色粘質土層 地山ブロック
- 11:濁黄灰色粘質砂層
- 12:濁黄褐色粘質土層 地山多量含む
- 13:濁黄灰色地山土 褐色ブロック含む
- 14:濁暗褐色粘質土層
- 15:青灰色地山土層
- 16:濁青灰色地山土層 15層に比べて粘質強い
- 17:褐色ビート層
- 18:緑灰色粘土層
- 19:濁黄褐色粘質土層 地山ブロック大量に含む
- 20:濁黄灰色粘土層 地山ブロック含む
- 21:濁黄褐色粘質土層 19層より地山分多い



<SD02(13-14)>

- 1:濁黄灰褐色粘質土層
- 2:濁黄灰褐色粘質砂層
- 3:暗灰色粘土層
- 4:暗黄灰色粘質砂層
- 5:暗灰褐色粘土層
- 6:黄色砂層
- 7:暗灰褐色粘質土層 4層と同層か?
- 8:淡黄灰色砂層
- 9:灰褐色粘質土層
- 10:濁黄灰褐色粘質土層
- 10':濁黄灰褐色粘土層 地山の土含む
- 11:褐色粘質土層
- 12:黄色地山土
- 13:暗黄褐色粘質土層 地山ブロック含む
- 14:暗緑灰色粘土層 地山ブロック含む
- 15:濁褐色粘質土層
- 16:濁灰褐色粘質土層 地山ブロック多量に含む
- 17:白黄色砂層 SD01



<SD02(21-22)>

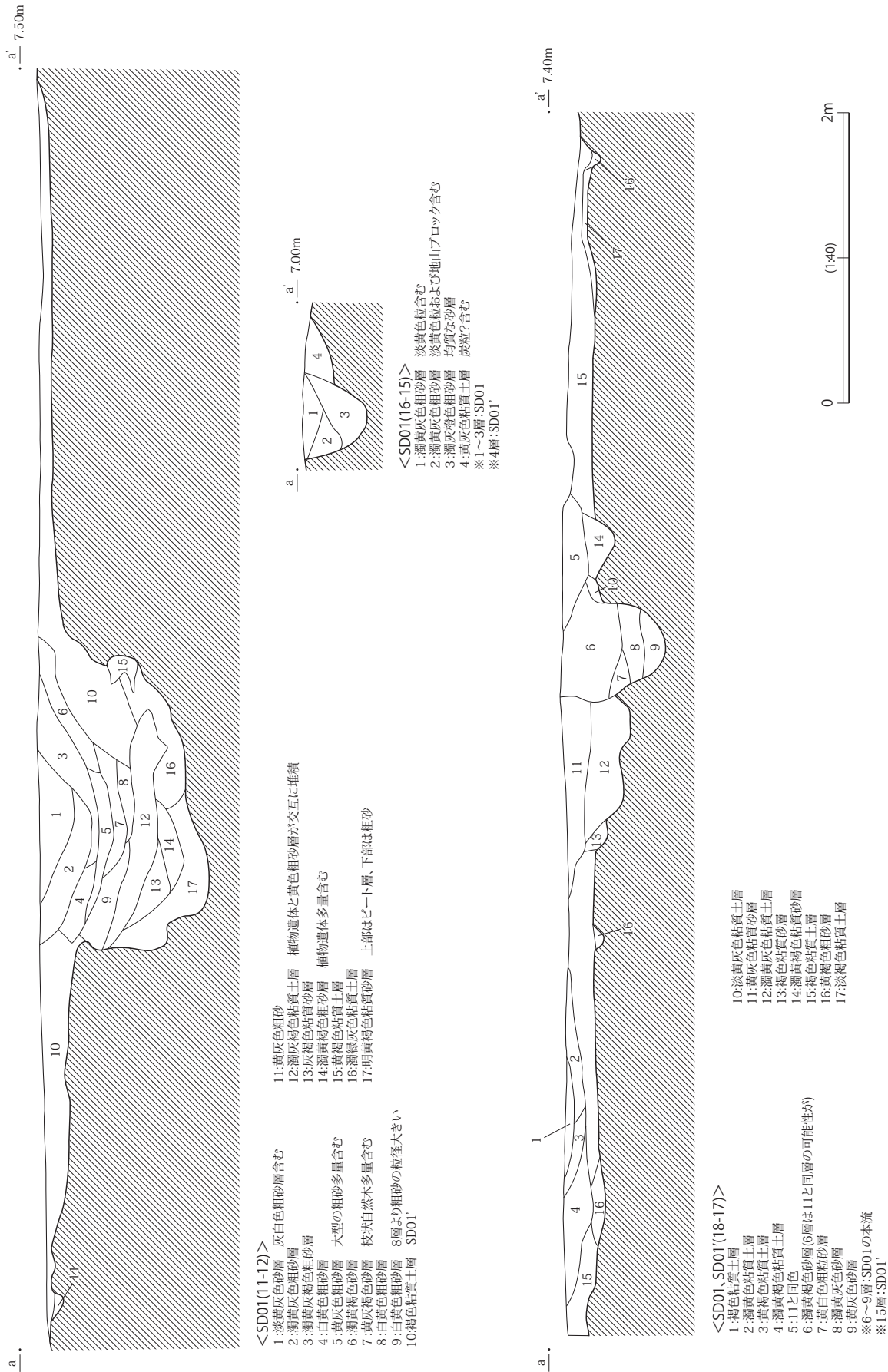
- 1:黄褐色粘質土層
  - 2:淡灰褐色弱粘土層
  - 3:褐色粘質土層
  - 4:灰褐色粘質土層
  - 5:淡黄灰色粘質土層
  - 6:褐色ビート層
  - 7:淡褐色粘質土層 黄色地山ブロック含む
  - 8:黄色粘土(地山土)層
  - 9:暗褐色粘質土層
  - 10:褐色粘質砂層
  - 11:褐色弱粘土層
  - 12:黄灰褐色粘質土層 地山ブロック含む
  - 13:灰褐色粘質土層 地山ブロック含む
  - 14:濁黄緑色粘土層 淡緑色地山ブロック含む
- ※新(1層~6層)、中(7層~11層)、古(12層~14層)の3段階とみられる

第33図 2区 SD02断面図(S=1/40)



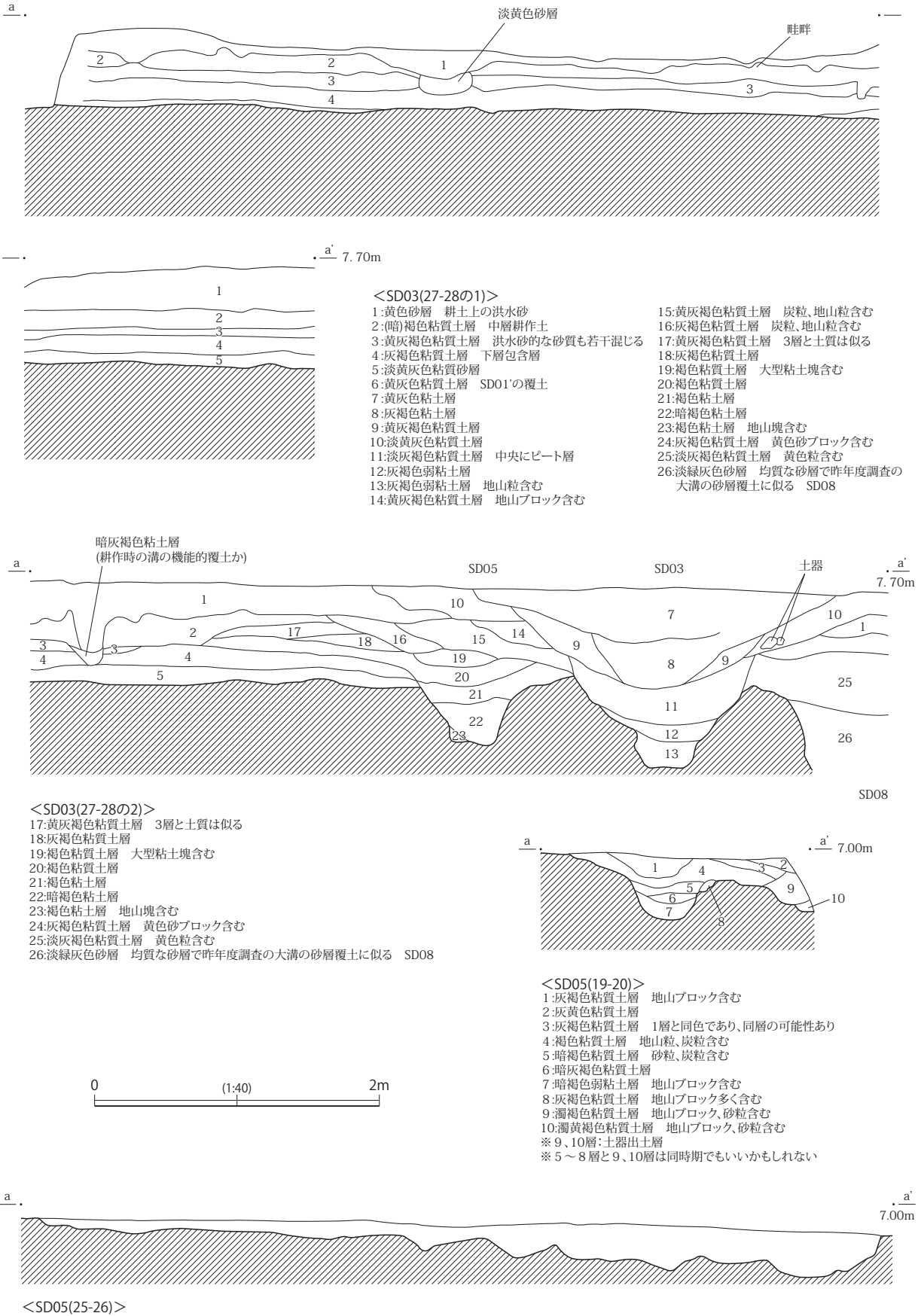
第34図 2区下層遺構平面図(西側) (S=1/200)



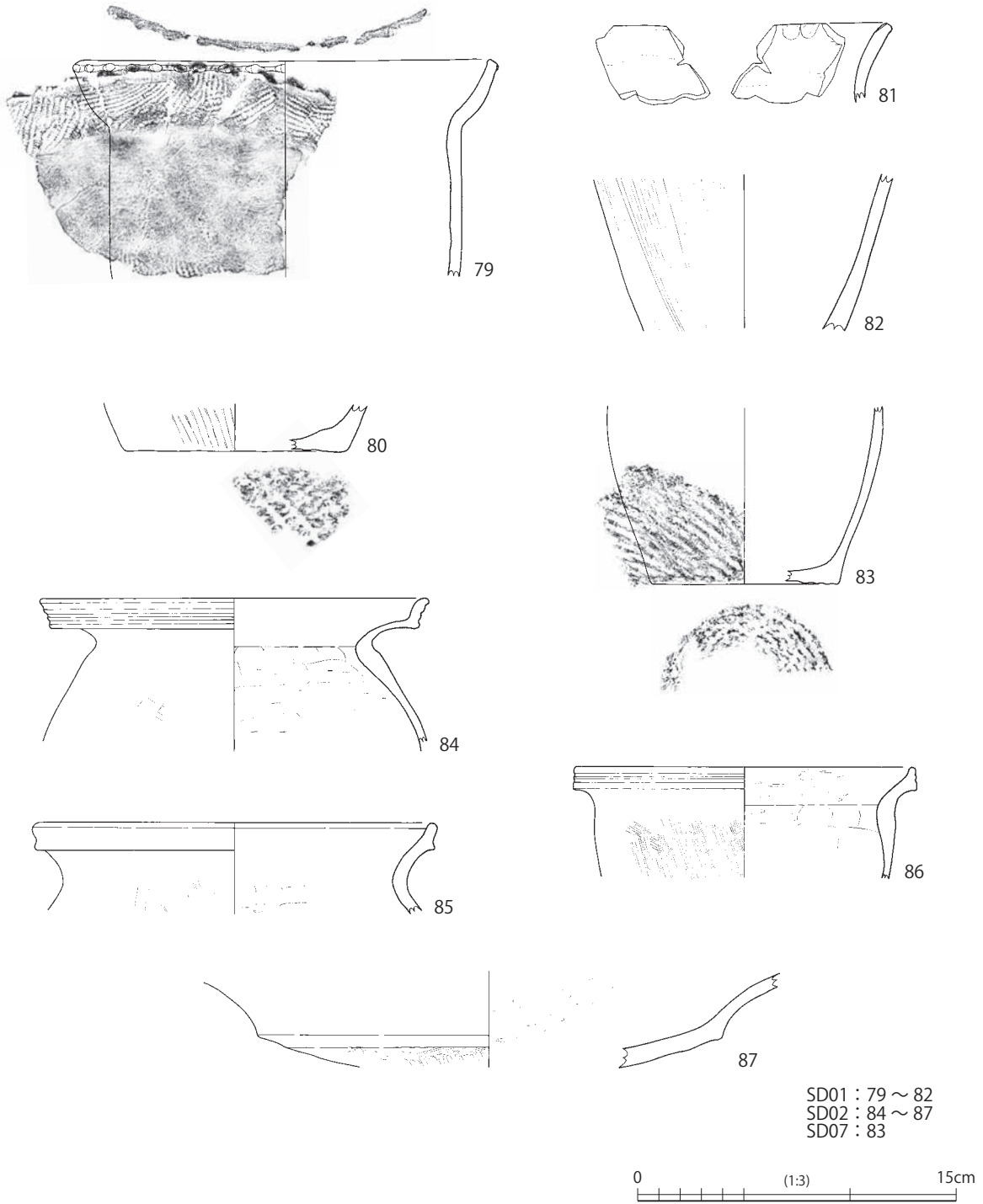


第35図 2区 SD01 断面図(S=1/40)

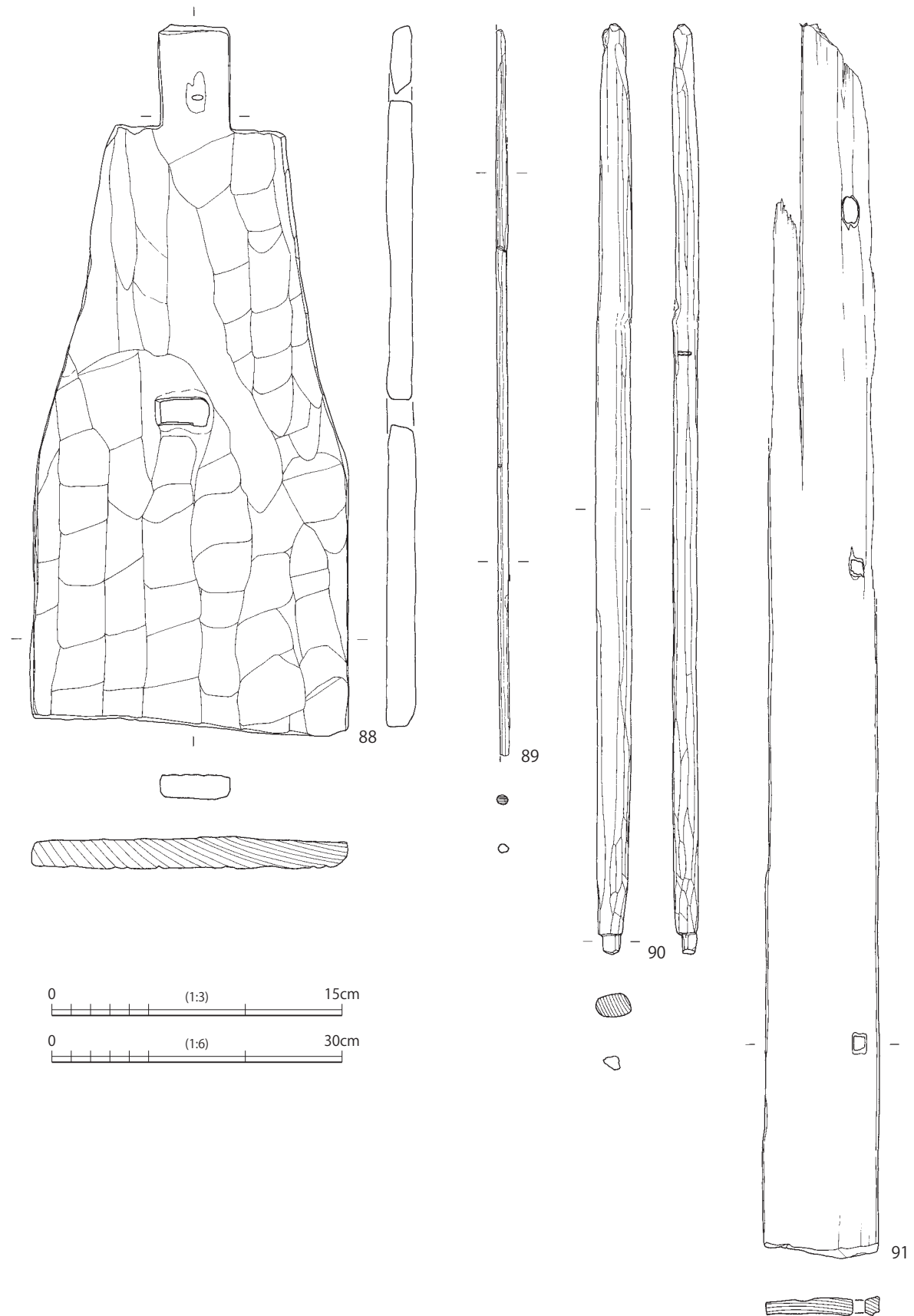
第4節 2区下層の遺構と遺物



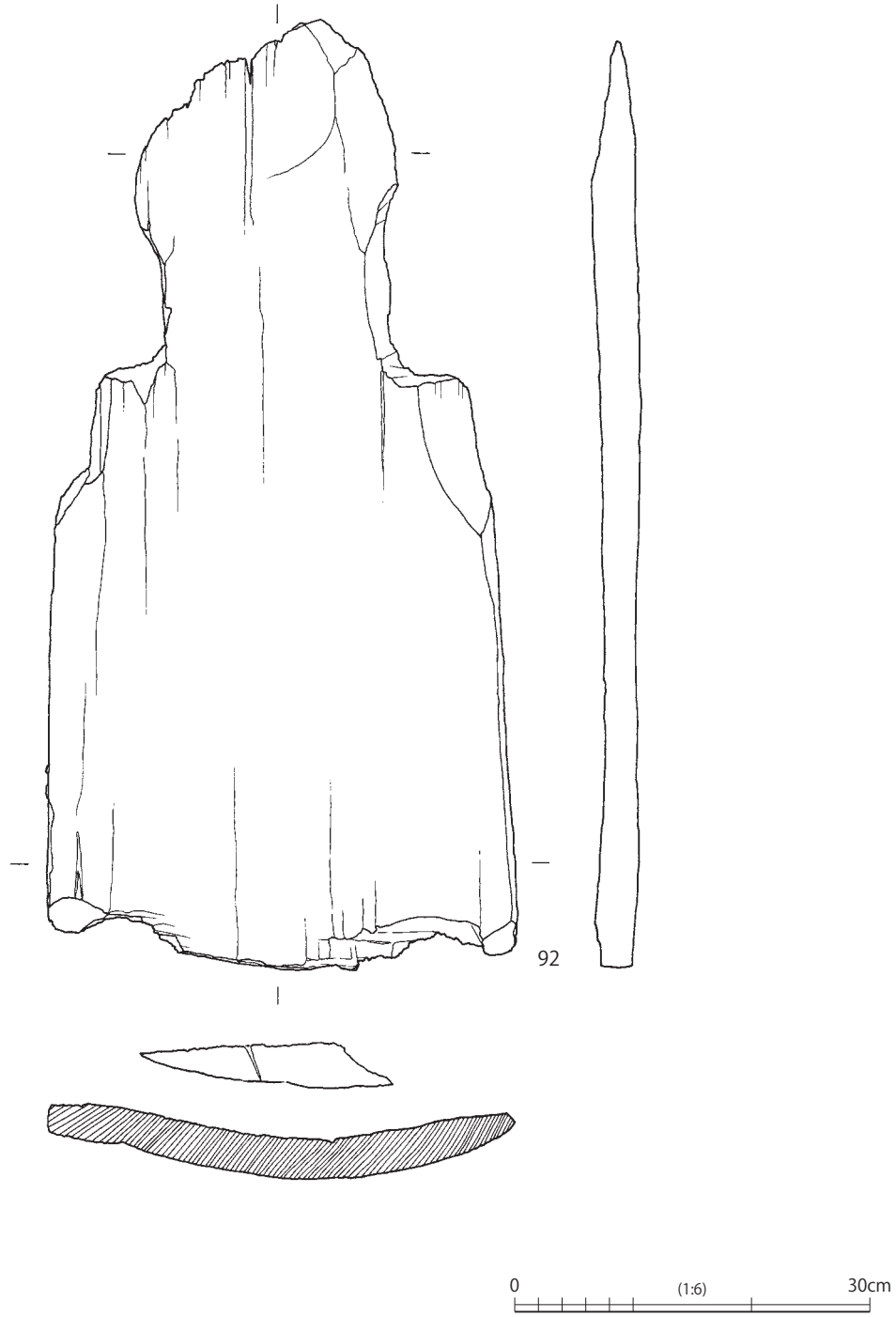
第36図 2区 SD03・05断面図(S=1/40)



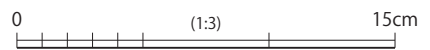
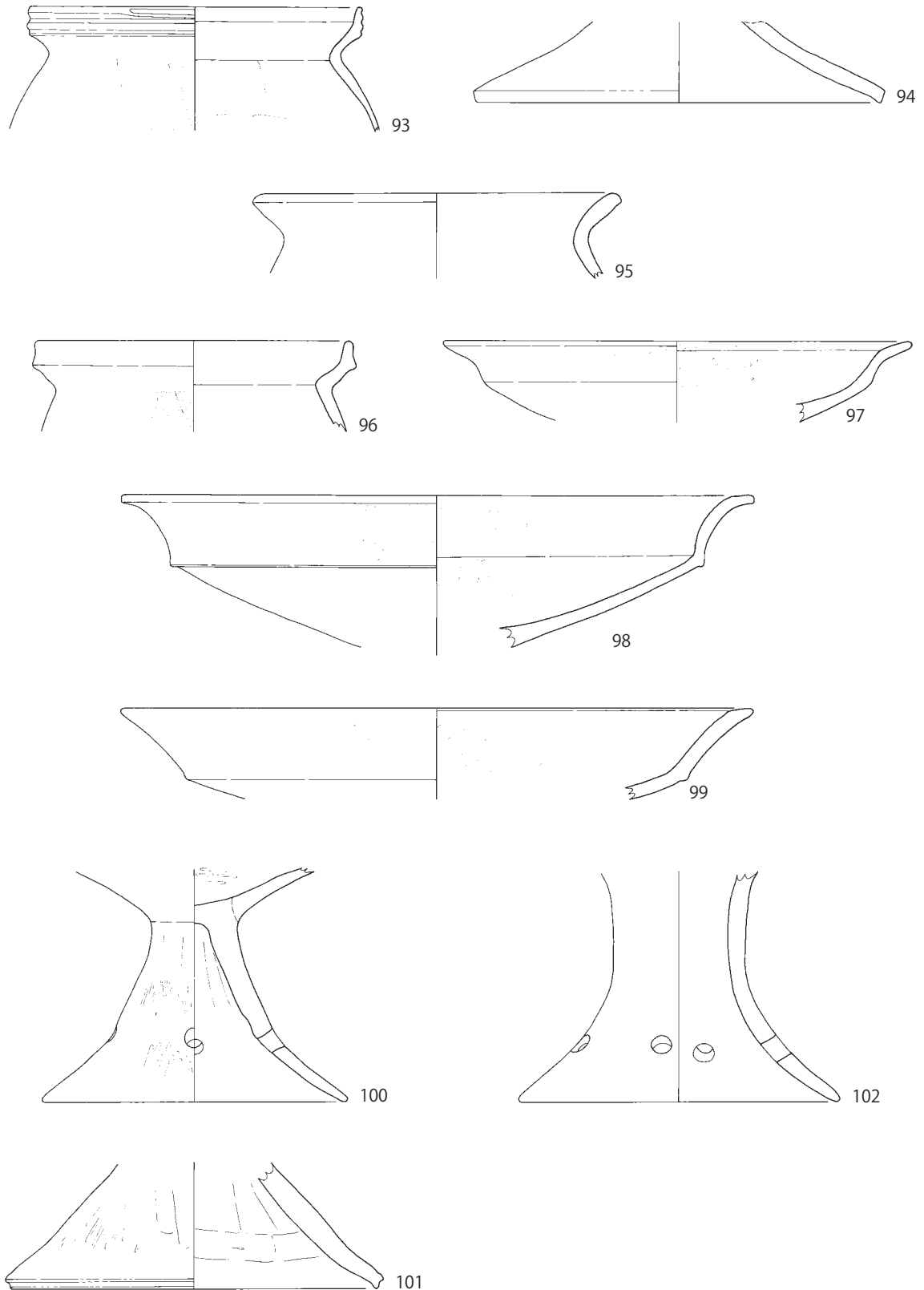
第37図 2区 SD01・02・07出土土器実測図(S=1/3)



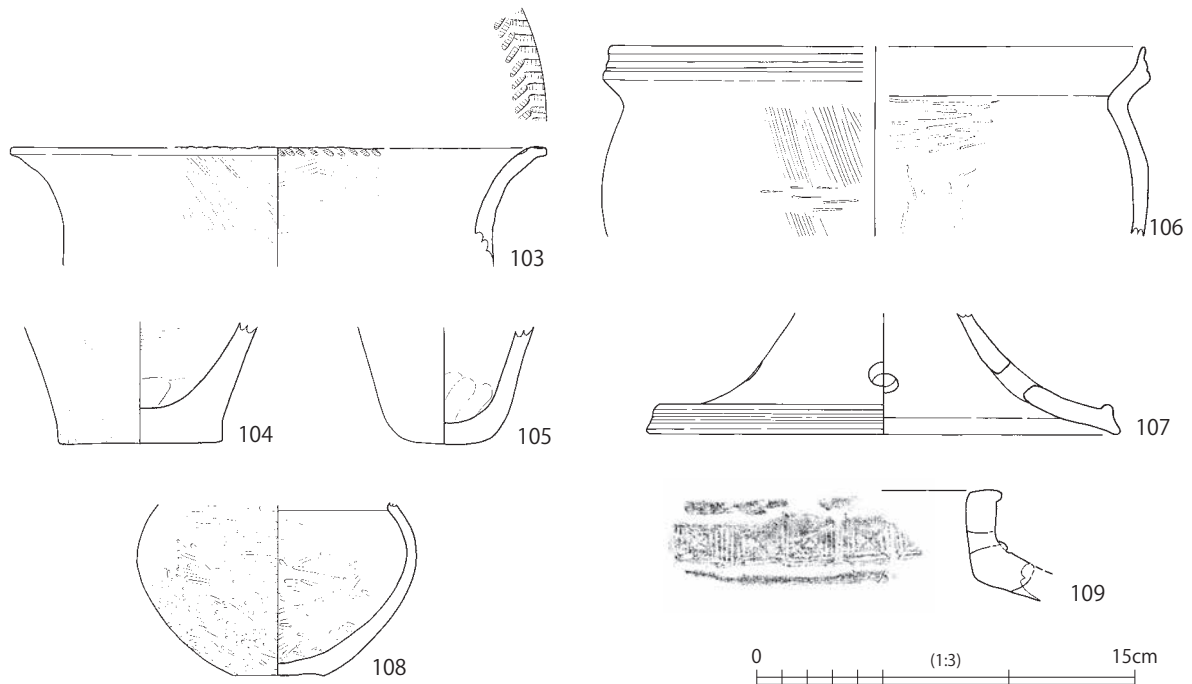
第38図 2区 SD02出土木器実測図1 (S=1/3・1/6)



第39図 2区 SD02出土木器実測図2 (S=1/6)



第40図 2区 SD03・05出土土器実測図(S=1/3)



第41図 2区包含層出土土器実測図(S=1/3)

91は長さ127cm、厚さ2.1cmを測るスギの板材である。上部を欠損しており、片側に開けられた穴は、径2~3cmを測り、舷側板の可能性が考えられている。92は一見すると88の腰掛の荒型のようにも見えるが、長さ80.3cm、厚さ4cmと湾曲をもつ大型のスギ板である。上下とも斧による切断痕を留め、湾曲形状から元は船材であり、それが切断転用の可能性がある。

SD03 (93~95) : 93の甕は口径16.6cmで、内面のケズリは丁寧である。94は高坏の脚部で、にぶい橙色の器面は摩耗している。95も甕で、93と同様外面にススが付着している。

SD05 (96~101) : 96は口径15.6cmと小型の甕である。97~101は高坏である。97は口径23.2cmを測り、胎土は淡黄色を呈する。98と99は、坏部の形態に違いをみせるが、口径31.2cmと同寸で、胎土も似ている。100は98の脚部とみられ、4箇所にもつ。101は胎土から99の脚である可能性が高い。102は器台で4箇所にもつ。

包含層遺物(103~108) : 103は弥生土器の壺で、口径21.3cmを測り、胎土は淡黄色を呈する。104は同類の底部である。105は手づくね製品で、小壺とみられる。106は広口の甕で、口径21.3cmを測る。107は器台の脚部で、灰黄色を呈する器面は、外面ミガキ、内面ナデ調整である。108は小型壺で、橙色を呈する器面はミガキで仕上げられている。

109は瓦質土器の風炉で、直立した口縁には方形文様のスタンプと隆帯が巡る。15世紀後半とみられる。

第4節 2区下層の遺構と遺物

図 No	実測 No	出土地点	遺構	種別	器種	法量 (cm)			調整		胎土・素地	色調		特記事項
						口径	底径	器高	内面	外面		内面/釉薬	外面/釉薬	
第37図 79	C002	2区下層Q16	SD01	弥生土器	深鉢	19.3	-	(10.3)	ヨコ方向のナデ、指による調整後ヨコ方向のナデ	縄文、ナデ	1mm以下の粗砂少量、海面骨針含む	灰白		天王山系 外面煤付着
80	C004	2区下層Q16	SD01	弥生土器	深鉢カ	-	10.6	(2.3)	磨耗の為不明	条痕	1~2mmの粗砂、石英、長石多量含む	黄褐	暗黄褐	底部簾状圧痕
81	C003	2区下層P14	SD01	弥生土器	壺	-	-	(3.6)	口縁部指による圧痕、ハケ	ハケ	1~2mmの粗砂、石英、長石含む	浅黄	浅黄	外面煤付着
82	C023	2区下層P14	SD01	弥生土器カ	壺	-	-	(6.4)	ナデカ	ハケ	1mm位の粗砂、石英、長石含む	暗灰黄	浅黄	内面炭化物付着
83	C019	2区下層Q15	SD07	縄文土器	深鉢	-	9.0	(8.4)	磨耗、底部指ナデ	条痕		黄灰	黄灰	底部簾状圧痕
84	C005	2区下層O16	SD02	土師器	甕	18.2	-	(7.2)	ヨコナデ、指による調整、ケズリ	縦凹線(3条)、ヨコナデ、ハケ	1mm位の粗砂含む	淡黄~にぶい橙	淡黄~にぶい橙	外面煤付着
85	C006	2区下層Q14	SD02	土師器	甕	18.4	-	(4.3)	ヨコナデ、指による調整、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	1mm位の粗砂、石英、長石、海面骨針、赤色粒含む	灰白	灰白	外面煤付着
86	C007	2区 O16 SD02	SD02	土師器	甕	15.8	-	(5.2)	ヨコナデ後ミガキ、指による調整、ケズリ	沈線(2条)、ヨコナデ、ハケ	1mm位の粗砂少量含む	灰黄褐	灰黄褐	内外面煤付着
87	C022	2区下層O15	SD02	土師器	高坏	-	-	(4.5)	ミガキ	ヨコナデ、ハケ後ミガキ	海面骨針含む	灰黄	灰黄	
第40図 93	C008	2区下層N12	SD03、SD05	土師器	甕	16.6	-	(6.0)	ヨコナデ	沈線(2条)、ヨコナデ、ハケ	1mm位の粗砂含む	浅黄橙	浅黄橙	外面煤付着
94	C010	2区下層N12	SD03、SD05	土師器	高坏	-	20.0	(4.0)	磨耗の為不明	磨耗の為不明	1mm以下の粗砂多量、海面骨針含む	にぶい赤橙	にぶい赤橙~灰白	
95	C009	2区下層P12	SD03	土師器	甕	17.2	-	(4.2)	磨耗の為不明	ヨコナデ	1~2mmの粗砂多量を含む	浅黄橙	浅黄橙	外面煤付着
96	C013	2区下層N13	SD05	土師器	甕	15.6	-	4.5	磨耗の為不明	ヨコナデ、ハケ	1~2mmの粗砂多量含む	にぶい橙~褐灰	にぶい橙~褐灰	外面煤付着
97	C014	2区下層N・O12	SD05	土師器	高坏	23.2	-	(4.0)	ミガキ	ミガキ	1mm位の粗砂、海面骨針含む	浅黄	浅黄	
98	C012	2区下層N13	SD05	土師器	高坏	31.2	-	(7.5)	ミガキ	ミガキ	1mm位の粗砂少量含む	灰白		
99	C015	2区下層M13	SD05	土師器	高坏	31.2	-	(4.5)	ミガキ	ミガキ	1mm位の粗砂、海面骨針含む	淡黄	淡黄	磨耗著しい
100	C011	2区下層M13	SD05	土師器	高坏	-	15.1	(11.5)	ミガキ、シボリ	ケズリ後ハケ、ミガキ	1mm位の粗砂含む	浅黄橙	浅黄橙	孔4ヶ所あり
101	C016	2区下層M・N13	SD05	土師器	高坏	18.3	-	(6.3)	ケズリ、ヨコナデ	雑なミガキ、ヨコナデ	1~2mmの粗砂、海面骨針含む	灰白	灰白	外面黒斑
102	C017	2区下層N12	SD05	土師器	器台	-	15.6	(11.4)	磨耗の為不明	磨耗の為不明	1mm位の粗砂含む	にぶい橙	にぶい橙	孔4ヶ所あり
第41図 103	C020	2区下層N13	包含層	弥生土器	壺	21.3	-	(4.7)	綾杉文、ハケ	ヨコナデ、ハケ	1mm位の粗砂少量含む	淡黄	淡黄	
104	C018	2区下層N13	包含層	弥生土器	壺カ	-	6.4	(4.8)	ハケ、指による調整	ハケ	2mm位の礫、海面骨針含む	灰黄	灰黄	
105	C021	2区下層N13	包含層	土師器	手づくね	-	3.6	(4.6)	底部指による調整	磨耗の為不明	1mm位の粗砂、赤色粒含む	淡橙	淡橙	
106	D543	2区下層	包含層	土師器	甕	[21.3]	-	(7.5)	ヨコナデ、ケズリ後多方向のミガキ	縦凹線2条、ヨコナデ、ハケ後ミガキ	淡黄	淡黄	1mm位の粗砂多量含む	
107	D533	2区下層	包含層	土師器	器台	-	18.6	(4.8)	ロクロナデ、ナデ	ミガキ	灰黄	灰黄	粗砂、細砂、海面骨針、焼土域少量含む	孔あり
108	D532	2区下層	包含層	土師器	壺	-	3.5	(6.9)	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂少量、細砂含む	外面黒斑
109	D542	2区下層	包含層	瓦質土器	風炉	-	-	(4.4)		スタンプ文	黒灰	黒灰	細砂、雲母含む	孔あり(焼成後に穿孔か)

第7表 2区土器・土製品観察表

図 No	実測 No	出土地点	区名	遺構	種別	器種	法量 (cm)			樹種	備考
							最大長	最大幅	最大厚		
第38図 88	W068	2区下層 O16	2区	SD02		腰掛側板	36.7	16.45	1.5	スギ	取上番号 W-3
89	W110	2区下層 O16	2区	SD02	紡織具カ	丸棒	(74.75)	1.35	1.0	スギ	
90	W106	2区下層	2区	SD02	紡織具カ	丸棒	95.8	3.6	2.7	スギ	
91	W124	2区下層	2区	SD02		板材	127.1	12.0	2.1	スギ	取上番号 W-1
第39図 92	W105	2区下層 O16	2区	SD02		板材	80.3	40.0	4.0	スギ	取上番号 W-2

第8表 2区木器観察表



## 第5節 4区の遺構と遺物

### 1. 4区の調査概要(第42～46図)

第5次調査の4区は、森本丘陵の裾部を南から北方向へと流下する川原市用水の東側で、梅田町の集落が立地する開析谷の出口部分にあたる。この調査地は、金沢東部環状道路の梅田インターチェンジの本線北側に建設された分岐道路や集落の付け替え道路予定地で、遺跡の北辺を画する丘陵裾から北西・西方・南方の三方向に伸びる不規則な形状を呈する。

その4区では、既存の農道が生活道路として利用され、農道脇には農業用水が流れており、調査予定地を各所で通過していた。また、周囲の水田では、調査期間も稲作の作付けが実施されたことで、予定地を通過していた農業用水も発掘調査の対象から除外された。このため調査区は、既存の用水で区分された形状となり、調査区をⅠ～Ⅴの5区画に細分することで発掘調査を実施した。

農業用水と農道で区分され4区は、北西端から4-Ⅰ区、4-Ⅱ区と区分し、中央付近を4-Ⅲ区、その西方を4-Ⅳ区、南側の集落脇を4-Ⅴ区と細分した。また、4区の全域を対象に国家座標を基軸とする10m方眼のグリッドを設定することで、出土遺物の取上と現地測定の基準とした。さらに、北西端の4-Ⅰ区と西方の4-Ⅳ区では、平安時代以降の遺構を検出した上層の基盤層の下から、弥生時代に形成されたみられる文化層を確認したことから、これを下層として発掘した。全域に広がる遺構を上層として発掘を進め、下層は基盤の断ち割りで包含層が確認された部分で検出を実施した。

#### 上層遺構の概要(奈良・平安時代～近世)

上層の遺構は、奈良・平安時代、中世前半、中世後半～近世初期のもので、4区のほぼ全域で検出されている。出土遺物は、溝や溝状からの出土が多く、古代の木製祭祀具、中世の陶磁器類、中世～中世の曲物柄杓などが注目される。

4-Ⅰ区は、東西方向に長い調査区で、南北幅12m、東西長62mを測り、西端は川原市用水の堤防に接する。南北とも水田が設営され、東端は用水を挟んで4-Ⅱ区であった。南辺で検出したSD01は、4-Ⅱ区の南辺から西方へ流下していた大溝で、下限は近代に下る可能性が高い。3基の水溜が設営されたこともあり、遺物は中世前半～近世前半と幅広い。また、この大溝に切られた建物遺構のSB401は、基軸を方位に置き、東辺に井戸のSE02が伴う。出土遺物と大型柱根から、11世紀後半から12世紀前半と推定され、建物・井戸とも造り替えが、実施されたとみられる。位置に大きな移動が無く、同一の宅地内における建て替えとみられる。建物の西側をみると、遺構密度が低く、広場的な空地とみられる。直行するSD02は、その宅地の区画溝とみられる。

他方、建物の東方で検出したSD06は、不整形な溝状地形を呈し湧水が強い。生水のような湧水地点であった可能性が高い。また、この湧水帯は、東方の4-Ⅱ区へ続いている。

4-Ⅱ区は、梅田集落の北辺を画する開析丘陵の裾部に位置する。地形に沿って斜行した調査区は、上幅8m、長さ38m程を測る。調査区の北側上方には、畠地と墓地在が営まれ「サンマイノシタ」の小字名が残る。上層遺構が地山で検出され、下層の堆積層はみられなかった。調査区の全域で、等高線方向に主軸をもつ溝状や土坑の窪地が検出された。中程に畦状の高まりがあり、その北側をSX02、南側をSX03としたが、境目は不明瞭である。東側のSK03周辺でも地下水の湧出が多く、Ⅰ区東方からこの付近までは、湧水帯が広がっていた可能性が高い。

4-Ⅲ区の中心は、不整形の台形を呈する。4-Ⅱ区から続く縦長の調査区は、幅6m程を測り、こ

の台形から北へ尖出した形状を呈する。調査区の東辺は、1mほど高く「ニシンヤチ」と呼称される畠地となり、北西方向の4-II区と西方の4-IV区の境には、梅田集落から流下した農業用水が北流する。

北の4-II区境から調査区の西辺に広がるSX06は、西方に傾斜した斜面地である。上面でみられた溝状の窪地にSX02やSX03を設定したが、これらは掘り方も明瞭ではなく、斜面地のSX06を埋立てる途中に生じた窪地とみられる。また、調査区中央のSX07も底面・法面に凹凸が認められ、出土遺物からすると近世前半には埋没している。SX06の覆土と曲物底の荒型出土から推考すると、SX07の北側にみられる平場では、狭小ながら曲物工房が設営された可能性が高い。また、南側に広がるSG01は、SD16の上面に広がる整地面で、中世～近世の陶磁器が多く出土している。北東隅で検出した石積01には、宝篋印塔の笠部が集石中に含まれる。付近に中世墓が存在したことを示している。

4-IV区は、三角形形状を呈する調査区で、東西47m、南北17mを測る。上層の遺構面は、4-III区より1mほど低く、その中央から東側で検出したSD18は、平安時代の小川状の遺構である。古代の木製品が多く出土しており、下面からは弥生時代後期の土器が出土している。溝底は自然流路に近い状況を呈し、8世紀末～9世紀初頭の須恵器のほか、人形や斎串のような古代の祭祀具にくわえて、古代後半～末頃の曲物や加工材等が出土した。隣接の4-III区で、曲物の桶や柄杓などの木工生産が推定され、その生産は古代に遡る可能性が高い。東側でみられる不整形な窪みは、4-II区にみられた溝状の窪地に近い。中央の小溝群は、中世前半の遺構とみられ、それに切られたSD19とSD21は古代の用水施設ともみられる。西側で柱穴群がみられ、小規模の建物も復元できるが、規模は不明である。

4-V区は、4-III区の南方向に伸びた細長い三角形形状の調査区で、北辺の幅は8mを測り、南北長は30mと長い。調査区の北辺と西辺は農道で画され、東辺は畠地と宅地であった。調査区内では、北部で建物の柱穴群や小土坑がみられ、4-III区の南辺から続く宅地が設営されたとみられる。SD12とSD13は、その宅地の南を流れ、4-IV区のSD18方向へ向かう。また、南部の東西溝SD14、湧水が多い土坑SK05とも平安時代の遺構で、農道の西に位置する第6次C区の遺構群との関連が注目される。

なお、この4区からも中近世の出土遺物に混在する形で、奈良時代の軒丸瓦が出土している。同時期の瓦は、第5次調査1区を流下するSD02やSD03でも混在しており、梅田町の開析谷に広がる古代遺跡のなかで、その性格を検討する必要がある。

#### 下層遺構の概要(弥生時代後期)

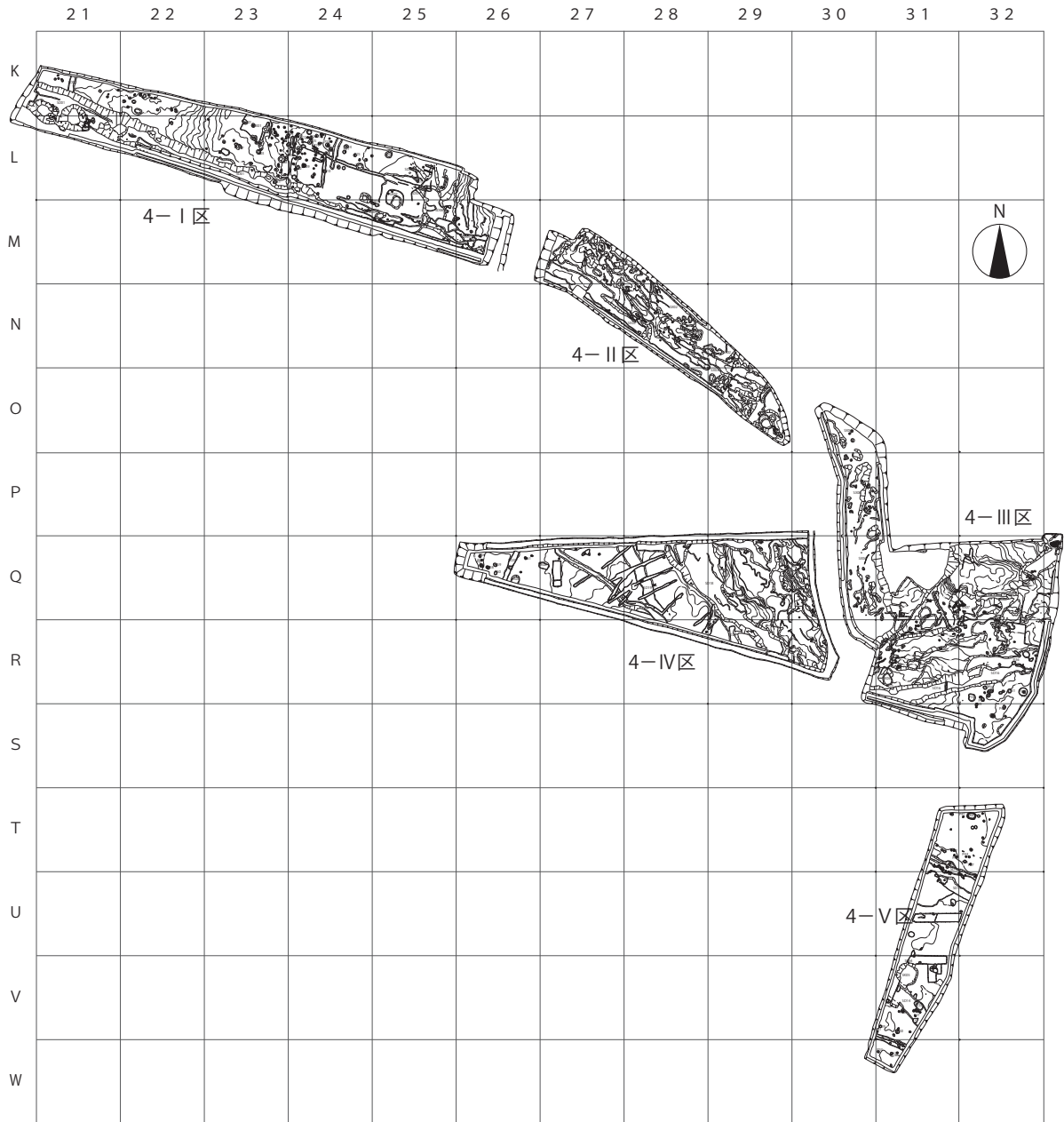
4区における下層遺構は、4-I区と4-IV区の各西半部において、上層の基盤層を除去することで検出された。弥生時代後期とみられるこの下層遺構は、4-I区の西側で柱穴群、4-IV区西側で2条の溝とSX08を検出した。共に、本遺跡が展開する開析谷の谷部に堆積した黄灰色の砂質土層が、弥生時代の表土層を被覆したものである。その遺構密度は薄いものの、弥生時代後期に起きた直下型の地震により、開析丘陵が崩壊を起し、大量の砂質土が流下・堆積したものと理解されている。

## 2. 4区の上層遺構

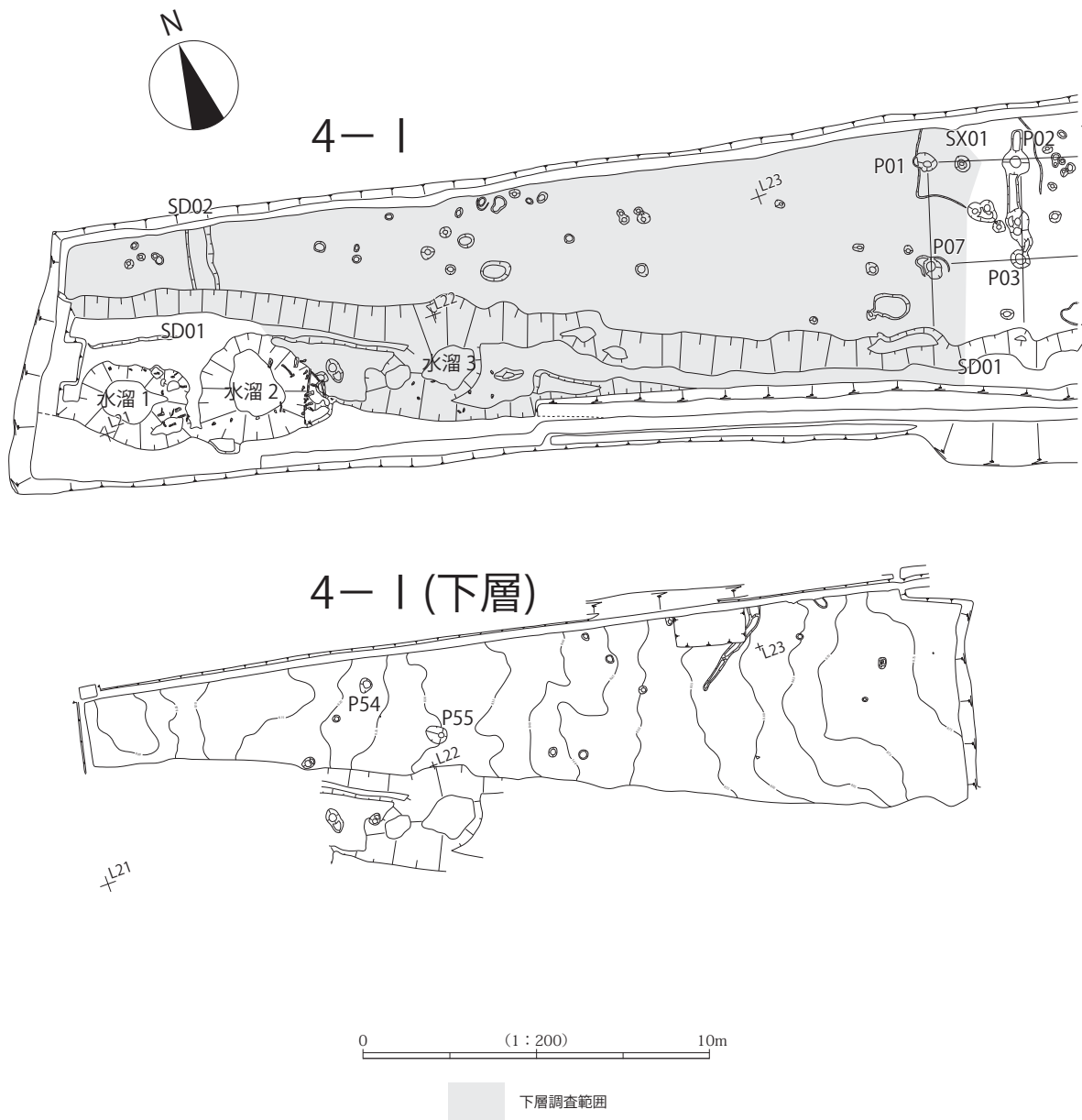
### (1) 4-I区の上層遺構(第47～53図)

SB401：東西4間、南北2間以上の規模を有する掘立柱建物で、その南側はSD01の開鑿により失う。各柱穴とも比較的大きく、P09に残る柱根は径32cmを測る。また、柱穴内より11世紀代の土器が少量出土していることから、11世紀後半の設営と推定される。建物東側に設営されている井戸SE01が、共伴する可能性が高い。

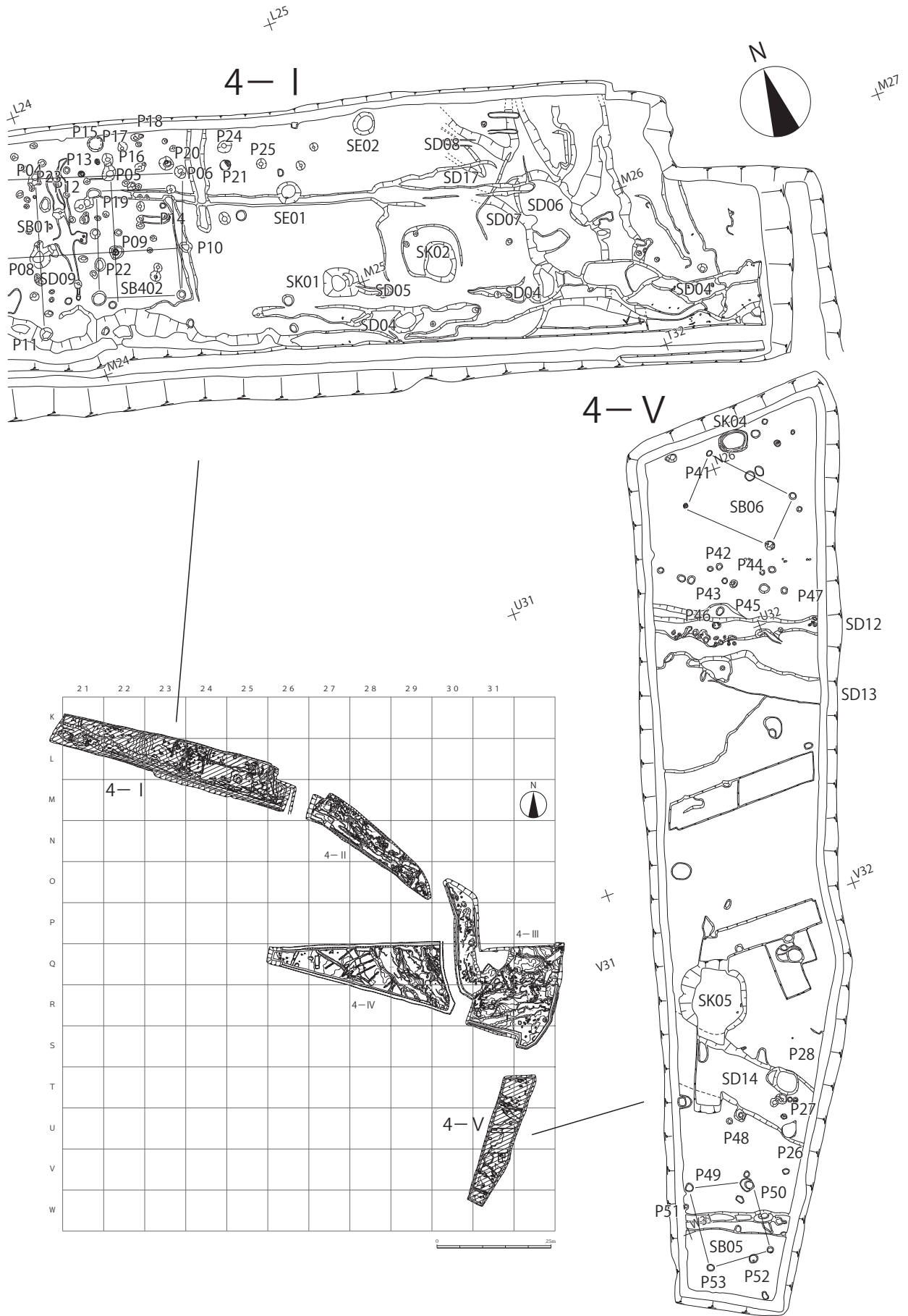
SB402：東西2間、南北1間以上の規模を有する建物で、SE01の開鑿により柱穴を失う。SB401に先行する建物とみられるが、規模については、調査区の北側に広がることが見込める。



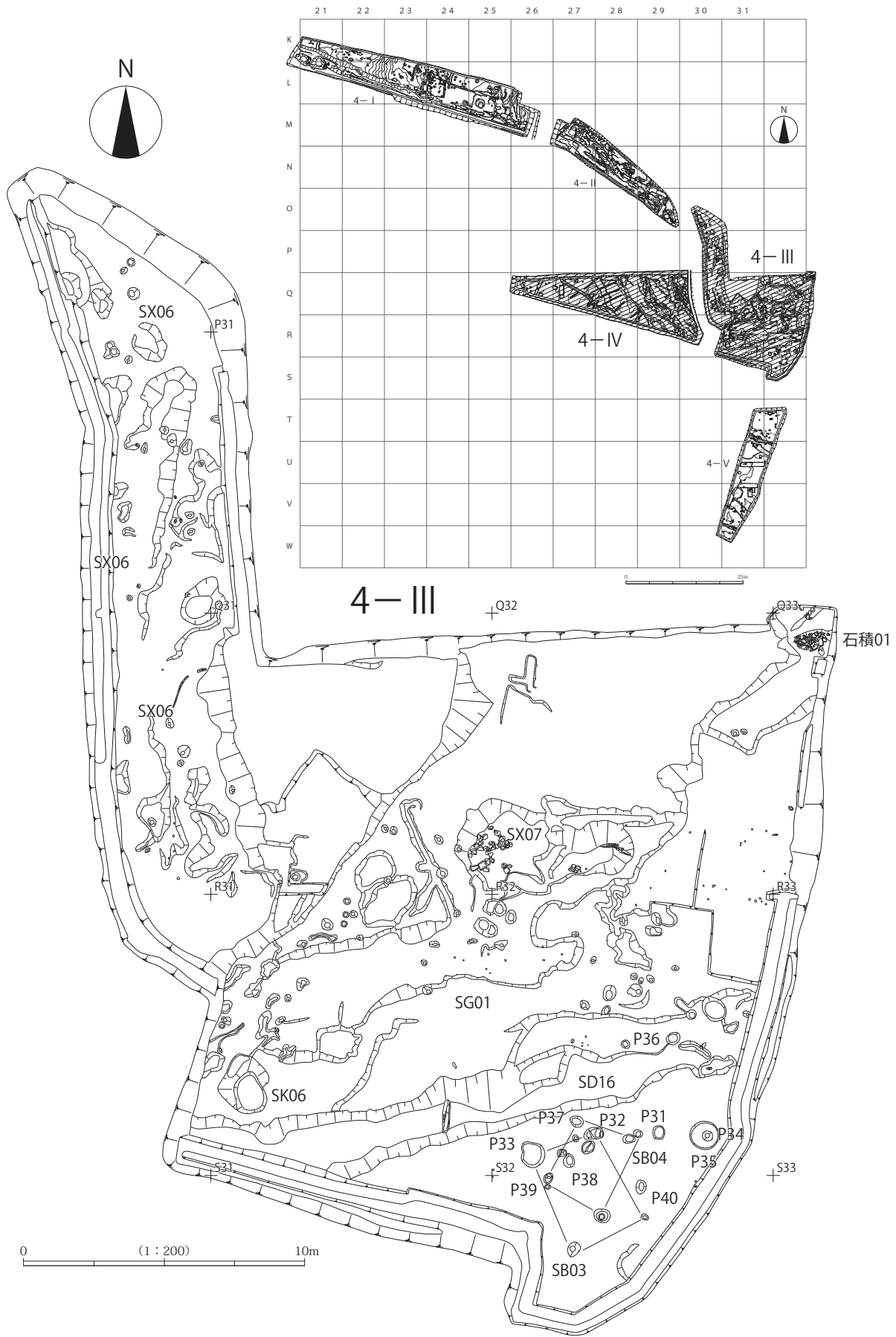
第42図 4区グリッド設定図(S=1/800)



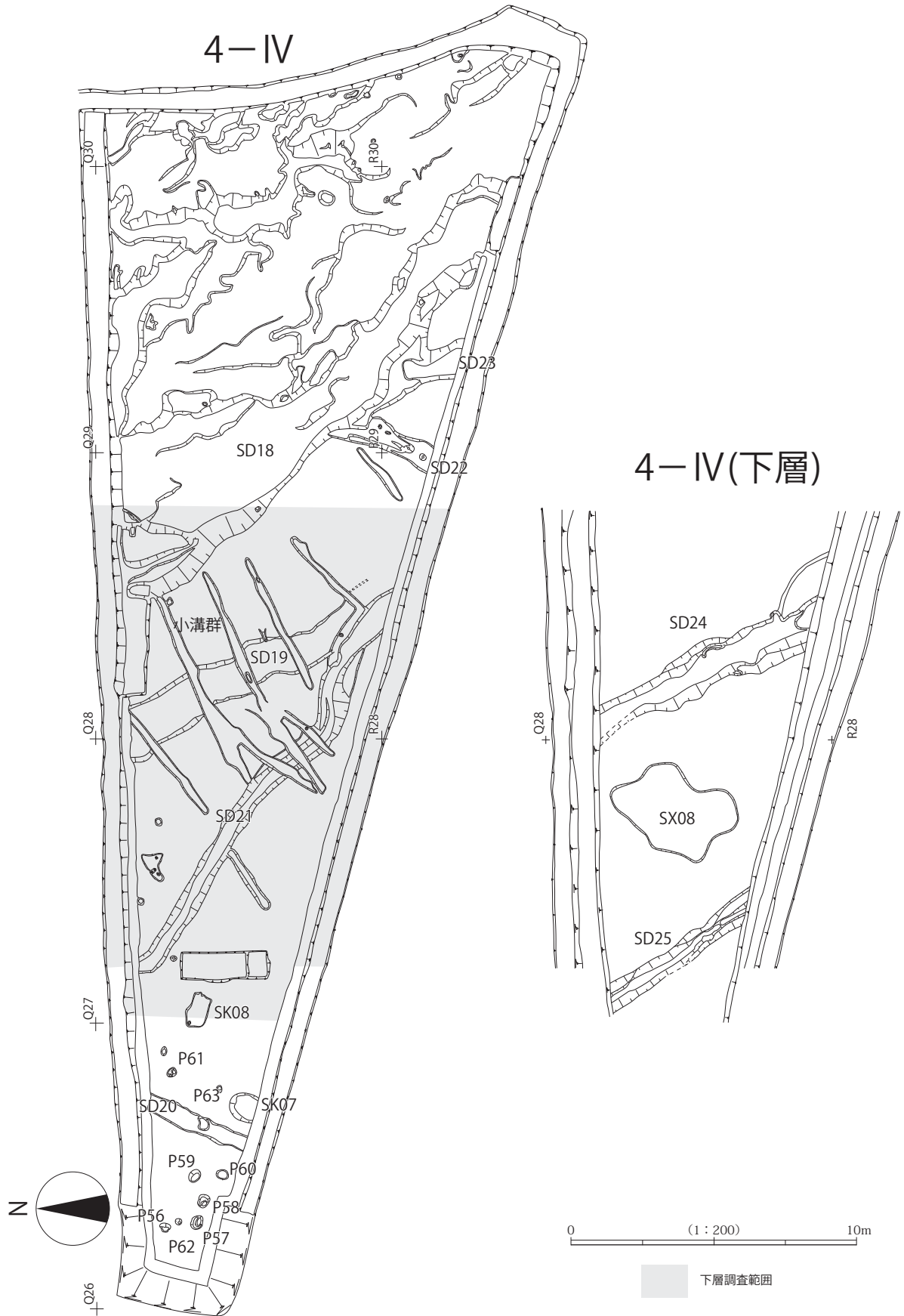
第43図 4区遺構配置図1-1(4-I・V区 S=1/200)



第44図 4区遺構配置図1-2 (4-I・V区 S=1/200)



第45図 4区遺構配置図2(4-Ⅲ区 S=1/200)

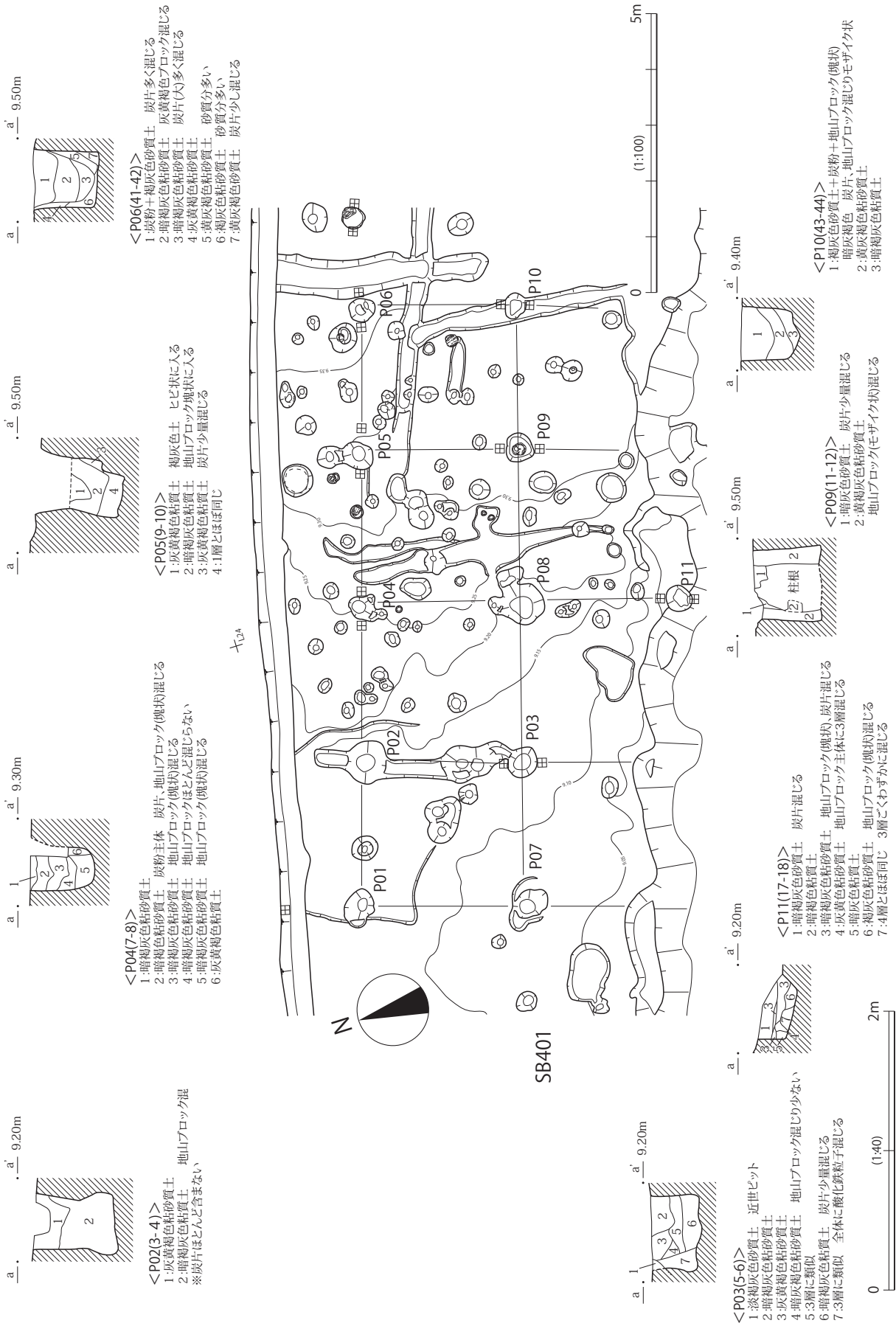


第46図 4区遺構配置図3(4-IV区 S=1/200)



第47図 4-I区平面図・基本土層図(S=1/60・1/300)





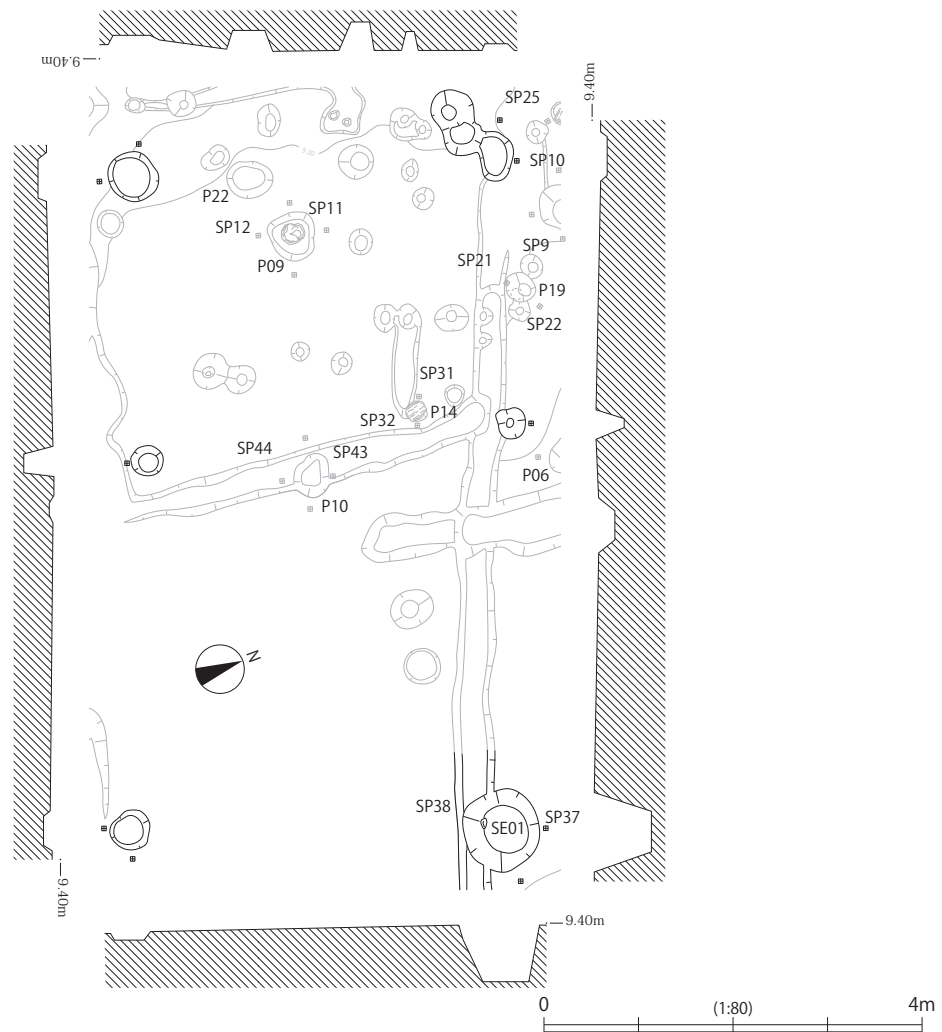
第48図 4-I区 SB401平面図・断面図(S=1/40・1/100)

SE01：SB402と複合する井戸で、断面部分の内径69cm、深さ62cmを測る。壁面の炭化層は、井戸側の曲物を埋設した痕跡とみられる。推定される曲物は、深さ45cmを越える。遺物は珠洲焼のすり鉢、土師器皿、箸などがある。出土遺物の土師器皿から、本井戸の廃棄は14世紀後半～15世紀の可能性が高い。

SE02：調査区の北壁沿いに位置する井戸で、内径85cm、深さ102cmを測る。木質部は未確認ながら井戸側は、曲物の据置きであったとみられる。また、側壁の形状から曲物の規模は、深さ70cmを越えると推定される。覆土下部に炭層(4層)が確認されたことで、火災後に廃棄された可能性が高い。

P15：調査区の北壁沿いに位置する小型の土坑で、径42cm前後の曲物が埋込みされたもので、曲物埋設遺構と呼称される水溜施設とみられる。深さ25cmを測るが、曲物は底まで及んでいない。

SD01：調査区の南辺で検出した中世～近世の堀状の大溝で、上幅366cmを測る。調査区の東端まで延びていることが、上面に堆積した溝状の窪み(SD04)から、東西67m以上の延伸が推定される。溝の上幅が広く、底が西方へ緩やかに傾斜することから、丘陵裾に設営された宅地の南面に建設された中世の区画溝が、用水として利用されるなかで、横幅が拡大したものと考えられる。また、溝の西端で検出した水溜1～水溜3は、溜枳的な施設と理解している。



第49図 4-I区 SB402平面図・断面図(S=1/80)

水溜1～水溜3：SD01の西端に並ぶ大型の土坑状の遺構である。それぞれ溝の内部に設けられた略円形の土坑で、長径250～300cmを越え、底が溝よりも20～30cmほど深く、下部からは湧水がみられた。さらに、水溜1と水溜2の東辺では、護岸的な杭と横木が残ることから、流水や湧水の湛水を目的とした溜枘的な施設であったと判断される。木杭の遺存と溝との重なりから、水溜3が先行し、水溜1と水溜2の掘削が遅れ、主に近世前半に機能した用水施設とみられる。

SD02：調査区の西端で検出した南北方向の溝で、SD01に切られている。上幅76cm、深さ23cmを測る。SB401など掘立柱建物の方位とも整合することから、本宅地の西辺を画する排水的な区画溝であったとみられる。

SD04：調査区の南東部で、SD01の北に並走的にみられた中世の溝状の窪みである。

SD05：SK01の東側から切る小溝状の窪地である。13世紀後半～14世紀前半と推定できる土師器皿が出土している。

SD06：調査区の東側で検出した南北方向の土坑状の窪みである。上層は平安時代後期～末頃、下層からは古墳時代の遺物が出土した。下部に堆積する覆土から、土坑状の湧水地点であった可能性が高い。

SD17：SD06には、北側から流下したような溝状窪地がみられ、SD17は北西方向から流下した浅い溝状のものである。

SK01：SB402の東に位置する南北径104cm、深さ40cmほどの遺構である。形状と設営場所から曲物を埋設した小型の井戸もしくは、水溜施設とみられる。横のSD05に先行する遺構で、13世紀後半以前と推定できる。

SK02：SK01の東に位置する土坑である。上面は南北径212cm、東西径192cmを測り、上部は略方形を呈する。南西部が径146cm×径118cmで、20cmほど窪む。周囲に空閑帯がみられ、井戸とも近接することから、簡易な上屋をもつ竪穴状遺構の可能性が高い。

SX01：調査区の北辺で、SB401のP01・P02と複合する東西径250cmの浅い窪み。深さも10cmほどで生活遺構であるかは不明である。

#### (2) 4-Ⅱ区の上層遺構(第53・54図)

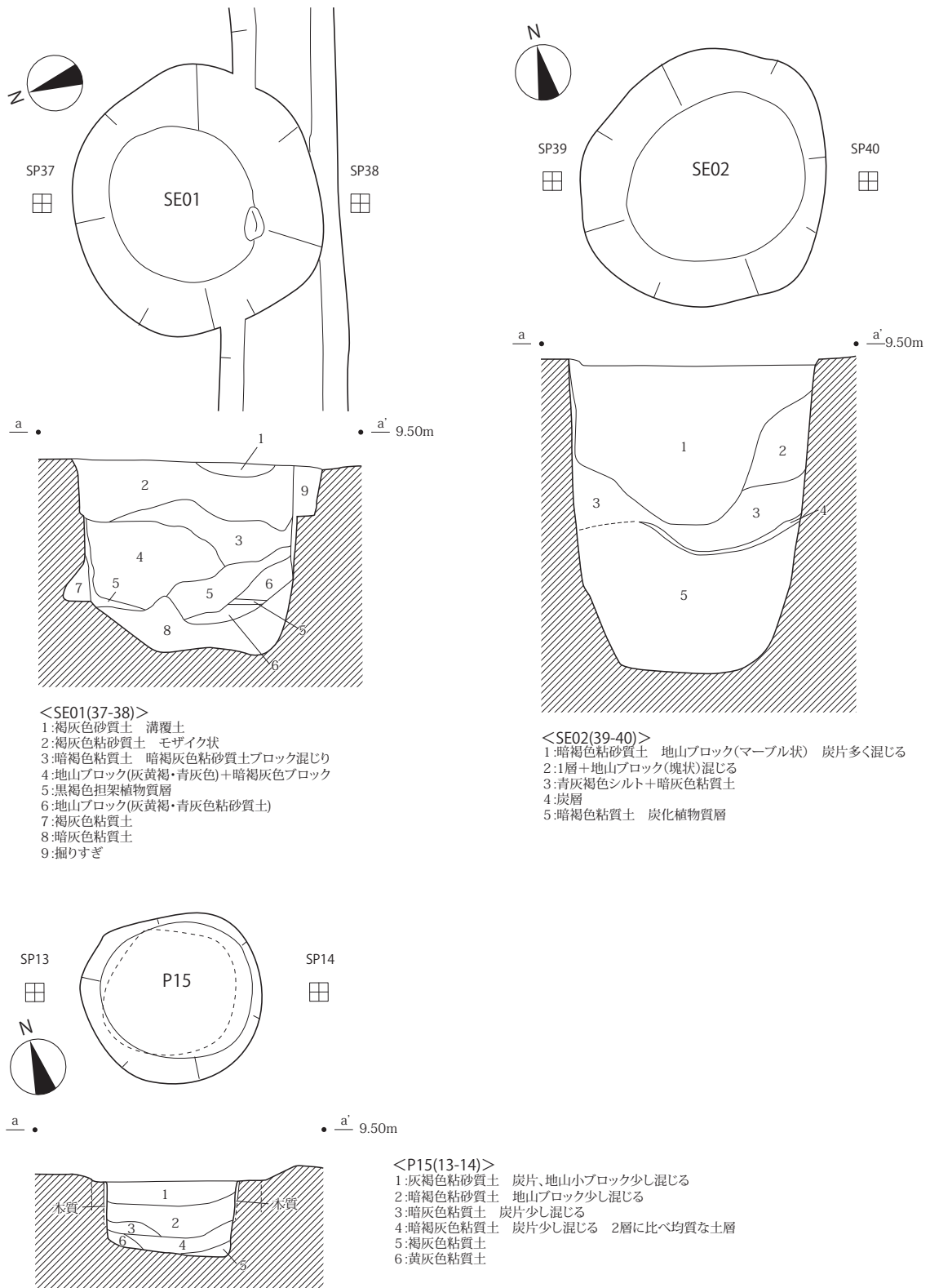
SD10：調査区の南壁でみられた溝状の窪地で、SX03の上面覆土(19層)とその下部にあたる。Ⅰ区のSD01の延びと捉えられた。出土遺物は、SD01・SX03と報告した。

SD11：調査区の東端で検出した溝状の窪みで、SX03からSK03の上面にあたる。

SX02：調査区の北半にみられた不整形な溝状形態の窪地である。底の凹凸が著しく、深さ6～20cmを測る。東西方向の溝状の窪地が、連鎖したようにもみられるが、横幅や底の形状が一定していない。その北西には、大小の小穴が甌穴状に群在しており、覆土は地山のブロックを多く含む。北側の斜面上方において遺物包含層の掘削をおこない、この窪地を埋立てたように見える。中世後半から近世初頭までの遺物を含み、地山からの湧水も多く、その旧地形は、開析丘陵の裾部に見受けられる帯状の湿地が復元され、小規模な水田と耕作地であった可能性が高い。

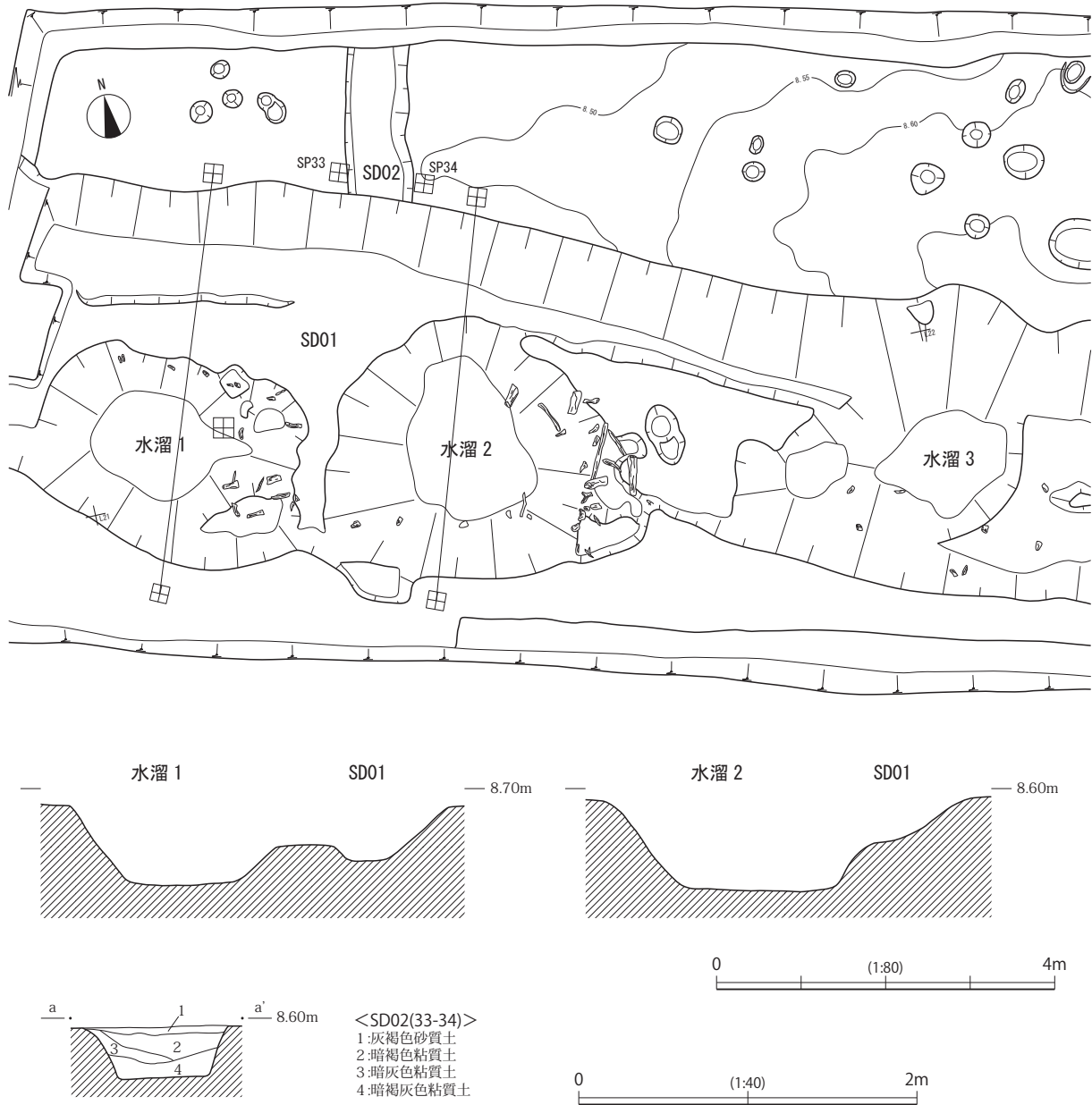
SX03：SX02の南側で検出した溝状の窪地である。SX02とは畦状の高まりを挟んで、調査区の長軸方向に広がり、その形状は不整形の箇所が多い。中央付近の幅は100cm前後、西側で幅260cmほどと、安定していない。底もSX02と共に凹凸が強い。検出時は溝形態の平面プランがみられたことから、SD01の延長部と捉え、出土遺物はSD10としたが、完掘時はSX03上面の窪みとした。遺物は中世のものが目立ち、近世の陶磁器を含まないことから、戦国時代には埋没した可能性が高い。

SK03：調査区東橋端に位置する土坑である。下面の南北径120cmほどの円形土坑が遺構で、これに小穴が付き埋立てされたものとみられる。



0 (1:20) 1m

第50図 4-I区 SE01・02、P15平面図・断面図(S=1/20)



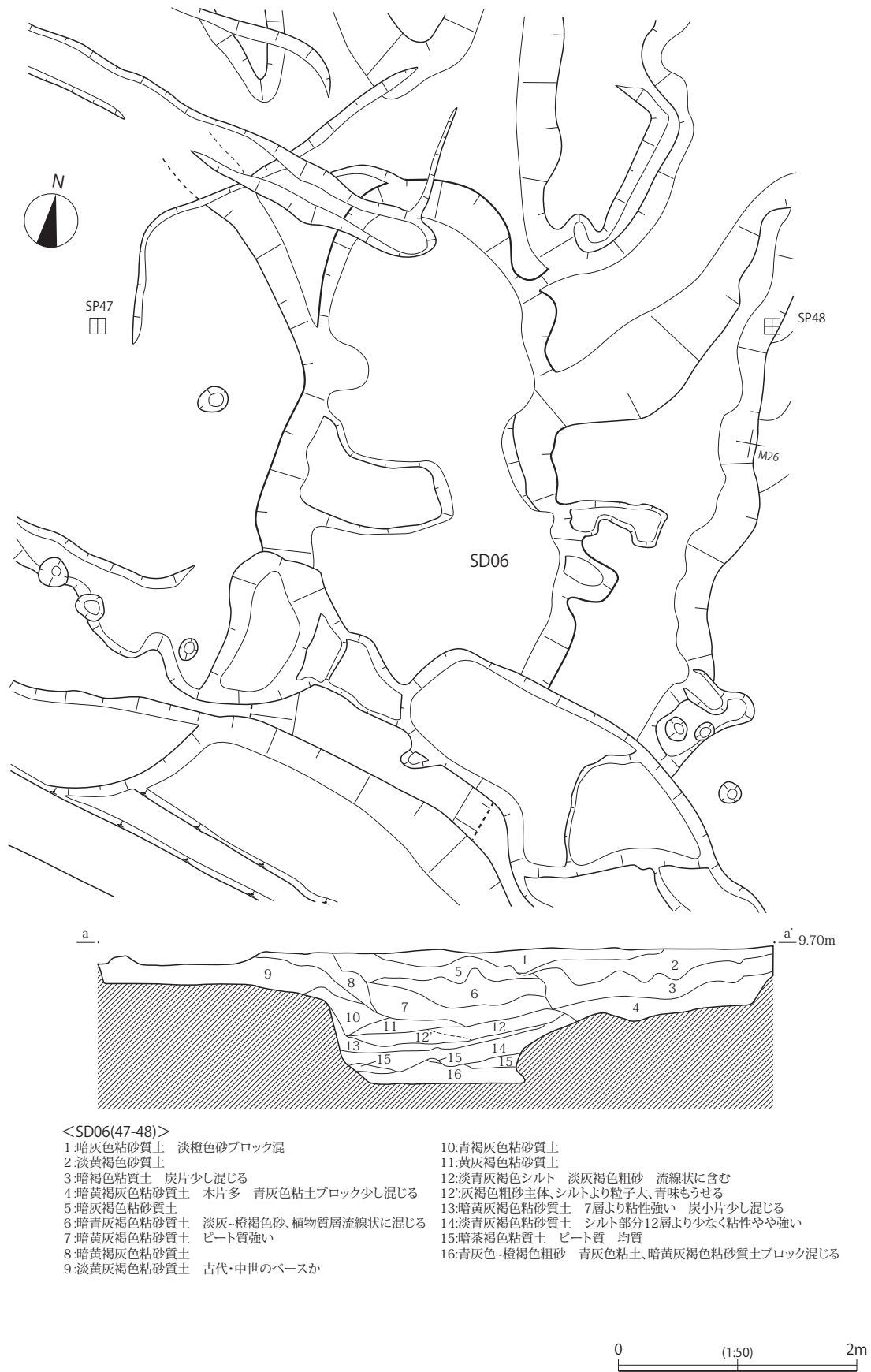
第51図 4-I区 SD01・02平面図・断面図(1/40・1/80)

(3) 4-Ⅲ区の上層遺構(第55～58図)

SB403: 調査区の南端で、SD16の南に位置する一間規模の建物で、柱穴・柱間とも一定していない。類似の建物は、農道南側の4-V区でも存在することから、SD16の南辺では小規模な宅地が置かれ、2間×3間規模の掘立柱建物が設営された可能性が高い。時代は基本層位と柱穴の規模からして、古代後半とみられる。

SB404: SB403と複合する一間四方の建物である。

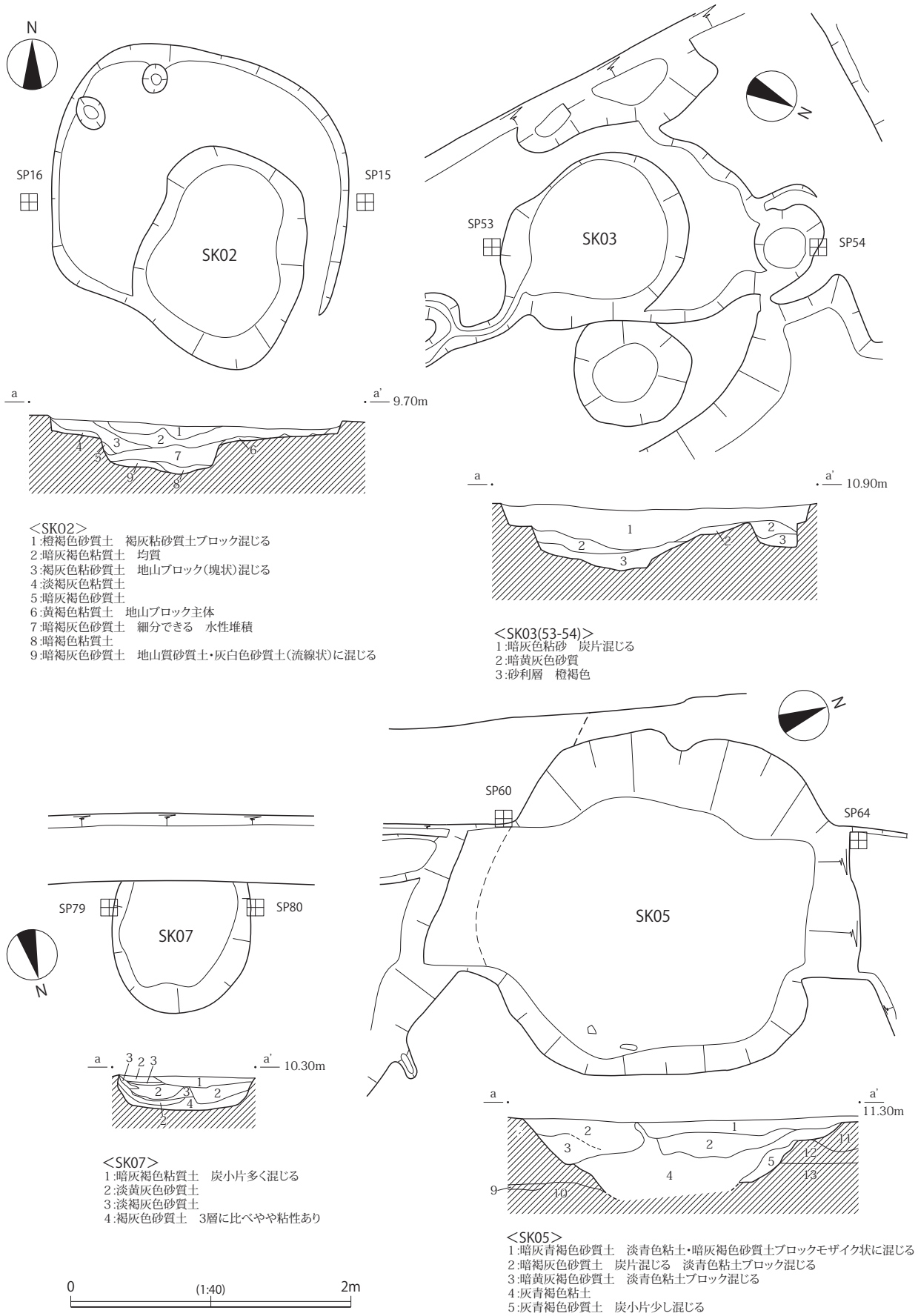
SD16: SG01の下位で検出した東西方向の溝である。東側は幅80cmと狭く、西に向かって溝幅が拡大し、上幅は250cmを越える。溝の延長も20mを越えることが見込まれる。東端部に湧水がみられ、西へ流下するほどに流れの幅が広まった自然流路とみられる。上面は埋立てされ、SG01の整地面が広がる。弥生時代～中世の遺物を含む。検出時に大型の窪みを推定しSG01としたが、下面ではSD16としている。



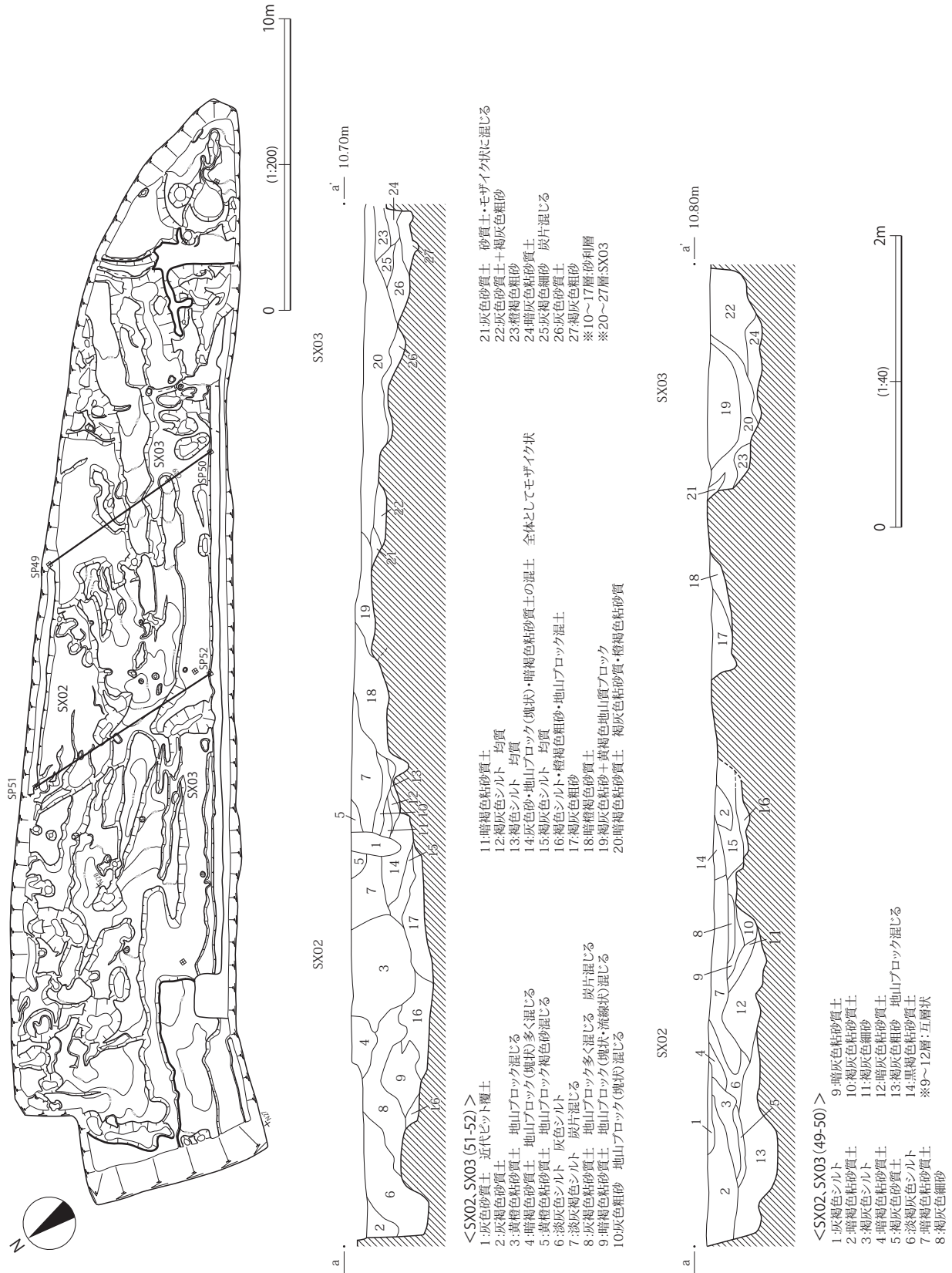
<SD06(47-48)>

- |                                 |                                     |
|---------------------------------|-------------------------------------|
| 1:暗灰色粘砂質土 淡橙色砂ブロック混             | 10:青褐色粘砂質土                          |
| 2:淡黄褐色粘砂質土                      | 11:黄灰褐色粘砂質土                         |
| 3:暗褐色粘質土 炭片少し混じる                | 12:淡青灰褐色シルト 淡灰褐色粗砂 流線状に含む           |
| 4:暗黄褐灰色粘砂質土 木片多 青灰色粘土ブロック少し混じる  | 13:暗黄灰褐色粘砂質土 7層より粘性強い、炭小片少し混じる      |
| 5:暗灰褐色粘砂質土                      | 14:淡青灰褐色粘砂質土 シルト部分12層より少なく粘性やや強い    |
| 6:暗青灰褐色粘砂質土 淡灰-橙褐色砂、植物質層流線状に混じる | 15:暗茶褐色粘質土 ビート質 均質                  |
| 7:暗黄灰褐色粘砂質土 ビート質強い              | 16:青灰色-橙褐色粗砂 青灰色粘土、暗黄灰褐色粘砂質土ブロック混じる |
| 8:暗黄褐灰色粘砂質土                     |                                     |
| 9:淡黄灰褐色粘砂質土 古代・中世のベースか          |                                     |

第52図 4-I区 SD06平面図・断面図(S=1/50)

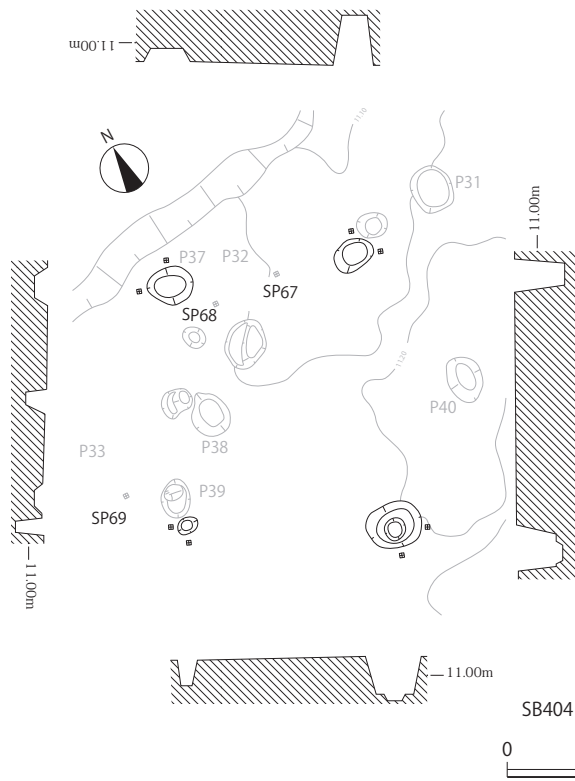
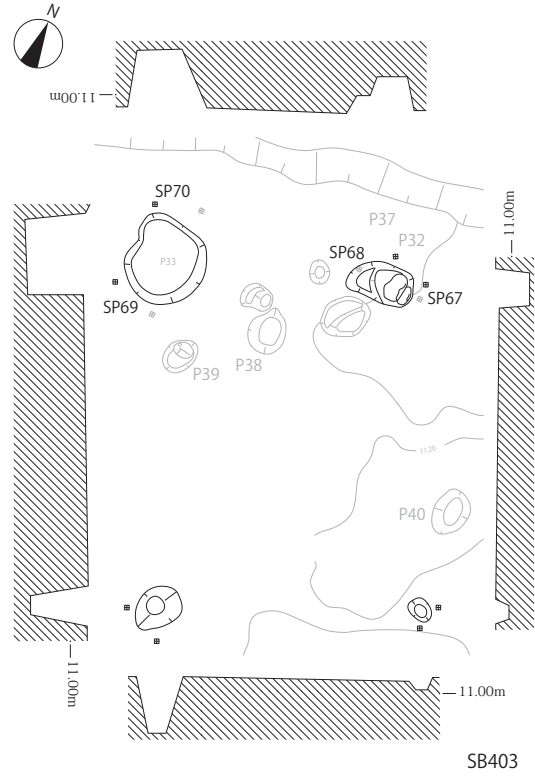


第53図 4-I区 SK02・03・05・07平面図・断面図(S=1/40)

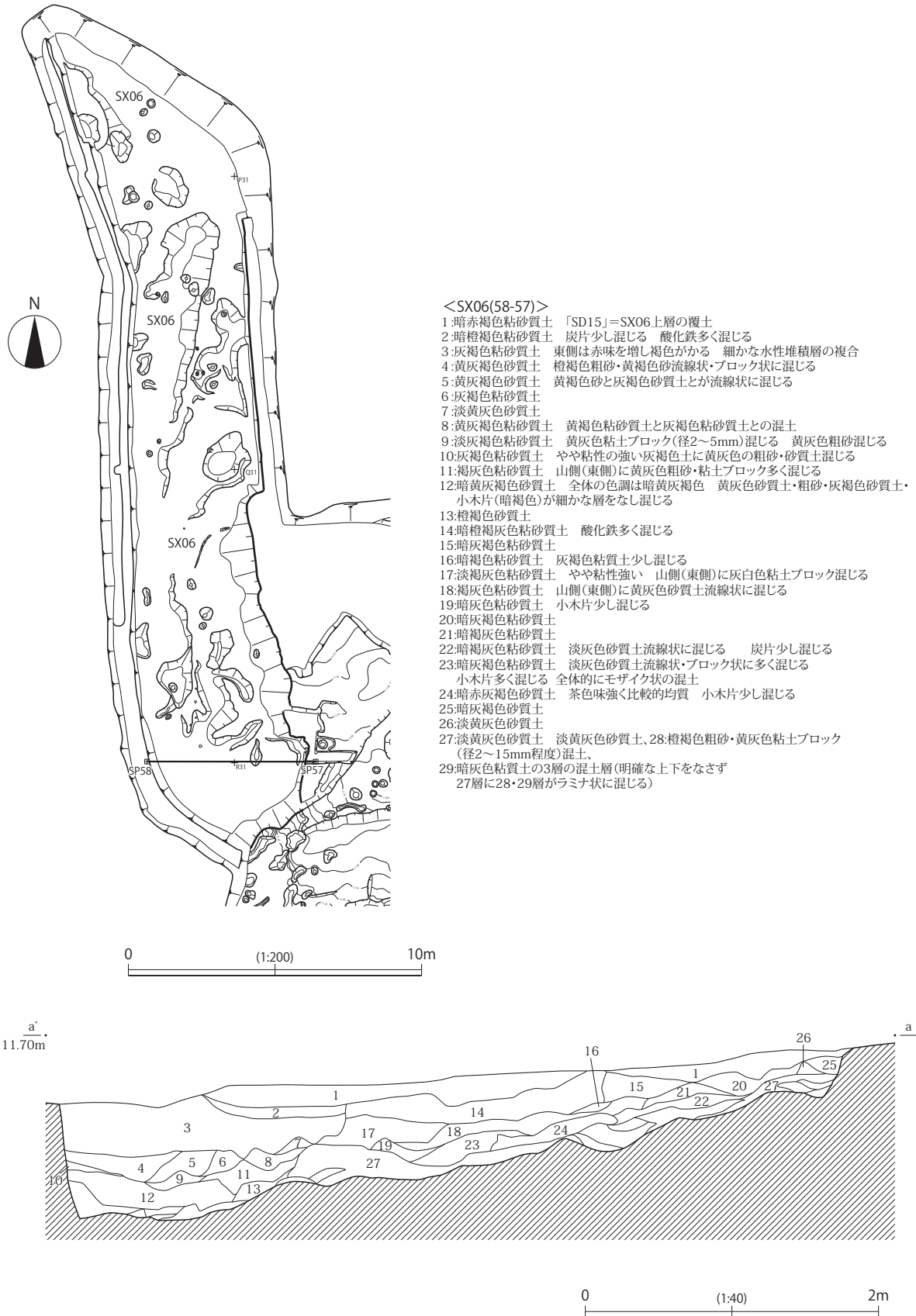


第54図 4- II区 SX02・03平面図・断面図(S=1/40・1/200)





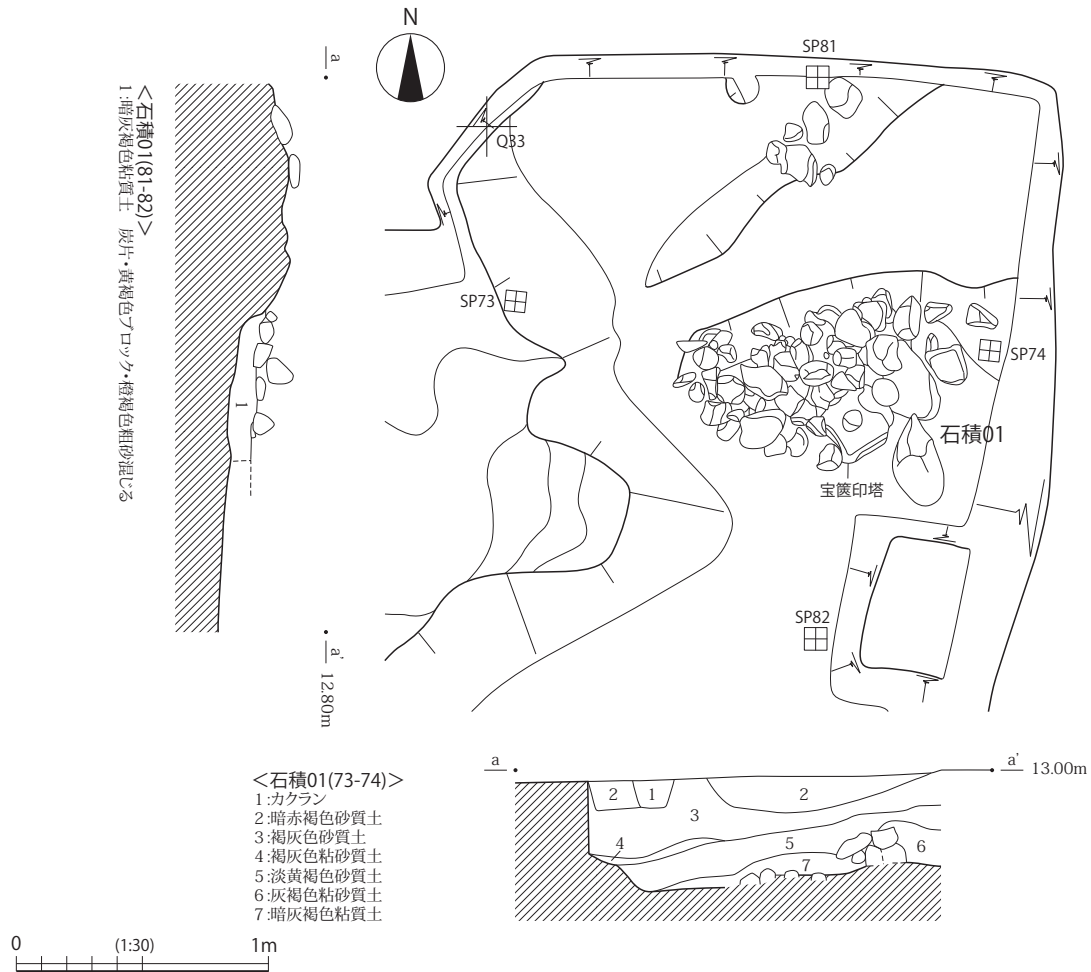
第55図 4-Ⅲ区 SB403・404平面図・断面図(S=1/80)



第56図 4-Ⅲ区 SX06平面図・断面図(S=1/40・1/200)



第57図 4-Ⅲ区 SD16・SG01平面図・断面図(S=1/50・1/300)



第58図 4-Ⅲ区石積01平面図・断面図(S=1/30)

西方は4-Ⅳ区のSD18に取り付く可能性が極めて高い。

SG01: 4-Ⅲ区の中央から南側にかけて、青褐灰色粘土の堆積土がみられたことから、これを大型の池状の窪地と推定して、SG01の遺構名で掘り下げを進めた。下面では、SD16とその北側の緩斜面となり、青褐灰色粘土は斜面地における埋立てと造成土とみられる。この粘土の下面では、南北約4.5mを超える規模で、段上の整地面が広がり、SX07へ及ぶ緩斜面が造成されていたと理解できる。遺物には、古墳時代から近世の陶磁器までみられるが、中世後半のものが多い。

SX06: 4-Ⅲ区の西辺は、既存の農業用水が残り、これにより4-Ⅱ区とⅣ区を区分したことから、用水沿いの道路予定地は、調査区の中央から北へ細長く突出する形状となり、その大半がSX06である。調査区の北東は、本遺跡の北辺を画する開析丘陵の緩斜面となり、4-Ⅲ区の東辺と西辺では、地表面で約1.4mの高低差がみられた。SX06においても西方へ傾斜しており、西辺は東辺に比べて120cmほど低い。SX06覆土の上層～中層では、SD15やSX04、SX05など南北方向の溝状の窪地を検出したが、これらはSX06の西側に設営された用水的な溝と、それらが埋込みされる途中の窪みとみられる。土師器皿と瓦質土器を一括廃棄した土器溜り(図版21)は、その溝(SD15)の肩に埋立てされたもので、14世紀後半～15世紀前半と推定される。また、SX06南部の窪地では、多量の小木片を含む堆積土層(12・19・23・24層)がみられた。曲物底の荒型の出土から、その成因は東側の平坦地で行なわれた曲物生産に求めることができ、漆を保管した珠洲焼の小壺(第90図373)の出土は、それを補強している。

SX07：調査区の中央部で検出した不整形な土坑状の窪地である。北壁は楕円形を呈し、その上方に広がる無遺構の空闲地は、標高12.20～14.60mの緩斜面となる。南側のSG01よりも新しく、一見したところ地山の粘土を掘削した採掘坑とみられ、西側から室町期の石臼が出土している。底は、凹凸が強く安定していない。なお、SX06の堆積土から本遺構の北側にある空闲地と横の平坦地は、狭小ながら曲物生産の工房が置かれた可能性が高い。また、本遺構からSG01の段状の造成地は、その三方が水場的な遺構に取り囲まれることから、曲物生産に関連した施設が置かれた可能性もある。

石積01：調査区の北東隅で検出した石積の遺構である。宝篋印塔の笠部と人頭大の石を畦畔状の南側に組み、その北側を裏込めするように10～25cmほどの礫を入れている。畦状の高まりの背後は、溝状に窪み、石組の横が水路のはけ口形態を呈する。このため、本遺構は北側の丘陵裾から流下した水路の一部が崩れたことで、周囲から礫を持ち込み補強したように見受けられる。石積の内部から植木鉢と考えられる瓦質土器が出土している。

#### (4) 4-IV区の上層遺構(第59～61区)

SD18：調査区の中央付近で確認した大型の溝で、北西方向へ流下した自然流路とみられる。南半部は深さ90cmほどの溝状を呈し、底は北へ向かって傾斜するものの、中央付近で深くなり、北側で再び浅くなるなど、自然流路としての特徴を示している。その北半部は上幅5mを測り、深さも110cmと深くなり、底の青灰色粘質土地からの湧水がみられた。下部の覆土(黒褐色粘砂質土)から弥生時代～古代の土器に加えて、木製祭祀具や曲物柄杓など多くの木製品と部材が出土した。溝状形態を呈する南方では、上幅は2mほどを測り、南東の方向から流水が注いでいたとみられる。

また、本遺構の西側では、古代の基盤層であった明黄褐色砂質土が堆積しており、溝と掘立柱建物の柱穴が検出されたが、東側は不整形の溝状の窪地が溝に沿うようにみられた。遺構の基盤層堆積が認められず、4-Ⅱ区のSX02ように不整形の窪みや小穴が北西方向に連なり、東方の4-Ⅲ区のSX06に向かって緩やかに上がる。このため、古代においてはSD18の東側部分は、自然流路に沿った湿地帯であった可能性が高い。

SD19：SD18の西側で、4mほどの間隔を空けて並走する浅い溝である。幅110～170cm、深さ4～12cmを測り、古代に開削された可能性が高い。

SD20：調査区の西端で検出した南北方向の溝で、幅70cm前後、深さ5～10cmと浅い。周囲に掘立柱建物と認められる柱穴が分布しており、覆土・規模とも4-Ⅰ区のSD02と似ている。古代末頃の宅地に付随した排水溝とみられる。

SD21：調査区の中央から北西にかけて、蛇行的に流下する溝である。上幅60cmと狭くなる箇所もみられるが、80cm前後の上幅で北西方向へ流下する。深さは28～48cmを測り、安定していない。南端はSD19で切られており、SD21からSD19への開削移動の可能性はある。

SD22・SD23：調査区の南辺からSD18へ流下する不整形な溝である。

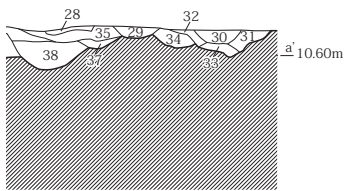
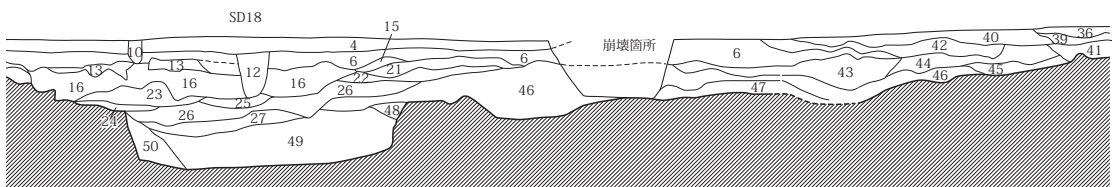
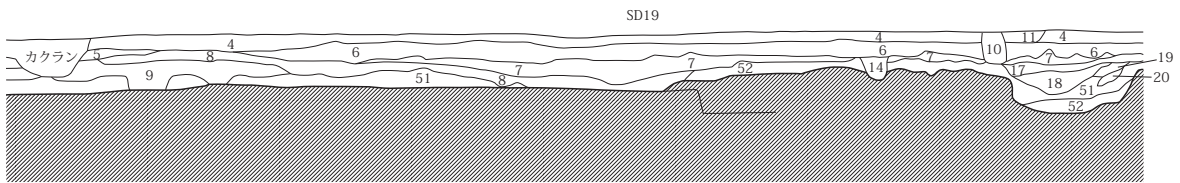
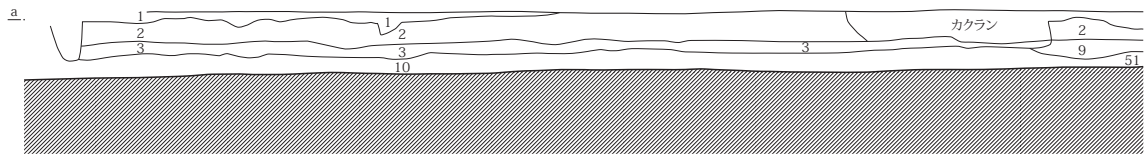
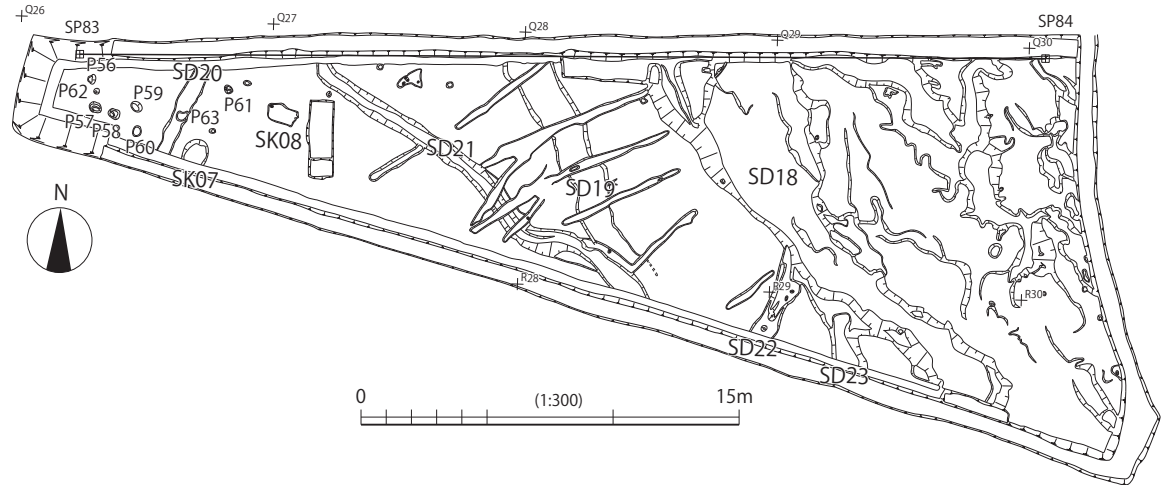
小溝群：SD18とSD21を東西方向に切る遺構群である。幅24cm～40cm強と細く、深さも5～10cmほどと浅い。最多7条の小溝で、農耕による畝溝とみられる。

SK07：調査区西側のSD20の東に位置する略円形の土坑である。径98cm、深さ24cmを測り、覆土の上面には炭化物の混入が多く、SD20と同時期の遺構とみられる。また、覆土をみると、土坑内には東西の二つの窪みが認められ、その東側は小型の曲物が埋設されていた可能性が高い。

SK08：SD20から2.7mほど離れている略方形の土坑である。不整形な窪みで深さも6cmと浅い。

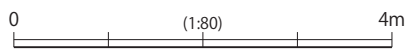
柱穴群：調査区西端で検出したP56～P63は、出土した土器から古代末以降の掘立柱建物跡とみられるものの、建物の基軸や規模については不明である。

第5節 4区の遺構と遺物

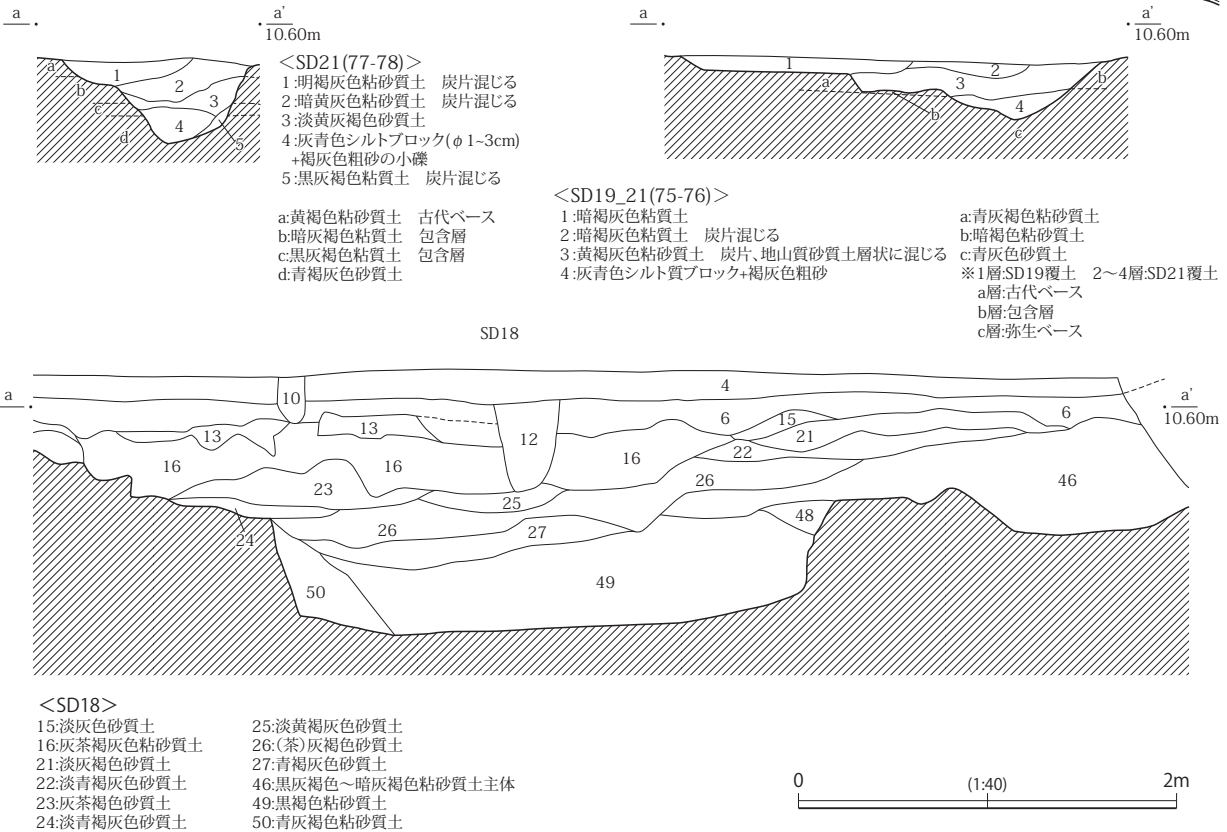
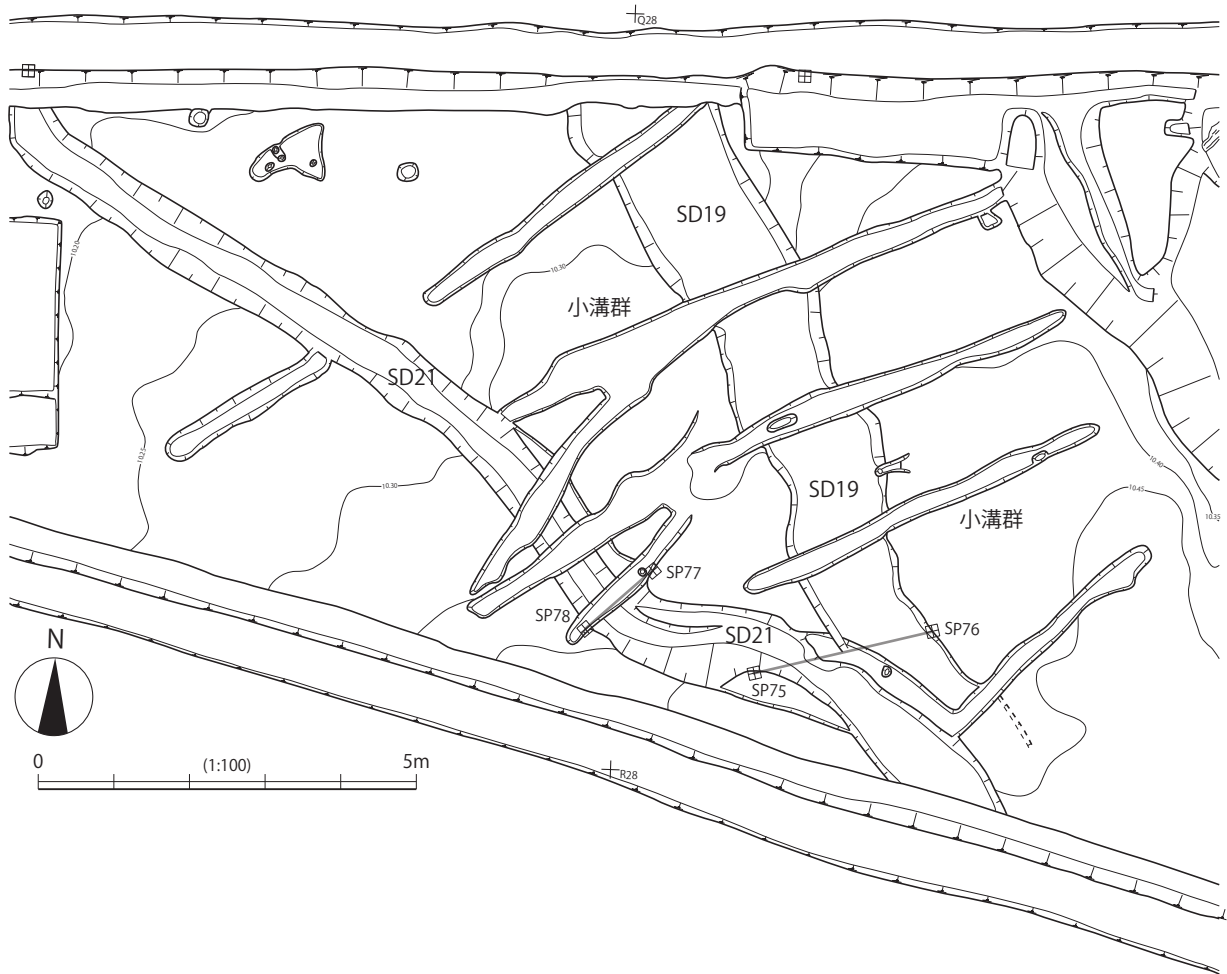


<拡張区北壁83-84>

- |             |                    |                    |
|-------------|--------------------|--------------------|
| 1:暗褐色砂質土    | 18:淡灰褐色砂質土         | 35:淡灰褐色砂質土         |
| 2:淡黄褐色砂質土   | 19:黒灰褐色粘砂質土        | 36:暗褐色粘砂質土         |
| 3:暗褐色粘質土    | 20:淡黄灰色砂質土         | 37:灰褐色砂質土+橙褐色粗砂    |
| 4:橙褐色砂質土    | 21:淡灰褐色砂質土         | 38:暗褐色粘砂質土         |
| 5:黄灰褐色粘質土   | 22:淡青褐色砂質土         | 39:暗褐色砂質土          |
| 6:暗褐色粘砂質土   | 23:灰茶褐色砂質土         | 40:灰褐色砂質土          |
| 7:灰黄褐色粘質土   | 24:淡青褐色砂質土         | 41:淡黄褐色砂質土         |
| 8:暗灰褐色粘質土   | 25:淡黄褐色砂質土         | 42:灰褐色砂質土+暗褐色砂質土   |
| 9:暗黄褐色粘質土   | 26:(茶)灰褐色砂質土       | 43:黄灰褐色砂質土主体       |
| 10:淡褐色砂質土   | 27:青褐色砂質土          | 44:暗褐色粘砂質土主体       |
| 11:明褐色砂質土   | 28:暗褐色粘砂質土         | 45:淡灰褐色砂質土主体       |
| 12:灰褐色砂質土   | 29:灰褐色粘砂質土         | 46:黒灰褐色~暗灰褐色粘砂質土主体 |
| 13:灰黄褐色砂質土  | 30:暗褐色砂質土          | 47:黄褐色粘質土          |
| 14:黒灰褐色粘砂質土 | 31:淡褐色砂質土          | 48:明黄褐色粘砂質土        |
| 15:淡灰色砂質土   | 32:灰褐色砂質土          | 49:黒褐色粘砂質土         |
| 16:灰茶褐色粘砂質土 | 33:淡黄灰色粘質土+淡橙褐色砂質土 | 50:青灰褐色粘砂質土        |
| 17:灰褐色砂質土   | 34:31層と同質          | 51:黄褐色粘質土(古代ベース)   |
|             |                    | 52:50層と同じ          |

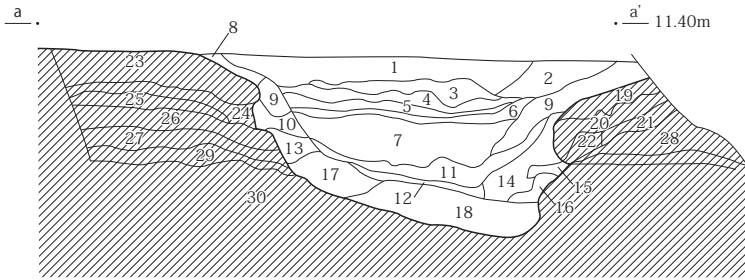


第59図 4-IV区平面図・基本土層図(S=1/80・1/300)



第60図 4-IV区小溝群平面図、SD18・19断面図(S=1/40・1/100)

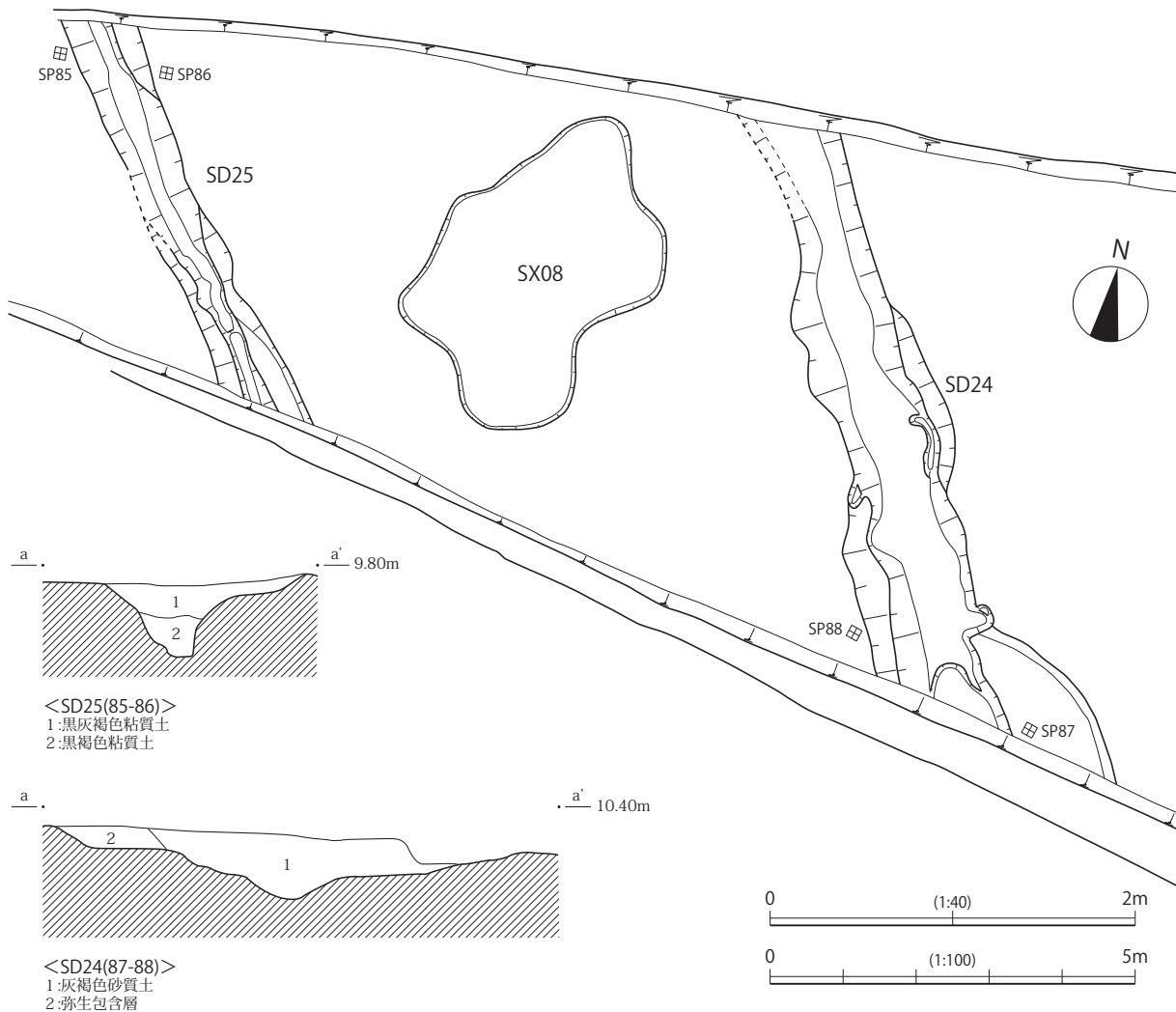
第5節 4区の遺構と遺物



<SD14(59-60)>

- |                                     |                                      |
|-------------------------------------|--------------------------------------|
| 1:暗青灰褐色粘砂質土 炭片混 モザイク状の混土            | 16:暗灰褐色粘質土 粘性強いがやや砂質気味               |
| 2:黄褐色粘砂質土 地山質土                      | 17:暗青灰色砂質土 木片多く混じる                   |
| 3:暗青灰色砂質土 シルト質(微砂)にやや大きめの粗砂混じる      | 18:灰褐色粗砂 青灰シルト質ブロック混じる 8-9cmの須恵器 包含層 |
| 4:淡灰褐色粘質土 ピート質に近い                   | 19:暗黄褐色粘砂質土 地山質土+暗灰褐色土               |
| 5:青灰色砂質土 3層よりやや明るく、粗砂の混じり少ない        | 20:黄褐色粘質土 地山質土 古代のベース?               |
| 6:淡灰褐色粘質土                           | 21:暗青灰色粘砂質土 南側に明青灰色砂質土流線の上に混じる       |
| 7:暗青灰色砂質土 3層とほぼ同じ 植物質(木片)混じる        | 22:暗青灰褐色砂質土 褐色味強く、暗い                 |
| 8:灰黄褐色粘砂質土 やや暗く、砂質気味の地山質土           | 23:明黄褐色粘砂質土 地山質土 古代のベース?             |
| 9:灰褐色粘砂質土 黄褐色土少し混じる                 | 24:暗灰褐色粘質土 粘性強い 炭化物小片混じる             |
| 10:青灰褐色粘砂質土 暗灰褐色粘質土ブロック混じる モザイク状の混土 | 25:暗灰褐色粘質土 黄褐色粘質土ブロック多く混じる 炭化物小片混じる  |
| 11:灰褐色粘質土 ピート質に近く粘性強い               | 26:灰黒褐色粘質土 粘性強い 炭化物小片多く混じる           |
| 12:褐灰色粘質土 11層に類似 やや明るい              | 27:黄灰褐色粘質土 粘性強い 弥生のベース               |
| 13:黒灰褐色粘質土 炭化物小片混じる 粘性強い            | 28:暗黄灰褐色砂質土 暗灰褐色土、青灰褐色土の流線状(縞状)混土    |
| 14:灰褐色粘質土 11層に比べやや暗い、質は類似 木片多く混じる   | 29:茶褐色植物質土 ピート(完全に粘質土化していない)         |
| 15:明褐色粘質土 粘性強い                      | 30:青褐色粘質土 やや粗い粒子で構成される               |

※23層:2層に類似するが段階を異にして形成されたと思われる  
 ※26層:弥生包含層に対応するが、この付近ではほとんど遺物を含まない  
 ※28層:26・27に対応



第61図 4-IV区 SD14断面図、下層遺構実測図(S=1/40・1/100)



## 下層遺構(第61図)

4-Ⅳ区のSD18の調査で、古代の遺構を検出した基盤層(明黄褐色粘質土)の下面に弥生時代後期とみられる文化層の存在を確認した。このため、北壁に沿って試掘トレンチを実施したところ、50cmほど下面から弥生時代の基盤層(黄灰褐色粘質土)と遺物包含層(灰黒褐色粘質土)を確認した。このため、重機で古代の基盤層を除き、作業員で遺構検出を実施したところ、SD19～SD21付近の下部から溝と土坑を発掘した。

SD24：南北方向の溝で、上幅36～68cm、深さ36cmを測る。SD19の下位にあたり、古代の基盤層より下面で検出したが、覆土は弥生時代の包含層を切るように堆積しており、基盤層の堆積が始まった弥生時代後期～古墳時代前期へ下る可能性がある。

SD25：SD24の西方で約260cmに位置する南北方向の溝である。上幅26～46cm、深さ36cmを測り、断面形状はV字形を呈する。遺物包含層に近い黒灰褐色粘質土が堆積していた。

SX08：SD24とSD25の中間にみられた土坑状の窪地で、深さは数cmと浅い。

## (5) 4-Ⅴ区の上層遺構(第53・62図)

4-Ⅲ区の南で、集落道と宅地に挟まれた細長い調査区である。北部は4-Ⅲの南部でみられた建物域が広がる。2条の溝(SD12・13)より南に10mほどの空閑地があり、再び土坑や溝、建物域の設営が確認された。

SB405・SB406：調査区の南部と北部において、検出した小型の掘立柱建物である。復元した2棟とも一間四方の規模で、その周囲に中世的な小型の柱穴を多く残していることから、再検討の余地が大きい。とくに、南部のSD14の上面に設営された柱状の遺構(P27・P28)は、中世前期に下る小型の利水施設とみられる。

SD12：北部で検出した東西方向の溝で、上幅は36～106cmを測り安定していない。底に小穴が多くみられ、発掘時は4-Ⅳ区のSD18の支流的な湧水溝とみられた。古代後半の羽釜、戦国時代の青磁碗などの出土で、古代後半から中世の用水路とみられる。

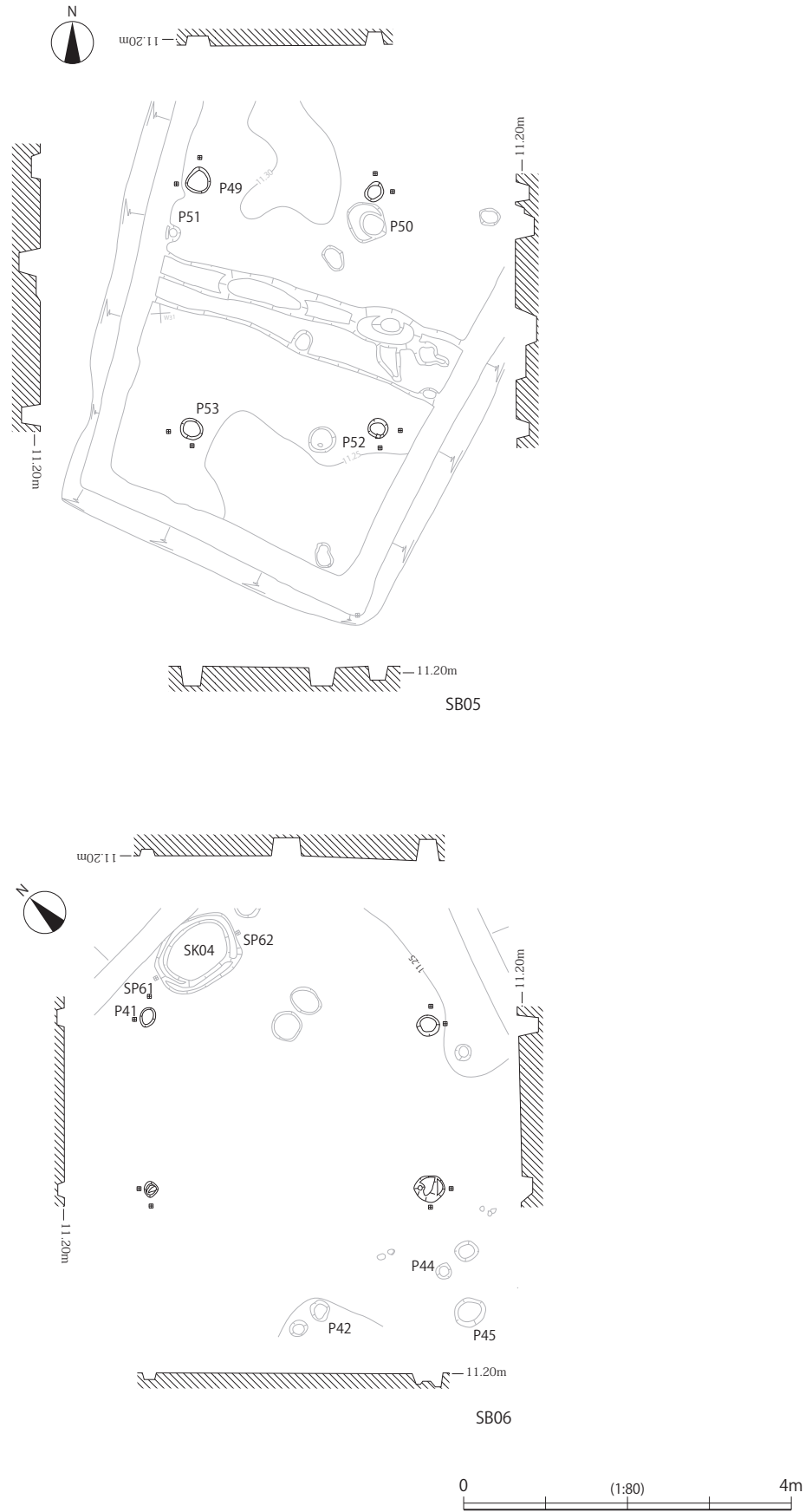
SD13：SD12の南に位置する溝状の窪地で、深さ10cm弱と浅い。その西側に浅い窪地(南北幅420cm、深さ6～8cm)が重なる。出土品と覆土から中世～近世前半の遺構とみられる。

なお、SD13～SD14の区間にみられる東西方向の幅1mほどの窪みは、重機を使用した試掘坑である。古代から中世においては、空閑地であった可能性が高い。

SD14：調査区の南部で検出した溝で、幅200cm前後、深さ85～90cmを測る。断面形は箱形を呈し、形状が安定した平安時代前期頃の溝である。須恵器の墨書土器など、完形品が出土している。複合するP26とP28は、本遺構が埋没・埋め立てされたのち、設営された小型の井戸とみられる。

SK04：北端に位置する楕円形の土坑である。長径108cm、深さ32cmを測り、壁に沿って段をもつことから、曲物を埋設した小型の井戸とみられる。周囲の柱穴も小型のものが目立ち、南はSD13、北は4-Ⅲ区のSD16に挟まれた中世の宅地に設営された利水施設であろう。

SK05：SD14の北に位置する略方形の大型土坑である。東西径308cm、深さ70cmを測り、断面形は逆台形を呈して、底は青灰色の湧水層に及んでいる。壁には、擁壁や足場となる施設が認められないが、内部に堆積した灰青褐色層等から、湧水を利用した池状の施設であったとみられる。時代は出土品の須恵器から、SD14と同時期の可能性が高い。



第62図 4-V区 SB05・06平面図・断面図(S=1/80)

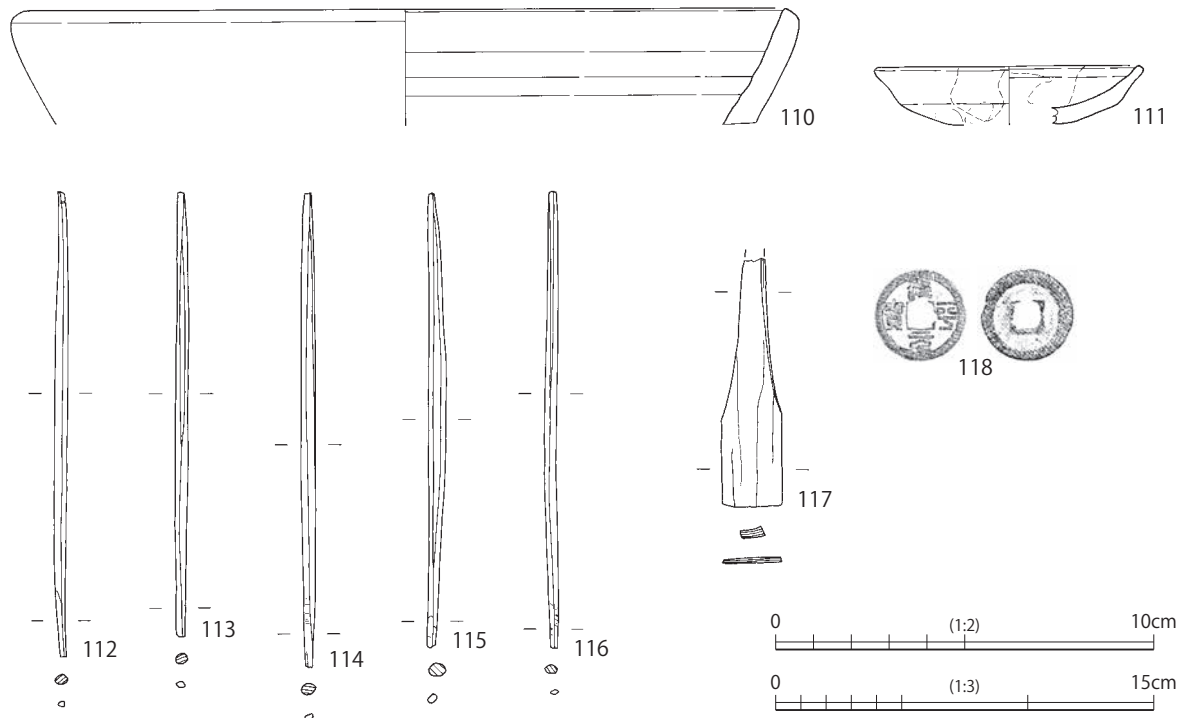
2. 4区出土遺物(第63～92図)

4区は、現代の農業用水や農道等により、4-I区～4-V区に細分されていたが、上層の溝や溝状の遺構、整地層などから、古代後半～中世の土器や木器が多く出土している。

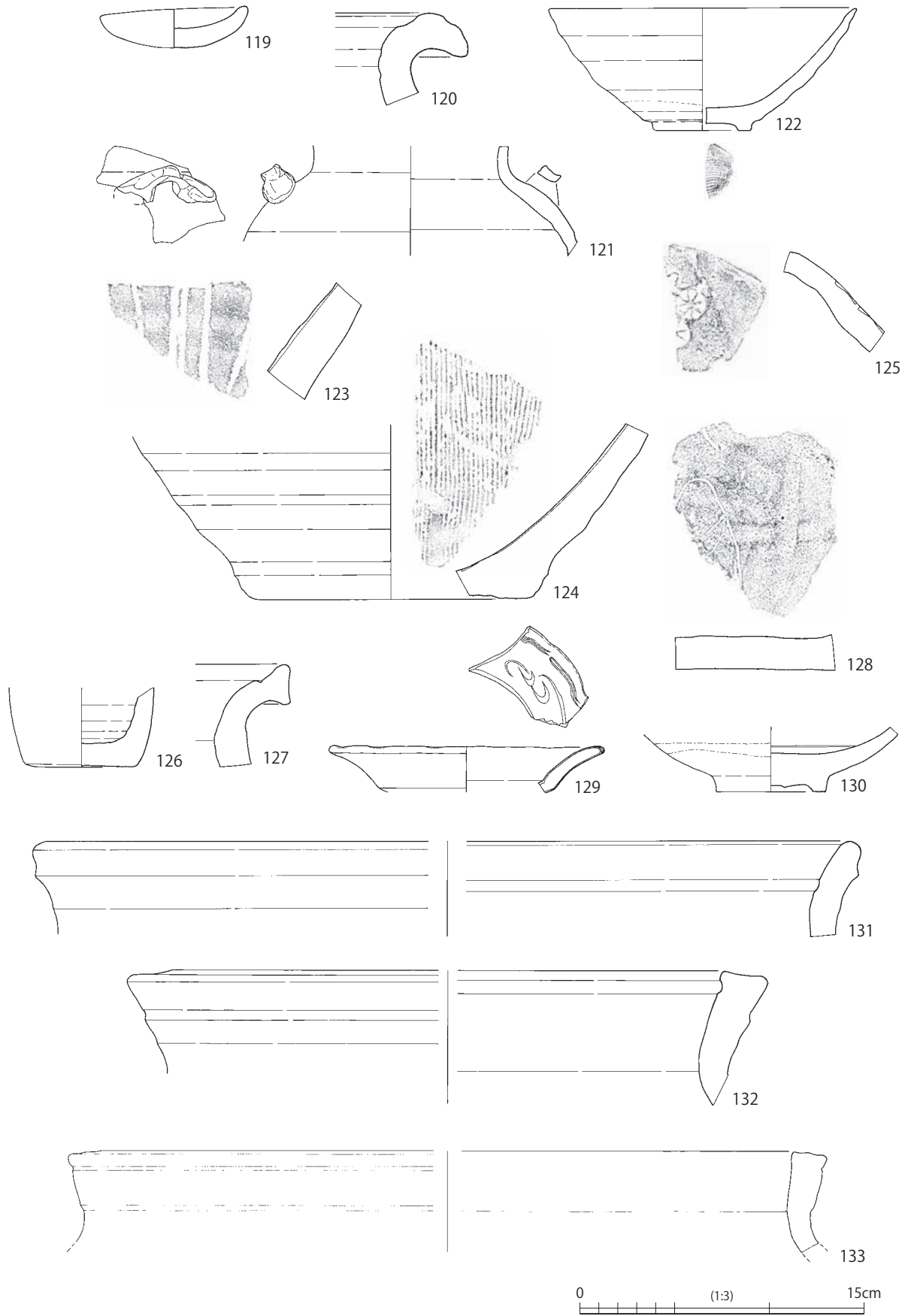
(1) 4-I区出土遺物(第63～67図)

SE02 (110～118) : 110は珠洲Ⅱ期の片口鉢で、内面は使用により平滑となり、外面に被熱による煤が付着。111は灯明痕を残す小皿で、14世紀後半～15世紀前半の可能性が高い。112～116は両端が細く成形された箸。樹種はスギで、長さも18cm前後と揃い、6寸相当の製品とみられる。117は横幅2.4cmと狭く、上部が棒状を呈することからヘラ状具とみられる。118は北宋の治平元宝。

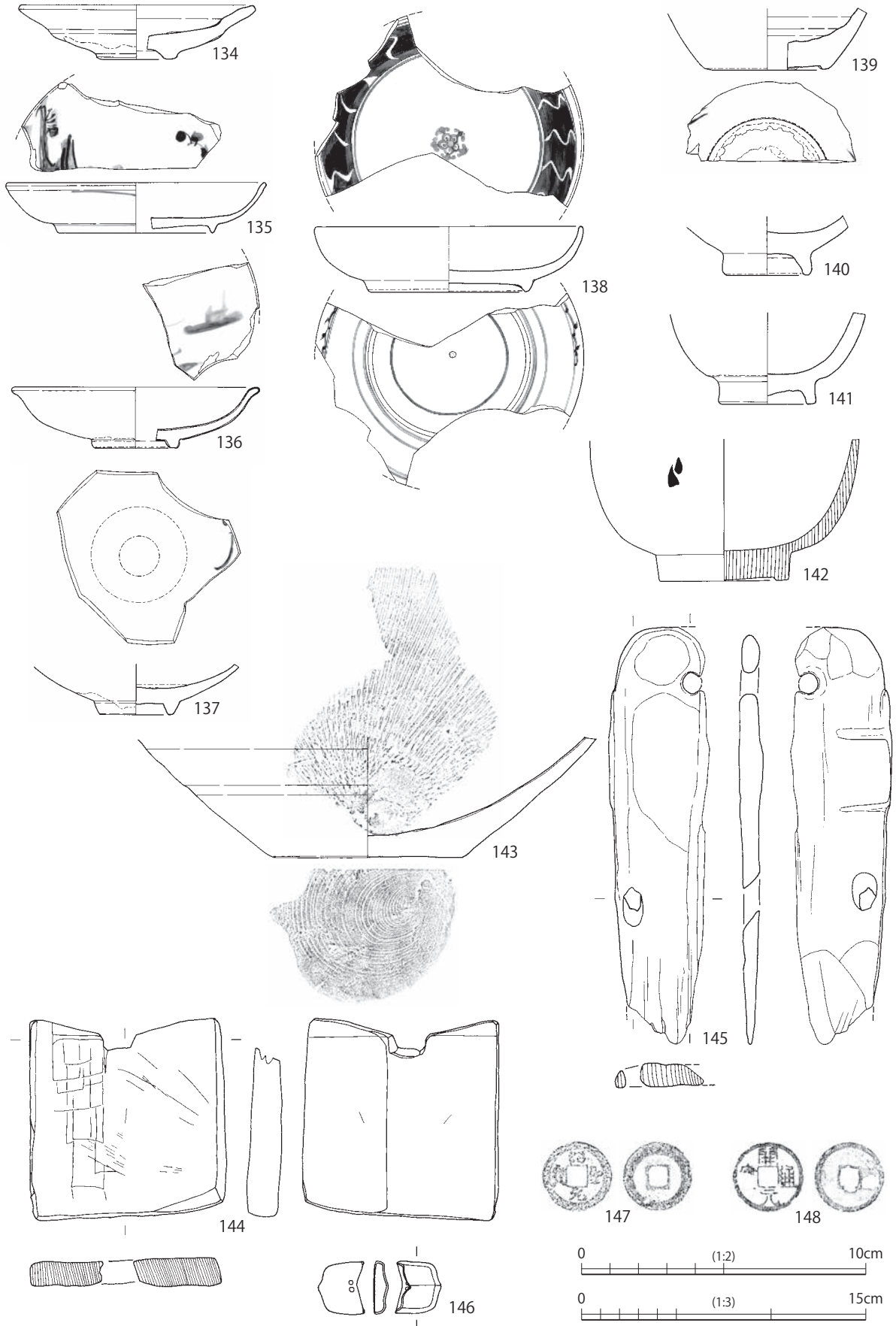
SD01 (119～148) : 中世の陶磁器は、遺構の各所から出土したのに対して、近世前期の陶磁器は、溝の上面で検出した溝状の窪地(SD10)と水溜1～3などからの出土である。119の土師器は、丸底で厚手の造りと調整から、15世紀中頃～後半の小皿とみられる。120は珠洲の大甕の口縁で、内面の隆帯は摩滅しており、長期の使用が推定される。121は珠洲Ⅰ～Ⅱ期の双耳壺で、内外とも水性摩耗で平滑である。122は瀬戸の灰釉平碗で、貼付けの高台から古瀬戸後Ⅰ期とみられる。123の越前すり鉢は、器壁が厚く、おろし目は一本引きで深い。124も越前のすり鉢で、おろし目は櫛状工具による。125は加賀の甕で、押印は湯上ユノカミダニ窯跡のⅡ-411に近似する。126は越前の小型の壺で、127は甕である。128は胎土から越前の甕で、内面に線刻文と降灰がみられる。129は青磁の稜花皿。130は釉に透明感がある白磁碗で、14世紀後半のピロークスタイプで口縁は端反りとみられる。露胎部には漆塗りされている。131～133は越前の甕で、133は鉄塗りをしたもので、越前Ⅵ3期とみられる。



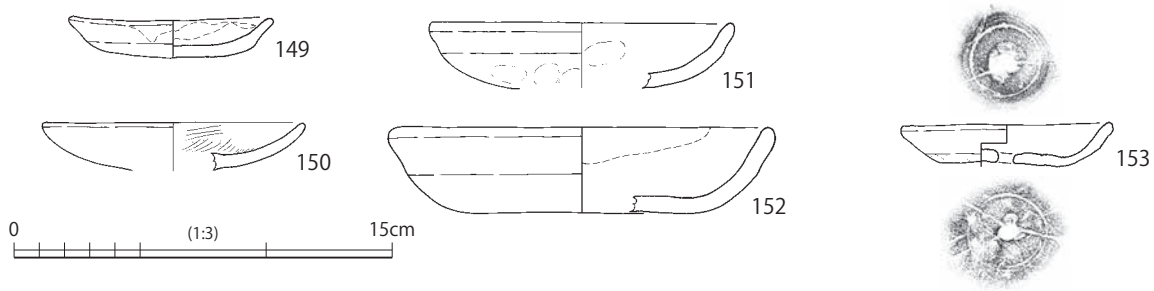
第63図 4区 SE 02出土遺物実測図(S=1/2・1/3)



第64図 4区 SD01 出土遺物実測図1 (S=1/3)



第65図 4区 SD01 出土遺物実測図2 (S=1/2、1/3)



第66図 4区 SD05出土遺物実測図(S=1/3)

SD01の出土品でも、鎌倉時代の珠洲焼の甕や壺などには、水性摩耗が強くみられる。これは、複合していた水溜1~3の内部で、陶片が受けた風化によるものとみられる。

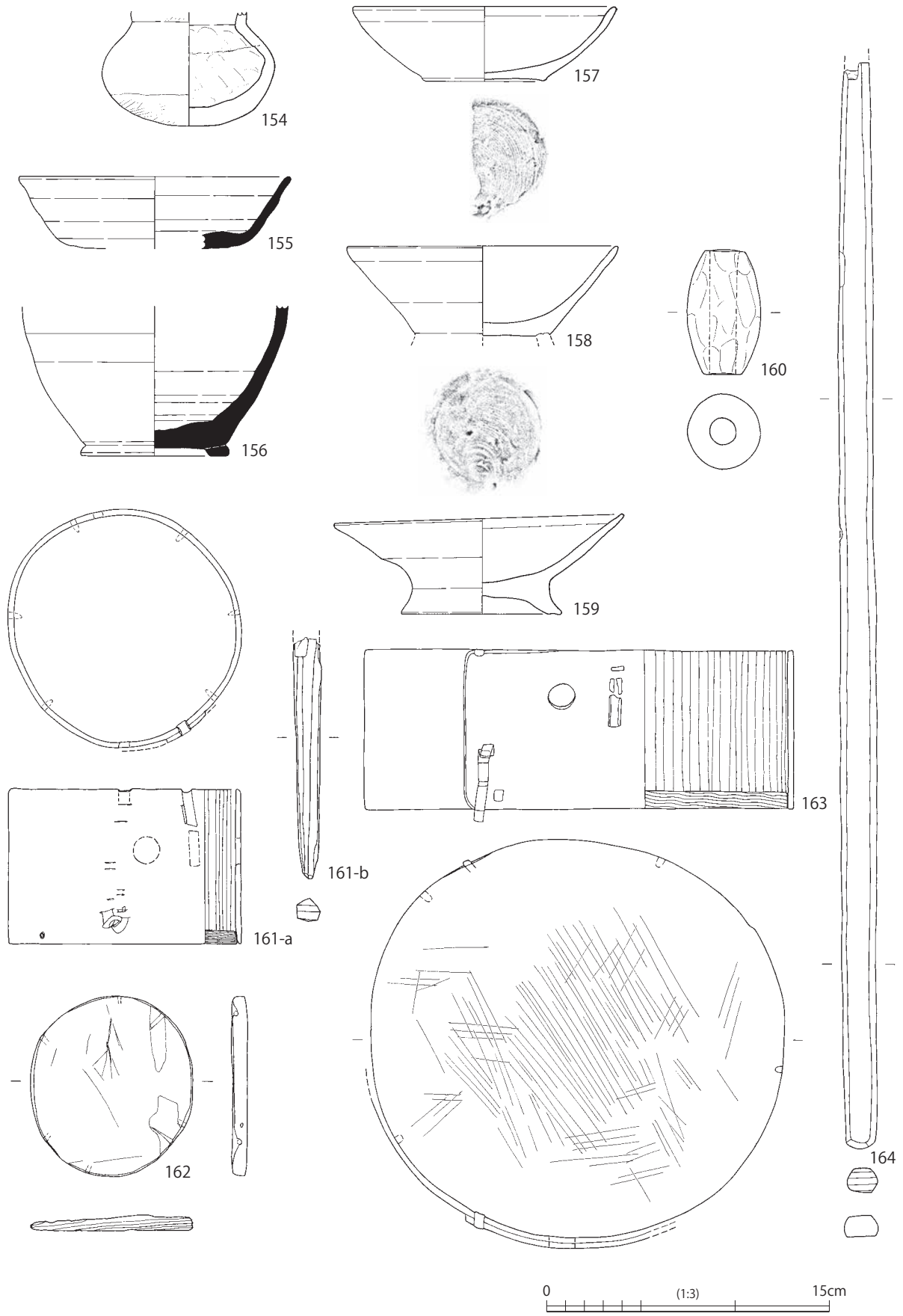
134~141は肥前の碗皿と瓶で、江戸前期の製品とみられる。125~138は初期伊万里の皿である。142は高台径6.8cmの漆器碗で、外面に朱漆で模様を描く。144は厚さ1.9cmの針葉樹の板材で、片面の縦横に罫引き線がみられる。寸法と形状から、下駄の差歯として整形された板材である可能性が高い。145は連歯が欠落した下駄で、主に右足に履かれたものである。一部が炭化している。146は花卉形を呈する横幅16mmの銅製の金具である。差込み部の幅は3.5mmを測り、裏面に綴穴とみられる一対の小孔が開く。金具の形状からして、五分幅の皮帯の端に装着された帯金具とみられる。147は紹聖元宝、148は開通元宝である。

SD05 (149~153) : 149は平底の小皿で灯明痕を残す。150~153は鉄分の付着により、器面が汚れているが、胎土は同質の土師器である。外面のナデ調整が高く、13世紀後半~14世紀前半の小皿と中皿とみられる。また153は口径8.2cmの有孔皿である。焼成後の土師器皿の中央に径4mmの小孔を開けたもので、穿孔を中心とした径2.7cmの沈線が皿の内外に輪状に残る。回転を要する用具に装着したことによる擦痕とみられる。

SD06 (154~164) : 154は土師器の丸底壺。155の須恵器の坏は口径14.2cmで、長頸瓶とみられる。156と共に灰色の胎土から高松産である可能性が高い。157は口径13.8cmの土師器の皿。158・159は高台が付くことから埴に分類。159の法量は口径15.1cm、器高5.3cmで、体部が直線的に開く。160の土錘は長さ6.6cm、重量79gで、胎土は157の皿に近似している。

161~163はスギ材を加工した曲物柄杓である。161-bは柄杓の曲物挿入部で、出土時は161-aの曲物容器に差込まれていた。その161-aの曲物は、口径12.3cm、器高8.2cmを測り、底に厚さ0.8cmの板が付く。底板の木釘止めは6カ所である。内容積は810cm<sup>3</sup>を測り、4.5合相当とみられる。162は径9.5cmの底板で、木釘が残ることから、内径3寸相当の曲物容器から脱落したものとみられる。163の曲物容器も164の柄と共に出土した。163は口径22.8cm、高8.2cmを測り、側面に径1.3cmの柄の差込み孔が開き、元は164の柄を差込んだ柄杓である。底板は厚さ1cmと厚く、外底に刃物痕が残る。容積は約2,680cm<sup>3</sup>を測り、1升5合相当とみられる。164は長さ57.6cm、幅1.8cmの柄である。上端部は不整形な六面体を呈し、手持ち部分は扁平な形状を呈する。

2点の柄杓は、SD06の水場で使用されたものが、柄の欠損により廃棄されたとみられる。同規模の柄杓は、県内の中世集落遺跡でも出土しているが、平安時代末頃と推定される製品が、柄の挿入部分で折れた状態で2点も出土している事例はみられない。



第67図 4区 SD06出土遺物実測図(S=1/3)

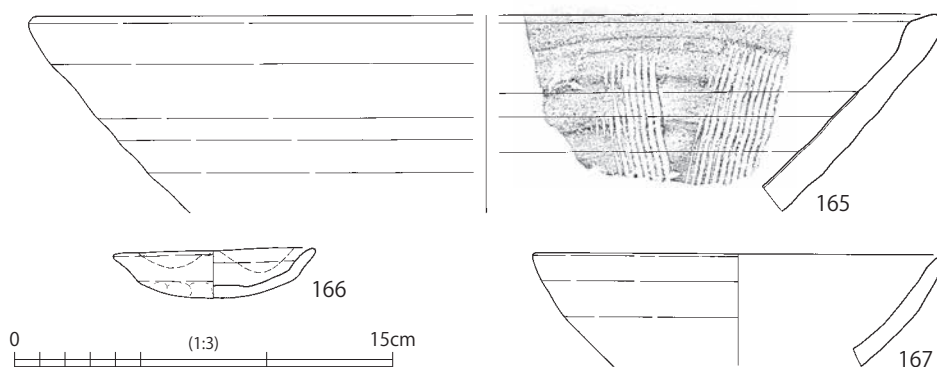
4- II区の出土遺物(第68・69図)

SD01・SX03(165~167)：4- II区で発掘した溝状の窪み(SX03)は、調査時は4- I区の南辺で検出したSD01の延伸部分と判断され、出土遺物が取上された。165は珠洲Ⅳ期頃のすり鉢で、口径35.8cmを測る。おろし目は3cm幅で、12本を数える。166は灰白色の胎土で、丸底は薄い。167は口径16cmの灰釉の平碗で、古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期とみられる。3点の廃棄年代は、15世紀中頃とみられる。

SX02・03(168~188)：SX02は4- II区の北側に広がる窪みで、SX03は南側の窪みである。両者の境は不明瞭であることから、第69図ではSX02の遺物を168~181に置き、複合するSD10を含むSX03の出土品を182~188に配した。

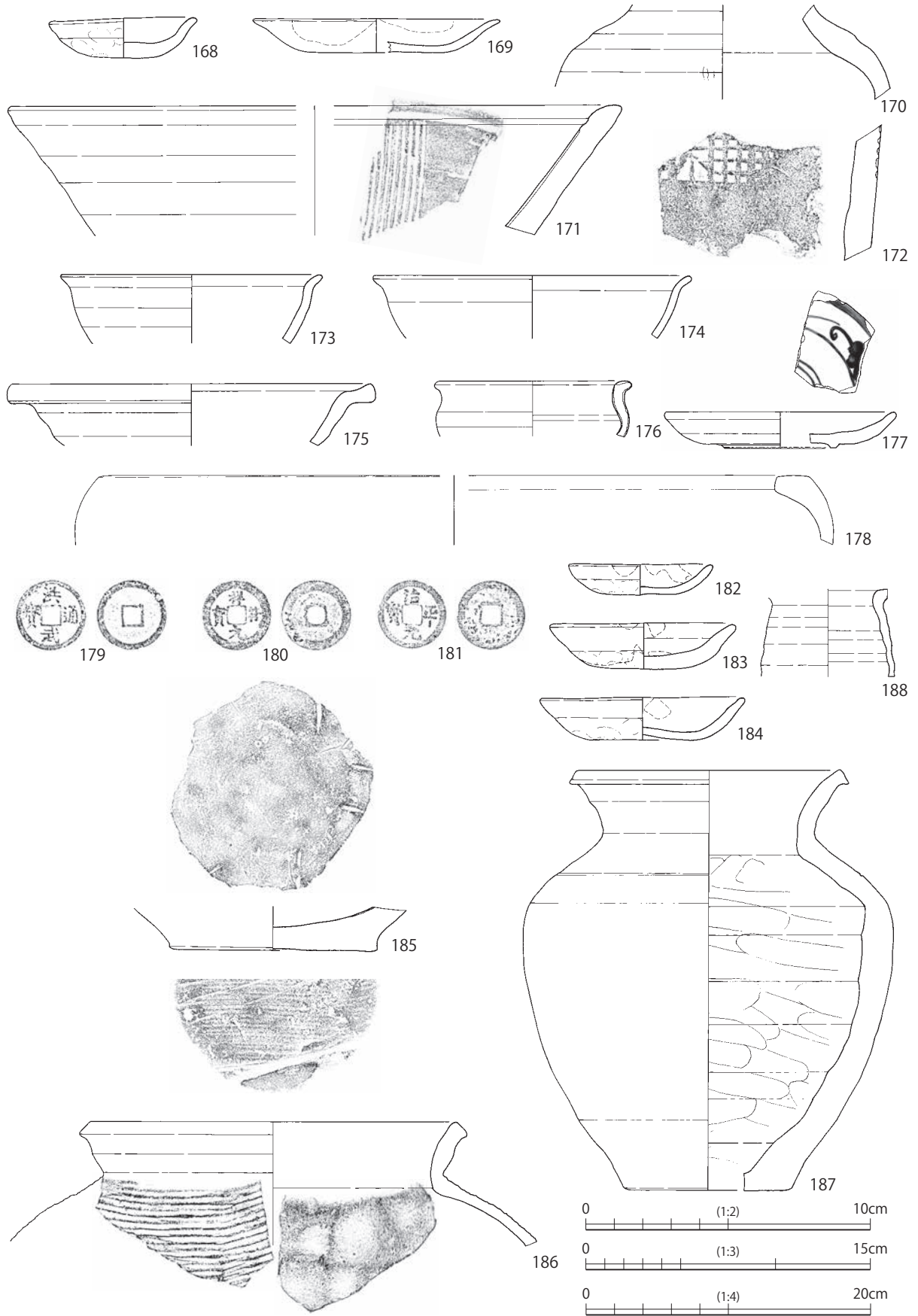
168の土師器はにぶい黄橙色で、丸底は厚手の造りである。169は口径12.8cmを測り、薄い器壁は浅黄橙色を呈する。170は珠洲の壺で、内外の調整からⅡ期のR種の双耳壺とみられる。171は越前のすり鉢で、172は灰色を呈する越前の大甕である。173は瀬戸の灰釉平碗で、古瀬戸後Ⅱ期とみられる。174は青磁碗で、外面のケズリは高く、搬入時期は14世紀後半とみられる。175は瀬戸の折縁中皿で、中期様式とみられるものの灰釉は被熱でかすれている。176は口径9.4cmの青磁香炉で、袴腰タイプの器形から、搬入時期は14世紀中頃と推定される。177は口径12cmの志野の丸皿で、内面の鉄絵は唐草文か。近隣から169の土師器と178の瓦質土器が出土しており、16世紀後半の遺物群とみられる。178の火鉢は、被熱により器壁の外側に剥離が認められる。179は洪武通宝、180は祥符元宝、181は治平元宝である。

182~184の皿は、胎土の質感から同じ窯場の焼成品とみられる。特に182の小皿と184の中皿は、調整痕も似ており、183を含め15世紀前半の所産か。185は珠洲のすり鉢で、おろし目が摩滅している。基本形状と胎土からⅤ期の製品と推定される。186・187は、SX03の上面で認められたSD10の出土品である。186は珠洲Ⅴ期の中型壺で、タタキは3cm幅9本と少し粗く、被熱で軟質化している。187の小壺は、復元の口径18.3cm、器高24.1cmを測り、肩に一条の沈線が巡る。輪積み整形の体部は厚手で、内面は粗いヨコナデとなり、底部と器面の調整は、瓷器系陶器の特徴を示す。海綿骨針を含む胎土と器面調整から、能登の志賀町の猪谷貯水池に窯跡群が所在する志加浦窯の製品とみられ、時期は13世紀中頃と推定される。188は肥前の小型の瓶で、内外に黒褐色の鉄釉がかかる。



第68図 4区SD01・SX03出土遺物実測図(S=1/3)





第69図 4区 SX02・03出土遺物実測図(S=1/2、1/3、1/4)

4-Ⅲ区の出土遺物(第70～80図)

SX06(189～274)：189～212は土師器の皿で、14世紀後半から1世紀ほどの時期差のものが混在している。189～195はSX06の中層で検出した土器溜り(図版21)で、222の瓦質土器の大鉢と共伴した土師器皿である。多くは平底形態を残し、立ち上がりの屈曲が強い。成形と橙色が強い胎土の特徴から、同一工房の製品であることを示している。類品は堅田B遺跡など近隣の中世遺跡に認められ、普正寺遺跡の地山面を標準とする形態を呈することから、14世紀後半から末頃と推定される。

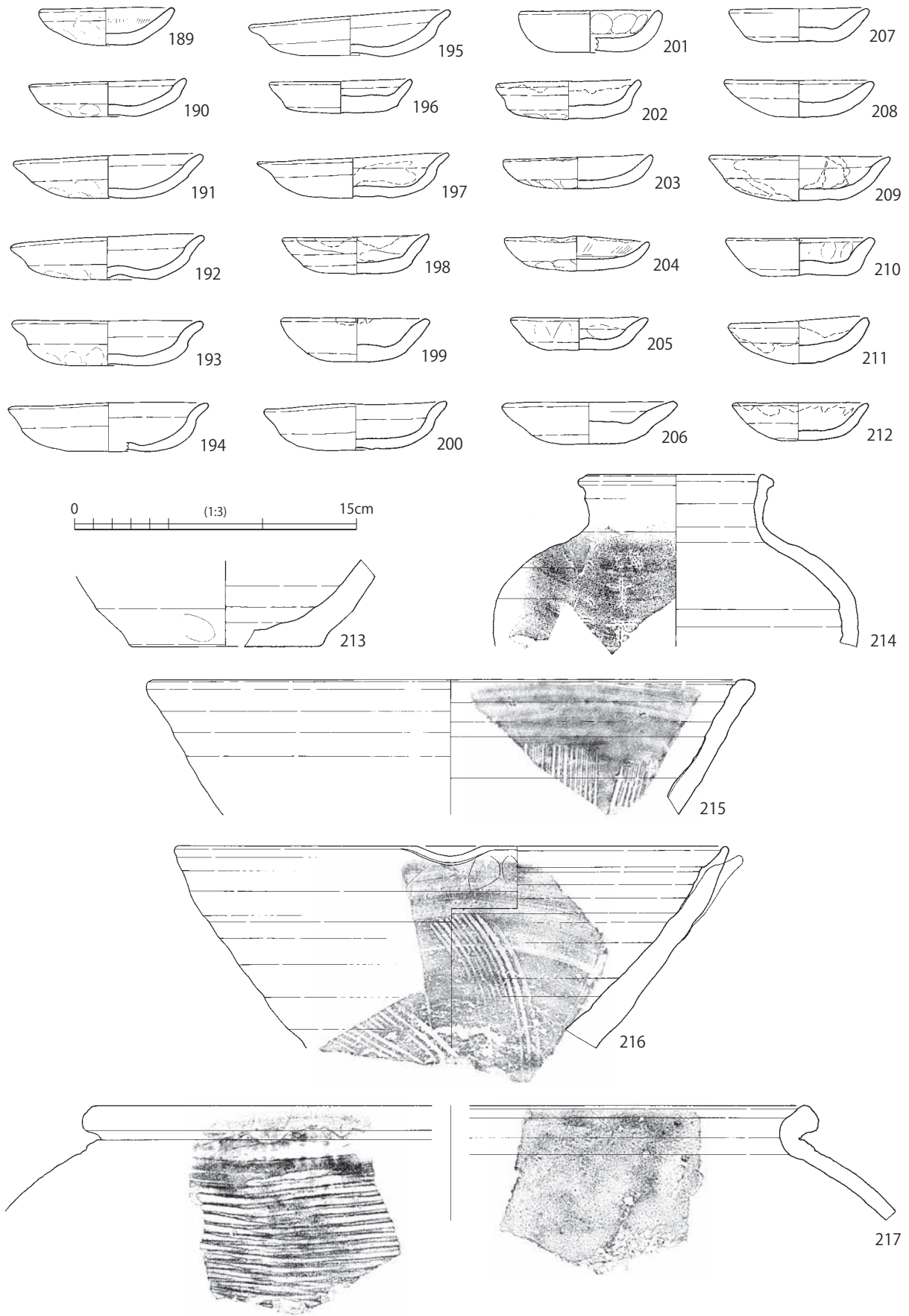
196～212の17点は、出土層位が不明瞭ながら、法量の小型化と底部の丸底化がみられ、15世紀前半代から15世紀代を推定できる。小皿の点数が増え、灯芯油痕を留めるものが多く見られることから、燈火具への利用増加が知られる。199と200は15世紀前半、205～208が15世紀中頃から後半、211と212は15世紀後半と推定している。

213～217は珠洲陶器である。213は底径10.2cmを測る壺で、内外面の調整からT種とみられる。胎土は灰白色を呈し軟質である。214は口径9.4cmの小型壺で、丁寧にロクロ整形された肩に2行の「四丈下／上□」の刻書がへら先で刻まれる。胎土と形状からⅡ期の製品とみられるものの、刻書の意味は不明である。215は口径31.8cmのすり鉢で、おろし目は4cm幅で14本と多い。口縁と体部の形状からⅣ期とみられる。216は口径29cmのすり鉢で、おろし目は3.1cm幅10本と粗く、Ⅴ期の製品であろう。217は口径38cm程の小甕で、タタキは3cmで8本と粗いⅣ期の製品である

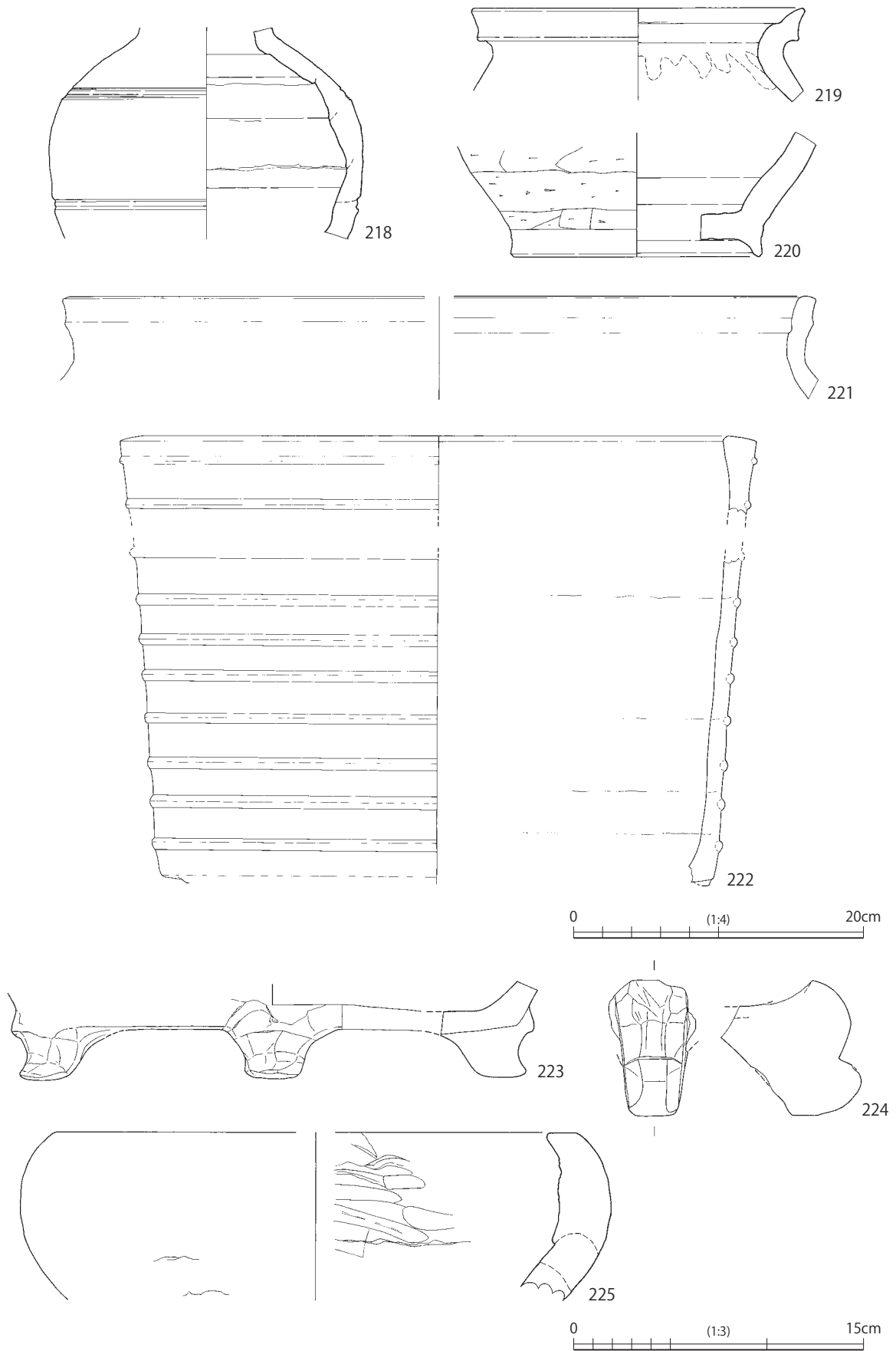
218～221は越前陶器である。218は三筋壺で、頸部径7cm、胴部径16.2cmを測る。焼成は良好で肩と胴部の筋は幅広である。また肩に降灰がみられ、越前Ⅰ期の焼成品であろう。219は口径17cmを測り、越前Ⅲ-1・2期の小甕とみられる。220は高台径13cmを測る片口鉢で、内面に高台重焼の痕跡と焼窪みをもつ。221は推定口径51cmの甕である。

222～226は瓦質土器の鉢類である。222はSX06の中間層において、土師器皿(189～195)と一括廃棄されていた大型の瓦質土器である。復元口径は40cm、器高は30cm以上が見込まれ、黄灰色の側面にある隆帯は10本を数える。平底の縁に三足が付くものとみられ、224がその可能性がある。器形と法量からして花盆の可能性が高い。底の穿孔は不明である。近くの石積01からも、花盆とみられる小型の瓦質土器(312)が出土している。223の鉢は底径25.2cmで、体部と支脚の造りから火鉢とみられる。224の支脚は、高さ6.9cm、厚さ3.2cmを測り、胎土と形状から222の鉢の支脚である可能性が高い。225の胎土はにぶい橙を呈し、輪積み成形の体部は厚手となり、内面の調整は荒い。橙色を呈する粗い胎土と形状から铸造用の鋳型とする指摘もあるが、過年度に報告している鉄鍋用の鋳型(『梅田B遺跡Ⅱ』SX19出土遺物)とは、胎土と形態が異なり別製品である。口縁部の成形と外面調整からして、在地生産された火鉢とみられる。226は胎土と調整から火鉢の底部である可能性がある。

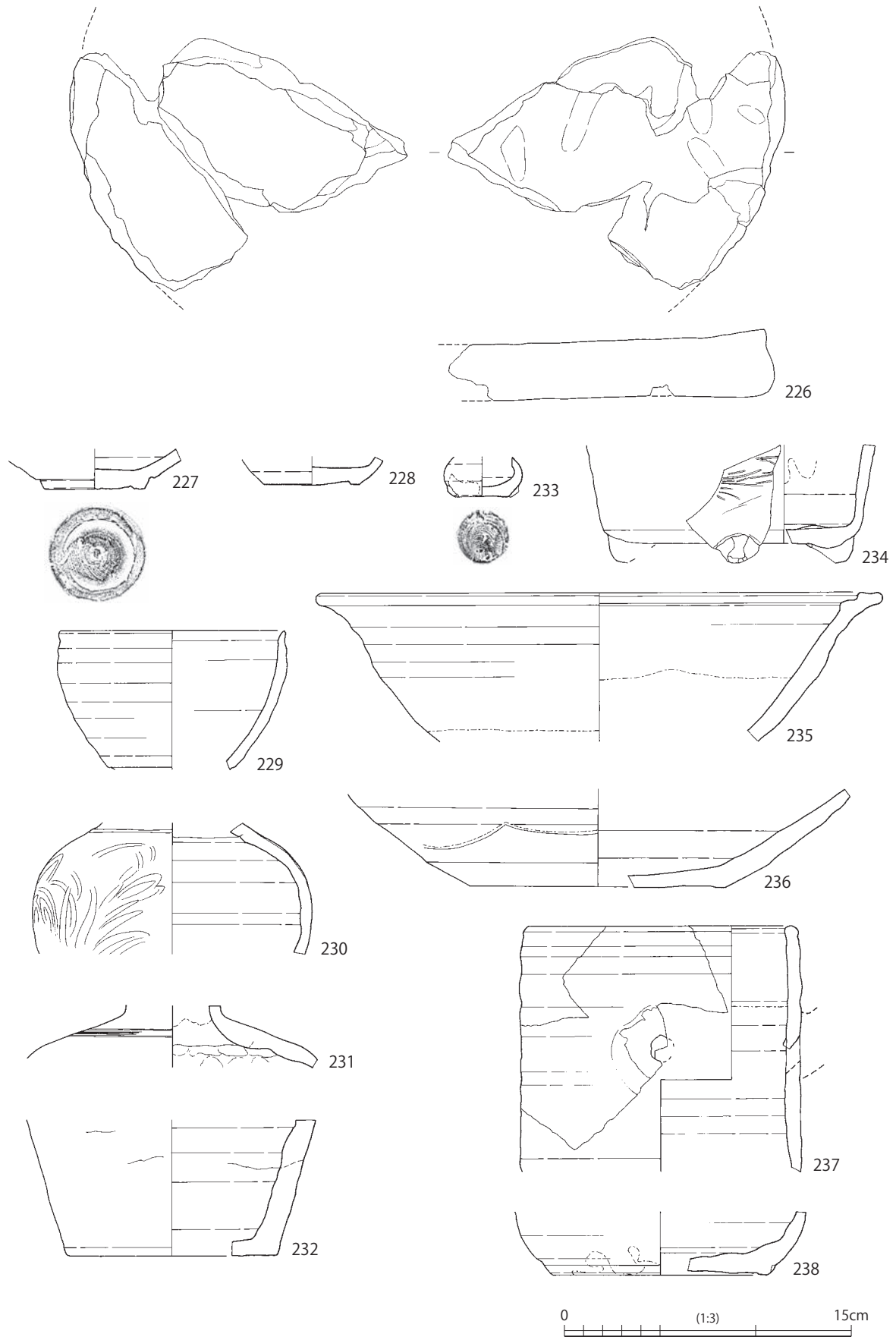
227～238は瀬戸製品の一群で、その構成は碗皿に加えて、瓶子、水滴、香炉、筒型容器と多器種が揃う。本遺跡出土の瀬戸製品なかでも、纏まりがある遺物群として評価できる。227は灰釉の平碗で外底に墨書が認められる。228は瀬戸・美濃の丸皿で、内面には灰釉がかかる。大窯第2段階の製品とみられる。また229は瀬戸・美濃の天目茶碗で、大窯第1段階とみられる。230～232の3点は灰釉の瓶子で、胎土と釉調から231と232は同一個体である可能性が高い。230は締腰のタイプの瓶子で、古瀬戸中期Ⅰ期の製品か。また231は古瀬戸中期でも、Ⅲ期頃の下る瓶子Ⅱ類とみられる。233は鉄釉の水滴で、胴部径は4.1cmと小さい。234は胴部径15cmの筒型香炉で、外面の灰釉はハケ塗りともみられ支脚にも及ぶ。古瀬戸中期とみられる。235・236は古瀬戸後期の折縁深皿である。237・238は形態から筒型容器とみられるが、胎土と調整からみて別個体であろう。237は口径13.7cmを測り、直立する口縁は丸みが強い。外面には凹線状の沈線が巡り、内面の灰釉は口縁の下3.2cmまで及ぶ。体部



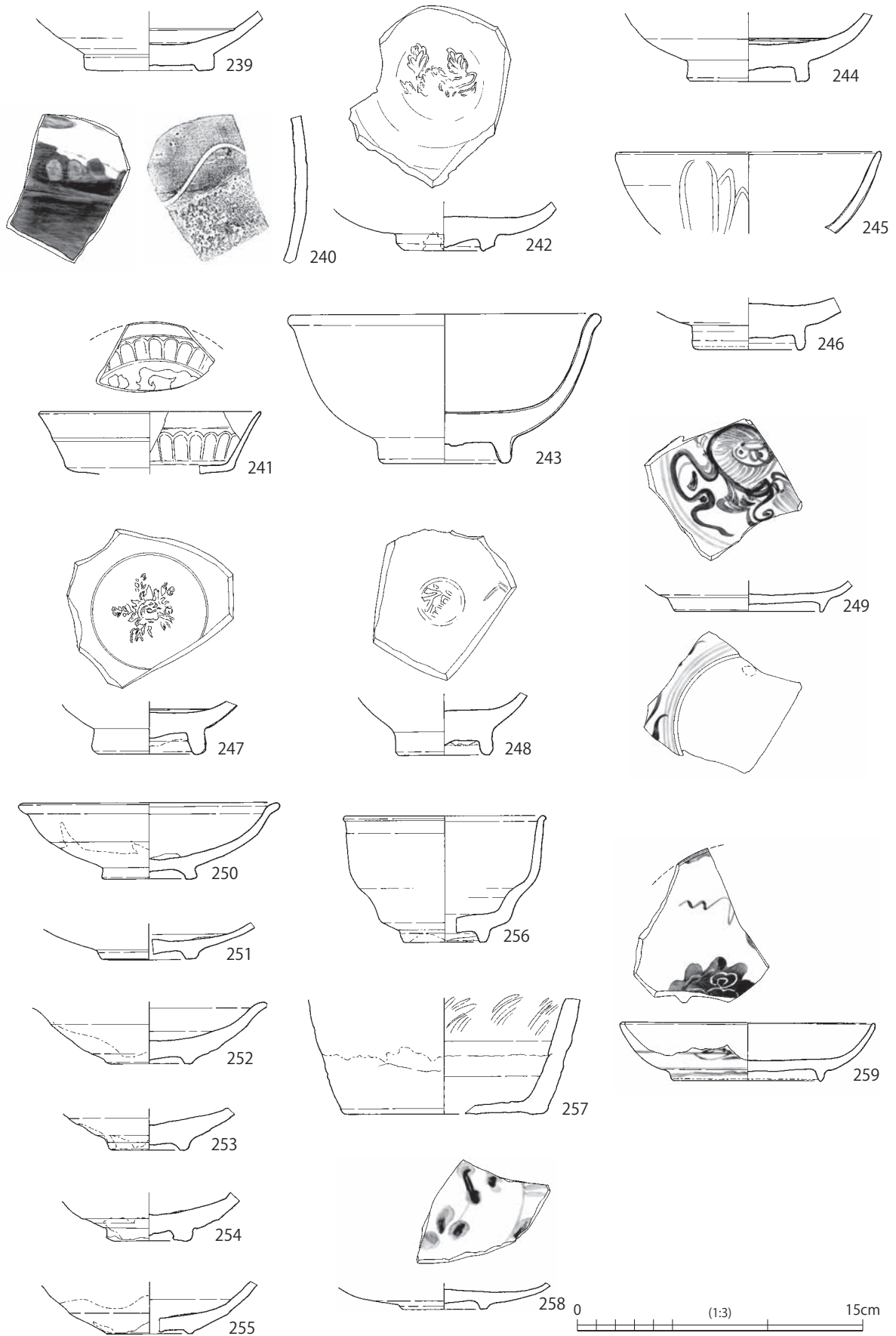
第70図 4区 SX06出土遺物実測図1 (S=1/3)



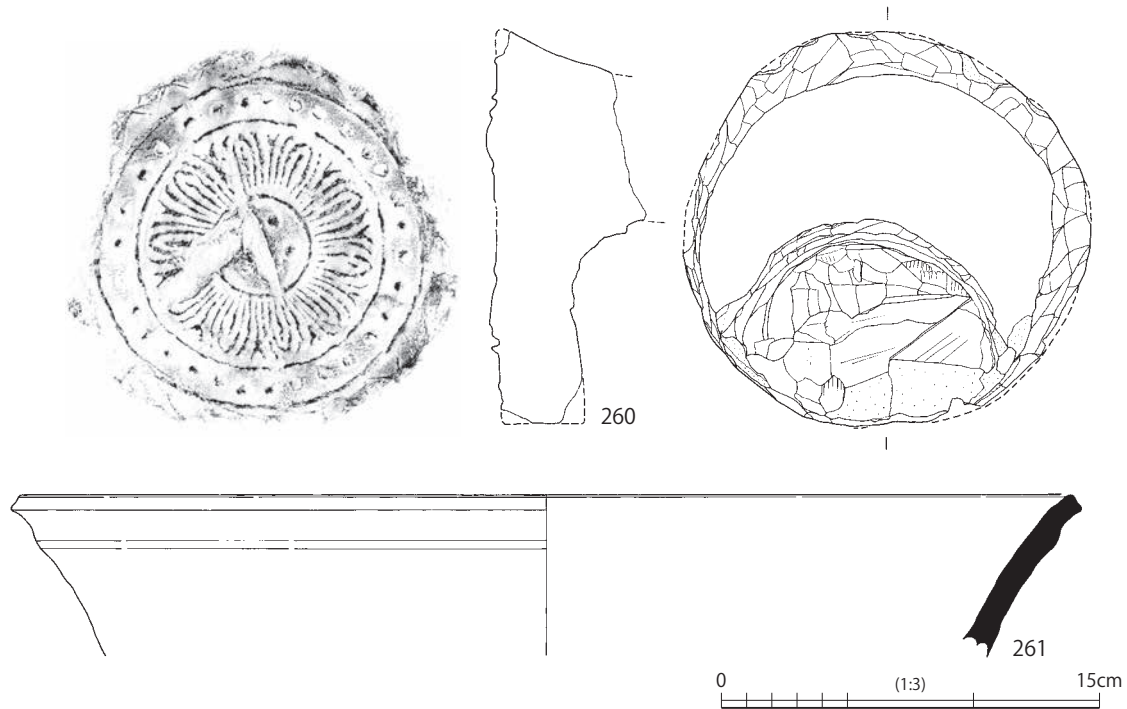
第71図 4区 SX06出土遺物実測図2 (S=1/3・1/4)



第72図 4区 SX06出土遺物実測図3 (S=1/3)



第73図 4区 SX06出土遺物実測図4 (S=1/3)



第74図 4区 SX06出土遺物実測図5 (S=1/3)

に穿孔と注口の接合痕が残り、把手が付かない水注容器である。石川県内では筒型容器の出土は少ない。238は高台径11.2cmの製品で、外面の灰釉は削り出しの高台まで及んでいる。

239～249は中国製の陶磁器で、碗類が多い。239は高台径6.8cmの白磁碗で、白磁碗Ⅳ類に同定される。240は褐釉陶器の体部片で、一条の波状沈線から12世紀代の四耳壺の肩部片である。241は口径11.5cmの青白磁の坏である。242～248は龍泉窯系の青磁碗で、14世紀後半～16世紀前半の時期幅がみられる。242は体部下半から高台の削り出しがシャープで、オリーブ灰の青磁釉は透明感が強い。14世紀後半～15世紀前半の端反碗とみられる。243の端反碗は、青磁釉が厚く、高台内の釉を蛇ノ目に削る。244も同種の碗である。245は口径13.6cmで青磁釉は厚い。へら書き沈線の蓮弁文が巡り、15世紀前半～中頃か。248は高台径5.1cmで、緑灰色の青磁釉は透明感に欠け、外底の釉を蛇ノ目状に削る。内底に丸福の印字文を入れ、体部に縦の沈線が確認されることから、249の染付皿と共伴する線描き蓮弁文碗である。249の染付皿はB1群Ⅶの製品で、見込にある玉取り獅子文の発色は良く、割口には漆継ぎが認められる。

250～259は肥前の陶磁器製品である。250と252は胎土目痕を残す皿で、251は砂目痕が残る皿である。253～255の3点は砂目痕の碗である。256は口径10.4cmの腰折小碗で、灰オリーブ色の釉がかけている。257の甕は底径10.4cmを測り、内面に青海波の当具痕がみられる。

258と259は初期伊万里の皿である。

260と261は古代の遺物である。260は面径15.5cmで、瓦当の文様が単弁10葉蓮華文とみられることから奈良時代の軒丸瓦である。瓦当文と胎土から、金沢市東部に窯場が所在する末窯産の焼成品と考えられる。261の須恵器は口径41cm強の甕で、内外に自然釉が降りかかる。

SX06では、土器溜まりと記録した土師器の一括出土がみられ、橙褐色の整地層からは下駄の片方が出土している。また小木片の混入がみられた19・23・24層からは、曲物の荒型が出土している。

262は前歯が欠損した露卯下駄で、主に右足使用の指痕がみられる。台板はヒノキ材で、長さ18.8cm、横幅10.8を測る。歯は高さ9.2で用材は針葉樹である。263は底部の中央が穿孔された漆器碗で、木地はブナ属である。264は径6.7cmの針葉樹の円盤であり、荒削りの側面から曲物底の荒型である。265の連歯下駄は、台長22.8cm、横幅9.2cmを測り、用材は針葉樹である。台板のすり減りが強く、左足使用の足形が残る。

266と267は横口式の行火で、共に方形の軽石凝灰岩を刳抜き整形した暖房具である。226は奥壁から側面の部位で、267は天井から奥壁の破片である。268は火山礫凝灰岩の加工品。請花の特徴から加賀型宝塔の剥離片とみられる。269の磨製石斧は、長さ11.1cm、幅5.5cm、重さ418gを測る。270は剥片石器である。271は径21.6cmの凝灰岩の円盤状で、両面に打撃による窪みをもち、台石利用の可能性が考えられる。272は北宋の祥符通宝、273は鋳銅製の刀装具である。

274はSX06の上面に位置したSK06出土のおろし皿で、古瀬戸後期様式Ⅱ期とみられる。

SX07(275・276)：275・276とも火山礫凝灰岩の石臼であるが、臼面のすり減りと上縁形状から新旧が認められる。275は臼面径26cmを測り、臼面の反り上がりから長期使用が知られる。276は臼面の径29cmと大きく、すり減りも少ない。主溝は8分画に入り、副溝は目立てにより乱れがあり、上縁と側面の直立形態から16世紀前半代と推定される。

277はSD17の南にあるPit33から出土した石臼で、上縁形態は276に近似していることから、本項に掲載した。臼面のすり減りが激しく、当初の挽き手孔が半分以上失われている。

SG01(278～310)：古代から近世前期の出土遺物がみられたが、これは中世の堆積層に古代の遺物が混入し、その上半を近世の整地土が被っていたことによるものとみられる。

278は須恵器の台付瓶で、胎土から能登の鳥屋産とみられる。279は口径12.2cmの内黒碗である。280は口径22.3cmの須恵器の壺で、胎土の特徴から本遺跡の南600mほどに所在する観法寺窯の製品とみられる。281の須恵器の瓶は、底部片に木葉痕が残り、高松産の意見がある。282の皿と283の碗は、本遺跡で消費が目立つ土師器である。284は白磁碗Ⅳ類で、口径17.5cmを測る。285と286の土師器皿は胎土が橙色を呈し、平底を基本とする形態から13世紀後半代の所産であろう。287と288の小皿は、平底ながら14世紀代に下る。289～292は丸底形態となり15世紀代の土師器皿で、とくに290～292の3点は15世紀後半とみられる。

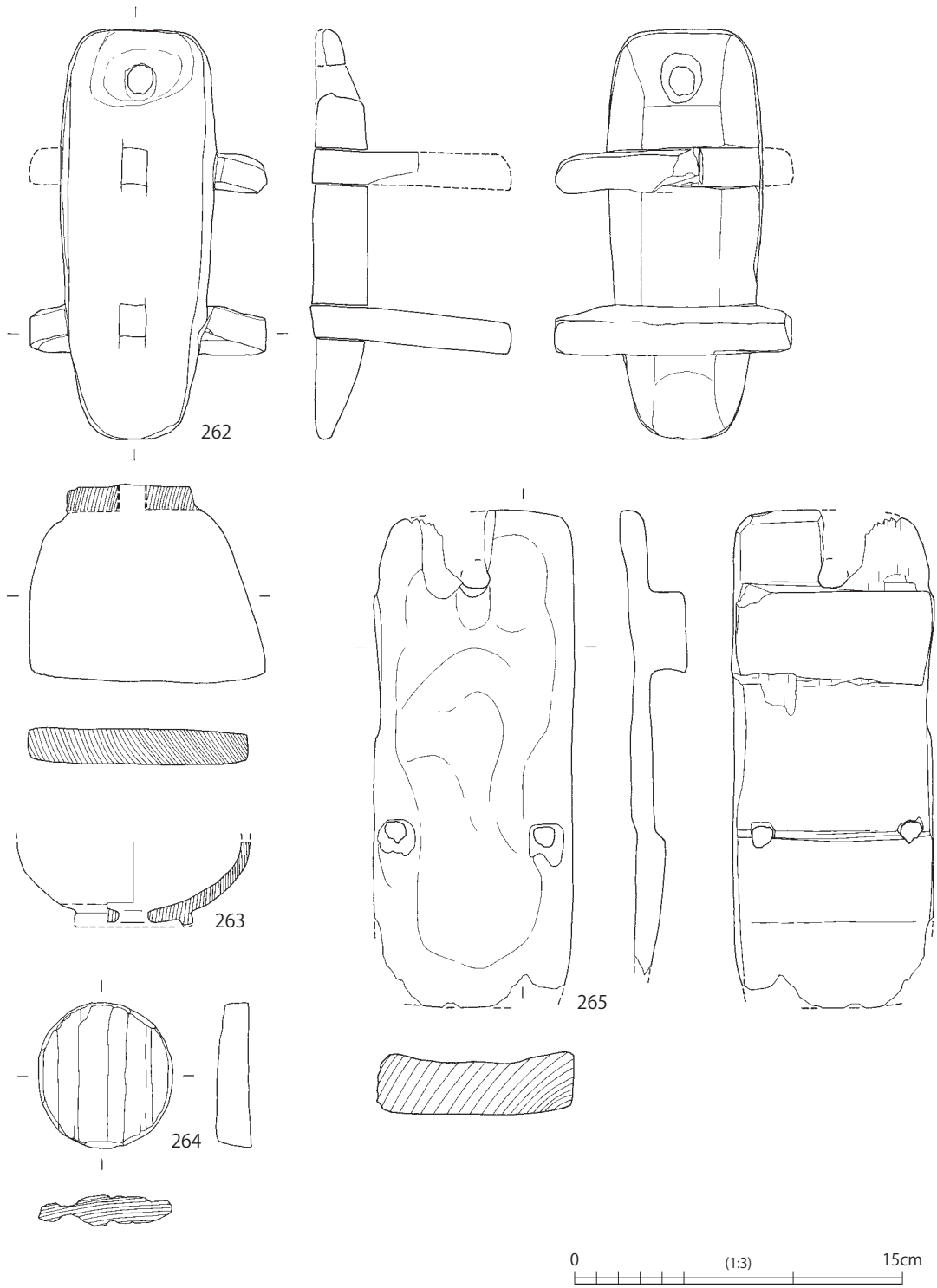
293は加賀のすり鉢で、口径37.8cm、底径13.7cmを測る。胎土と直線的な体部、幅1.8cmのおろし目からして、那谷ダイテンノウダニ窯で13世紀中頃～後半に焼成された可能性が高い。294は加賀の甕。295は加賀の壺で、頸部が狭く大形の製品。胎土から湯上ユノカミダニ窯の製品とみられる。296は信楽の小壺で、口径7.5cm、高さ16cmを測り、肩部に「信楽」銘の刻書をもつ。

297は瀬戸灰釉の花瓶で、298は筒型香炉である。共に古瀬戸後期のⅣ期頃か。299の青磁碗は、「顧氏」とみられる印文が内底にあり、線描き蓮弁文の製品とみられる。300は端反の白磁皿である。301は肥前の雑釉の碗である。302は近世の肥前波佐見の青磁大皿である。

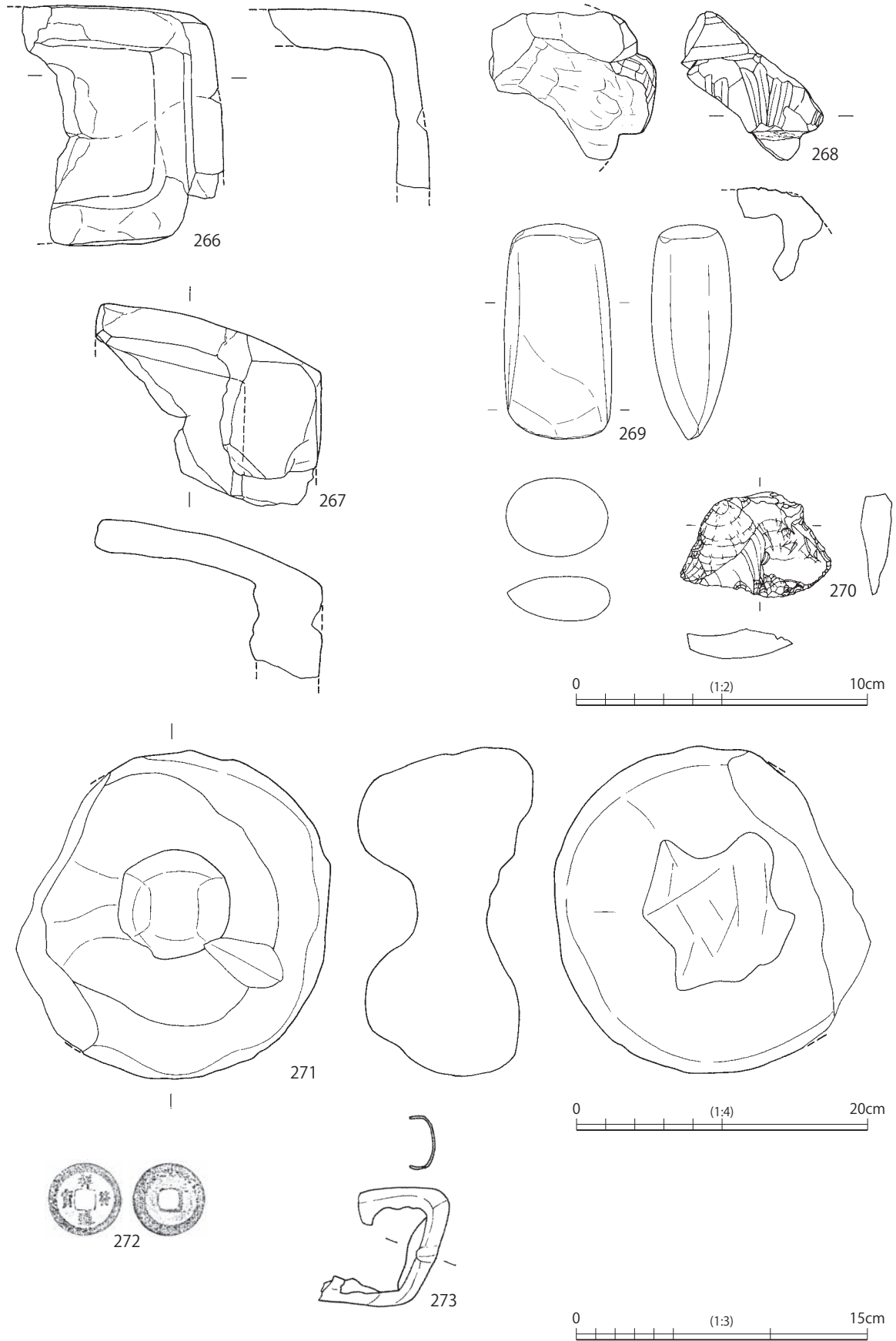
303は高台径9cmの漆器碗で、外面黒、内面赤の漆塗りが残る。304は鉄製の二爪熊手で、柄の幅1.8cm、釘孔径0.6cmを測る。二爪の類似品は福井県一乗谷朝倉氏遺跡にあり、富山県の加納谷内遺跡では三爪の製品がみられる。305は北宋の「熙寧元宝」か。

306は裏面に側足を備えた高嶋硯で、被熱で赤色化している。足幅1.1cmを測り、陸の窪みは左側へ寄り、16世紀後半の文房具である。307は滑石製の石板で、表裏とも石面が湾曲するが、石鍋の整形跡は認められない。穿孔を失うが、元は11.2cm×9.5cmほどの温石とみられる。13～14世紀の採暖具とみられる。308は左側面に整形痕を残す砥石で、流紋岩から中砥石に分けられる。石質の質感から





第75図 4区 SX06出土遺物実測図6 (S=1/3)



第76図 4区 SX06出土遺物実測図7 (S=1/2・1/3・1/4)

みて、福井県一乗谷朝倉氏遺跡の谷奥で産出した乗慶寺砥石に比定できる。309は五輪塔の風輪部で、側面に細かい整形痕を残す。310は緑色凝灰岩の石鉢で、内面に粗いおろし目を刻む。

石積01 (311・312)：311は積石に組み込まれていた宝篋印塔の笠である。四隅突起や側面の欠損等から倒壊した宝篋印塔が転用されたと考えられる。また、312は瓦質土器の三足鉢で、法量と受口状の口縁部にみられる波状隆帯は、香炉などの器形にはみられず、獣脚的な三足から小型の花盆と考えられる。胴部に巡る亀甲文は長さ1.5cmで、海綿骨針を多く含む胎土から在地産とみられる。

#### 4-IV区の出土遺物(第81～89図)

SD18 (313～362)：第81図の313～321と第82図の327は、SD18の下部から出土した弥生時代後期の土器で、天王山式土器と呼称される一群である。口縁から外面に被熱変色やススの付着が多い。

313は口径28cmに復元できる甕で、口唇部と内面に縦キザミを入れる。外面は斜行する捺糸を巡らしたうえに、口縁と頸部に2条の沈線を入れ、上向きの連弧文をヘラで刻んでいる。314は頸部の沈線より下に重菱形文がみられる。315は口径が30cmに復元できる甕で、口縁の端部に突起を作り、口が緩やかに波状となる。斜行する縄文が口縁端部から外面に広がるが、沈線文様はみられない。

316の口縁と同部は同一個体とみられるものである。口唇部の内外に縦キザミ、その下に2条の沈線を入れ、外面には連弧文、同部に山形文を刻んでいる。

317は口径26cm、底径8.5cmを測り、器高30～40cmほどの甕が復元される。口唇部の両面に縦キザミを巡らす、外面は粗いナデで施文はみられない。318は口縁が波状となり、外面に条痕、縦キザミ、連弧文がみられる。319も口縁が波状となり、斜行する捺糸が口縁端部から外面に施される。

320の甕は、口縁端部にキザミ、頸部に沈線、胴部上半に重菱形文を巡らす。また321は甕の胴部上半で鋸歯文、山形文、重菱形文がヘラで刻まれている。

327は口縁が波状を呈する甕で、口唇部の縦キザミや2条沈線、連弧文は316に近い製品ある。

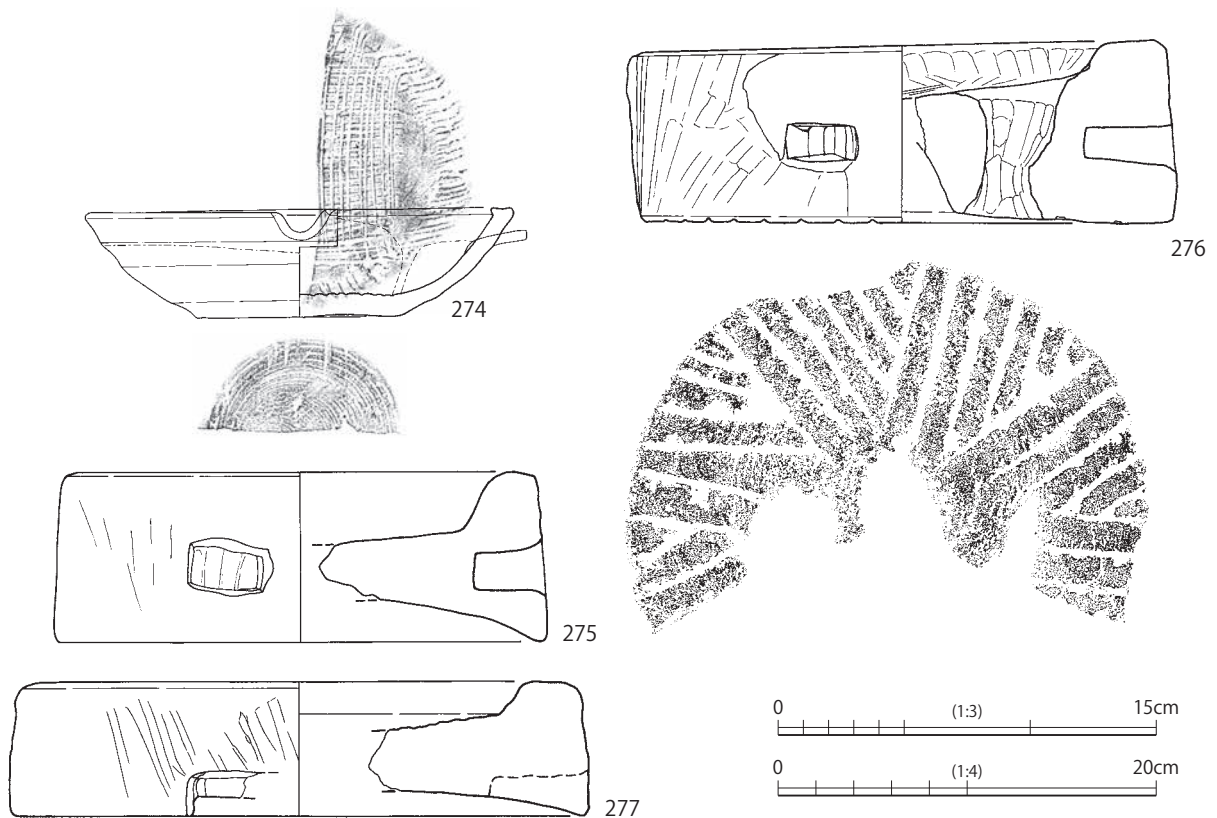
本遺跡においては、これら天王山式土器が、調査区の下層もしくは、深い溝などの遺構から出土している。集落としての展開も予想されるが、弥生時代後期後半に起きた大規模な地震と、その後の土砂災害もあり判然とない。

322は土師器の壺で、口径19.3cmと開き、擬凹線は11条を数える。323と324は土師器の壺で、器面は摩耗している。325は土師器の甕で内外の調整を残す。

326は完形の須恵器の坏である。口径10.8cm、器高3.7cmを測り、外底に漆の付着がみられる。田嶋編年Ⅳ-1・2期とみられ、9世紀後半と推定される。SD18からは斎串、人形、陽物などの木製祭祀具が出土しているが、それらに共伴する可能性が高い。

328と329は土師器の皿である。328は底径5.2cmを測り、底の中央に径6mmの穿孔がある。にぶい黄褐色を呈する普通の土師器であるが、穿孔は焼成前のものであることから、特異な用途を意図した製品である。329は底径5cmで、柱状高台とみられる形状を呈する。底の穿孔は検討を要するが、時期は228より後出とみられ、Ⅶ2～Ⅶ3期に比定される可能性が高い。

330～338は曲物製品とその底板である。他の木製品や部材と一緒に、SD18北半部の中間から下半の堆積層から出土している。スギ材の利用が多く、底板の側面には木釘が残る。330は直径12.2cmを測り、径四寸の底板である。331は直径15cmで、底板に歪みと欠損がある。側板の一部が付随したが、器高は不明である。332の曲物は口径17.5cm、器高5.1cmを測る。側板はヒノキ材、底板はスギ材が使用され、部位により用材が異なり古代の製品か。333の底板は直径が16cmを越え、2枚の板が接合されている。334は直径18cm、336は直径18.4cmを測り、共に径六寸相当の底板である。また336の「×」印は、火箸による焼印とみられ、合点の可能性が高い。337は直径23.9cmを測り、八寸相当の底板で

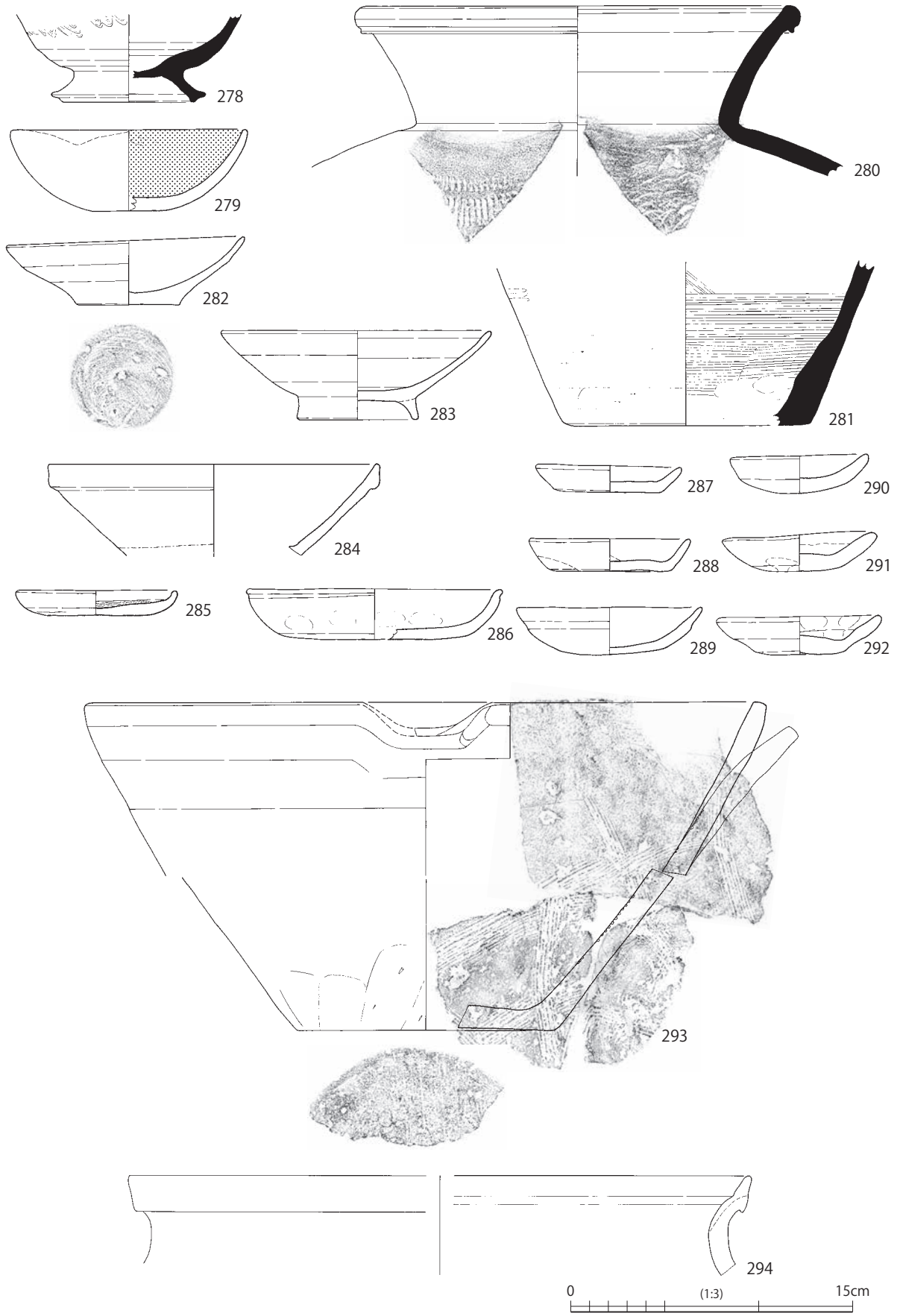


第77図 4区 SX06・07出土遺物実測図(S=1/3・1/4)

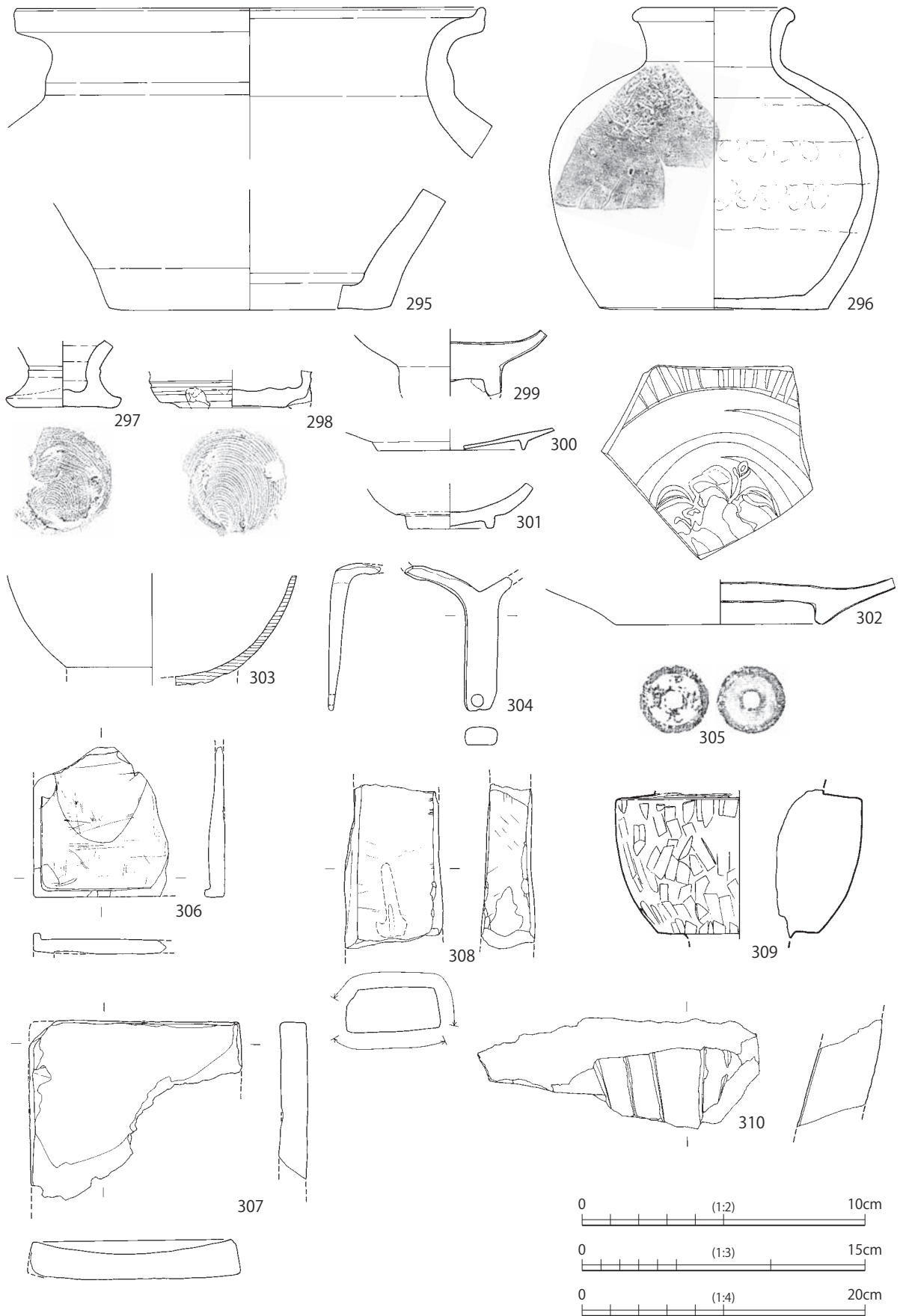
刃痕が多い。まな板利用されたものである。

339・340はスギ材から削り出した丸棒で、2点とも下端が細くなるように整形されている。曲物柄杓に使用した柄の未成品もしくは、製品とみられる。339は径2.1cmと太く、下端の尖りも不整形である。340は径1.5cmと細いが、削りが粗く細身となる箇所もある。

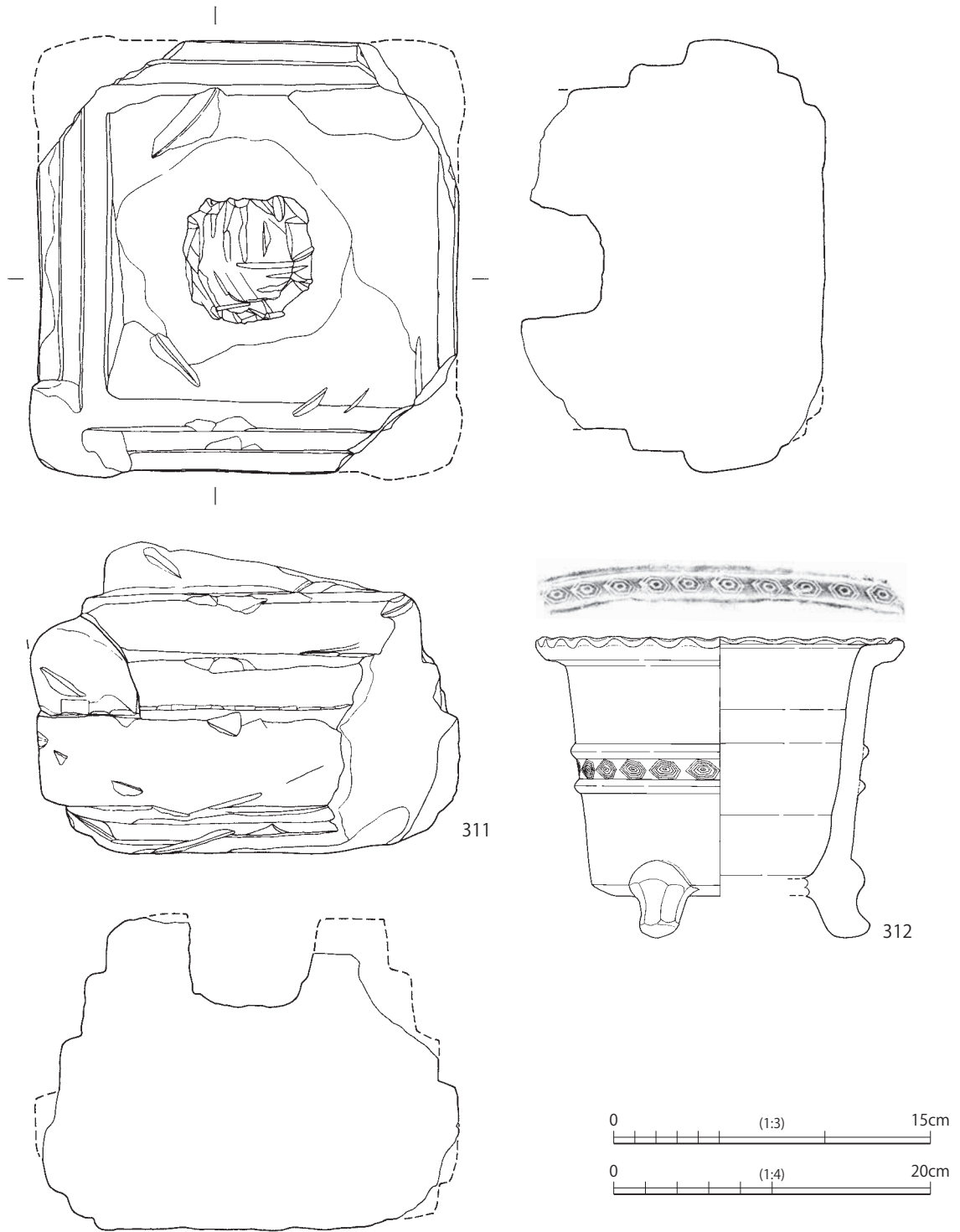
341は方形容器の側面に丸棒形態の把手を削り出した製品で、出土の層位から古代の遺物である。アカ取りと呼ばれる水汲み容器の可能性が高い。把手と容器側面の形状からすると、水を横方向にすくい取る機能が推定される。また、342は長さ39cm、横幅5.6cm、厚さ2.5cmで、糸柁の組物部材とみられる。下端は直角に近く、上端は片切的に尖る。背とみられる側面は、整形と使用により丸みをもち、反対側に縦長のほぞ穴を上下に開け、横から木釘を打ち込み固定したものである。その形態的な特徴から糸柁の柁木に比定できる。東村純子の研究(2011『考古学からみた古代日本の紡織』)によると、39cmで一尺三寸相当の柁木は、大型の糸柁に分類される。



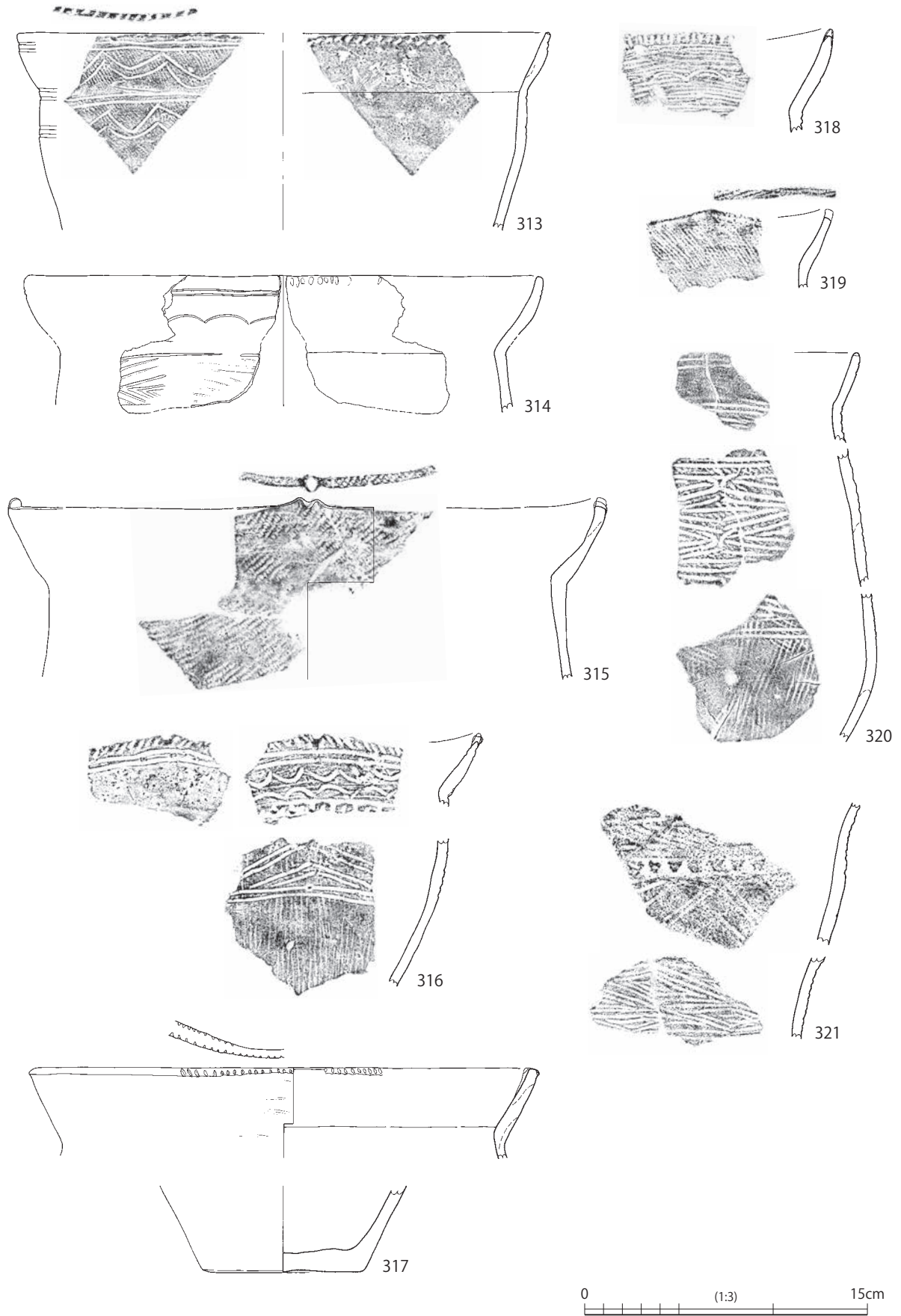
第78図 4区 SG01 出土遺物実測図1 (S=1/3)



第79図 4区 SG01 出土遺物実測図2 (S=1/2・1/3・1/4)

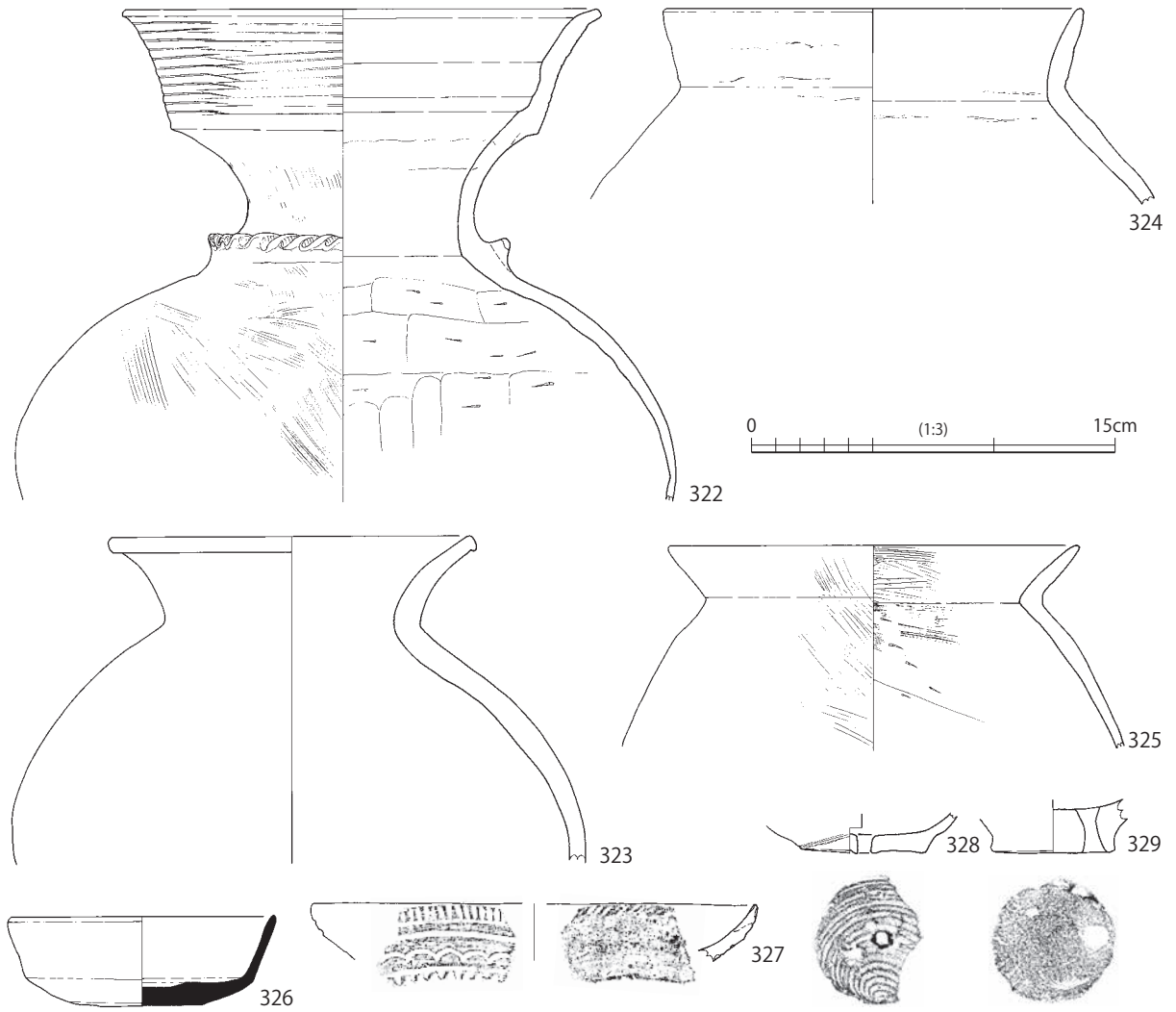


第80図 4区石積01出土遺物実測図(S=1/3・1/4)



第81図 4区 SD18出土土器実測図1 (S=1/3)





第82図 4区 SD18出土土器実測図2 (S=1/3)

343～345は古代の木製祭祀具で、346の弓も寸法から祭祀具であった可能性が高い。343は長さ12.3cmの斎串である。344は長さ15.6cmの人形で、顔面の墨描きが残る。2点とも用材はスギで、厚みと幅は、斎串、人形とも近似している。345は整形が粗いながら、その形状から陽物とみられる。長さ15.2cm、幅3.6を測る。346は径1.8cmのカヤ材の丸棒で、片側に面を削り出す。上端はやや扁平となり、抉りもあることから、カヤの枝木を加工した小型の弓である。

347・348はスギ材の丸棒で、曲物柄杓の柄とみられる。347は長さが127.9cm（四尺二寸相当）と長い。径は2.7cmで、下端を尖らせる。ほぼ完形であるが、側面の削りが荒く、長柄の未成品とみられる。348は長さ102cm（三尺三寸相当）を測り、両端を失う。

349・350は幅2.1～2.5cm、長さ74cm越えるスギの細板である。板目に沿った割材の形状からみて、柄の製作時に生じた端材とみられる。351は長さ80cmを越え、352も105cmを越えるスギの割板である。上下で厚みが異なることから、曲物の用材から除外された辺材とみられる。

353・354はスギの矢板である。353の上部にみられる縦長の穿孔は、ほぞ穴とみられる。355は厚さ4.6cm、長さ126cmのスギの板材である。下部に残る方形の縦長の穿孔は、14cm×7.5cmと大き、材木の末端に空けられた「鼻ぐり」であろう。356は長さ137.5cmを測る針葉樹の辺材である。

357は板杓子を推定させる形状を呈するが、長さ48.5cmと長く、整形も荒いことから未成品とみられる。358～360の3点はスギ材の端材である。鉋や斧で、材木の端に残る「鼻ぐり」などの突出部を切断したものとみられる。361も端材とみられる。362はスギの用材片で、幅20.7cm、厚さ6.6cmを測る。上端の窪みは材木の「鼻ぐり」であった可能性が高く、そのことで端材となったものか。

出土した木製品には、柄の未成品や辺材、材木の「鼻ぐり」や端材が多く、SD18の近隣で実施された曲物生産を強く反映したものとみられる。

#### 4区 SD出土遺物(第90図)

4-I区、4-III区、4-V区の溝や包含層から出土した遺物である。

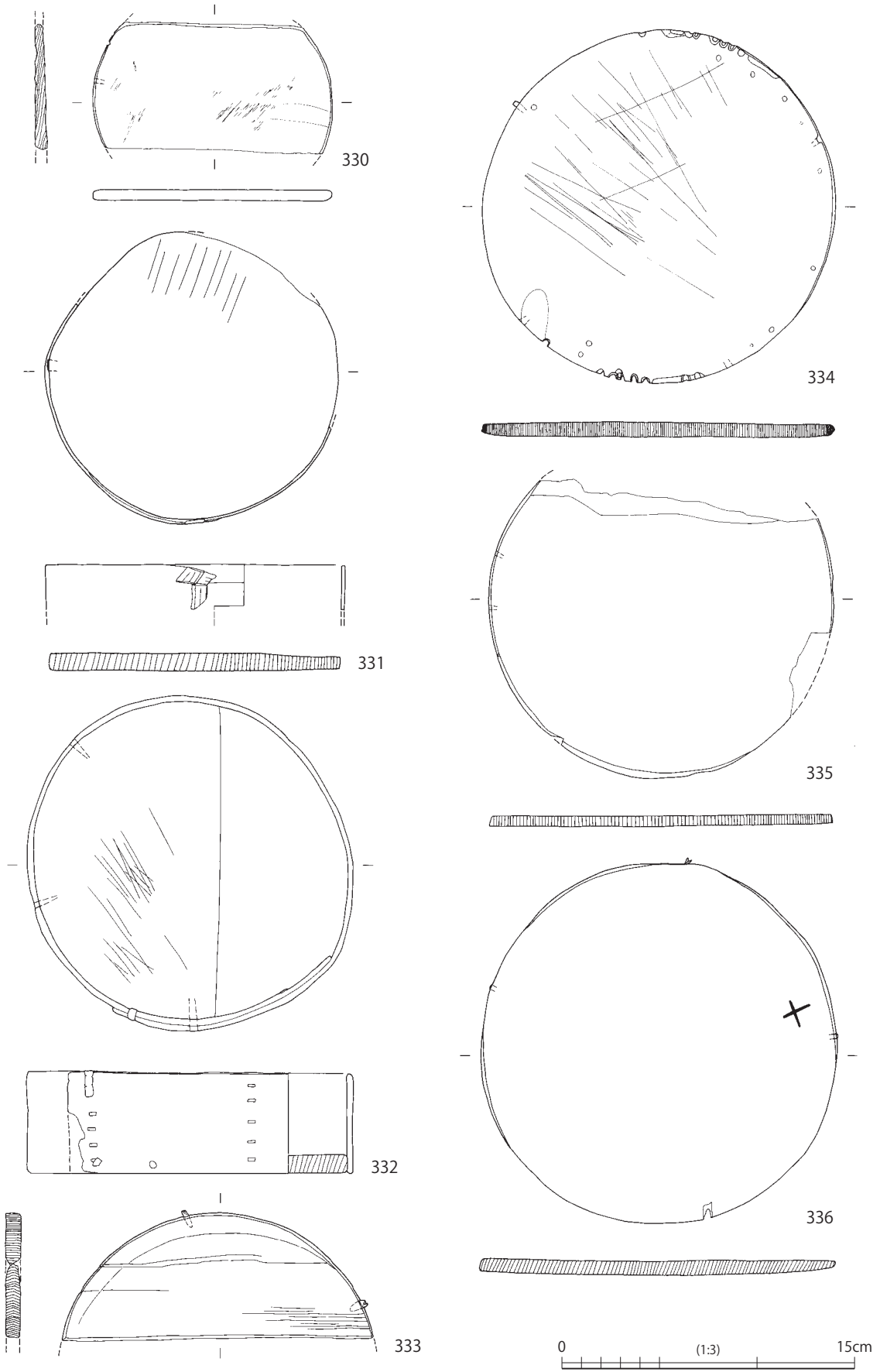
SD04 (370) : 4-I区のSD01上面にみられた溝状で、渡来銭の聖宋元宝である。

SD12・SD13 (363～366) : 4-V区の北部に位置する東西溝の遺物である。363は口径15.7cmを測る小型の羽釜である。外面には煤が付着している。11世紀代の煮沸具とみられる。364は白磁碗V類とみられる底部である。365は龍泉窯系青磁碗の底部で、外面には線描き蓮弁文の下端が認められる。366は銅製の雁首である。

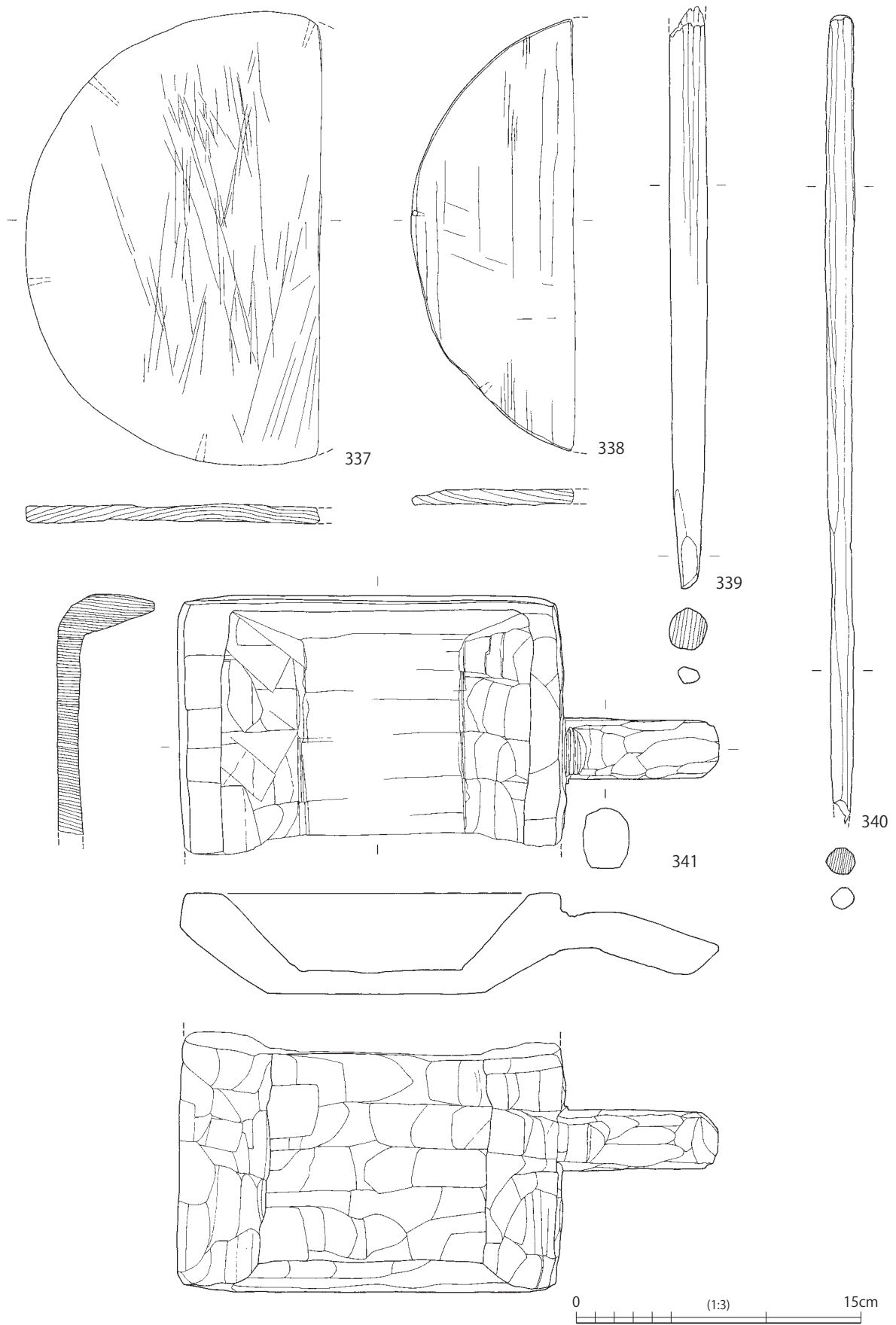
SD14 (367～369) : 4-V区の南部に位置する溝の須恵器で、3点ともほぼ完形品である。367と369は口径12.5cm、高さ3.4cmと同一法量をもつ無台の坏である。368の墨書土器は口径12.7cm、器高3.9cmの有台坏で、外底に「本」とみられる墨書が残る。田嶋編年IV-1期の製品とみられ、9世紀後半と推定される。胎土の特徴から金沢市内の末窯産とみられる。

SD15 (371～373) : 4-III区の北部、SX06の上面で認められた溝状の窪地の出土遺物で、SX06に包括されるものである。371は口径7cmの土師器皿で、灯芯油痕を残す。372は高台径5cmの龍泉窯系青磁碗で、透明感のあるオリブ灰の青磁釉と双魚の印文から、14世紀末～15世紀前半とみられる。373は珠洲焼R種で、肩部と底部から器高25cmほどの小壺が復元される。珠洲III～IV期の製品とみられる。乾燥した漆が肩部の内面に付着しており、底にも漆溜まりが残ることから、漆の運搬容器として能登方面から搬入された可能性がある。

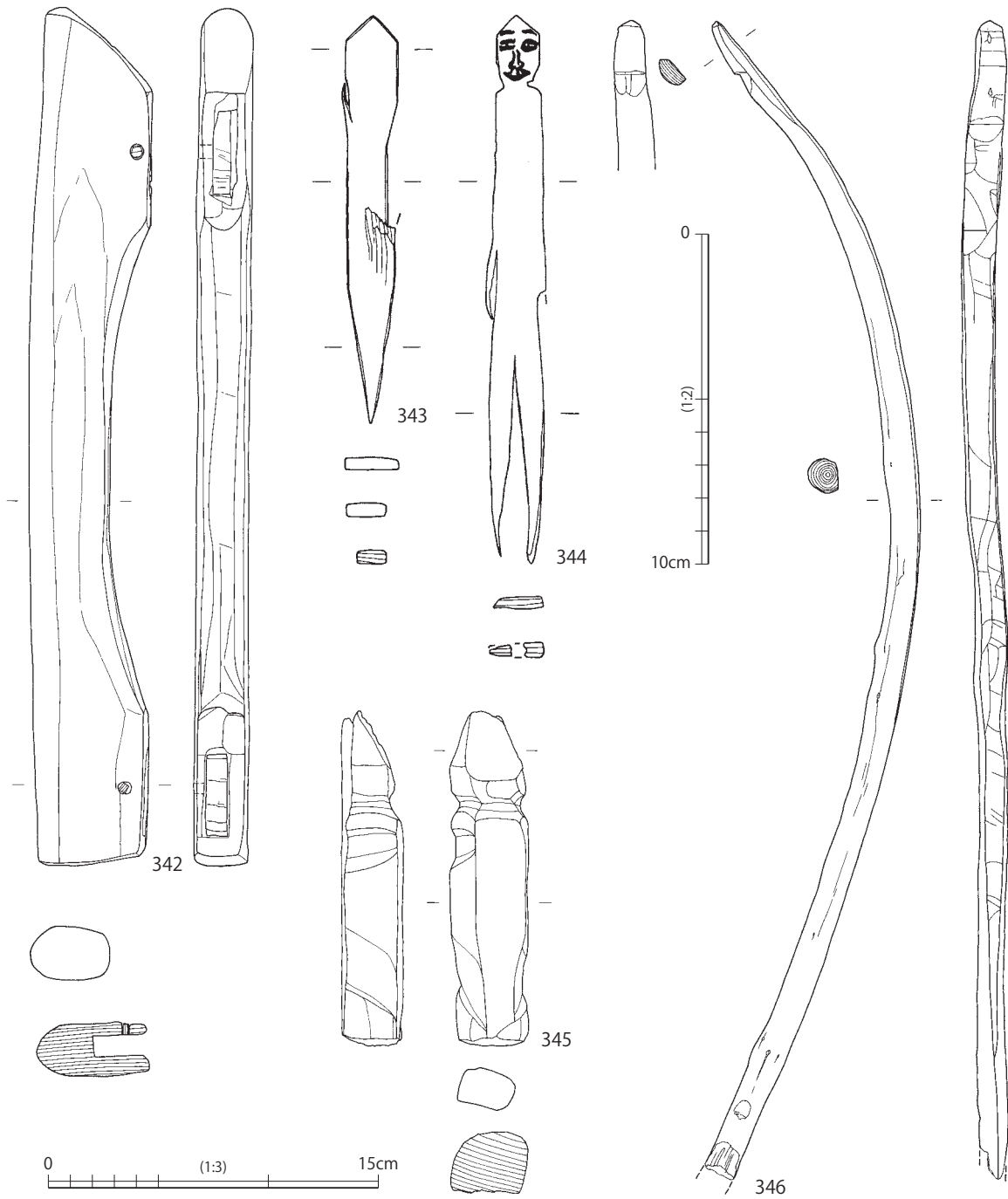
SD16 (374～376) : 4-III区の南部、SG01の下面で発掘した溝の出土遺物である。374は口径14.3cmの土師器の碗で、376は皿の底部である。田嶋編年のVII 3期に比定される。376は柄が挿入部で折れた曲物柄杓である。口径15cm、器高8.2cmを測り、スギ材の加工品である。



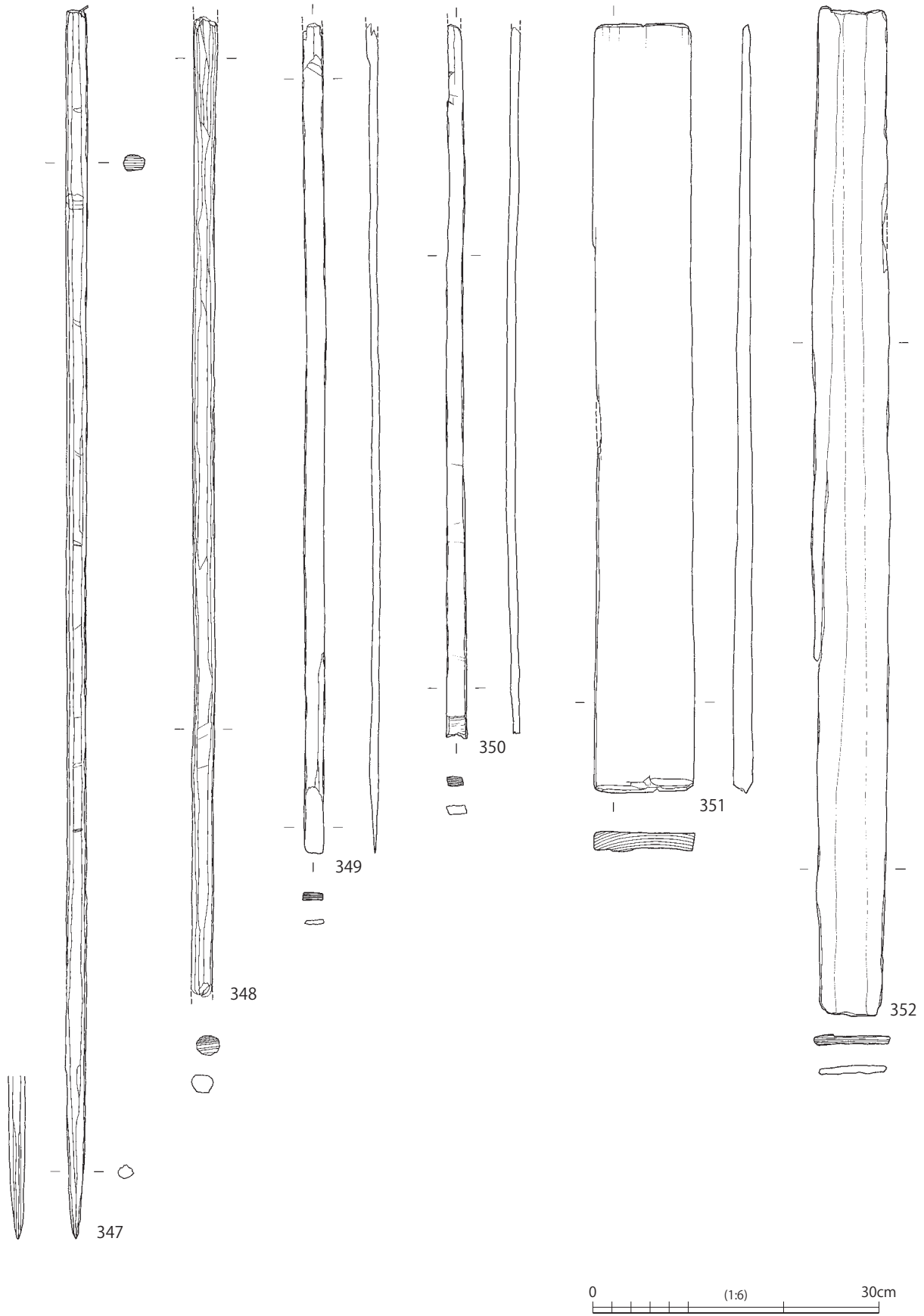
第83図 4区 SD18出土木器実測図1 (S=1/3)



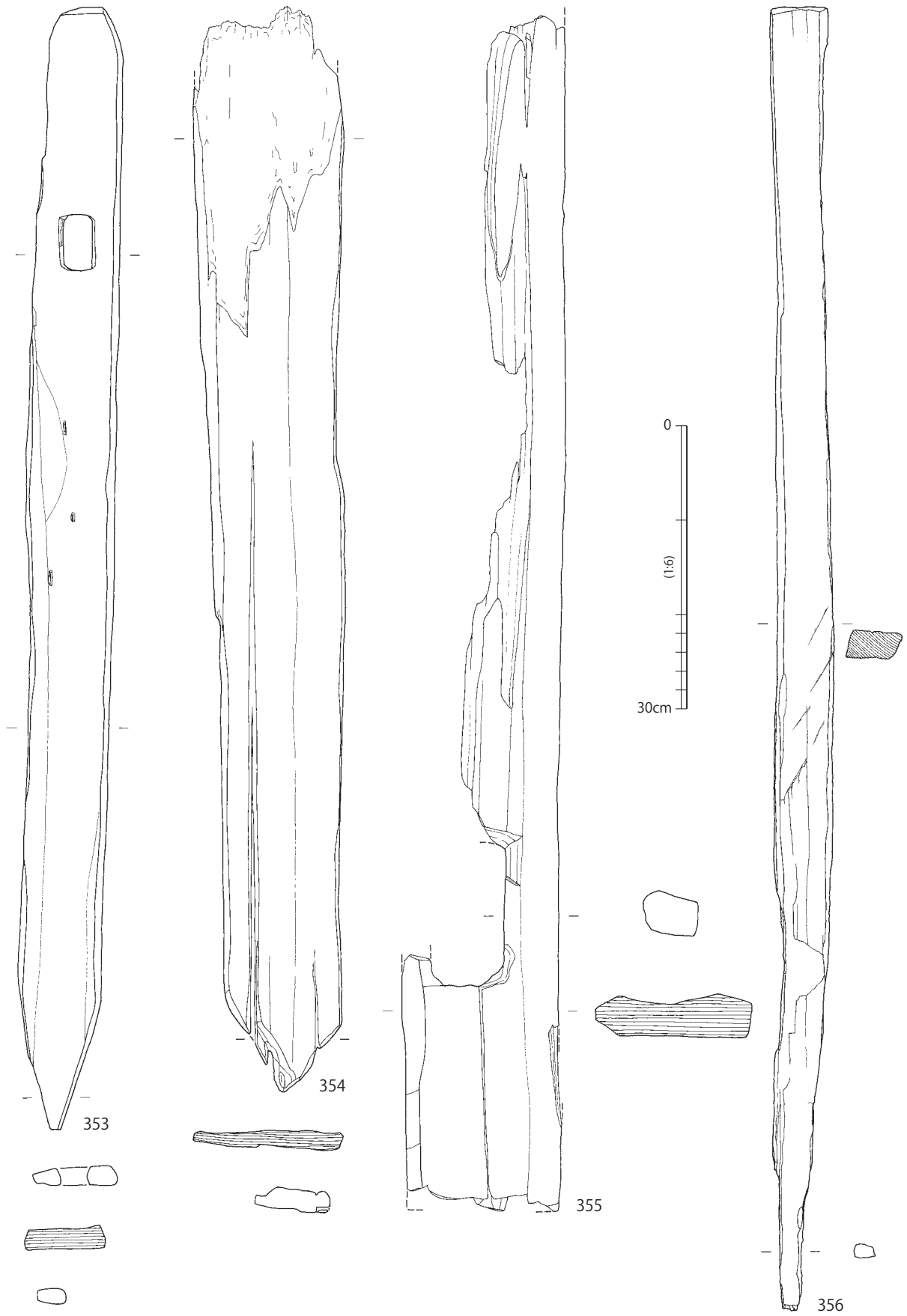
第84図 4区 SD18出土木器実測図2 (S=1/3)



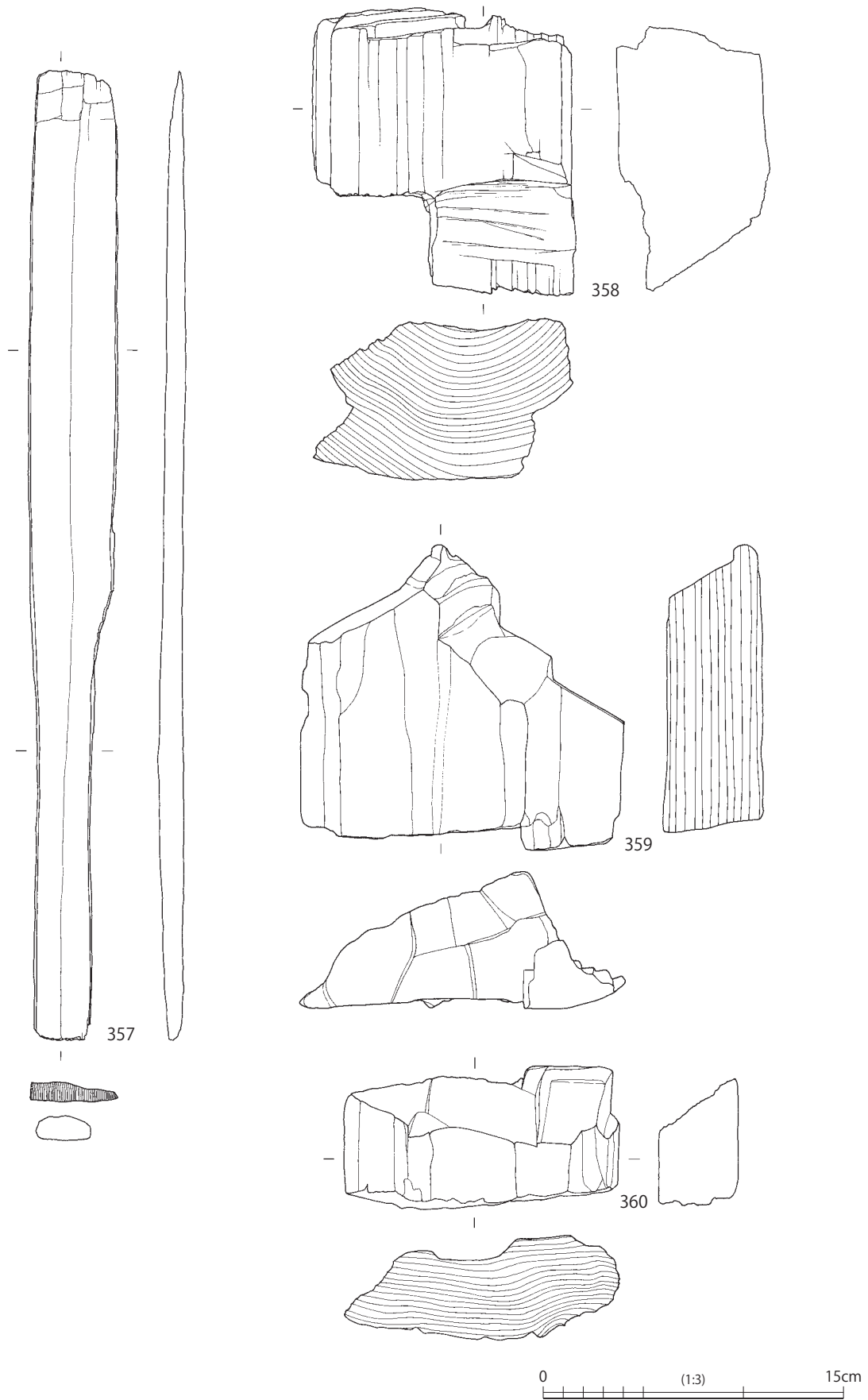
第85図 4区 SD18出土木器実測図3(S=1/2、1/3)



第86図 4区 SD18出土木器実測図4 (S=1/6)

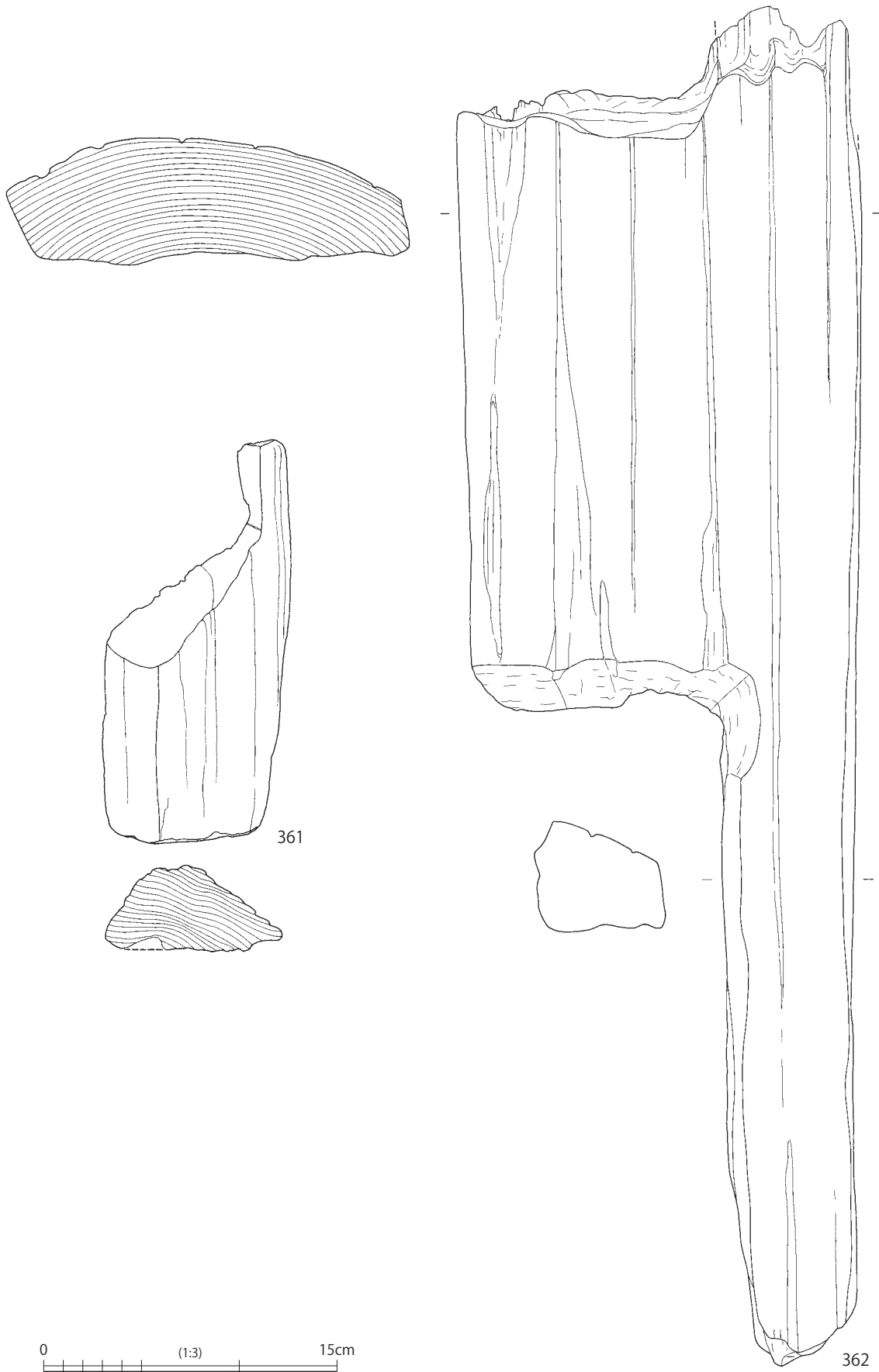


第87図 4区 SD18出土木器実測図5 (S=1/6)



第88図 4区 SD18出土木器実測図6 (S=1/3)





第89図 4区 SD18出土木器実測図7 (S=1/3)

#### 4区出土遺物(第91・92図)

4-I区～V区のピット・土坑・包含層から出土した遺物である。

377は4-I区のSB402と複合するP21の礎盤利用のスギの板材である。横幅12.6cm、厚さ4.8cmと厚く、表裏等は手斧仕上げとみられる成形痕がみられる。左端は直角に切られ、ノコによる切断とみられる。また左から10.8cm(三寸五分)の箇所にもノコの当たりが残る。建築部材の端材が鎌倉時代頃の掘立柱建物の支柱礎盤に使用されたものである。

378は4-V区のSK05の須恵器である。口径13.4cm、器高3.6cmで、灰色の胎土からして小松産とみられる。横のSD14では、367～369の須恵器が出土している。

381は4-II区 SX02のスギの木片である。

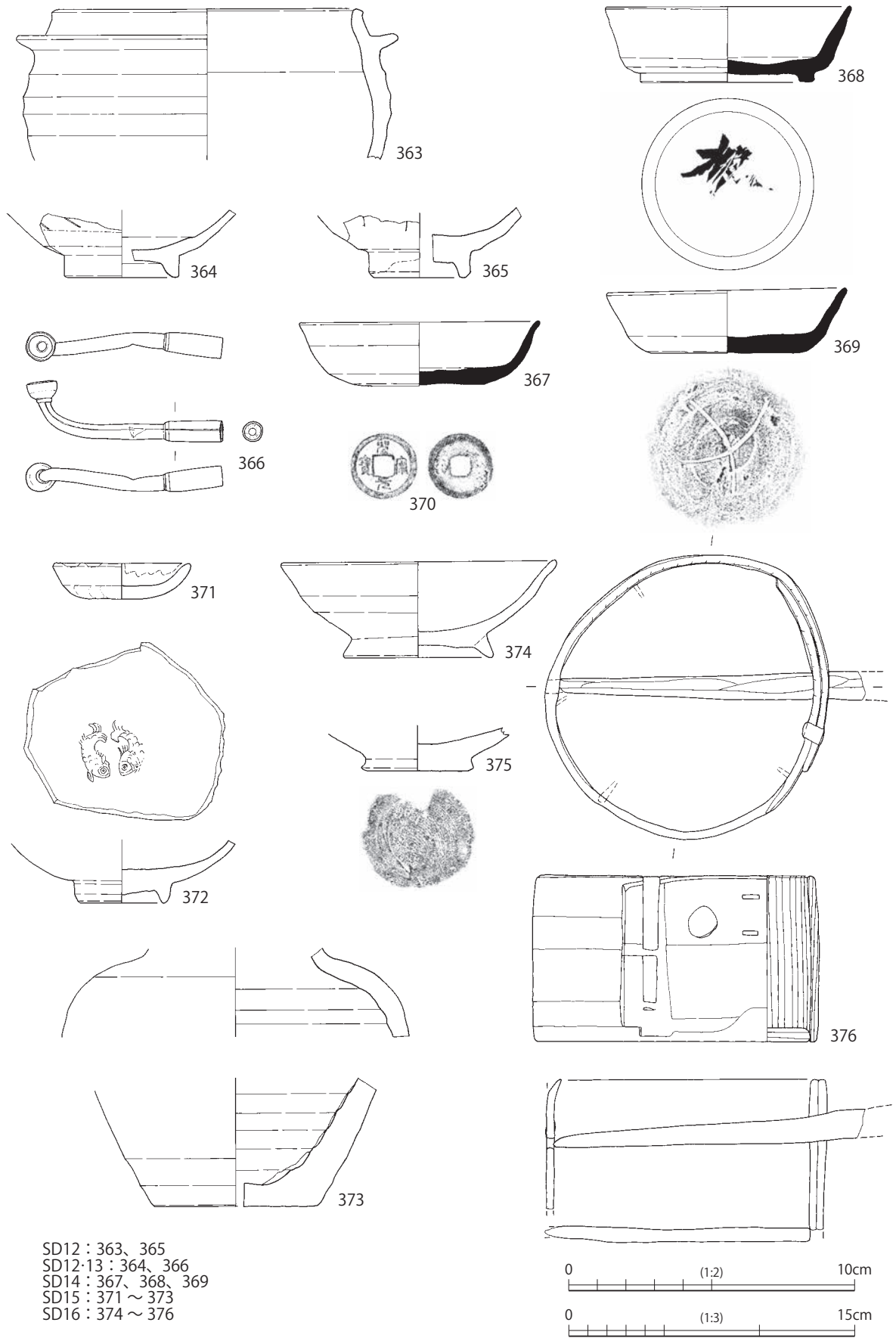
379は包含層の瀬戸の天目碗である。体部下半が露胎で、古瀬戸後II～III期の製品とみられる。380は初期伊万里の皿で、口径25cmを測る。382は須恵器の甕で、口径43.8cmを測る。

383～385は4-III区の中央で検出したSG01の出土遺物である。3点とも弥生時代後期の甕の口縁、体部、底部片とみられ、胎土から同一個体であった可能性が高い。だが、覆土から遺構の年代はこれよりも新しく、中世以降とみられる。

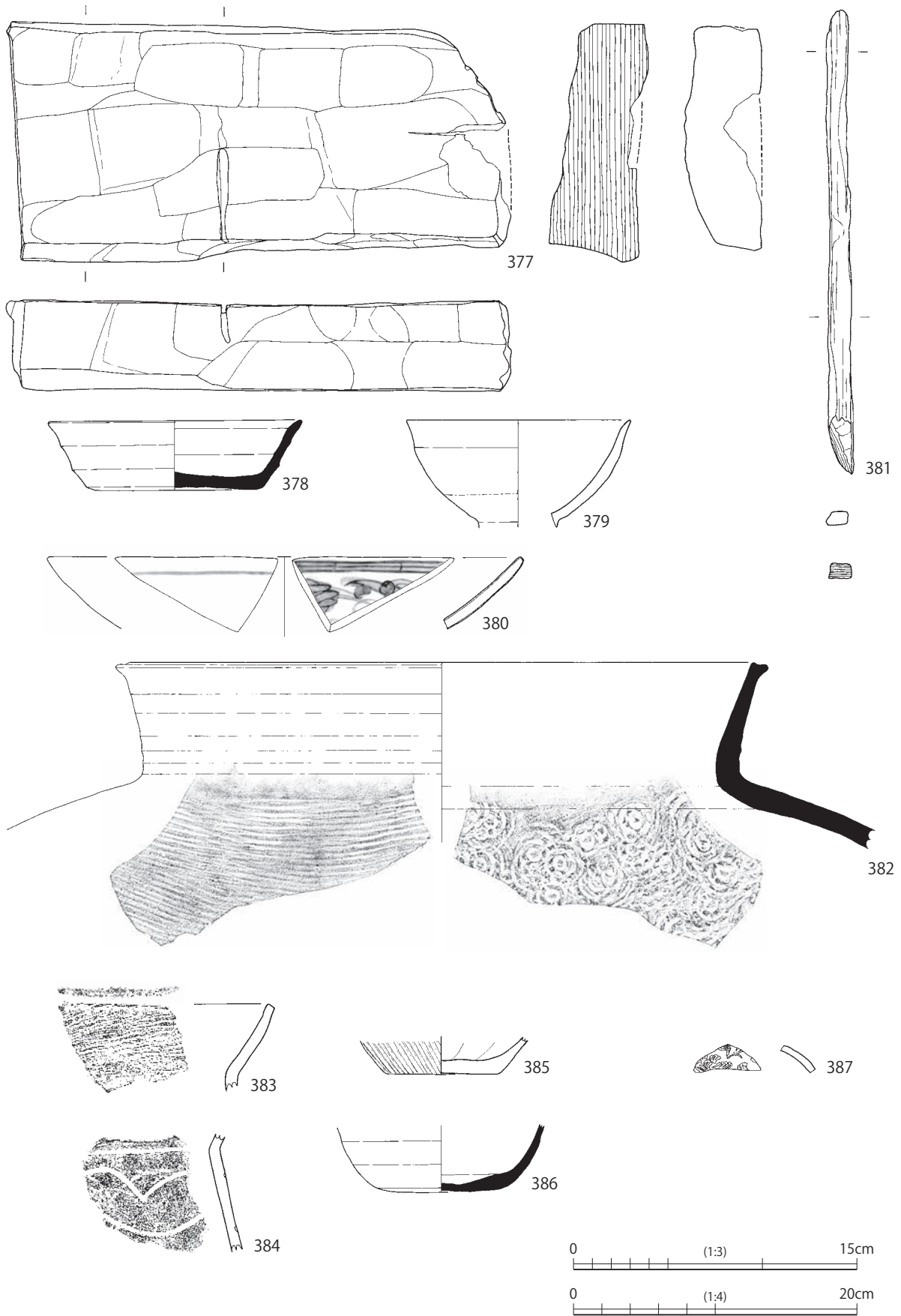
386は須恵器の坏、387は青白磁の合子の体部、共に包含層の遺物である。

388は包含層出土と記録されたスギの丸棒である。径2.1cm、長さ144.3cmを測り、下端は欠損している。形状から曲物柄杓の長柄の未成品と考えると、長さ四尺六寸相当と長い。SD18の上面から出土したものとみられる。また389は長さ32.5cmの棒状製品である。スギ材の加工品で、表面に二本の溝状の刻みあり、その付近が太く、上下両端が少し細くなる。出土地点は388ともR29区とあることから、SD18の南端付近とみられる。

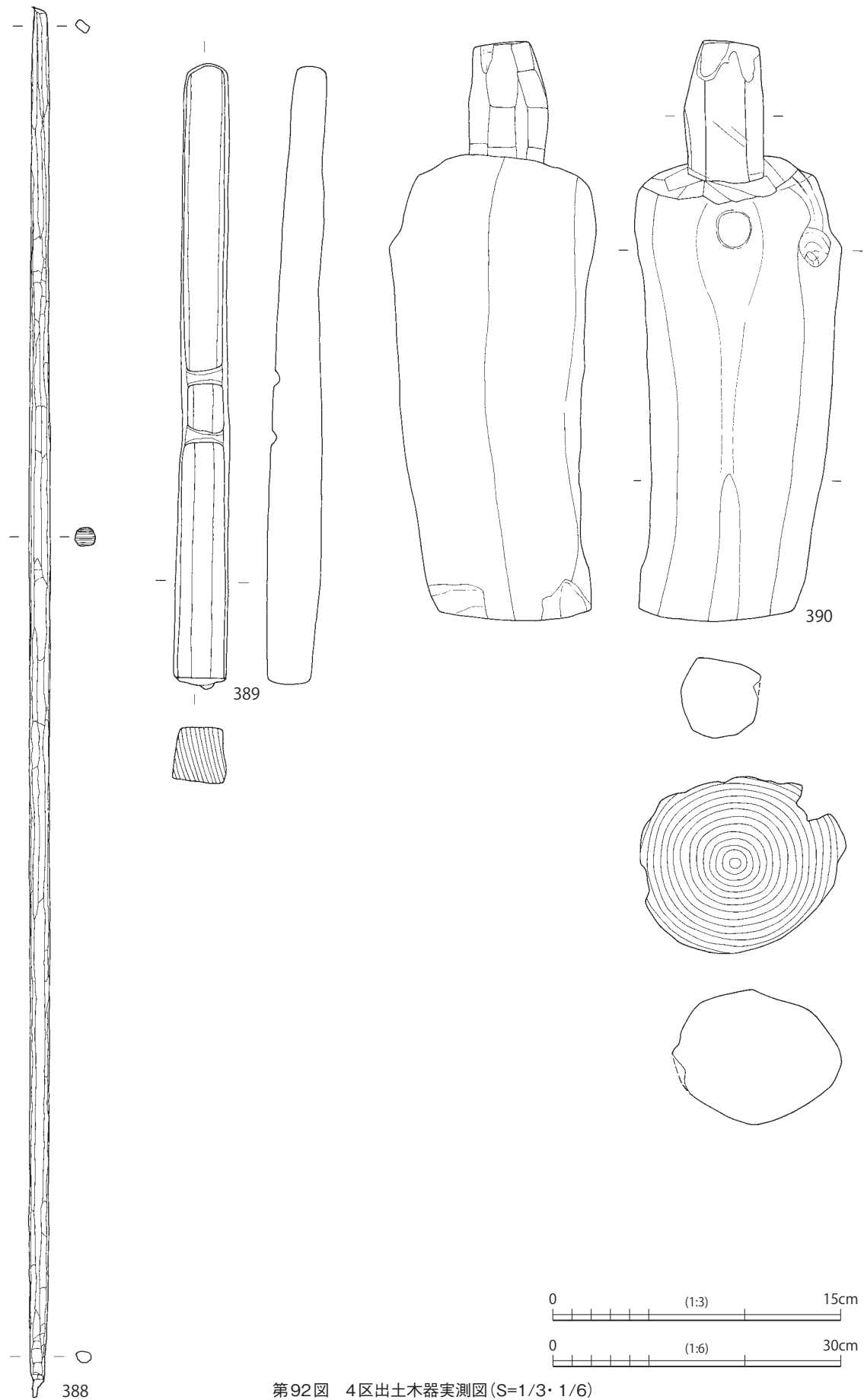
390は4-III区SB04のP32より出土した丸木の部材で、礎盤利用とみられる。径12cm規模のクリの芯持材を加工したもので、下面が平坦で自立する。上部に造り出された柄は、木芯部分を径4cm、長さ7cmほどに成形したもので、柄面には傾斜がみられる。このため、斜行する台木の片方に組み込まれた支脚と推定されるが、木組みの機能は不明である。



第90図 4区SD出土遺物実測図(S=1/2・1/3)



第91図 4区出土遺物実測図(S=1/3・1/4)



第92図 4区出土木器実測図(S=1/3・1/6)











第5節 4区の遺構と遺物

図 No.	実測 No.	出土地点	区名	遺構	種別	器種	法量 (cm)			樹種	備考
							最大長	最大幅	最大厚		
第63図 112	W058-①	4区 L25	4区	SE02	食器	箸	18.5	0.5	0.4	スギ	
113	W058-②	4区 L25	4区	SE02	食器	箸	17.7	0.6	0.5	スギ	
114	W058-③	4区 L25	4区	SE02	食器	箸	18.7	0.5	0.5	スギ	
115	W058-④	4区 L25	4区	SE02	食器	箸	18.1	0.8	0.5	スギ	
116	W058-⑤	4区 L25	4区	SE02	食器	箸	18.1	0.55	0.4	スギ	
117	W061	4区 L25	4区	SE02	用具	籠状木製品	(9.3)	2.4	0.4	スギ	
第65図 142	W010	4区 L21	4区	SD01	漆器	椀		6.8	(8.1)	ブナ属	外面朱漆で模様あり
144	W147	4区 L21	4区	SD01	履物	下駄	10.6	10.3	1.9	針葉樹	差歯の荒型カ
145	W012	4区 K21	4区	SD01	履物	下駄	(21.9)	(5.3)	1.8	針葉樹	連歯、一部炭化
第67図 161-a	W004	4区	4区	SD06	容器	柄杓	12.3	11.7~ 12.0	8.2	(側)・(底)スギ (木釘)針葉樹	底板厚0.8cm、容積810 cm <sup>3</sup>
161-b	W005	4区	4区	SD06	容器	柄				スギ	
162	W013	4区 M26	4区	SD06	容器	底板	9.5	8.5	0.8	スギ	
163	W005a	4区	4区	SD06	容器	柄杓	22.2	21.8	8.3	(側)・(底)スギ、 (木釘)針葉樹	底板厚1.0cm、容積2,680 cm <sup>3</sup>
164	W005b	4区	4区	SD06	容器	柄	(57.6)	3.0	1.3	スギ	
第75図 262	W050	4区 P30	4区	SX06	履物	露卯下駄	18.8	10.8	9.2	(台板)ヒノキ (前歯)・(後歯) 針葉樹	
263	W148	4区 Q30	4区	SX06	漆器	椀		5.3	(3.8)	ブナ属	底部穿孔
264	W057	4区 Q31	4区	SX06	部材	荒型	6.7	6.1	1.55	針葉樹	曲物底の荒型、側面荒削り
265	W054	4区 P30	4区	SX06	履物	下駄	22.8	9.2	3.1	針葉樹	
第79図 303	W016	4区 R32	4区	SG01	漆器	椀			(5.9)	ブナ属	外面:黒漆、内面:朱漆
第83図 330	W123	4区 Q29	4区	SD18	容器	底板		12.2	0.6	スギ	
331	W146	4区 R30	4区	SD18	容器	曲物	15.0	15.0		(底)スギ	底板厚0.9cm
332	W002	4区 Q28	4区	SD18	容器	曲物	17.5	16.3	5.15	(側)ヒノキ、 (底)スギ、 (木釘)針葉樹、 (縫合材)不明	底板厚1.0cm
333	W116	4区 Q28	4区	SD18	容器	底板		(15.9)	0.8	スギ	側面に木釘
334	W035	4区 Q28・29	4区	SD18	容器	底板		18.0	0.8	スギ	側面に木釘
335	W118	4区 R29	4区	SD18	容器	底板		17.6	0.6	スギ	側面に木釘
336	W079	4区 Q28	4区	SD18	容器	底板		18.3	0.7	スギ	焼印「×」、側面に木釘
第84図 337	W034	4区 Q29	4区	SD18	容器	底板		23.9	1.1	スギ	側面に木釘、片面に刃物痕
338	W122	4区 Q29	4区	SD18	容器	底板		(22.7)	0.9	スギ	側面に木釘
339	W038	4区 R29	4区	SD18	部材	柄	(30.1)	2.0	2.1	スギ	W-01
340	W039	4区 R29	4区	SD18	部材	柄	(42.6)	1.5	1.4	スギ	
341	W040	4区 Q28	4区	SD18	容器	槽	28.5	13.5	4.5	スギ	
第85図 342	W037	4区 Q28	4区	SD18	紡織具	糸巻き	39.0	5.6	2.5	スギ	側面に縦長のほぞ穴2カ所、側面に木釘
343	W003	4区 Q28	4区	SD18	祭祀具	斎串	12.3	1.6	0.4	スギ	
344	木001	4区 Q28	4区	SD18	祭祀具	人形	15.6	1.8	0.5	スギ	顔面墨描き
345	W119	4区 Q28	4区	SD18	祭祀具	陽物	15.2	3.6	2.8	スギ	
346	W120	4区 Q28・29	4区	SD18	武具	弓	(52.7)	1.6	1.8	カヤ	木器集中⑧

第10表 4区木器観察表(1)

図 No.	実測 No.	出土地点	区名	遺構	種別	器種	法量 (cm)			樹種	備考
							最大長	最大幅	最大厚		
第86図 347	W094	4区 R29	4区	SD18	部材	柄	127.9	2.7	1.8	スギ	W-03
348	W098	4区 R29	4区	SD18	部材	柄	(102.3)	3.1	2.2	スギ	W-02
349	W095	4区 Q28	4区	SD18	端材	細板	(86.5)	2.5	1.2	スギ	
350	W097	4区 Q・R29	4区	SD18	端材	細板	(74.4)	2.1	1.1	針葉樹	
351	W099	4区 Q28	4区	SD18	用材	板	80.4	10.7	2.2	スギ	
352	W096	4区 Q28	4区	SD18	用材	板	105.4	8.0	0.9	スギ	
第87図 353	W127	4区 Q28・29	4区	SD18	土木具	矢板	118.6	8.9	2.4	スギ	木器集中②
354	W128	4区 Q28・29	4区	SD18	土木具	矢板	(114.6)	15.9	3.1	スギ	木器集中⑩
355	W100	4区 Q28・29	4区	SD18	用材	板	(126.2)	16.5	4.6	スギ	木器集中⑤
356	W102	4区 Q28	4区	SD18	土木具	杭	137.5	6.8	3.2	針葉樹	
第88図 357	W036	4区 R29	4区	SD18	調理具	板杓子	48.5	4.5	1.3	スギ	
358	W080	4区 Q28	4区	SD18	端材		14.2	13.2	7.9	スギ	
359	W085	4区 Q28	4区	SD18	端材		15.2	16.1	6.4	スギ	
360	W117	4区 Q28	4区	SD18	端材		7.1	13.7	5.2	未分析	
第89図 361	W121	4区 Q28	4区	SD18	端材		20.6	9.5	4.3	未分析	
362	W126	4区 Q28・29	4区	SD18	用材	板	(69.5)	20.7	6.6	スギ	木器集中⑥
第90図 376	W051	4区 R32	4区	SD16	容器	柄杓	15.0		8.2	スギ	底板厚0.8cm
第91図 377	W056	4区 L24	4区	P21	用材	板	26.6	12.6	4.8	スギ	
381	W062	4区 L・M25	4区	SK02	不明		24.2	1.25	0.8	スギ	一部炭化あり
第92図 388	W093	4区 R29	4区	包含層	部材	柄	144.3	2.1	2.1	スギ	
389	W014	4区 R29	4区	包含層	不明		32.5	2.7	2.9	スギ	
390	W055	4区 R32	4区	P32	部材	支脚	30.2	10.7	9.3	クリ	礎盤利用

漆器碗や容器の曲物の法量は、口径・底径・器高を記載

第10表 4区木器観察表(2)

第5節 4区の遺構と遺物

図 No.	実測 No.	出土地点	遺構	種別	器種	法量(mm)		孔径(mm)		重量(g)	備考
						最大長	最大幅	縦	横		
第63図 118	金005	4区 L25	SE02	銅銭	渡来銭	24.0	19.0	6.2	6.5	3.9	治平元宝
第65図 146	金018	4区 L22	SD01	金具	帯金具	19	16			3	銅製、厚さ5mm
147	金011	4区 L22	SD01	銅銭	渡来銭	24.7	18.4	6.6	6.4	3.2	紹聖元宝
148	金017	4区 L24	SD01	銅銭	渡来銭	24.6	20.6	6.4	6.4	2.9	開通元宝
第69図 179	金015	4区 M27	SX02	銅銭	渡来銭	24.5	20.7	5.9	5.9	2.9	洪武通宝
180	金007	4区 M28	SX02	銅銭	渡来銭	24.5	18.2	6.0	6.0	2.8	祥符元宝
181	金019	4区 M28	SX02	銅銭	渡来銭	24.3	19.0	6.4	6.4	3.1	治平元宝
第77図 272	金006	4区 P31	SX06	銅銭	渡来銭	25.2	19.3	6.8	6.8	2.8	祥符通宝
273	金008	4区 Q31	SX06	金具	刀飾具	25	37.5			5.7	銅製
第80図 304	金013	4区 R31	SG01	用具	熊手	76.5				45.7	鉄製の三本熊手カ
305	金020	4区 R32・ S32	SG01	銅銭	渡来銭	24.3	18.3	24.5	18.7	2.6	熙寧元宝カ
第90図 366	金004	4区 T31・32	SD12・13	喫煙具	雁首	103	32			23.9	銅製、厚さ5mm
370	金016	4区 M24	SD04	銅銭	渡来銭	23.2	19.0	6.9	6.8	2.6	聖宋元宝

第11表 4区金属製品観察表

図 No.	実測 No.	出土地点	遺構	種別	器種	法量(cm・g)				石質	備考
						最大長	最大幅	最大厚	重量		
第77図 266	石025	4区 Q30	SX06	暖房具	行火	(16.3)	(13.8)	15.5	1050.0	軽石凝灰岩	内面煤付着
267	石025	4区 Q30	SX06	暖房具	行火	(16.3)	(13.8)	15.5	1050.0	軽石凝灰岩	
268	石027	4区 Q30	SX06	石塔	請花	(10.1)	(9.7)	(12.4)	377.0	火山礫凝灰岩	加賀型宝塔の残欠
269	石003	4区 P30	SX06	工具	磨製石斧	11.1	5.5	4.2	418.0		
270	石030	4区 M25	SD06		剥片	3.6	5.0	1.0	17.0		
271	石009	4区 Q30	SX06	用具	凹石	21.6	22.3	12.0		凝灰岩	五輪塔風輪の転用品カ
第78図 275	石020	4区 R31	SX07	製粉具	石臼(上臼)	白面径 26.0		8.9	1450.0	火山礫凝灰岩	凝灰岩
276	石011	4区 R31	SX07	製粉具	石臼(上臼)	白面径 29.0	-	9.7	7350.0	火山礫凝灰岩	
277	石021	4区 R32	Pit33	製粉具	石臼(上臼)	白面径 29.4		6.98	919.0	火山礫凝灰岩	凝灰岩
第80図 306	石023	4区 Q32	SG01	文房具	硯	(8.9)	(7.1)	1.1		粘板岩	高嶋硯、被熱赤色化
307	石024	4区 Q32	SG01	暖房具	温石	(9.5)	11.3	1.7	247.0	滑石	石面湾曲
308	石026	4区 Q32	SG01	工具	砥石	(8.7)	(5.2)	(2.9)	190.0	流紋岩	中砥石
309	石028	4区 R32	SG01	石塔	五輪塔(風輪)	(10.4)	17.4	(9.4)	1030.0	凝灰岩	
310	石012	4区 Q32	SG01	製粉具	石鉢	-	-	(3.4)	227.0	砂岩質凝灰岩	
第81図 311	石001	4区	石積01	石塔	宝篋印塔 (笠部)	27.3	27.1	19.7	1475.0	凝灰岩	四隅突起等欠損

第12表 4区石製品観察表

## 第4章 調査成果の総括

### 第1節 第5次調査の成果

梅田B遺跡は、梅田町の集落が所在する開析谷から沖積地に広がる集落遺跡で、遺跡を縦断する河原市用水は、谷戸地形が沖積地へ移る境目に開削されている。平成9年度の第5次調査は、この河原市用水を挟み、西側に1・2区、東側の谷口部に3・4区の調査区を設定したが、3区は第6・7次調査区と遺構が接合することから後年の報告とした。このため、本節では1・2・4区の成果を俯瞰する。

また、4区で確認した曲物生産は、特筆される成果であることから、第3節で曲物製品の規格と木工具の復元を試みている。さらに、石川県が実施した活断層調査は、同年度に2区の北西部で断層の露頭を発掘しており、弥生～古墳時代の遺構評価に大きく関係することから第2節に取上げた。

#### 1区の土地利用

1区は、開析谷の出口付近にあたり、開析谷から沖積地へ変化する緩やかな傾斜地である。調査区の東端を南へ流下するSD02・03は、開析谷から流下した用水を南の第4次調査K区の方へ流すため、平安時代後期頃に開削した用水路とみられる。現代の梅田川につながる用水路であり、溝底にみられる甌穴状の凹凸は、用水が急な流れであったことを示している。また、SD06・08は、その用水を分流した遺構とみられる。SB101の建物やSK03の土坑は、これら用水に囲まれた宅地に付属した可能性が高く、北側にみられる空闲地的な広がり、古墳時代以降、水田として利用されていたと考えられる。

#### 2区下層の遺構と断層

2区の遺構は、地山面で検出された下層の溝と小規模な建物である。地山は西方へ緩やかに傾斜するが、西方の第3次調査より低く南北に窪む沖積地である。遺構を被覆した褐色粘質土は、開析谷から流下したSD01・07が運搬した可能性が高く、古墳時代の頃には、中間層で確認された小区画の水田が設営されたとみられる。また、2区の西側で並走するSD03・05・08の溝は、活断層調査で発掘された森本断層の上面にあたる。弥生時代後期に生じた地震では、2区の西辺が隆起し、東側が沈降する地盤の変動が生じており、これら南北溝は、地震後に生じた段差に沿って開削された水路と考えられた。

#### 4区の土地利用と住人像

4区は三方向に枝分かれしている。北西の4-I区では、SB401を中心とする鎌倉時代の宅地が検出された。谷口の丘陵裾に設営された宅地は、調査区の北側へ広がり、家屋と曲物埋設の井戸、出土品等から類推すると名主クラスの居住が推定される。その東側に位置する4-II区は、湿田を想定させる土砂の堆積がみられた。北側の斜面に梅田町の近世墓が営まれており、X02・03出土陶磁器のなかでも、珠洲焼や志加浦窯の壺は、中世墓の蔵骨器が丘陵の開削により土砂と共に埋もれた可能性が高い。

4-III区の北には、丘陵に入り込む小谷と階段状の平坦地がみられる。SX06で確認した曲物生産は、この平坦地の一角で実施されたと推定される。出土品には瀬戸の瓶子や水注、花盆状の瓦質土器など、中世後半の調度的な容器がみられる。また、SG01の珠洲焼の銘文壺、「信楽」銘の壺、滑石製温石に石硯などの消費物は、宗教的素養を示唆する。4-IV区のSD18は、丘陵の裾部に位置した古代の水場であり、中世も湧水として機能したことが考えられる。下層を被覆する砂質土は、谷奥から短期的に流下した土砂で、SD18よりも南側に堆積することで、遺跡の変遷に大きな影響を及ぼしている。

なお、古代の平瓦や軒丸瓦が、1区SD01・02や4区SX06などから出土している。第6・7次調査でも散発的に出土しており、その検討は遺跡全体で行なう必要から、今後の課題としたい。

## 第2節 活断層調査と梅田B遺跡

平成9年度末、第3次調査完了区域(M13区付近)で、石川県森本断層調査グループ・石川県環境安全部(生活安全部前身)による活断層調査が施された。この調査は、本遺跡第4次調査1区で、下層遺構の検出面に50cm規模の段差がみられ、弥生時代後期の溝(SD12)の西側が、不自然に高くなっている情報から、調査グループが断層運動による地形変動の可能性を考え、重機によるトレンチ調査を実施したものである。調査地点は、第4・5次調査の2区北西部にあたり、周囲の遺構評価に大きく関係している。

活断層調査の成果は、既に石川県から『森本・富樫断層帯調査の結果』として公表されている。第5次調査を担当した社団法人石川県埋蔵文化財保存協会も、調査グループから提供された写真と土層の断面を使い、保存協会の年報で概要を紹介しているが、断層の活動は本遺跡の遺構変遷に大きな影響を及ぼしており、その土地利用と集落の歴史的な変遷を理解するため本節で取上げたものである。

森本断層は、金沢市北部の小坂町付近から、津幡町中津幡付近に所在する活断層である。その延長は約13kmに及ぶものと考えられ、金沢市南部に所在する富樫断層と併せて、総延長約25kmもの森本・富樫断層帯をなしている。梅田町から北東方向に津幡町へ向かうと、東側の丘陵が急峻な崖を呈するのは、この森本断層による地形の変動によるものと考えられている。さらに、寛政11年(1799)5月26日の申刻(16時)過ぎに発生した金沢地震は、推定でM6を越える直下型の大地震として知られている。その被害は、金沢城内から城下町に加えて、周辺の河北・石川・能美郡域の村々へも及んだことが、当時の記録から確認され、その震源を森本断層とする説もある。この頃の金沢は、人口10万人を越える近世都市で、金沢城跡の北方約7kmに位置する河北郡の梅田村でも、家屋の損壊や耕作地における噴砂など、史料には欠けるが相当の被害が起きたものとみられる。

平成9年度の断層調査は、地盤変動の可能性が指摘されていた2区SD08を目安として、遺跡の発掘調査が完了していた第3次調査区に設定された。その結果、地表下約4.5~6mの深さで、1区の下層遺構でみられた不整合を裏付ける活断層が確認された。活断層は森本丘陵を隆起させてきた断層本体の運動方向とは反対で、平野側(西側)が隆起、丘陵側(東側)が沈降の逆断層であったことから、主断層の活動により生じた、副次的な層面すべり断層と考えられている。

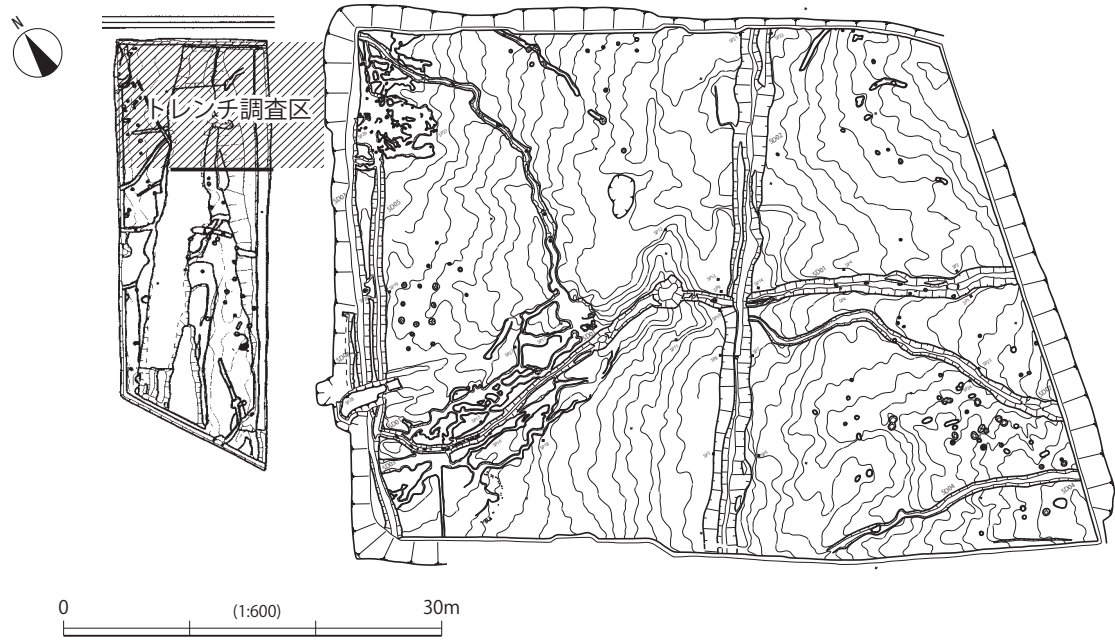
トレンチ南壁の写真(図版16)を見ると、最下部の中部洪積層(卯辰山層)が、鉛直の方向に1.2mほど変位することで、上位のすべての地層がずれている。このため、断層を被覆する沖積層も、西側が隆起をおこし、東側が沈降している。調査グループでは、この構造からみて、一回の断層運動によって生じたものと報告している。第94図の土層断面図は、そのトレンチ南壁面の実測図で、断層活動はM6.7以上の地震規模に相当するものと推定され、活動時期は第4次調査の所見から弥生時代後期後半に比定されている。

この逆断層の変位は、2区下層で南北方向に並走するSD05・08を挟んで、東側の2区地山面が、西側の第3次調査区より30~50cmほど低く、窪地を呈する状況に合致する。2区の中央部を抜けているSD02も、北は第4次1区の北端から、南は第6次調査E区SD01へ到達する延長270m以上の溝で、これも断層活動で生じた地盤変動の境目で開削された可能性が高く、第6次調査の報告時に再検討する必要がある。

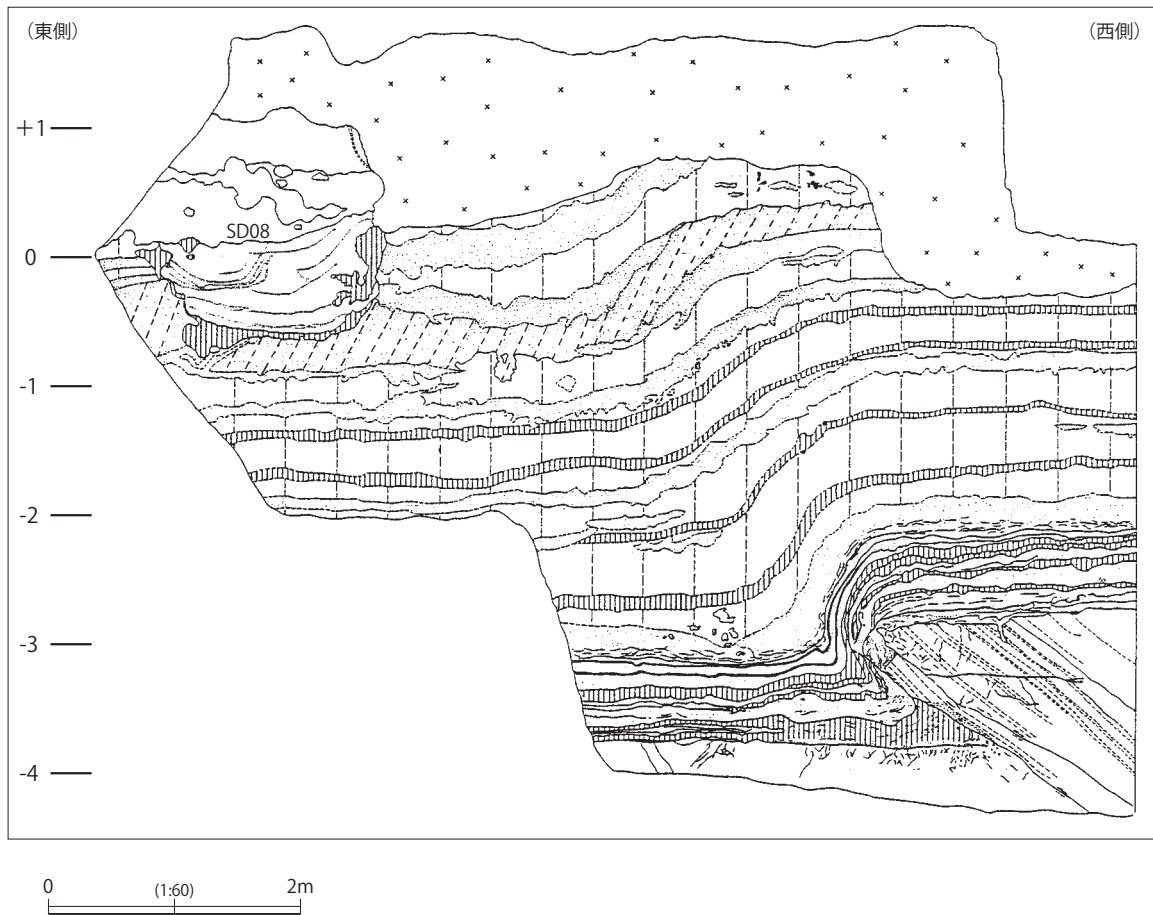
梅田B遺跡では、弥生時代の後期後半に直下型の大規模な地震を経験したことがわかり、この地震からの復興は、古墳時代初頭に小区画の水田が、2区の窪地に設営されたことで知られる。近世の梅田村も寛政11年の金沢地震を受けたとみられるが、用水や水田の復興を果し現代の梅田町へと続いている。

### 〔参考文献〕

- 石川県森本断層調査グループ他 1997「金沢市森本活断層の発掘調査」『地質学雑誌 Vol.103』日本地質学会  
石川県 1999『石川県の活断層－森本・富樫断層帯調査の結果－』



第93図 森本活断層発掘調査区(S=1/600)



第94図 断層活動を表す土層断面図(南側壁面) (S=1/60)

### 第3節 梅田B遺跡の曲物生産について

**はじめに** 沖積地から森本丘陵の開析谷に展開する梅田B遺跡は、遺構面の標高が8~12mと低く、地下からの湧水が多い環境にある。また、粘質土に覆われた遺構からは、木製品の出土が多く、木材を加工した建築部材や生活用具が各所で発掘されている。既刊の『金沢市梅田B遺跡I~III』を開いても、弥生~古墳時代の木製農具や建築部材、鎌倉時代の井戸側や漆器など、集落遺跡で見受けられる木製品が多く報告されている。

そのような環境のなか、開析丘陵の裾部に位置する第5次調査4-Ⅲ区のSX06からは、曲物の生産活動を裏付ける荒型や木くずの出土が確認された。周辺の遺構においても、曲物柄杓の部材出土が目立つことから、SX06とその周辺には、柄杓などの曲物生産を担った木工が、生産拠点を置いていたと考えられた。

この曲物とは、『広辞苑』に「ヒノキやスギなどの薄板を円形、楕円(だえん)形に曲げて、これに底板を取り付けた容器。」とあるように、スギなどの針葉樹の薄板を筒形に曲げ、重ねた部分を樹皮で縫い合わせることで容器の側面を作り、それに底板を差込み、木釘などで固定した筒形の木製容器である。北陸地方でも弥生時代後半に生産が始まり、奈良時代~室町時代にかけて、さまざまな容器が生産されたことが、既に県内の出土品から考察されているが、生産工具や活動拠点に関しては不明の点が多い。

このため、第5次調査の成果として、4区出土の曲物製品と部材からその製品規格を探り、4-Ⅲ区の周辺に設営された生産工房を推定することで、遺跡に暮らした人々の生業の一端を明らかにしたい。

**4区の曲物製品** 4区の曲物を確認すると、小型の曲物容器に細長い柄を差し込んだ柄杓が多いことが注目される。柄杓は、主に飲料水や生活用水などの水汲みに使用された柄付きの用具で、曲物桶などと共に曲物師と呼ばれた木工職人が、針葉樹の板材を整形・加工することで作り上げた容器である。

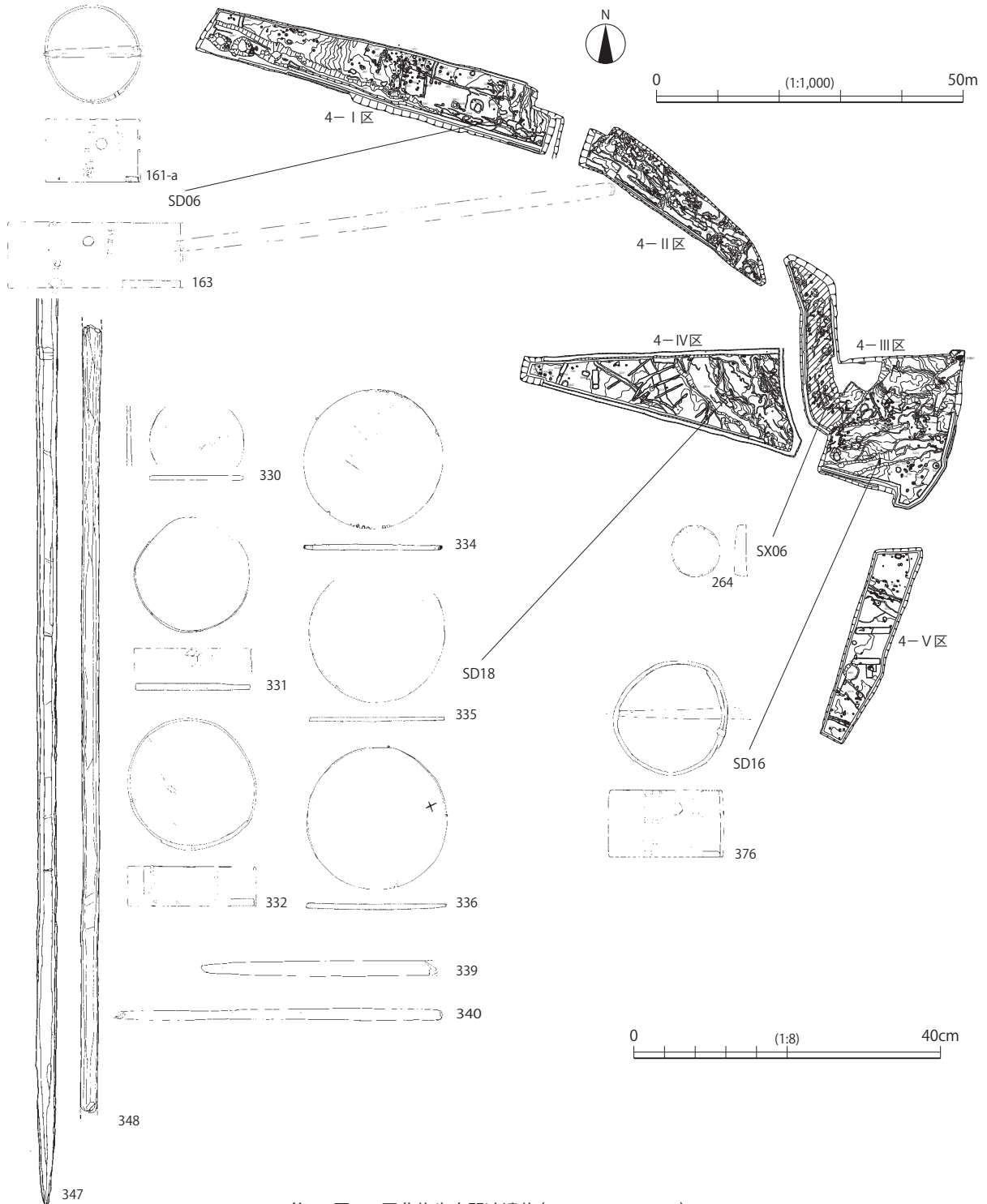
第95図に取上げたSD06とSD16で出土した3点の柄杓は、平安時代後期~末頃の遺物とみられ、細い柄が容器の挿入付近において折れたものである。底板に刃物の痕跡が無く、折れた柄も付随していたことから、出土付近に設けられた水場で使用されていたものが、欠損後に埋もれたものとみられる。曲物の口径を計測すると4寸(161)、4寸5分(376)、7寸(163)相当であり、折れた柄も全長が60cm(2尺程)と推定される。また、曲物の法量を試算すると、4寸→4.5合、4寸5分→7合、7寸→1升5合の容積が復元できる。このため、4区の水場で使用された柄杓は、柄の長さが2尺前後であっても、水を汲む曲物容器の容積を反映した4.5合、7合、1升5合と区分するような製品規格を備えていた可能性が高い。

次に、4-Ⅳ区の東側に位置するSD18から出土した曲物の部材をみると、径4~8寸の底板に加えて、長さ4尺を越える柄の未成品や割木など、長柄の製作時に生じたとみられる部材が集中するように出土している。円盤の底板には、木釘と刃物痕が残ることから、小型の桶や柄杓の底板が、調理時のまな板として再利用されものとみられる。また、柄の未成品とみられる丸棒(347)は、長さ128cmを測り、4尺2寸相当と長大である。他にも、長さ4尺8寸相当の未成品や板材が出土していることを考慮すると、これらの曲物は、元は径4~6寸相当の曲物容器に4尺を越える柄を装着した長柄杓であった可能性が高い。その出土量からして、SD18の近隣で板材を加工することで製造されていたと考えられる。

**曲物の生産** 注目されるのは、覆土に多量の木くずが確認された4-Ⅲ区のSX06である。これは、4-Ⅲ区の西側において発掘された斜面地である。東側の上方には段状の平坦地がみられ、西側はSD18の水場へ下る斜面であった。第3章に掲載したSX06の土層断面図にみられる「小木片」は、この東側にある平坦地から斜面へ廃棄された木くずとみられる。また、覆土中から出土した木製の円盤(264)は、径2寸の底板の荒型で、大量の木くずは、木工具の出土には欠けるが、曲物の側板や部材の整形で生じた削り屑と考えられる。共伴する陶磁器から、14世紀後半~15世紀前半頃とみられる。



SX06の東側に位置する平坦地では、室町時代前期に曲物生産の工房が設営されていたとみられる。このため、4区出土の曲物製品の年代を確認すると、SD06の柄杓は11世紀前半、SD16の柄杓は11世紀代、SD18の部材は11世紀後半～12世紀前半と推定され、いずれも平安時代後期～末頃で、SX06よりも古い年代を示している。そのため4-IV区の南側で、4-V区に囲まれた地点に広がる第6次調査のC区の調査成果を確認すると、SD18と同時代の建物や曲物製品の縫合に使用されるコイル状の樹皮が発掘され、この付近に平安時代後期の生産工房が設営されていた可能性が高い。



第95図 4区曲物生産関連遺物(S=1/8、1/1000)

また、梅田町の開析谷に展開する遺跡を俯瞰し、コイル状の樹皮や木製品などから木工の活動を推測すると、平安時代後期に開始された曲物生産は、時代により活動拠点の工房を移しながら室町時代前期まで、その生産が継続していた可能性が高い。だが、本遺跡の第5～7次の調査記録をみても、曲物生産を裏付けるような具体的な所見はみられない。これは森林資源や地下水に恵まれた環境にある集落遺跡で、曲物の製品や荒型、板材や辺材、コイル状の樹皮が断片的に出土しても、曲物生産や木工具に係る考古学的な情報が少なく、その生産活動が具体視されなかったことによる。

**曲物生産と木工具** 日本の木製容器は、その製作の技法から、刳物、挽物、曲物、指物、組物、編物などに分別されている。木材の加工作業では、斧、鉋、鑿、小刀などの工具を使い、木を切り・割り・削り・曲げ・組合せることで、多様な容器を作り上げていた。石川県内の出土品をみても、縄文時代の刳物や編物に始まり、鉄製工具の普及や律令体制による容器造りを経たことで、多彩な出土木製品がみられる。またこれら木製容器の大半が、集落遺跡に拠点を置いた木工により生産されたと理解されながらも、生産に係る考古学研究は少ない。

当埋蔵文化財センターが、令和2年度に開催した環日本海文化交流史研究集会『古代の木の器(うつわ)－その2』は、北陸地方の挽物を集成・検討したものである。資料集にある「石川県内の8～13世紀出土挽物容器」の一覧表をみると、白木や漆器の挽物が出土した54遺跡の製品がリスト化されているものの、木工具から挽物生産が確認できる事例は、鑿が出土している津幡町の加茂遺跡だけと少ない。さらに、県内で曲物生産を裏付ける考古資料を探索しても、コイル状樹皮の出土事例を除外すると、木工具や荒型から曲物生産を確認できる事例は、本遺跡と七尾市の三引遺跡だけと少ない。このため、第96図に以前作成した曲物製作の作業解説図を使い、曲物生産に係る木工具の解説をおこない、三引遺跡で出土した木製品から、木工具と荒型の遺物を抽出することで、考古学的な検討を深めたい。

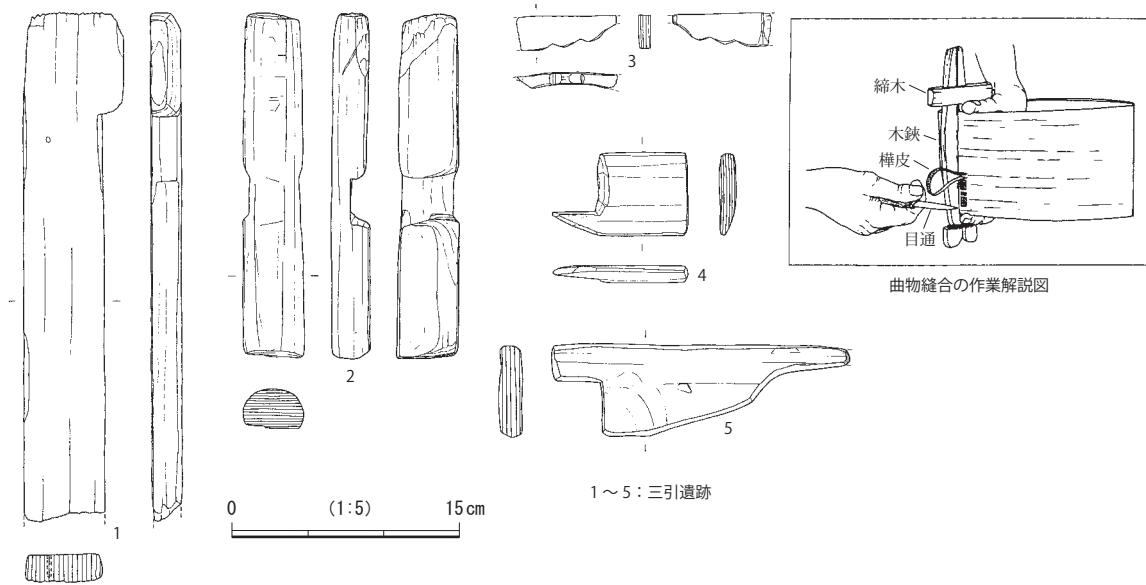
掲載した作業解説図は、曲物の製作工程において、曲げた薄板を木挟で仮止めした状態におき、胴部となる薄板の合わせを樺皮の平紐で縫合している場面である。中世遺跡の出土品と大差が無い木挟と目通しの小鑿が、現代の曲物製作でも木工具として使用されている。それは針葉樹の薄板を曲げて仮止めする作業と、仮止めした胴部を樹皮の平紐で縫合する作業内容に、変化が無いことを物語っている。

第96図の1～5は、三引遺跡で出土している木工具や荒型などの一部である。

1は木挟の基部である。木挟とは、2本の棒の有頭部を紐で連結した木工具で、出土品は半折したものであるが、有頭部に細紐を通した小孔と紐からの脱落を防ぐ挟りがみられる。曲げた薄板の合わせ目をこれで挟み、木挟の上部を締木で固定することで、胴部となる筒形を仮止めするための専用工具である。出土品は長さ34cmを測り、その横幅を勘案すると、元は60cm(2尺)規模の木挟であった可能性が高く、曲物製作の木工具類が多く出土している鎌倉市の佐助ヶ谷遺跡の木挟とも形状が近似している。

また2は、長さ23cmの丸木で、中程に捻れをもつ挟りがあることから、木や竹の歪みを修正する作業に使用された矯木である。柄杓の柄や折敷の雲形、さらには矢柄のように、反りや歪みをもつ部材をこの挟りに挟み、力を加えることで形状の矯正と修正を図るための木工具である。挟りの上下に剥離が認められることから、この剥離により挟りが浅くなり廃棄されたものとみられる。

3～5は、折敷などの曲物製品に装着された雲形とその荒型である。佐助ヶ谷遺跡や若宮大路周辺遺跡群などで類似品が報告されている。3は漆塗りが残り、折敷の脚に付随した部材とみられる。また、4・5も折敷などに装着するため、事前に数多く準備された荒型で、仕上げの前に廃棄になったものである。県内の中世遺跡をみても、曲物製作に関係しない集落遺跡では、出土が認められない小型の木製品である。三引遺跡の報告書によると、これらの木工具と荒型は、中世前半の遺物である。同時期の梅田B遺跡の曲物製作でも、同類の木工具が使用されたと考えられる。森本丘陵の開析谷に立地した集落では、沖積



第96図 曲物生産工具と作業解説図(S=1/5)

地の稲作や畠作などの農業生産に加えて、平安時代後期から丘陵地の木材利用を容認された木工が居住し、曲物容器の生産活動を展開したことは、梅田B遺跡の歴史的な特徴として評価できる。

**おわりに** 本遺跡の南方の谷間で営まれた観法寺谷遺跡をみても、鎌倉時代の土器・陶磁器に加えて、柄杓や水桶などの曲物容器に形代や板絵が出土しているが、曲物製作を示す木工具や荒型は確認されない。さらに、南方1.5kmに所在する堅田B遺跡は、街道に面した鎌倉時代～室町時代の居館である。大規模な堀からは在地領主が消費した大量の土師器皿に加えて、巻数板や呪符、曲物容器や漆器など豊富な木製品が出土したものの、やはり曲物製作に関係した木工具や荒型は認められない。

鎌倉時代に描かれた『一遍上人絵伝』で曲物容器をみると、水や食品を入れた桶、水汲みの柄杓、衣類や食材を詰めた櫃、食器を載せた折敷など多様な製品が描かれている。本遺跡に拠点をついた工人も、遺跡の東方に広がる森本丘陵で伐採した針葉樹を素材として、木製容器の生活用具を製作し、堅田B遺跡近くに伝承される河原市や本遺跡北部の二日市などに設けられた市庭で、販売したものと考えられる。

なお、本遺跡出土の大型の曲物容器を確認すると、4-1区の宅地で発掘したP15の水溜は、径42cmの曲物が埋設され、鎌倉時代の井戸SE01とSE02では、不確定ながら径60cm規模の曲物が、井戸側として埋設されていたと推定できる。井戸側に大型の曲物を据えた遺構は、本遺跡の西方で設営された中世集落でもみられる。口径55cmと58.8cmの曲物は、底板を固定した木釘痕から本来は曲物桶であった。その内容積は5斗6升と8斗を測り、これも本遺跡の曲物工房で製作された可能性が高い。

今後は、出土している曲物に刻まれたケビキ痕や樺皮縫合の観察を深め、金沢市北部の中世集落で出土している曲物製品と比較すると、梅田B遺跡に拠点をついた工人の個性と特徴が知られるが、その前に曲物容器の製作に係る考古学的特徴の認識を広める必要があると感じている。

#### [引用・参考文献]

(公財)石川県埋蔵文化財センター 2021『古代の木の器(うつわ)-その2(報告資料集)』

- |       |      |  |
|-------|------|--|
| 岩瀬由美  | 2001 | 「東調査区の遺構と遺物」『田鶴浜町三引遺跡I(上層編1)』(財)石川県埋蔵文化財センター |
| 川畑 誠  | 1995 | 「中世加賀地方の木製容器の概要」『中世北陸の木製容器』北陸中世土器研究会         |
| 垣内光次郎 | 2001 | 「石や木の加工」『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会                  |
| 成田壽一郎 | 1996 | 『木工諸職双書 曲物・籠物』理工学社                           |

## 報告書抄録

ふりがな	かなざわし うめだBいせきⅣ							
書名	金沢市 梅田B遺跡Ⅳ							
副書名	一般国道 159 号金沢東部環状道路事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書 7							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号	7							
編著者名	垣内光次郎							
編集機関	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 920-1336 石川県金沢市中戸町 18 番地 1 TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731							
発行機関	石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2022 年 3 月 22 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
うめだ いせき 梅田B遺跡	かなざわしうめだまち 金沢市梅田町、 かんぼうじまち 観法寺町	17201	01363	36° 37' 23"	136° 42' 22"	19970409 ～ 19971222	(5次全体) 17,500㎡ (本報告) 11,900㎡	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
梅田B遺跡	集落	弥生 古代 中世	掘立柱建物、 井戸、溝、 土坑	弥生土器、須恵器、 軒平瓦、陶磁器、 曲物柄杓		古代～中世の 曲物生産		
要約	<p>第5次調査の1・2区及び4区の調査成果である。下層で弥生～古墳時代、上層で平安時代～近世前期の集落跡を確認した。間層の堆積土は、古墳～奈良時代にかけて東方の谷部から流下したもので、集落の立地と変遷に影響を及ぼしている。</p> <p>また、4区で確認した曲物生産は、平安時代後期から室町時代にかけて継続したとみられる木工で、作業施設は地点の移動が考えられる。</p> <p>なお、森本断層の発掘調査は、石川県が平成9年度末に第4次調査区で実施したものである。弥生時代の後期後半頃に直下型の地震を引き起こしている。</p>							



遺跡全景(南から)



遺跡全景(東から)



1区下層調査区の全景(南から)



1区下層調査区の全景(西から)



1区表土の重機掘削



1区上層遺構の検出状況



1区上層 SD12検出状況



1区 SD14検出状況と上層堆積層



1区(南)西側拡張の上層遺構



1区(南)の上層遺構



1区上層堆積層の重機掘削



1区 SD02・SD03の発掘状況



1区 SD01 (南から)



1区 SD06 (西から)





1区(南)上層遺構(東から)



1区(南)西側拡張(東から)



1区(南)上層遺構(南西から)



1区(南)SD21(北から)



1区(南)SD22(北東から)



1区(南)SD21土層断面(南から)



1区(南)SB101(南から)



1区(南)P03土器出土状況

図版6



1区(南) SK01土層断面(東から)



1区(南) SK02土層断面(東から)



1区(南) SK03土層断面(南東から)



1区(南) SK03(東から)



1区(南) SD08土層断面



1区(南) SD19土層断面



1区(北) SD10(南から)



1区(北) SD10土層断面



1区(北) SD02・03 (北東から)



1区(北) SD02土層断面(北東から)



1区(北) SD03土層断面(北東から)



1区(北) SD02・03土層断面(北東から)



1区(北) SD03木製片口鉢の出土状況



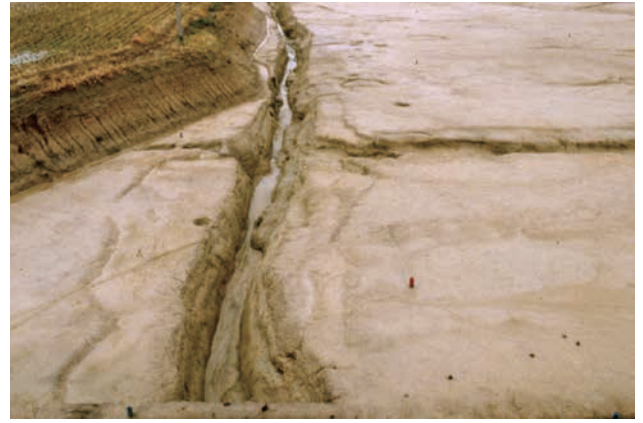
1区(北) SD02～SD13(南東から)



1区(北) SD14と柱穴列(西から)



1区(南) SD14 (南西から)



1区(北) SD14 (南西から)



1区(南) SD14南端(南西から)



1区(南) SD14土層断面(北から)



1区(南)西側拡張(東から)



1区(北) SD13 (西から)



1区(北) SD18 (東から)



1区(南) SD28土層断面(西から)



1区出土遺物1



1



54



57



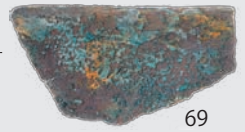
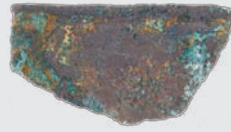
58



62



64



69



72



73



74



76



75



77



78



2区下層調査区全景(西から)



2区下層調査区全景(南から)





2区中層堆積層の重機掘削



2区下層遺構の検出作業



下層遺構の発掘風景 1



下層遺構の発掘風景 2



2区下層東側 SD01 東側(南東から)



2区下層東側 SD01 土層断面(北東から)



2区下層東側 SD01 土器出土状況



2区下層東側 SD02 土層断面



2区下層東側 SD02 木器出土状況



2区下層東側 SD02 (南西から)



2区下層西側 SD03・05 (南西から)



2区下層西側遺構発掘状況



2区下層西側 SD03・05土層断面



2区下層西側 SD03遺物出土状況



2区下層西側 SD05土器出土状況



2区下層東側 SD05北部(北東から)



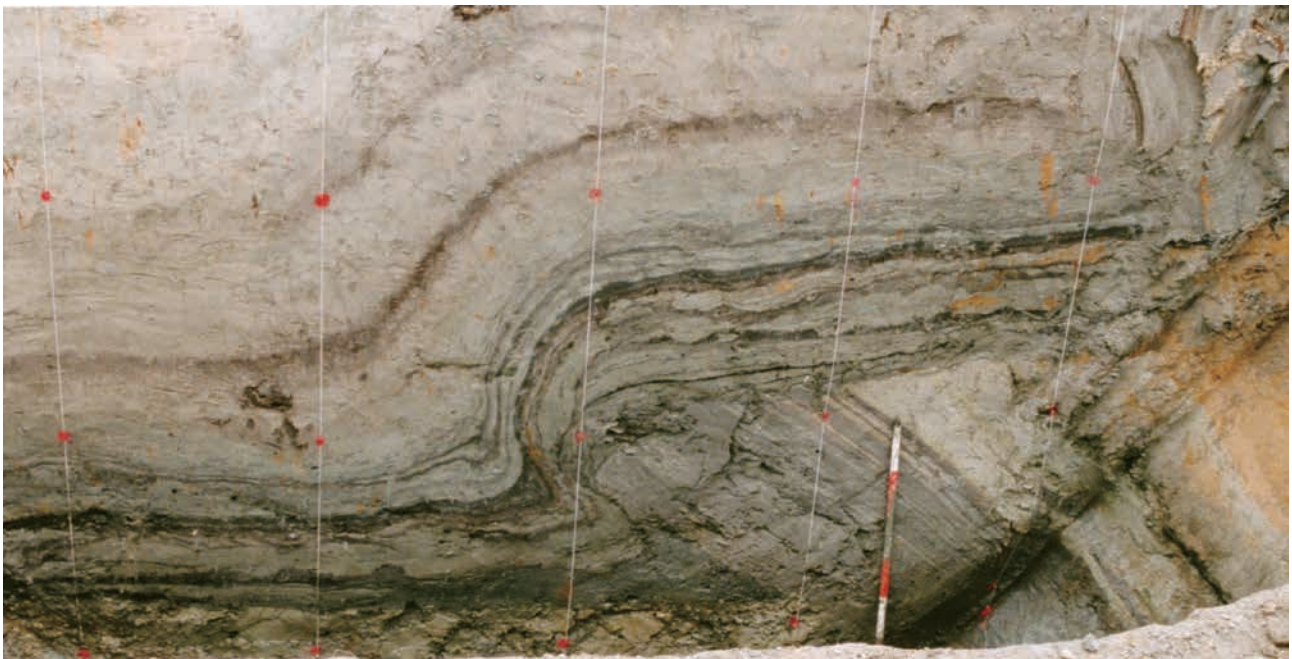
2区下層東側 SD07(南から)



2区下層西側 SB201(南西から)



2区下層西側 SD01内土坑



2区北西の活断層(南壁)



2区出土遺物



4- I・II区全景(南から)



4- IV区全景(南から)



4-Ⅲ・Ⅴ区全景(北から)



4-Ⅲ・Ⅴ区全景(東から)



4- I 区全景(西から)



4- I 区全景(東から)



4- I 区 SE01 土層断面(東から)



4- I 区 SE02 (北から)



4- I 区 P15 土層断面(南から)



4- I 区 SK01 土層断面(東から)



4- I 区 SD10 と土層断面(東から)



4- I 区 SD06 (南から)





4-Ⅲ区 SX04 (南から)



4-Ⅲ区 SX05・SD15 (南から)



4-Ⅲ区 SX06 (南から)



4-Ⅲ区 SX06 (北から)



SX06 土器溜り



SX06 下駄出土状況



4-Ⅲ区 SX06 法面 (西から)



4-Ⅲ区 SX06 土層断面と杭列 (北から)



4-Ⅲ区全景(南から)



4-Ⅲ区 SG01 と土層断面(東から)



4-Ⅲ区 SX07 周辺(北から)



4-Ⅲ区 SD16(西から)



4-Ⅲ区 SX07(南から)



4-Ⅲ区石積01(南から)



4-Ⅲ区 SK06 土層断面(東から)



4-Ⅲ区 P33(北から)



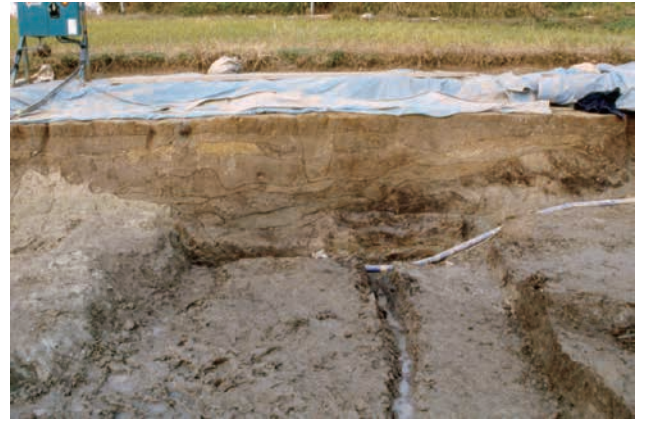
4-IV区全景(南東から)



4-IV区 SD18(北西から)



4-IV区 SD18発掘作業(北西から)



4-IV区 SD18土層断面(南から)



SD18木器発掘状況



SD18木製容器出土状況



SD18曲物出土状況



SD18柄杓出土状況



4-IV区 SD21 (北西から)



4-IV区 SD19 (北から)



4-IV区 SD20周辺(西から)



4-IV区 SD20周辺(南から)



4-IV区下層全景(南東から)



4-IV区下層全景(西から)



4-IV区 SD24 (南から)



4-IV区下層断面(南から)



4-V区全景(北から)



4-V区全景(南から)



4-V区 SK04(南から)



同左土層断面



4-V区 SD12・13(北西から)



4-V区 SK05(北西から)



4-V区 SD14(南東から)



4-V区 SD14土層断面(東から)



4区出土遺物 1



4区出土遺物2



4区出土遺物3





4区出土遺物4



4区出土遺物5



4区出土遺物6



4区出土遺物 7

## 金沢市 梅田B遺跡Ⅳ

発行日 令和4(2022)年3月22日

発行者 石川県教育委員会  
〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地  
電話 076-225-1842(文化財課)  
(公財)石川県埋蔵文化財センター  
〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1  
電話 076-229-4477  
E-mail address daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 安達写真印刷株式会社